

JILPT 資料シリーズ

No. 80 2010年12月

アジア諸国における高度外国人材の就職意識と 活用実態に関する調査報告書



独立行政法人 労働政策研究・研修機構
The Japan Institute for Labour Policy and Training

アジア諸国における高度外国人材の就職意識と 活用実態に関する調査報告書

独立行政法人 労働政策研究・研修機構

The Japan Institute for Labour Policy and Training

まえがき

経済社会の国際化の進展に伴い、就労を目的として日本に入国、在留する外国人が増加しているなかで政府は、2007年の雇用対策法改正に際して、高度外国人材の就業を促進するための施策を総合的に講ずることとした。

同施策の目的は、官房長官の下に産官学労で構成された「高度人材受入推進会議」によると、「多様な価値観、経験、ノウハウ、技術を持った高度外国人材を積極的に受け入れることにより、新たなイノベーションを生み出して行くことが重要であり、外国人の採用に対する企業の意識や労務管理の在り方を、グローバル化に対応したものに改革していくことや、高度人材の予備軍である留学生の就職支援のために、インターンシップの拡大など様々な取り組みを総合的に進める」ことである。

しかし、わが国の高度人材に対する入国管理制度は、他の先進国と比べても開放的であるにもかかわらず、実際には企業における高度外国人材の受け入れは必ずしも大きく進展しているとは言い難い。この要因を明らかにするために厚生労働省が2009年に行った調査結果によると、企業は採用が進まない理由として、①能力の判定が難しい、②求める日本語能力を有する人材が少ない、などを指摘、また採用した高度外国人材の活用の問題点について、①採用しても受け入れることができる部署が限られる、②言語・コミュニケーション上の障壁、などをあげている。さらに企業は、採用した高度外国人材を維持する上で、①ビザの延長等法制度上の制約が多い、②高度外国人材の雇用管理ができる管理者が不足している、などの問題点があると回答している。

本調査は上記の事情を踏まえて、厚生労働省の要請により、日本企業はアジア諸国の高度人材およびその予備軍から就職先として選ばれる存在となっているのかとの観点から、日本における高度外国人材の活用を促進するための基礎データの収集を目的に、ヒヤリング調査を実施したものである。

本調査の結果が、日本の高度外国人材受け入れに関する政策の一助となれば幸いである。

2010年12月

独立行政法人 労働政策研究・研修機構

理事長 稲 上 毅

執筆担当者（執筆順）

坂井 澄雄	労働政策研究・研修機構 国際研究部長	序章 第1、2、3、4章 第5章 第2節
Lee Kyu Yong	韓国労働研究院（KLI） Research Fellow	第5章 第1、3節
Bae Kiu Sik	韓国労働研究院（KLI） Research Fellow	第5章 第3節

本調査を実施するに当たって、JILPT において研究会を設けた。研究会のメンバーは下記のとおりである。研究会委員の小平氏には中国、大連理工大学の現地ヒヤリング調査に参加してもらった。

小平達也（株）ジェイエーエス社長

厚生労働省外国人対策課

坂井澄雄 労働政策研究・研修機構国際研究部長

韓国の調査に関しては、韓国労働研究院（KLI）との共同調査として実施した。同研究院からは以下の2人の研究員が参加した。

Bae Kiu Sik, Research Fellow

Lee Kyu Yong, Research Fellow

目 次

まえがき	
目 次	
序 章 調査の目的と概要	1
第1章 調査結果の概要	3
第1節 高度人材送出国	3
第2節 高度人材受入国	9
第2章 中国における調査結果	19
第1節 高等教育制度の現状	19
第2節 北京における調査結果	21
第3節 北京におけるヒヤリング記録	32
第4節 大連における調査結果	49
第5節 大連におけるヒヤリング記録	59
第3章 ベトナムにおける調査結果	81
第1節 高等教育制度の現状	81
第2節 調査結果	83
第3節 ヒヤリング記録	91
第4章 シンガポールにおける調査結果	111
第1節 高度人材受入制度の概要と実態	111
第2節 調査結果	117
第3節 ヒヤリング記録	129
第5章 韓国における調査結果	159
第1節 高度人材受入制度の概要と実態	159
第2節 調査結果	171
第3節 ヒヤリング記録	176
資料 質問項目	207
中国・ベトナム（大学生・大学院生）	207
シンガポール・韓国（高度外国人材）	208

序 章 調査の目的と概要

1 調査名

アジア諸国における高度外国人材の就職意識と活用実態に関する調査

2 調査の目的

就労を目的として日本に入国、在留する外国人が増加しているなかで政府は、2007年に高度外国人材の就業を促進するための施策を総合的に講ずることとした。しかしながら、実際には高度外国人材の受け入れは必ずしも大きく進展しているとは言い難い。

本調査はこうした事情を踏まえて、厚生労働省の要請により、日本企業はアジア諸国の高度人材およびその予備軍から就職先として選ばれる存在となっているのかとの観点から、アジア諸国のなかで、比較的多くの高度人材を外国に送り出している国の高度人材予備軍、すなわち大学、大学院の学生、および高度人材を比較的多く外国から受け入れて活用している国で現に働いている高度外国人材にヒヤリングすることによって、日本企業において高度外国人材の活用を促進するための基礎データを収集することを目的に実施したものである。

3 調査の対象国・対象者

具体的な調査対象は下記のとおりである。

①送出国

- ・中国、北京の大学生、大学院生
- ・中国、大連の大学生
- ・ベトナム、ハノイの大学生、大学院生

②受入国

- ・シンガポールで就職して働いている高度外国人材
- ・韓国で就職して働いている高度外国人材

4 調査の方法

調査票に基づく調査対象者の個別ヒヤリングを原則とした。ただし、調査対象者の時間的制約、その他の事情により複数の調査対象者のグループ・ヒヤリングを併用した。また、ヒヤリング対象者のプライバシーの意識の違いなどに応じて、調査票の内容をすべて網羅できない場合は、状況に応じて柔軟に対応した。

中国（北京、大連）、ベトナム、シンガポールの調査は労働政策研究・研修機構が直接実施したが、韓国については韓国労働研究院（KLI）との共同調査として実施した。

5 調査の時期

2010年6月中旬から7月末。国別の調査時期はつぎのとおりである。

- ・中国・北京：6月中旬
- ・中国・大連：6月下旬
- ・ベトナム：6月下旬
- ・シンガポール：7月上旬
- ・韓国：6月下旬～7月末

6 高度外国人材の定義

本調査においては、高度外国人材の定義は『企業における高度外国人材活用促進事業報告』（厚生労働省委託、富士通総研、平成22年3月）に倣って下記のとおり定めた。ただし、第4章、5章で詳しく説明するが、受入国（シンガポール、韓国）の調査対象者選定に際しては、当該国で高度外国人材の受け入れに当たって適用される就業許可証、滞在許可証（ビザ）などの法制度上の条件に従うことにした。とはいえ、両国の法制度上の条件と下記の定義との間には実質的に大きな差異はないといえる。

- ①企業での職種：研究者やエンジニア等の専門職、および海外進出を担当する営業職、法務・会計等の専門職、経営に関わる役員や管理職
- ②企業の人材層のなかの位置づけ：現在既に経営に関わるなど高度な役割を果たしている外国人材および留学生など将来高度な役割を果たすこととなるべき外国人材
- ③外国人材が所属する組織：当該国の国内組織のなかで働く外国人材、および主に当該国で海外ビジネスを行う国内組織のなかで働く外国人材
- ④教育レベル：原則、大卒以上
- ⑤在留資格：日本の法制度で定める「研究（企業内の研究者）」、「技術（機械工学等の技術者、システムエンジニア等のエンジニア）」、「人文知識・国際業務（企画、営業、経理などの事務職、企業内通訳、デザイナー等）」に当該国で該当する者。

送り出し国の高度人材となる可能性の高い大学、大学院の学生（高度人材予備軍）については、通常の世界通念に従って、中国、ベトナムにおいて教育の質、研究水準が高いと考えられている、いわゆる「有名大学、大学院」の学生を調査対象とした。

第1章 調査結果の概要

本章では、高度人材送出国である中国（北京、大連）とベトナム、高度人材受入国であるシンガポール、韓国のヒヤリング調査結果の概要をとりまとめる。

中国（北京、大連）とベトナムにおいては将来の高度人材の予備軍である大学、大学院の学生を調査対象とした。調査対象の学生の所属する大学、大学院は一般的な社会通念に従って「有名大学」を選んだ。すなわち、入学試験の難易度が高い大学である。他方、シンガポール、韓国については、それぞれの国の企業で働いているアジア各国出身の高度人材を調査対象とした。ここにおける高度人材の定義は「少なくとも大学卒である」ことを原則として、その他の条件はシンガポール、韓国の高度外国人材の就業許可、滞在許可に関する法律の規定に従った。

第1節 高度人材送出国

1 中国・北京の調査結果概要

北京における調査対象者は7大学・大学院の学生16人で、主な属性は、理科系10人、文科系6人、男子学生10人、女子学生6人、学部生3人、大学院生13人、年齢は19～28歳である。

大学に進学した経緯は、大半の学生が全国統一入学試験（高考）の成績で入学可能な最も水準の高い大学を選択したと回答している。ほぼ例外はなかった。学部・専攻の選択理由も全国統一入学試験の成績によると答えている。学生の回答には中国の受験戦争の厳しさがにじみ出ていた。これと比較して大学院進学の際の経緯は、入学試験に関する“苦労話”はなく、「さらに高度な知識を得たい」との動機がほとんどを占めていた。

卒業後の進路希望で「外国にある外国企業」と回答した学生は皆無であった。

調査対象者16人のうち、7人が国有企業を希望、国有企業と類似した組織である政府関係研究機関を希望している学生が2人、公務員を第1志望にあげた学生が1人、外資系企業を第1志望とする学生が1人、学部生で大学院進学希望者が1人、外国への留学希望者が3人であった。

卒業後の進路希望をとりまとめると、第1に調査対象の学生の大多数が大学、大学院で専攻した自分の専門を活かすことができる職に就きたい、と考えていた。この背景には、中国の高等教育は「実戦的」な面が重要視され、将来の職業と密接に結びついていることがうかがわれた。

第2に、国有企業の人気が思った以上に高かったことが特徴である。国有企業への就職を希望する学生は異口同音に「雇用の安定」と「最近賃金が高くなった」ことを理由としてあげていた。これに対し、民間企業、外資系企業は、国有企業と比べて「賃金は高い」が

「雇用は不安定」であると考えられている。中国においても 2008 年 9 月のリーマン・ショック以降の景気後退で雇用が不安定となり、とくに民間企業、外資系企業では雇用調整が大規模に実施されたことが、就職を考える学生に強く影響しているといつてよさそうだ。

第 3 にいえることは、北京の学生には「外国にある外国企業」に就職することは、現実的な問題としては捉えられていないことである。外国企業への就職を「まったく考えたことがない」「機会があれば考えてもいい」との回答がこのことを表している。ただ、留学希望者を含めて約半数の学生が「先進国」に強い関心を示し、「研修、勉強のために行きたい」との意欲を示していた。先進国の中では、アメリカが関心の的であった。調査対象者の回答ぶりからみて、これは中国の熱心な「英語教育」の結果ではないかと考えられる。北京の学生の大多数が英語能力の自己評価を「完璧」「ほぼ完璧」と答えていた。

就職観は堅実な安定志向

つぎに、就職した企業に長く勤めるか、あるいは転職を視野に入れているかなどについて調査対象者の回答をみると、国有企業、公務員を希望している学生の回答は非常にシンプルで、「長く勤めるつもりである」と判で押したように答えていた。「雇用の安定」を重要視して就職する以上は、長く勤めようとすることはごく自然な発想といえよう。外資系企業を希望している学生も、「働き始めてみないとどうなるか分からないが、現時点では自分の能力を十分に発揮したいと思っている」と控えめな回答で、「転職」は「仕事の内容次第である」と答え、「昇進」「賃金」は念頭にないようであった。いずれにせよ、北京の学生の将来展望は予想外に堅実な「安定指向」であった。

卒業後の進路希望に関する質問で「外国での就職を希望する者」が皆無であったことから、外国での就職に関する意見、感想を聞いた。この結果は、「全否定」2 人、「考えたことがない」10 人（うち 2 人は「機会があれば考えてもいい」）、「機会があれば就職でも研修でも留学でもいいから先進国に行ってみたい」1 人、「外国で働くとすればアメリカ」2 人、「留学後、アメリカで就職するかもしれない」1 人であった。

調査対象者はいずれも「外国には 1 度も行ったことがない」と答えており、こうした背景が回答に反映しているのかもしれない。いずれにせよ、日本を含めた「外国にある外国企業」に就職することには、現実感が乏しいとの答えであったといえる。

しかし一方で、留学、研修などは「自分の技術を向上させる」機会と捉え、ポジティブな意見が聞かれた。

ヒヤリングの中で説明を受けた北京の大学における「就職情報を入手する方法」には、①大学の就職担当事務室（掲示板）、②各学部、研究科の就職担当の教員、③指導教員、④学生会、研究生会などの学内組織、⑤同窓会、⑥キャンパス内のイントラネット、⑦民間企業、外資系企業の情報はインターネット、⑧知人、⑨企業が直接大学に来て募集、などがある。国有企業に関しては、国有企業に勤めている「知人」が最も有力な情報源であるという。

今回ヒヤリングした 16 人のなかでは、「外国にある外国企業の募集」を実際に目にした者

は1人もいなかった。

2 中国・大連の調査結果概要

大連におけるヒヤリング調査は、大連理工大学の機械学部、機械／日本語強化班の学生を対象に実施した。機械／日本語強化班は、日本語で機械工学を学ぶ極めてユニークな専攻である。2010年には60人の機械／日本語強化班所属の学生のうち80%は日本で就職するか、留学する予定である。このように日本および日本企業に関心の高い学生が多いことを想定してここをヒヤリング対象として選んだ。

調査対象者は3年生15人、4年生8人の計23人で、機械／日本語強化班は5年制であるため、4年生も卒業までにまだ1年残していた。調査対象者の属性は、男子学生20人、女子学生3人、地元大連出身者3人、大連市以外の出身者20人。大連の調査対象者は北京と異なり、同一大学の同一専攻で、属性から見た限り極めて同質性の高い学生グループである。

大連理工大学に入学した理由に関する回答は、北京の調査結果とほとんど同じ文脈で、「全国統一の大学入学試験を受け、その成績を勘案して、大連理工大学に入学した」との答えが圧倒的であった。なかには地方大学らしく「大連市で生まれ育ったので、子供の頃から大連理工大学に入りたと思っていた。両親も常々、理工大学に入れればいいねといていた」との回答もあったが、大勢は入学試験の成績に応じて入学したとの回答である。

機械学部の機械／日本語強化班を選択した理由も、やはり「機械学部の中でレベルが高い専攻であった」と入学試験の成績を考慮したとの回答が多かった。なかには機械と日本語の組み合わせは確かにユニークだが、ユニークだけではなく「日本語だけよりは、機械をあわせて学んだ方が就職に有利であると考えた」との認識を複数の学生が持っていた。「就職に有利」との認識は、中国の日系企業ないし日本にある日本企業に就職するに際して有利であることを意味している。

大半が日本での就職を希望

調査対象者23人の卒業後の進路希望を聞くと、「外国にある外国企業」をあげる者が9人で、国有企業、外資系企業を大きく上回っていた。ここでいう「外国にある外国企業」とは実質的には「日本における日本企業」を意味していた。そこで進路希望を「日本での就職」と関連づけて整理すると、①日本における就職希望者9人、②日本における就職の可能性を語った者7人、③日本留学後に日本での就職を希望2人、④中国の大学院修了後に「外国で働くかもしれない」者1人、⑤「日本では就職しない」と答えた者2人、⑥外国での就職についてまったく考えたことがない者2人、となる。

日本における就職希望者9人の日本で就職したい理由には「日本語で機械を勉強したからだ」など日本語を第1にあげた者が多かった。この9人の日本における就職先に関する希望は、全員が機械関係の企業であったが、特定の企業名をあげた学生はなく、大半が大企業を希望していたにとどまる。

ただ、多くの学生が、2～3年から長くても10年以内に日本での仕事を切りあげ、中国に帰国したいと考えていた。日本で「長く勤めたい」と答えたのはわずか1人である。実際、先輩の例として「4～5年で多くの者が中国に帰ってくる。中国に帰ったら北京や上海の日系企業に勤めている者が多い」と説明する学生がいた。

日本で長く勤めない理由を大雑把に分類すると、①日本で技術を向上させ、経験を積む、②親孝行をする、③日本企業に対する不満、の3点となる。

第1の理由「技術を向上させ、経験を積む」が圧倒的に多い。日本留学希望者も「研究ではなく、実務的な勉強をしたい」と述べていた。要するに、日本における就職は、日本企業に長く勤め、日本に根を下ろして暮らす、という意味ではなく、「経験を積み」「技術を向上させる」機会と捉えられており、この文脈において、大連理工大学機械／日本語強化班の学生は日本への留学と日本における就職とを同一次元で考えているといえそうだ。このためか、日本企業の賃金について質問したところ、「中国より高い」との答えはあったが、それほど関心はなさそうであった。

「日本企業に対する不満」は、大連理工大学におけるヒヤリングでは非常に例外的な回答であったといっている。

3 ベトナムの調査結果概要

ベトナムにおいてはハノイで調査を実施した。調査対象者は北京と同様に、5大学・大学院の学生14人で、主な属性は、理科系9人、文科系5人、男子学生10人、女子学生4人、学部生12人、大学院生2人である。大学院生の数が北京と比較して少ない。これについて、ベトナムでは大学院生は働きながら夜間の修士課程に通う者が多く、全日制の修士課程、博士課程に所属する大学院生は研究者を目指す者がほとんどで、彼らは企業に就職することを考えていないとの説明があった。結果的にはあるが調査対象者に大学院生が多く含まれていないのは、ベトナムの現状を反映しているといえよう。

ハノイのほとんどの学生は、現在所属する大学に入学した理由を「入学試験の成績を考慮して」と回答した。学部、専攻についても入学試験の成績を考慮して選択したとの答えが大半であった。ヒヤリング対象となった学生が例外なく入学可能な点数を大学別のみならず、学部、専攻別に詳しく知っていた。この点も中国と同様に、各大学、学部、専攻のランキングが、政府（教育訓練省）が公表する資料で明確な形で示されている結果である。ベトナムの「受験戦争」も日本以上に厳しいとの印象を受けた。

卒業後の進路希望について14人の回答をみると、「外国にある外国企業」との答えは皆無であった。

最も回答が多かったのは「外資系企業」である。14人のうち、7人が外資系企業と答え、すでに外資系企業に勤めながら夜間の大学院に通っている学生を加えると8人が外資系企業と答えたことになる。この8人の専攻科目をみると、文科系が6人、理科系が2人。文科系

6人のうち、4人は「外資系の銀行、証券などの金融機関」を希望、1人は、外国語学部で日本語を専攻しており「日系企業に勤めたい」と回答、他の1人は「アメリカ系の外資系企業に入社できればいい」と答えた。一方、理科系の2人はいずれも工学部で、1人は特定の企業名をあげ、他の1人は夜間の大学院に通っている学生で、すでに外資系のメーカーに勤めていた。

賃金が高いことを理由に外資系を選択

外資系企業を選択した8人に共通する選択理由は、「賃金が高い」「自分の専門が活かせる」の2点である。他方で、「外資系は外国人の上司がいるので嫌だ」との声も聞かれた。

外資系企業のつぎに回答が多かったのは、国有企業の4人。共通点は、4人のいずれも工学部の学生で「雇用が安定している」ことを理由にあげたことである。残る2人は「公務員希望」で「安定した職である」ことを希望理由としていた。「民間企業」については、第1志望の外資系企業や国有企業に就職できなかった場合、「民間企業に就職せざるを得ない」との消極的な回答の中で言及されたに過ぎない。

以上の進路希望の背景には、賃金は外資系企業が最も高く、民間企業、国有企業、公務員の順で低くなる、一方「仕事の厳しさ」については、外資系企業が最も厳しく、民間企業がこれにつき、国有企業、公務員の仕事は相対的に「厳しくない」との共通認識があるようだ。また、雇用の安定について、国有企業、公務員は極めて「安定している」が、外資系企業や民間企業は「景気変動に影響されて不安定である」と考えられていた。民間企業が敬遠された理由は、国有企業のほとんどは大企業かつ独占企業であり、外資系企業も多くは大企業で、規模が小さくとも賃金が高いのに対し、民間企業は大半が中小企業で賃金が低いことであるようだ。

就職した企業に長く働くか、転職を考えるか、を聞いたところ、「安定した雇用を望む」ことを理由に国有企業への就職や公務員になることを希望していた者がいずれも、希望どおり就職できれば「長く働くつもりである」と答えていた。一方、外資系企業希望者は「3～5年で転職すると思う。実務経験があれば転職は容易であり、転職によって賃金が上がり、昇進できるといわれている」と考えているようであった。すなわち、安定指向で就職する者は国有企業、公務員を選択して、最初に就職した職場に長く勤め、高い賃金を希望して外資系企業に就職した者は、より高い賃金、昇進を求めて「転職」を視野に入れているという傾向があるといつてよさそうだ。

なお、ヒヤリング対象者の中には「大学院への進学」「外国への留学」を具体的に検討しているケースはみられなかった。

なぜ「外国にある外国企業への就職」を希望しないのかとの質問に対しては「外国には1度も行ったことがない」ので、「外国の企業に関する知識がない」というのが共通した反応であった。外国で働かない理由に、「ベトナムは今後、さらに発展することが期待できるのでベトナムで働く」という考え方もあった。こうしたなかで「チャンスがあれば留学はした

い」との声が幾つか聞かれた。

将来外国にある外国企業への就職機会があったらどうするか、との質問に対しては、「働くチャンスがあれば、行きたい」との積極派から、「外国で働くのも悪くはない」「検討するかもしれない」との中間派、「チャンスがあっても、たぶん外国の企業には入らない」との消極派までバラエティーがあった。働きに行きたい、と答えた積極派に具体的国名をあげてもらおうと、日本、アメリカ、イギリス、シンガポール、中国の名前があがった。理由は、第1に「先進国」であること、第2に「言葉が通じる」こと、第3に「発展している国」であることだ。積極派の中でも「外国で働くにしても、長くは働かない。ベトナムに家族がいるからだ」との回答が複数みられた。また、中国でよく聞かれた「外国で働き、経験を積んで、出身国に帰り、その経験を活かしたい」との考え方も聞かれた。

就職情報の入手経路は、外資系企業希望者の場合は「インターネットの募集広告」との回答で、国有企業希望者の場合は「知人や国有企業勤務者の親類の者から募集情報を聞く」とのことであった。公務員の場合は毎年、12月に全国統一試験がある。

4 まとめ

ここでは北京、大連、ハノイの調査結果を比較検討する。

まず、共通点の第1は、現在所属する大学・大学院、学部・専攻を選択した理由が「全国統一入学試験の成績をみて」決めていることである。将来の職業、就職を考慮するよりは、「有名大学」に入学することが第1目標であったようだ。大学卒業、大学院修了まで2年以上を残す調査対象者の多くが「就職について考えたことがない」と答えていたことが何よりの証左である。この点について中国、ベトナムの国による差異はほとんど認められなかった。

第2の共通点は、就職を具体的に考える場合、「雇用の安定」を重視している学生が多かったことである。とくに北京とハノイの学生の大半は「国有企業」への就職を「雇用の安定」を理由として希望し、外資系企業、民間企業は「景気変動の影響により雇用が不安定」と考えていた。

第3の共通点は、多少のニュアンスの違いはあったが、北京、大連、ハノイの学生がともに「自分の専門性を活かした職業に就きたい」と答えていたことだ。「有名企業に入りたい」との回答はごく僅かであった。「大学は有名指向」であったが、「就職先は有名指向」ではなく、明らかに「専門性を活かすこと」を優先する意識が強かった。

第4の共通点は、「外国にある外国企業への就職」について、北京とハノイの学生は、現実的なものとして捉えていなかったことである。この背景には「1度も外国に行ったことがない」学生がほとんどで、身近に外国で就職した知人がいないといった事情が介在しているようだ。だが、北京とハノイの学生はともに先進国に対する関心は高く、外国に留学した先輩が身近にいることから、機会があれば留学してみたいとの希望は多くみられた。

これに対し、大連の調査対象者である機械／日本語強化班の学生は、日本語を学んでいる

こと、日本の大学との交換留学制度があること、「先輩の多くが日本へ留学、就職で行っていること」などの環境から、日本で就職したい、日本に留学したいとの希望を大半の者が話っていた。

しかしながら、大連の学生も、日本で長く勤める考えはなく、2年から10年以内に中国に帰ってくると答えていた。大連の調査対象者の「先輩」の多くは、日本で就職しても数年で帰国しているようだ。北京とハノイの学生は「もし外国で就職する機会があったらどうするか」との質問に対し、多くが検討すると答えたものの、経験を積んだあと、数年で帰国すると答えていた。この点では、大連の学生も、北京、ハノイの学生も同じ意識であるといえよう。これが第5の共通点である。

第6の共通点は、就職に際しての大都市指向である。北京の学生は、北京での就職を希望し、大連の学生は中国国内で就職するならば北京か、上海、大連を希望、ハノイの学生は一律にハノイで働きたいと語っていた。この理由として、中国もベトナムも、大学、大学院を卒業した学生にふさわしい専門的な職が「地方にはない」ことが強調されていた。

つぎに相違点をとりあげる。第1は、中国とベトナムの高等教育の違いである。制度自体は、全国統一入学試験に代表されるように類似点が多い。だが、ベトナムの大学は、校舎不足、教員不足などの要因で、全日制の課程も午前、午後の2部制が一般的で、また大学院への進学率が中国と比較してかなり低い。同規模の大学における大学院の学生数を中国と比較すると、ベトナムは5分の1ほどに過ぎない。すなわち、高度人材育成のインフラ整備には、中国とベトナムでは大きな差がみられた。

相違点の第2は、就職先を選択する際の理由である。すでに上でみたように、「専門性」を重視する点は共通していたが、ベトナムの学生は多くが専門性と同一比重で「賃金が高い」ことを就職先を選ぶ基準にあげていた。中国の学生も賃金について言及しなかったわけではないが、ベトナムの学生は誰もが国有企業、外資系企業など企業形態の違いによる“賃金相場”について極めて豊富な知識を持っており、賃金に対する関心が中国の学生と比較して格段と高かった。

第2節 高度人材受入国

1 シンガポールの調査結果概要

シンガポールの調査対象者は現在、シンガポールの企業で働いているアジア各国出身の高度人材である。高度人材の定義は「少なくとも大学卒である」ことを原則として、その他の条件はシンガポールの高度外国人材の就業許可、滞在許可に関する法律の規定に従った。

シンガポールは外国人のいわゆる「一般労働者（マニュアル・ワーカー）」を100万人以上受け入れているが、法制度上は「高度人材（ホワイトカラー）」を想定した制度とは明確に区分している。外国人マニュアル・ワーカーの管理は非常に厳格であるのに対し、高度人材の管理は極めて緩やかである。

シンガポールで高度外国人材が働くためには、就業許可証として「エンプロイメント・パス（E パス）」を取得する必要がある。取得条件は「月例賃金が 2,500S\$（約 16 万 3,000 円）¹以上」で雇用されること、「専門職」「管理職」に就く者であることだ。

ヒヤリング調査対象者は 15 人で、出身国別にみると、マレーシア 7 人、インドネシア 5 人、フィリピン 2 人、ニュージーランド 1 人、男女比は男性 5 人、女性 10 人、学歴は大卒 12 人、大学院修了者 3 人、年齢は 28 ～ 38 歳。「シンガポールで働く外国人の大多数は、アセアン諸国出身の中国系である」といわれるが、調査対象者 15 人のなかに「中国系」が 11 人含まれていた。

所属企業の業種は、製造業 6 人、ロジスティック（運輸サービス）2 人、コンピュータ・ソフトウェア開発 2 人、IT 関連 3 人、金融・保険業 2 人。従業員規模は 100 ～ 3,000 人。企業は合計 13 社で、多国籍企業 12 社、地元企業 1 社。

ヒヤリング対象者の職務・職種は、大雑把に分類して各種の「エンジニア」が 7 人、「管理系の職種」が 8 人であった。「エンジニア」「管理系の職種」とともにマネジャー、アシスタント・マネジャーなどの管理職が合わせて 5 人いた。

15 人の調査対象者全員が、大学・大学院における専攻と現在の職種がほぼリンクしていた。外国人がシンガポールで職を得るためには「専門性」が極めて重要なファクターで、専門性を証明するために「大学・大学院の専攻」「過去の職歴（主として職務）」に関する書類の提出が E パス取得の必須条件となっていることから当然の結果であるといえよう。

調査対象者の月例賃金額は 3,000 ～ 6,000S\$（約 20 ～ 40 万円）である。日本の賃金との比較は難しいが、調査対象者の 1 人は「日本の賃金水準より多少低い（10%程度）」と話していた。

英語が企業の公式言語

企業で使う言語は、全員が「英語」と答えた。企業の公式の会議、打ち合わせはほとんど英語で行われ、書類もすべて英語で作成されているようだ。同僚などとの日常会話は、「英語」と「各種中国語」が用いられ、通常両言語の「ミックス」であるとの回答が多かった。

「中国語を解さない」者は、日常会話を含めて英語のみで仕事をしているようだ。ただ昼食などはどうしても「中国語を話す者と話さない者」に別れがちだとの話を聞いた。

現在所属する企業に対する満足度は、「ほぼ満足」が多く、「可もなく不可もなし」が 3 分の 1、「不満」も 1 人いた。この理由は、ほとんどが「現在の賃金に対する満足度」と解釈してよさそうであった。これに対して、職務に対する満足度は相対的に高く、「満足」「ほぼ満足」が合わせて 14 人、残る 1 人は「可もなく不可もなし」であった。この理由は、就職に際して契約した職務どおりの仕事をしている結果であると考えられる。

¹ 2010 年 8 月 1 日現在のレートによる。1S\$ = 65.2 円。以下、本報告書でシンガポールドルを日本円に換算した叙述はすべてこのレートを用いた。

調査対象者がシンガポールで就職することに決めた理由、現在所属する企業に就職した理由はつぎの3点に集約できる。

第1の理由は、調査対象者15人の出身地は4カ国にわたっていたが、いずれの国よりも明らかにシンガポールの「賃金が高い」ことである。多かれ少なかれ、すべての調査対象者がこの点に触れていた。

第2の理由は、言語である。シンガポールでは英語がビジネス言語であるのみならず、広く社会で使われている。英語は必ずしもアジアの共通言語ではないが、今日、アジアのほとんどの国において英語が第1外国語として学校教育で教えられている。ことの是非は別として、イギリスの植民地であったマレーシアやインド、アメリカの植民地であったフィリピンにおいては、旧植民地時代の影響で今日でも他の国と比較して英語が広く普及している。これらの国の高度人材にとってシンガポールはなじみやすい国となっている。

シンガポールでは英語と並んで中国語が広く使用されている。国民の75%以上が「中国系」であることがその理由である。ビジネス言語は英語であるが、日常生活においては中国語の使用頻度の方が英語をはるかに上回っているといわれる。したがって、中国語を解するか否かによって、シンガポールで暮らす快適度に大きな差があるようだ。この点で、シンガポールは東南アジア各国の中国語を解する高度人材にとって魅力があるようだ。

第3の理由は、シンガポール政府が、高度外国人材の受け入れに一貫して積極的なことである。シンガポールは100万人を超える外国人マニュアル・ワーカーを受け入れているが、この管理は極めて厳格で、不況時にはシンガポール人の雇用を優先してその数を減少させ、好況時には数を増加させている。

長く働くためには永住権取得が重要

政府の政策に関連して、ヒヤリング対象者からつぎのような点が指摘された。

シンガポールで働く高度外国人材は、通常、Eパスを得て働く。Eパスは申請時の企業で働くことを前提とし、その企業を何らかの理由で離職すると、滞在許可を失う。この問題を解決するために、2つの制度が用意されている。1つは永住権（PR）である。Eパスで一定期間働くと容易にPRが取得できる。PRを取得すると、シンガポール国内で転職が可能となり、精神的に安心感が得られる。PRを何らかの理由で取得しない者に対しては「個人Eパス」が用意されている。個人Eパスは、PRと同じく、Eパスで一定期間働くと容易に取得できる。個人Eパスを取得すると、離職しても半年間はシンガポールに滞在して求職活動ができる。

この両制度は、有能な高度外国人材をシンガポールにとどめておくための有効な制度となっている。

さらに、シンガポールで働く高度外国人材の場合、一定期間勤めてPRを取得すれば、安価で快適な公共住宅（HDBフラット）に入居することが容易になり、子育てはメイド（外国人）を雇うことによって問題を解消している。メイドの賃金は、月450S\$～700S\$（約3

～5万円)である。

将来の計画については、主として現在所属している企業に今後も長く勤めるつもりか、あるいは転職を考えているのか、に焦点を当て質問したところ、①現在の企業に長く勤めるつもり3人、②当面は勤めるつもり7人、③シンガポールで転職するつもり2人、④その他(留学を計画、10年くらい勤めた後に出身国に帰国、昇進できなければシンガポールで転職)3人、との回答であった。職場の上司への不満、昇進、賃金などを理由に「転職」することは、シンガポールで働く高度外国人材にとっては特別なことではないようだ。この背景には、シンガポールの高度人材の労働市場がこうした慣行になっているからであろう。すなわち、高度外国人材のみならず、シンガポール人高度人材にとっても「転職」は特別なことではない。

ただし、こうした考え方が一般的であるからといって、実際には「転職」がそれほど多いわけではない。シンガポール使用者連盟(SNEF)を訪ねた際にこの点を質問すると、「実際に企業を渡り歩いているのは“役員層”であって、ホワイトカラー層の転職は10%程度である」との説明であった。

シンガポールにおける就職情報の入手方法は、①シンガポールで企業募集をみて4人、②海外から人材あっせん会社に登録して情報入手3人、③インターネットで情報入手3人、④出身国で勤めていた企業のシンガポールの関連会社にスカウトされた2人、⑤出身国の人材あっせん会社に登録して情報入手1人、⑥現在の企業に勤めていた友人の紹介1人、⑦シンガポールに住んでいる親戚の紹介1人、である。就職情報の入手方法は多様であるが、募集情報を入手するのに困ったと答えた調査対象者は1人もいなかった。

2 韓国の調査結果概要

韓国における調査は、韓国労働研究院(KLI)との共同調査として実施した。高度人材の定義は、「少なくとも大学卒である」ことを原則に、韓国の高度人材受入制度にそくして「教授(E-1)」「研究(E-3)」「技術指導(E-4)」「専門職業(E-5)」「特定活動(E-7)」の各ビザを取得して働いている外国人とした。

調査対象者は11人で、出身国別にみると中国6人、ベトナム5人、男性7人、女性4人、年齢は26～43歳。大学卒が5人で、うち4人が出身国の大学、1人が韓国の大学を卒業。大学院修了は6人で、全員が韓国の大学院を修了。すなわち、韓国への留学経験者が7人含まれていたことになる。留学経験者の出身国別内訳は中国が6人中5人、ベトナムは5人中2人である。

韓国で高度人材として働く際のビザの種類は、「教授(E-1)」1人、「研究(E-3)」1人、「技術指導(E-4)」1人、「特定活動(E-7)」8人。ベトナム出身者は全員E-7ビザで、中国出身者もE-7ビザが3人と多い。高度人材として韓国の企業で働く際のビザはE-7が最も一般的で、今回の調査対象者もその例にもれない。

中国出身者は全員、中国語を母語とし、全員が韓国語を解すると答えた。なかには「中国国籍の朝鮮族」で「中国語より韓国語が得意」と答えた者が1人、また中国の大学の「朝鮮語学科」を卒業した者が2人いた。これに対しベトナム出身者は、留学経験のある2人を除いて「韓国語が難しい」と答えており、まったく韓国語を解さない者も1人いた。

既婚者は4人、独身者7人。既婚者の配偶者はいずれも出身国の者。既婚者のうち2人は韓国で「単身赴任」生活をしていた。うち1人は「家族を呼び寄せようとしたが、ビザを取るのが難しく」諦めたという。

現在の所属企業をビザの種類で分類すると、「教授（E-1）」の1人は大学教員、「研究（E-3）」の1人は政府関係研究機関、「技術指導（E-4）」の1人は民間企業であるが製薬会社で薬品開発を指導、他の8人は「特定活動（E-7）」で、うち7人が民間企業、1人が政府関係研究機関である。ベトナム出身者5人のうち4人はIT関連・通信の業種で働いていた。中国出身の女性2人は、中国語を活かした職務に就いていた。

賃金は、税金と社会保険料を差し引いた手取額で100～250万ウォン（約9～23万円）²と調査対象者によってその差が大きい。賃金について、中国出身者は6人中2人が「中国の約2倍」と答え、4人は「中国と同水準」と答えている。一方、ベトナム出身者は5人中4人が「ベトナムの約2倍」と答え、1人は「3倍」と自分の賃金を評価していた。

企業や職務に対する満足度は「満足」「やや満足」が半数を超え、「不満」「やや不満」の回答はなかった。

就職理由は経験を積むこと

韓国で就職した理由は「外国で仕事をする経験を積みたかったから」が11人中7人と最も多く、「経験」を就職理由にあげた回答者はいずれも、近い将来に出身国に帰ることを考えていた。就職理由に「賃金が高い」と答えた者は、ベトナム出身者3人で予想外に少なかった。

就職理由ではこの他に「現在勤めている韓国の会社の社長が、自分が勤めていた中国の会社に要請し、当初は“派遣形式”で韓国の会社に勤務、現在は、韓国の会社に転職して仕事をしている」と、スカウトされた者が1人いた。

現在所属する企業の職場をどのように考えているかを聞くと、複数の調査対象者が、出身国の労働慣行と韓国の慣行が異なることを認め、その上で「韓国人の同僚は勤勉である」「韓国人は几帳面に仕事をする」「企業では規則が厳格に守られる」「韓国人の同僚は責任感が強い」「よくあいさつをする」との好意的な感想を述べている。

² 2010年8月1日のレートによる。1ウォン=0.092円。以下、本報告書で韓国ウォンを日本円に換算した叙述はすべてこのレートを用いた。

しかし一方で、「勤務時間が長い」「退社時間が守られない」「上司より先に退社するとよく思われない」との意見が聞かれた。「責任感」が強いので、仕事が終わらないと帰らない、したがって「退社時間が守られない」ことになるようである。この問題に対して「自分は上司に悪く思われても退社時間になったら帰る」という回答と、「できる限り韓国の慣行にあわせるよう努力している」との2つの異なった対応がみられた。

韓国の職場で遭遇した問題点については、言葉、コミュニケーションにまつわる回答が多かった。とくに、韓国語のできないベトナムから来て就職した者は、業務そのものは英語で遂行しているが、同僚とのコミュニケーションに苦勞しているようであった。韓国語が良くでき、韓国人の同僚とも問題なく業務をしている中国出身の女性も「会社に中国人アルバイトが5人いる。食事をする時はいつも、中国人は中国人同士、韓国人は韓国人同士で別々に食べている」と回答していた。

過去の職歴を聞くと、現在の所属企業が初めての就職先である調査対象者が11人中4人いた。いずれも中国出身者で、韓国への留学経験者である。中国出身者で残る2人は、中国で就職した経験を持っていた。ベトナムの5人は、いずれも大学卒業後、就職している。うち2人は韓国政府の奨学金を得て、韓国の大学院に留学、大学院を修了後に韓国で就職。他の3人は「賃金の高い」企業を求めて韓国の企業に転職していた。

「長く韓国で暮らす」ことには否定的

「韓国で長く働き続けるつもりか」との質問に対しては、11人中8人が「長く仕事をしてくれと請われても、韓国で長く暮らす気はない」と否定的で、なかには「今年の9月に契約が終了した後、ベトナムに帰る」など、すでに帰国のスケジュールのある回答者が2人いた。他の3人のうち1人は「長くいてくれとの要請があれば、韓国に長くいることもあり得る」との曖昧な回答で、明確に「長く韓国で働きたい」と答えたのは2人にとどまる。

「長く勤める気はない」理由は、就職理由の「韓国の企業で経験を積む」との回答と軌を一にするもので、韓国で経験を積んで出身国に帰り、より良い職を探すとの考え方である。中国出身者からは「両親がいるので、故郷に帰る」との回答も聞かれた。

「長く韓国で働きたい」と明確に答えたのは1人（ベトナム出身、女性）に過ぎず、現在勤める会社の賃金が低いので転職するつもりだが、転職先は韓国の企業であるという。理由は「韓国が好きになった」ので「韓国で結婚して長く暮らしたい」と希望を述べていた。

質問の中で、「日本で働く気はないか」と聞いたところ、肯定的意見は少なく「興味がある」と答えた回答者が2人いたのみである。大きなネックは「言葉」で、「日本語を今後勉強することは大きな負担になる」との意見が聞かれた。

3 まとめ

ここではシンガポールと韓国の調査結果を比較する。

第1節で検討した中国、ベトナムの学生の外国にある外国企業への「就職観」などは、予想外に共通点が多くみられたが、高度外国人材を受け入れているシンガポールと韓国の調査結果を比較すると、共通点より相違点が際立って多い。そこで、両受入国の調査結果からみた相違点を中心に検討する。

まず、第1に、受入制度の相違点を見る。シンガポールは1965年にマレーシアから分離独立して以来、一貫して外国人労働者受入政策をとってきた。詳しい議論は避けるが、東南アジア諸国のなかで最も著しい経済発展を遂げる過程で、マレーシア、インドネシア、タイ、フィリピンなど近隣諸国の労働者を活用してきた。現在では労働力人口300万人の30%に当たる100万人以上の外国人労働者がシンガポールで働いている。この多くはマニュアル・ワーカーである。シンガポール政府は景気変動に応じて数を調整するために外国人労働者を厳格な管理の下に置いている。

経済発展にとって必要な労働者はマニュアル・ワーカーにとどまらず、ホワイト・カラー層も重要である。シンガポール経済の構造は、金融と製造業が2本の柱となっている。金融業においてとりわけ多くのホワイト・カラー層が必要とされてきた。このホワイト・カラー層もシンガポールは近隣諸国の高度外国人材を受け入れることによって不足する労働力を補ってきた。ホワイト・カラー層とは具体的には専門職と管理職である。産業構造が高度化するに従って専門職と管理職の需要は増加の一途をたどった。このため政府はマニュアル・ワーカーとは大きく異なる受入制度を次第に定着させていった。現在では高度外国人材はEパスと呼称される就業許可書を取得すれば、多くの点においてシンガポール人高度人材とほぼ同一の処遇で就業することができる。Eパス取得者に対する政府の管理は極めて緩やかである。

一方、韓国の場合は1997年のアジア通貨危機の直後に経済が大幅に落ち込み、ここから立ち直る過程で外資導入とあわせて外国人労働者の活用が本格的に政策課題となってきた。2003年にはそれまでの研修制度を廃止し、外国人マニュアル・ワーカーの導入に踏み切り、外国人の「雇用許可制度」を本格的に整備した。この制度は2国間の政府合意に基づくもので、シンガポールの制度とは異なるが、外国人マニュアル・ワーカーを厳格に管理する考え方は共通している。高度外国人材受入制度については2000年代後半に入って整備が進み、現在の制度は2009年3月の出入国管理法施行令改正に基づく。

シンガポールと韓国で高度人材受け入れの歴史に大きな差

すなわち、シンガポールと韓国では高度外国人材受け入れの歴史に大きな差があり、シンガポールではすでに社会に定着した高度外国人材が多数みられるのに対し、韓国では定着は今後の課題となっている。シンガポールでは先の調査結果概要でみたように、永住権(PR)や個人Eパスによって高度外国人材の国内における転職を容易にする制度が整備さ

れているのに対し、韓国では「ビザを取得するのに限定条件がとても多い」と調査対象者の1人が指摘したように、「国内で長く勤める」ための制度が整備途上であるといえよう。

賃金の違いも大きな要素である。シンガポールが受け入れる高度外国人材は制度上、Eパスを取得しなければならない。Eパス取得条件の第1は「2,500S\$以上」（約16万3,000円）の雇用契約を結ぶことである。すなわち、高度外国人材の実質的な最低賃金が政府によって設定されていることになる。「2,500S\$」の賃金は、シンガポール人高度人材にとっての最低賃金といってもいい。シンガポールの雇用法適用労働者（マニュアル・ワーカー）は2,500S\$以下の賃金を得ている者に限定されている。シンガポールの調査対象者は出身国より「賃金が高い」ことがシンガポールで働く大きなインセンティブであることをほぼ全員が認めていた。

これに対し韓国で働く調査対象者の賃金は「税金、社会保険料を差し引いた手取額で「100～250万ウォン」（約9～23万円）と、企業により、あるいは個人によりその差が大きかった。調査対象者のなかには同じ職務に就いている韓国人より「賃金が高い」と考えている者もいた。また、韓国で働く中国人高度人材の調査対象者の何人かは「韓国の賃金は中国と同水準」と話していた。ここにおいては「高賃金」というインセンティブはないように見える。他方、ベトナム出身の高度人材は「韓国の賃金はベトナムの2倍」と評価していた。単純に比較することはできないが、シンガポールの調査対象者の賃金は3,000～6,000S\$（約20～40万円）で、韓国の調査対象者をかなり上回っていた。

社会の受け入れ態勢に違いも

制度のみならず、社会の受け入れ態勢の違いも大きい。シンガポールは独立以前から移民によって成り立っている中国系を中心とした多民族社会である。近隣諸国の中国系を高度人材として受け入れ、社会に統合していくことに大きな軋轢は少ない条件がもともと揃っていた。中国系のみならず、シンガポール国民には10%近いインド系国民も存在する。多くはタミール語を母語とする南インド系のインド人である。当初はマレーシアのインド系高度人材がシンガポールに来た。最近ではインド本国からも職を求めてやってきている。中国本国からの受け入れは、政治的外交的理由から長く拒否していたが、1990年に国交を結んだ後、慎重にはあるが中国からの受け入れも承認するようになっていく。

シンガポールにおいては、近隣諸国の中国系の高度外国人材は、英語のみならず中国語を解する者が多い。企業における業務は英語が中心で、高度外国人材の英語能力は「完璧」に近いものがあり、かつ中国語を解することによって、中国系が大半を占める企業のシンガポール人同僚との「英語と中国語のミックス」による付き合いに支障をきたすことが少ない。同様に企業外の日常生活においても言葉の問題はないようだ。

これに対し、韓国においては、調査対象者の多くが、企業内で韓国語によるコミュニケーションに困難さを訴えており、日常生活においてはさらに困難さは大きいようだ。例外は韓国語が得意な「中国国籍の朝鮮族」に限られる。韓国における「中国国籍の朝鮮族」は、シ

シンガポールにおける「中国系」と類似した状況であるといえよう。こうした社会の受け入れ態勢の違いが、シンガポールでは高度外国人材が「働いて生活する」ことを前提にしているのに対し、韓国においては「数年、経験を積んで出身国に帰る」と考えている者が多い背景となっているようだ。シンガポールの調査対象者で「経験を積む」と答えた者はいない。

言葉の問題は、シンガポールでは企業に限らず社会全体が英語を第1言語とし、中国語を第2言語として社会生活が営まれているのに対し、韓国では企業においても社会全体においても韓国語が第1言語で、英語は「第1外国語に過ぎない」という事情にある。この違いは、高度外国人材が働き、生活していく上では決定的な違いとなっている。

シンガポール、韓国の社会の違いは言葉にとどまらず、「食事」にもみられた。シンガポールでは、企業で、あるいは日常生活で直面する問題に関する質問で「食事」に言及されることはなかった。しかし、韓国においては調査対象者の少なからざる者が「韓国料理が口に合わない」と答えている。

就職の経緯も大きく異なる。シンガポールでは、大学を出身国ないし外国で卒業した者が、「高賃金」を理由に就職している。これに対し韓国では、調査対象者の半数以上が韓国政府の奨学金などで留学した後、韓国内で就職している。

積極的な受け入れ政策が共通点

さて、シンガポールと韓国の共通点はなにか。調査結果から明確な共通点は見出し難いが、あえていえば、上記に述べたことと同趣旨であるが、政府の積極的な受入政策であろう。シンガポールは先に何度も指摘したように、独立以来一貫して高度外国人材受け入れに積極的だ。韓国の場合は、受入政策が策定されてそれほどの年月を経ていないため、まず政府が奨学金を支給して大学院への留学を促し、終了後、「特定活動（E-7）」ビザを支給することによって国内での就職の促進を図っているようだ。

第2の共通点は、出身国との賃金格差と就職している高度外国人材の性格だ。シンガポールの場合は、理由は先に述べたとおり、近隣のシンガポールと比較して「賃金の低い」東南アジア諸国の中国系が中心である。韓国の場合も同様に近隣の韓国と比較して「賃金の低い」国である。ヒヤリング調査の対象者ではこの点は十分に確認できないが、第5章の表5-1-5「ビザ類型別専門人材の主要出身国」をみると、E-7ビザ取得者は中国出身者が圧倒的に多いことが分かる。とはいえ、表5-1-10「国別にみた就業職種」では、中国出身者の70%以上が「調理師長、調理師」である。

以上みたように、シンガポールの高度外国人材受け入れはほぼ定着し、シンガポールで働く高度外国人材は社会に溶け込み、長くシンガポールで就業している。この要因は、政府の積極的な受入政策と、英語がビジネス上の第1言語であり、多民族社会であるというシンガポールの特異性に根ざしたものであるといえる。

韓国の場合は、シンガポールとは大きく社会の条件が異なり、積極的な受入政策を導入して日が浅いことから、現状では韓国で就職した高度外国人材は「経験を積むために数年働く」

と考えている者が大半で、韓国企業に定着して働くが増えるにはまだ時間がかかりそうであるといえよう。

第2章 中国における調査結果

本章では高度人材を各国に送り出している中国の北京と大連における調査結果を検討する。中国においては、将来の高度人材の予備軍である大学、大学院の学生を調査対象とした。ヒヤリングでは年齢、男女別、現住所、出身地、母国語、その他の言語などの属性、所属する大学、大学院の専攻、卒業予定年などを確認した上で、現在の大学、大学院に進学した経緯、現在の専攻を選択した理由、将来の就職、職業に対する考え方、卒業後の進路希望を中心に聞いた。（質問項目は別添資料を参照のこと）

調査対象となった学生のほとんどが、現在所属している大学、大学院を選択した理由に関する質問に対し、「入学試験の成績」に言及して回答していた。これは北京、大連双方に共通する傾向であった。このため調査結果を検討する前に、中国の高等教育制度と大学入学試験制度の現状について簡潔に説明する。

第1節 高等教育制度の現状

1 学校制度の概要³

中国の初等教育は小学校の6年である。中等教育は初級中学3年、高級中学3年の計6年。このうち、小学校6年と初級中学3年の9年間は義務教育となっている。小学校、初級中学、高級中学のいずれにも、学期末、学年末の試験の成績により優秀な生徒を選抜した「飛び級」と、成績不振な生徒の「留年」の制度がある。

教育省に認可された高等教育機関は2009年現在、2600校を超える。内訳は総合大学、単科大学、専門大学があわせて1867校、独立学院（大学と民間組織が共同で設立した高等教育機関）が318校、社会人大学が444校である。

総合大学、単科大学、専門大学のほとんどは国立であるが、後で述べるように近年の教育改革のなかで、地方の発展に必要な人材育成のために大学の管理を省政府などに移管する動きや、民営大学（私立大学）設立の動きもみられる。

総合大学、単科大学には本科と呼ばれる4～5年制の課程、単科と呼ばれる2～3年制の課程が設けられている。専門大学は2～3年制の単科課程のみの大学である。

大学にも「飛び級」「留年」制度があり、不合格科目が4科目あると退学処分となる。留年は2年を超えることはできない。

大学院のほとんどは大学に付設されているが、なかには政府の研究機関に付設された大学院もある。例えば、自然科学の最高研究機関であるといわれる国務院直属の中国科学院は、教育機関として大学院を付設している。同大学院には約2万人の大学院生がいる。中国科学

³ 中国の学校制度については以下の Web を参照した。

http://www.moe.edu.cn/publicfiles/business/htmlfiles/moe/moe_2792/index.html

院は3万7,000人の研究者、技術者を擁し、これらの研究陣が大学院生の指導に当たっている。

高等教育改革

中国政府は1980年代末から今日に至るまで教育改革に取り組んでいる。目的は旧ソ連方式の教育制度から脱却し、1986年に打ち出した改革・開放政策に基づく市場経済導入に必要とされる人材の育成である。経済が飛躍的に伸びている最近においては、将来の技術開発を担う人材の育成が主要な目的となっている。

高等教育制度に関する具体的な改革方針として、①民営大学（私立大学）の設立、②政府の統制を抑制して大学の自立性を高める、③人事権を大学に委譲する、などが実行に移されている。

また100校程度の大学を選定し、限られた教育財政を集中的に配分して教育の質、科学研究の水準を高めて世界水準の一流大学へと発展させることを目的とした「211工程」（Project 211）を1993年から実施している。同政策に基づき1995年に「211工程重点大学」として大学109校、軍関係教育機関3校の計112校が指定された。さらに1998年には大学の研究活動の質を国際レベルに引き上げるために、特定の大学に重点的に投資する「985工程」（Project 985）が新たに打ち出された。教育省は2007年現在で大学38校、軍関係教育機関1校の計39校を指定している。

211工程重点大学と985工程指定大学はかなり重複しているが、985工程指定大学は北京以外の地方大学を指定する割合が高く、地方における高等教育の充実を図る方針が明確にみとれる。

上記の政策に基づき教育の質や研究水準の向上をより効果的に進めるために中国では数多くの機関が大学の評価を定期的に行っている。例をあげると、中国管理科学研究院・科学研究所では「211工程」が打ち出された1993年から毎年、独自評価システムに基づく評価を実施、2009年には605大学を対象に評価を行い「中国の大学ランキング」を公表している。政府の研究機関がランキングを公表することは中国ならではの点である。

いずれにせよ、211工程重点大学や985工程指定大学、大学ランキングで上位にランクされた大学は、高度人材を育成する大学と違って間違いない。

大学入学試験制度

ヒヤリングのなかで調査対象者が例外なく言及した中国の大学入学試験制度について、北京および大連における調査対象の学生の説明をもとに以下にとりまとめておく。

- ①中国の大学入学試験は全国全大学統一試験である。
- ②各省（市）ごとに各大学、学部、学科ごとの入学定員が割り振られ、試験問題も各省（市）ごとに作成される。すなわち統一試験ではあるが、試験問題は統一ではない。
- ③人口の多い、行政的な力が強い北京や上海などの大都市には入学定員が多く割り振られる傾向があり、北京や上海などの大都市出身者は、大学（とくに有名大学）に入学する

ことが、地方と比較して相対的に有利であるといわれる。

④受験生は、志望大学、学部、学科を第1から第5志望まで選択する。

⑤試験は全国一斉に6月上旬に3日間にわたって実施される。

⑥入学試験の成績の良かった受験生は、自分の成績に応じて複数の大学から1校を選択できる。だが、成績の悪かった者は当然ながらどこの大学にも入ることはできない。合格率は各省（市）によって大きく異なり一概にはいえないが、通常35%程度といわれている。

2 大学をめぐる最近の問題

ヒヤリングのアレンジを依頼した大学関係者から2つの問題点が指摘された。

1つは上記した高等教育改革とも絡むが、民営大学（私立大学）の問題である。政府が民営大学の設立推進策を打ち出して以来、100を超える民営大学が相次いで設立された。民営大学の増加は、大学入学希望者の増加と軌を一にしたものである。

しかしながら、教育カリキュラムや教員の陣容などの不備で、国家教育委員会の認可を得ることが難しい。教育省の資料によると2009年現在で、100を超える民営大学のうち認可を受けているのは10校程度に過ぎない。認可がなければ大学は卒業生に学士号を授与できない。にもかかわらず、無認可の大学が学生を募集して大学を運営している。

もう1つの問題は、大学卒業生の就職難である。教育改革の一環として1999年に大学の募集枠が大幅に拡大された。この結果、進学率は2007年には23%に達し、表2-1-1にみられるように、卒業生は大幅に増加した。だが、高等教育を受けた学生を受け入れるだけの雇用が生み出されておらず、大規模なミスマッチが生じている。未就業者の増大は大きな社会問題となっており、たびたび現地紙にも取り上げられている。

大学の募集枠拡大は、経済発展に必要な人材の育成とともに、国内で大学に進学できない学生の海外への流出（留学）を減少させることが目的であった。

表 2-1-1 中国の大学卒業生の就業状況

	1998年	2000年	2002年	2004年	2006年
卒業生の数（万人）	84.8	95.0	133.7	239.1	413.0
就業率（%）	79.3	82.0	80.0	73.0	70.0
未就業者数（万人）	17.6	17.1	26.7	64.6	123.9

出所：中国労働保障科学研究院資料

第2節 北京における調査結果

1 調査方法について

北京におけるヒヤリング調査は6月下旬に実施した。調査対象は、北京にある大学、大学

院の学生である。理科系、文科系の学生、学部生と大学院生、男女をバランスよく半々とすることを意図したが、必ずしも意図どおりに調査対象を選定できなかった。

調査対象者は「高度人材予備軍」である大学、大学院の学生で、当然のことながら、どのような学生が将来「高度人材」となるかを確認することは不可能である。したがって、一般的な社会通念に基づき、いわゆる「有名大学」の学生を調査対象とするよう努めた。ここでいう「有名大学」とは、上記の「中国の高等教育制度の現状」で述べた 211 工程重点大学や大学ランキングで上位にランクされた大学を指す。

調査は原則、1 人 1 時間程度の個別ヒヤリングとした。しかし、調査対象の学生の日程上の都合もあり、一部は複数の調査対象者に対するグループ・ヒヤリングとした（北京大学において 4 人と 2 人のグループ・ヒヤリングを実施）。グループ・ヒヤリングにおいても、ヒヤリング自体は順番に 1 人ずつ質問し、回答を得る方法をとった。質問趣旨の説明などは繰り返す必要がなく時間の節約にはなったが、回答順序が後になるにしたがい、それ以前の回答に影響される回答があったことは否めない。

ヒヤリングにおいては大半を中国語・日本語の通訳を介して実施したが、一部は学生の希望もあり、通訳を介さずに英語で直接実施した。このため訳語の一部、例えば学部名などは必ずしも統一できていない。

北京における調査対象者は以下の 16 人である。

表 2-2-1 北京の調査対象者

(人)

大学・大学院名	合計	理科系	文科系	学部	大学院	男	女
北京大学・大学院	6	2	4	1	5	3	3
清華大学	1	1	—	—	1	—	1
中国人民大学	1	—	1	1	—	—	1
北京交通大学・大学院	4	3	1	—	4	4	—
北京理工大学	1	1	—	1	—	—	1
中国科学院・大学院	2	2	—	—	2	2	—
中国科学技術大学・大学院	1	1	—	—	1	1	—
合計	16	10	6	3	13	10	6

2 調査対象者の所属大学・大学院の概要⁴

調査対象となった 16 人が現在所属している大学、大学院の概要を以下に紹介しておく。

北京大学 (Peking University)

教育省直轄の 43 学部を持つ総合大学。1889 年に創設された京師大学堂を前身とし、辛亥

⁴ 大学の概況については以下を参照した。北京大学 <http://www.pku.edu.cn/>、清華大学 <http://www.tsinghua.edu.cn/>、中国人民大学 <http://www.ruc.edu.cn/>、北京交通大学 <http://www.ruc.edu.cn/>、北京理工大学 <http://www.bit.edu.cn/>、中国科学院・大学院 <http://www.cas.ac.cn/>、中国科学技術大学 <http://www.ustc.edu.cn/>

革命後の 1912 年に北京大学に改称。北京大学は五四運動の発生地であり、中国で最初にマルクス主義思想が広まり、中国共産党が最初に活動を始めた大学である。北京大学は清華大学と並んで最難関大学とされる。211 工程重点大学。2008 年の学生数 3 万人、うち大学院生は修士課程、博士課程あわせて 1 万人、教員数 3,000 人。(科学研究所の 2009 年総合ランキング 2 位)

清華大学 (Tsinghua University)

教育省直轄の 14 学部、55 学科を持つ総合大学。1911 年に創設された清華学堂を前身とする。清華大学は常に北京大学と大学ランキング 1 位を争っており、ここ数年は毎年 1 位。1950 年代の全国的な大学再編の際に文科系学部を他大学に移し、理科系中心の大学となったが、改革開放後は文科系学部を復活させ総合大学となった。211 工程重点大学。教職員 7,000 人、学生 3 万 1,000 人。(科学研究所の 2009 年総合ランキング 1 位)

中国人民大学 (Renmin University of China)

人文社会学系を主体とした教育省直轄の総合大学。1937 年に創設され、1950 年に現在の名称に改めた。211 工程重点大学。2008 年現在、教員 1,700 人、学生 2 万 3,000 人。(科学研究所の 2009 年総合ランキング 21 位)

北京交通大学 (Beijing Jiaotong University)

交通運輸学部、土木建築学部、理学部、経済管理学部、人文社会科学部など 12 学部を持つ教育省直轄の 4 年制総合大学。創立は 1909 年。211 工程重点大学。2009 年の学生数 3 万 1,000 人、教職員は 3,000 人。(科学研究所の 2009 年総合ランキング 59 位)

北京理工大学 (Beijing Institute of Technology)

国務院工業情報省直属の理学、工学、法学、経済学、管理学など 10 学部に 60 学科を持つ総合大学。1940 年に創設。他大学との統合、改称を繰り返し、1988 年に現在の名称となった。211 工程重点大学。2008 年現在、教職員 3,500 人、学生数 4 万 5,000 人で、うち 8,000 人が大学院生。(科学研究所の 2009 年総合ランキング 31 位)

中国科学院・大学院 (Graduate University of Chinese Academy of Sciences)

自然科学の最高研究機関であるといわれる国務院直属の中国科学院に教育機関として付設されている大学院。大学院生は 2 万人。中国科学院の 3 万 7,000 人の研究者、技術者が大学院生の指導に当たっている。

中国科学技術大学 (University of Science and Technology of China)

中国科学院付属の教育機関として安徽省合肥市に 1958 年に設立された国立大学。数学、理学、化学など理科系を中心とするが、人文社会科学系も有する。211 工程重点大学。学生数 1 万 5,500 人、うち修士課程 6,200 人、博士課程 1,900 人。(科学研究所の 2009 年総合ランキング 7 位)

3 調査結果

(1) 調査対象者の属性

ヒヤリングした学生は、先の表 2-1-1 で示したとおり、7 大学・大学院の 16 人である。所属学部・専攻を理科系・文科系別にみると、理科系 10 人、文科系 6 人である。男女別では男子学生 10 人、女子学生 6 人。学部生が 3 人、大学院生が 13 人で、少し大学院生に偏ったきらいがあるが、これは「高度人材になる可能性の高い学生」とヒヤリングのアレンジを依頼した大学関係者に要望したためである。

修士課程・博士課程別にみた大学院生の内訳は、修士課程 8 人、博士課程 5 人である。学部生 3 人を理科系・文科系別にみると、理科系 1 人、文科系 2 人、大学院生 13 人の内訳は理科系 9 人、文科系 4 人である。なお、理科系の大学院生には心理学専攻 1 人を含む。日本では心理学は文科系に分類されるが、中国では「理科系に分類される」との当の学生の見解に従った。

文科系では大半が「管理学」、すなわち情報管理学、経済管理学、政府（行政）管理学、人的資源管理などを専攻する学生であった。ヒヤリングのアレンジを依頼した 1 人である北京大学の教授から「中国では管理学が文科系で最も人気がある。社会のニーズがあるからだ」との説明があった。例外は「哲学専攻」が 1 人いたことである。

ついで地方出身者と北京出身者の割合をみると、北京出身者はわずかに 1 人で、残る 15 人はいずれも地方出身者である。通訳者は地方を「田舎」と訳していた。通訳者によると、中国では現在大都市は北京、上海、広州、深センの 4 大都市に限られ、その他の地方はすべて「田舎」と一括して呼ばれるとのことであった。15 人の地方出身者の出身地はバラエティーに富んでいたが、北京以外の大都市出身者はいなかった。これも通訳者の解説であるが、他の 3 大都市にはそれぞれ有名総合大学があり、北京の大学に入る者は少ないという。

地方出身者はすべて、大学構内に男女別に設けられた学生寮で暮らしている。北京交通大学の学生寮をみせてもらったが、学生寮として 25 階建ての高層ビルが数棟ある。その 1 つのビルに約 4,000 人の男子学生が暮らしていた。なお、ヒヤリングで訪問した北京大学、清華大学、中国人民大学、北京交通大学、北京理工大学などの大学は、北京都心の北西部に隣接して所在している。地下鉄の駅でいえば、人民大学前のつぎの駅が北京大学東門駅である。清華大学は、北京大学と大通り 1 本を挟んで隣り合わせに位置する。北京のこの地区は、まさに大学都市とっていいであろう。多くの地方出身の大学生・大学院生はほとんどこの大学都市のなかだけで 4 年ないし 6 年、9 年を過ごすと言われた。

調査対象者の年齢は 19～28 歳の間で、小・中・高に「飛び級」があると聞いていたので、若年の学生が含まれていると予想したが、特別年齢の低い学生はいなかった。

属性でとくに印象に残ったのは、語学である。いずれも母国語は中国語であり、大学入学以前の外国語は英語のみを学んでいた。中国の大学では、特別な専攻を除くと、第 2 外国語教育はない。その分どの調査対象者も英語を重視して勉強していると答え、5 段階の自己評

価を求めると「完璧」「ほぼ完璧」と答える割合が、5割を超え、「力不足」との答えは皆無であった。いずれの学生も英語力には相当に自信があるようであった。

(2) 現在の大学・大学院に進学した経緯

現在所属する大学に入学した理由は「全国統一の入学試験の成績の範囲で入学できる大学を選択した」「全国統一の大学入学試験の結果を考慮し、希望する理学部の水準の高い大学であることから、清華大学を選択した」「全国統一の入学試験で、良い点が取れたので北京大学に入った」といった回答が最も多かった。すなわち、多くの学生は全国統一入学試験の成績で入学可能な最も水準の高い大学を選択している。ほぼ例外はなかった。

成績に自信のある学生からは「当初から北京大学に入学したいと思って受験勉強をした。北京大学が水準の高い大学であることが理由である」「中国で最もレベルの高い大学（北京大学）であることから志望した」との答えがあった。これらの回答をした学生は、「有名大学」に入学することが第1目標で、「全国統一の大学入学試験の結果をみて、北京大学の各学部のなかから、入学可能な政府管理学部を選んだ」「本当は、テレコミュニケーションが第1志望であったが、入学試験の点数が少し足りず、コンピュータ学部を選んだ」との回答にうかがえるように、学部、専攻も成績次第で選択したようだ。

いずれにせよこれらの回答には中国の受験戦争の厳しさがにじみ出ていた。「安徽省から北京大学の計算機科学技術学部に入学できる枠は1つしかなかったが、高校の教師のアドバイスで選択した」との答えからもうかがえるように、今回ヒヤリングした回答者は例外なく受験戦争の勝者であるとの意識を垣間みせていた。

大学、学部、専攻の選択は、第1義的には上述したように「入学試験の成績如何」であったが、なかには「鉄道が子供の頃から好きだったので、鉄道に関係する大学を選んだ」「高校時代から宇宙工学に関心があり、(宇宙工学で有名な)この大学を選んだ」「高校の時、政治や歴史の科目が好きであったことから、政府管理(行政管理)を専門に選んだ」のように、自分の関心や適性を考慮したとの回答も幾つかみられた。

他方、学部や専攻の選択を将来の職業と結びつけて選択したとの回答は少なく、わずかに「学科は、理科系で、将来性のあると思われるコンピュータを選んだ」「コンピュータ関連の分野は今後も限りなく発展すると考え、コンピュータ分野が充実している交通大学を選んだ」などが聞かれた程度である。むしろ「将来の仕事を考えて大学、専攻を選んだわけではない」「仕事のことを考えて、専門を選んだわけではない」との答えの方が多かった。

このほかに印象に残った点は、大学や学部の選択に際して、「両親、高校の教師の意見を十分に参考とした」と答えた学生が比較的多くみられたことである。

上記のように大学入学試験は非常にシビアであるが、これに比較して大学院進学の際の経緯は「大学で、ある程度ソフトウェアについて理解したが、さらに高度な知識を得たいと思い、大学院に入った。教授の推薦もあり、比較的容易に進学できた」「学部だけの勉強では物足

りなくて、博士課程に入った」「大学院に入ったのは、もっと多くの知識を得たいと考えたからである」などの意見にみられるように、入学試験に関する“苦労話”はなく、もっぱら「さらに知識を得たいから」といった動機がほとんどを占めていた。出身大学の大学院に入るには指導教授の推薦があれば比較的容易であるという事情がこれらの回答には反映しているようである。調査対象者の1人は「大学院進学希望者の70%は進学できると思う」と話していた。

大学院生13人の大半は学部の専攻と大学院の専攻が同じであったが、一部には「大学では経済管理学を勉強したが、どうしても情報管理学を勉強したくなり、この大学院に入った」「学部では、数学を中心に勉強したが、修士では大きく方向転換して管理を学ぶことにした」と専攻の転換を図った学生もいた。

(3) 卒業後の進路希望

卒業後の進路希望については、まずつぎの選択肢から1つ選んでもらう方法でヒヤリングを進めた。(カッコ内は回答者数。いずれも第1志望。第1志望が2つの場合があり、合計は16人にならない)

- ①外資系企業 (1)
- ②民間企業 (2)
- ③国有企業 (7)
- ④公務員 (1)
- ⑤外国にある外国企業 (0)
- ⑥起業 (0)
- ⑦家業を継ぐ (0)
- ⑧(学部生の場合) 大学院への進学 (1)
- ⑨外国への留学 (3)
- ⑩その他 (3)

16人の回答をみると、「⑤外国にある外国企業」「⑥起業」「⑦家業を継ぐ」の3項目は皆無である。大学、大学院を卒業して直ちに「起業することは中国では難しい」との説明があった。「家業を継ぐ」という考え方も現在の中国ではあまりなく、「農業を継ぐ」ことはあるが、大学、大学院を卒業して直ちに継ぐことは極めて例外だろうとのことであった。

「⑤外国にある外国企業」については、次項で検討する。

「⑩その他」の3人は「政府関係研究機関」2人、「選択肢が多く、志望を絞り込めていない」1人である。

10項目の選択肢のなかで最も回答が多かったのは、「③国有企業」である。16人のうち、7人が国有企業を選択した。国有企業を志望する理由は、「国有企業はかつては色々と問題があったが、多くの改革が実施され、最近では賃金も民間企業より高くなっている」「国有

企業は何よりも安定した雇用を提供してくれることが魅力だ。最近では賃金も高くなっている」「専攻したコンピュータ工程、情報科学の知識を活用できる」などが代表的な回答である。

ここでは、雇用が安定していること、賃金も民間企業より高い、専門知識・技能が活用できる、の3点が強調されている。中国の「改革・開放」政策は、1986年に始まったが、本格化したのは1994年以降である。「改革・開放」は、計画経済から市場経済への移行を図る政策であるが、政策実施当初は「非効率な事業活動」をしていた国有企業の改革が焦点の1つで、過剰な人員を整理した結果、多くの失業者（「待業」）が発生し大きな社会問題となった。回答者の1人が指摘したように、多くの改革が実施され、現在では「雇用が安定」し、「賃金も高くなっている」と、就職先として高く評価されているようだ。

国有企業を希望した7人のうち4人は北京交通大学の大学院生である。北京交通大学のヒヤリング対象者は4人で、全員が国有企業を希望しているとの回答をしたことになる。これは偶然ではない。志望理由は、雇用の安定、賃金も高くなっている、専門知識・技能が活用できる以外に「交通・運輸・機械管理という専門分野を活かすことができる仕事は国有企業に多いと考えられるからだ」「交通・運輸・機械管理を専攻している。この分野での就職先は国有企業が最も多い」との事情があるようだ。

もう1人、国有企業を選んだ学生の意見を紹介する。この学生は固有名詞をあげて「電力配電企業B社」への就職を希望していた。その理由として、専門分野を活かせること、安定した企業として評価されていることの他に、「公共企業に入って仕事をすれば、社会に対する貢献度が高い」ことをあげた。同学生によると、「中国には“体制内”、“体制外”という考え方がある。体制内とは国有企業、公務員のことで、体制外とは民間企業、外資系企業のことである。自分は体制内の仕事をしようと思っている」という。

もう1人、国有企業を志望している政府（行政）管理学専攻の女子学生が「第1志望は有名な国有企業。理由は、大きな組織で行政管理を実践してみたいから」と答えたのが印象に残った。彼女の第2志望は公務員で、その理由は「行政管理を専攻しているからである」という。彼女は北京大学の修士課程の学生だが、その説明によると、政府（行政）管理学は研究というよりももっと実践的な学問で、学んだことを実際の組織のなかで使ってみないと自分の勉強の成果が分からないということであった。

国有企業と類似した組織である政府関係研究機関を希望している学生が2人いた。政府関係研究機関とは、政府のいずれかの省庁（部）や委員会に付属する機関で、予算は政府が負担しているが、職員は公務員ではない。

このうち1人は、「国有企業か、政府関係研究機関を希望」している学生で、希望理由は上でみた国有企業希望理由とオーバーラップするが、それに加えて「自分には総合的な能力があり、また行政能力もあるので、政府機関や国有企業で総合的な仕事をする事に向いている」ことを理由にあげている。こうした考え方から同学生は「大学院では、専門の研究をす

るとともに、研究生会（大学院の学生会）の会長をずっと務め、行政的な能力を養ってきた」という。研究生会会長を務めたという経歴は就職、とくに国有企業や公務員試験で有利な条件になるので、それを意識して長く務めてきた、と話してくれた。このため、この学生は、「外資系企業も民間企業も自分の勤め先としては考えられない」と一般企業への就職を否定し、「就職を考える場合、賃金は問題ではない。中国では、専門の基礎ができていれば、大きく飛躍できると考えられている。自分がしたい仕事をするのが最も重要で、お金は後からついてくるものだ」と強い調子で回答した。

政府関係研究機関を希望していると答えた他の1人は、すでに希望どおりの就職が決まっていた。この学生の専攻はコンピュータのソフトウェアで、「専門を活かすことができる」就職先を探すため、「修士の最終学年になった2009年9月から今年の4月まで」就職活動を行い、「両親と相談し、国有企業3社、3政府関係研究機関に絞って準備をし」「結果的に、出身地、天津に近い北京の政府関係研究機関に勤めること」にした。就職活動をするなかで「2008年の金融危機の影響で、就職は困難な状況であった。入りたい企業が募集していなかったり、色々なことが分かった」という。就職先を決めた理由は、「統計数値を用いて各種のシミュレーションを行い、政策に役立つ数値情報を作成する職務」に「興味がもてること」で、「最終的に絞った6カ所のうち、賃金は最も低いところだが、仕事に興味を持てることが決定した理由である」と語った。

公務員を第1志望に上げたのは、わずか1人であった。その理由は、「政府管理学を学んだ」からで、また、「生活が安定すると思う」と答えた。自らの専門と雇用の安定が就職先選択の理由となっており、この点では国有企業、政府関係研究機関の志望者と軌を一にしている。

公務員については、1人の調査対象者からつぎのような説明があった。「公務員にはポストによって2年間の実務経験が要求される。ポストごとの募集なので、思ったような職に就けないことがある。つまりポストが空くまで長く待つ必要があるわけだ。これが嫌われる1つの理由だろう」。すなわち、公務員の場合、賃金がそれほど高くないことはともかくとして、少なくとも就職当初は専攻・専門と異なった職務・職種に就く可能性が高いことが敬遠される理由であるようだ。とはいえ、公務員の人気は低いわけではない。「北京、上海などの大都市の公務員試験に合格することは極めて難しい」とのことであった。

民間企業を希望していた学生は2人いたが、2人とも「国有企業か民間企業の大企業」と答えており、「大企業」である点が強調されていた。詳しく聞くと、国有企業の優先度が高いニュアンスであった。希望理由は「専門を活かせる」ことで、民間大企業を選択する具体的な理由は乏しかった。賃金面では、民間大企業の方が高いが、最近では国有企業によっては民間大企業より高い賃金の企業もみられると説明していた。

外資系企業を第1志望とする学生はわずかに1人である。この結果は少し意外であった。この学生は修士課程の2年生でこの7月に大学院修了をひかえ、すでにアメリカ系の外資系

企業への就職が「内定」していた。専攻はコンピュータ・システム構造で、「専門分野を考えて、世界的に有名な統計ソフトを開発した A 社の中国法人への就職を決めた」と答えた。現在は「内定」段階で、まだ雇用契約は取り交わしておらず、卒業証書をもってから、契約することになるという。中国の「内定」は、本人・企業・大学による「3 者協定」に基づくもので、「内定が取り消されることはない」ようだ。当初の雇用契約は有期で、3 年、5 年、7 年のいずれかになるが、「まだ知らされていない」。A 社は直接、大学に来て募集活動し、同級生が 30 人が応募したが、「合格したのは自分を含め 3 人だけである」。この学生は、次項で検討する“外国での就職”について、「アメリカで働いてみたいと考えたことはある」と前向きに答えた数少ない 1 人で、「アメリカ系の企業に就職すれば、アメリカで研修を受ける機会があるかもしれないと期待している」と話していた。

学部生で大学院進学希望者は 1 人であった。「修士課程では、哲学ではなく、政治学を専攻したい」と話し、大学院に入って政治学を学べば気持ちが変わるかもしれないが、現時点では「修士を卒業したら、公務員になりたいと思う。場所は、北京でも、出身地の湖南省でもいい。1 人っ子なので、両親は湖南省に帰ってきてほしいと希望している」と答えた。この学生の就職観は、先にみた公務員志望者に近いといえよう。

3 人の学生が留学を希望していた。学部生 1 人、大学院生 2 人である。留学先は 2 人がアメリカで、1 人はドイツ。アメリカ希望の 1 人とドイツ希望の学生は、すでに留学先が決まっていた。留学希望者はいずれも留学先で奨学金を得ることにしている。

ドイツに留学が決まっているのは学部生で宇宙工学部において力学を専攻、ミュンヘンの大学院に 3 年間行く予定である。ドイツを選んだ理由は「力学の分野で多くの先端的研究が行われている」ことだ。大学院を修了した後は中国に帰り、政府関係研究機関か国有企業への就職を希望していた。ただ、「ドイツへ行けば考えが変わるかもしれない」と答えている。

アメリカに留学が決まっている 1 人は心理学専攻の大学院生（修士課程）で、留学理由は「さらに専門知識を得るため」と答えた。この学生は 2009 年 9 月からアメリカの大学のスカラシップを得るための活動を始め、14 の大学に申請したがいずれも審査に漏れ、10 カ月間かけてようやくケンタッキー州立大学のスカラシップを得たという。この間、決してめげることはなかったと話している。彼女は「1 度も外国に行ったことがない」が、英語はほぼ完璧にできるので「アメリカでもしっかり研究できる」と自信満々に答えていた。この学生は大学院を終えた後、「アメリカで働きたいと思うようになるかもしれない」とその就職観を語っていた。

もう 1 人の留学希望者は、「アメリカのどこかの大学」に留学したいと希望を述べたにとどまる。留学後については「よく分からない」との答えであった。

このように 3 人の留学希望者がいた。偶然であろうが、いずれも女性で、理科系の専攻であった。

この項の冒頭に掲げた回答の分類のなかで「⑩その他」の 3 人のうち 2 人はすでに述べた

ように、政府関係研究機関を希望していたが、残る1人は、卒業予定が3年先なので「まったく考えていない。国有企業、民間企業、外資系企業と選択肢の幅は広い。今後じっくり考える」と答えた。就職観としては「専門を活かした仕事をするようになると思う」と話していた。

以上の「卒業後の進路希望」を簡単にとりまとめると、第1に調査対象の学生の大多数が大学、大学院で専攻した自分の専門を活かすことができる職に就きたい、と考えているといえる。この背景には、中国の高等教育は「実戦的」な面が重要視され、将来の職業と密接に結びついていることがうかがわれた。

第2に、国有企業の人気思った以上に高かったことである。国有企業への就職を希望する学生は異口同音に「雇用の安定」と「最近賃金が高くなった」ことを理由としてあげていた。これに対し、民間企業、外資系企業は、国有企業と比べて「賃金は高い」が「雇用は不安定」であると考えられている。中国においても2008年9月のリーマン・ショック以降の景気後退で雇用が不安定となり、とくに民間企業、外資系企業で雇用調整が大規模に実施されたことが、就職を考える学生に強く影響しているといってよさそうだ。

第3に、北京の学生には「外国にある外国企業」に就職することは、現実的な問題としては捉えられていないことである。外国企業への就職を「まったく考えたことがない」「機会があれば考えてもいい」との回答がこのことを表している。ただ、留学希望者を含めて約半数の学生が「先進国」に強い関心を示し、「研修、勉強のために行きたい」との意欲を示していた。先進国のなかでは、アメリカが関心の的であった。調査対象者の回答ぶりからみて、これは中国の熱心な「英語教育」の結果ではないかと考えられる。

(4) 外国での就職について

卒業後の進路希望に関する質問では、外国留学を希望する調査対象者は複数いたが、外国での就職を希望する者は皆無であった。そこで調査趣旨を改めて説明し、外国での就職に関する意見、感想を聞くことにした。

この結果、最も多い回答は、「考えたことがない」「自分のこととしては考えられない」といったもので、16人中、10人がこうした感想であった。「考えたことがない」と答えた学生10人に、“空想でも”と水を向けると、「機会があれば、考えてもいい」「機会があれば、若いうちにしばらく外国で働いてもいいと思う」と答えてくれた者が2人いた。

「とくに興味はない」「外国で働く気はまったくない」と全否定して、この質問に対する回答をうち切った学生も16人中、2人みられた。「外国で働く気はまったくない」と答えた学生の理由は、「テレビなどで見る外国の生活スタイルが嫌いだからだ」とにべもなかった。

この背景には、ヒヤリング対象者全員が「外国には1度も行ったことがない」との事情があるようである。ただ、外国に対する考え方は必ずしも否定的なものだけでなく、なかには「外国で勉強すること、研修を受けることには興味がある」と回答した学生も複数みられ、

“就職”は考えづらいが、外国における研修や外国旅行には強い関心を持っているとはいえずよう。しかしながら、中国においてはそうした機会は依然としてまれなケースであるようだ。

他方、外国に対するポジティブな意見も少数であったがみられた。最も積極的なものは「アメリカやヨーロッパ、日本などの先進国に、留学、研修、就職などどのような形であっても行ってみたい」との回答である。外国に行きたい理由をこの学生は「自分の技術を向上できると思うからだ」と語っていた。

具体的国名が上げられたのはアメリカのみで、「外国で働くとなればアメリカだ」と16人中3人が言及した。その1人はアメリカ系の外資系企業への就職希望者で、「アメリカで働いてみたいと考えたことはある」と答えている。最も外国での就職の可能性が高いと思われたのは、アメリカへの留学が決まっている学生で、「アメリカの大学院を修了すれば、アメリカで働きたいと思うようになるかもしれない。アメリカには、中国よりも、専門の社会心理学を活かすことのできる職業が多くあるのではないかと考えている」と話していた。

日本については、残念ながら先に紹介した「日本などの先進国」との言い回しがあったのみで、それ以外の言及はなかった。いずれにせよ、今回ヒヤリングした学生の興味の対象はアメリカに代表される「先進国」のみであったといえよう。なかでもアメリカに対する関心が高い背景には、すでに属性の項で指摘したように調査対象者が一様に「英語力」に自信を持っていることがある。また、是非は別として、テレビ映画などを通じてアメリカを身近なものと感じているようだ。

以上の「外国での就職について」の回答をとりまとめると以下のようなになる。

- 「全否定」2人
- 「考えたことがない」10人
 - ・うち「機会があれば考えてもいい」2人
- 「機会があれば就職でも研修でも留学でもいいから先進国に行ってみたい」1人
- 「外国で働くとなればアメリカ」2人
- 「留学後、アメリカで就職するかもしれない」1人

(5) 将来の希望・展望

前の項で就職に対する志望をみたが、ここでは就職した企業に長く勤めるか、あるいは転職を視野に入れているかなどについて調査対象者の回答をみていく。

国有企業、公務員を希望している調査対象者の回答は非常にシンプルで、「長く勤めるつもりである」と判で押したように答えていた。「雇用の安定」を重要視して就職する以上は長く勤めようとすることはごく自然な発想といえよう。

アメリカ系外資系企業への就職が内定している学生も、「働き始めてみないとどうなるかわからないが、現時点では自分の能力を十分に発揮したいと思っている」と控えめな回答であった。外資系企業は中国においても「転職」が頻繁にあると事前に聞いていたので、その

点をさらに聞いてみたが、「仕事の内容次第である」との答えで、「昇進」「賃金」は念頭にないようであった。

16人の調査対象者のなかで唯一、将来の「仕事」について熱っぽく語った学生の回答を最後に紹介しておく。「中国の一流大学の卒業生として、社会に役立ちたい。具体的には、国民の生活をよくするために働きたいと思っている。そのために、中国の政治に関わることに興味がある」。

こうした考えがもう少し多く聞かれると事前には予想していたが、北京の学生の将来展望は予想外に堅実な「安定指向」であった。

(6) 就職情報について

本節の最後に、ヒヤリングの中で説明を受けた北京の大学における「就職情報を入手する方法」についてまとめておく。

就職情報を得るルートには、①大学の就職担当事務室（掲示板）、②各学部、研究科の就職担当の教員、③指導教員、④学生会、研究生会などの学内組織、⑤同窓会、⑥キャンパス内のイントラネット、⑦民間企業、外資系企業の情報はインターネット、⑧知人、⑨企業が直接大学に来て募集、などがある。

ヒヤリングした学生の見解では「どれが有用かは一概にいけない」が、学内の情報は「1次的なもの」を得られるにとどまるとの回答が多かった。国有企業に関しては、国有企業に勤めている「知人」が最も有力な情報源で、「企業内部の者（職員）の推薦が得られれば入社できる可能性が高まる。ただし、筆記試験は免除されるが、面接は受けなければならない。推薦した学生が入社した場合、国有企業では推薦した職員に奨励金が出るようだ」と説明してくれた学生がいた。

今回ヒヤリングした16人の中では、「外国にある外国企業の募集」を目にした者は1人もいなかった。

第3節 北京におけるヒヤリング記録

北京 1

1. 属性

(1) 年齢・男女別	28歳、男
(2) 現住所	北京
(3) 出身地	天津市
(4) 大学・学部・専攻	中国科学技術大学（国立、安徽省）ソフトウェア学部
(5) 大学院・研究科・専攻・課程	中国科学技術大学大学院、ソフトウェア工程専攻、修士課程

(6) 卒業予定年月	2010年7月
(7) 言語 ①母語	中国語
②英語の能力(自己評価)	
a. 会話 b. 読み書き	a. ほぼ完璧 b. 完璧
③その他の言語	—
(8) その他特記事項	①すでに卒業し就職のため北京に転居済み ②就職先は政府の研究機関

(注) 中国科学技術大学は国務省中国科学院の付属大学である。

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 中国科学技術大学に入学したのは、全国統一の入学試験の成績の範囲で、希望するソフトウェア学部のある大学として選んだ。選択は間違っていないと思う。希望していたとおりの勉強ができた満足している。
- (2) 大学で、ある程度ソフトウェアについて理解したが、さらに高度な知識を得たいと思い、大学院に入った。教授の推薦もあり、比較的容易に進学できた。
- (3) 学部は4年、修士は3年である。いずれも9月に入学し、卒業は7月である。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 就職活動は修士の最終学年になった2009年9月から今年の4月まで行った。とはいえ、最初の数カ月は企業などの色々な情報をインターネットなどで集め、検討していた。
- (2) 2008年の金融危機の影響で、就職は困難な状況であった。入りたい企業が募集していなかったり、色々なことが分かった。
- (3) 最終的に、北京、上海、広州、深センの4大都市のいずれかで職を得ようと考えた。その理由は、ソフトウェアは大都市ほど発展しているからである。
- (4) 両親と相談し、国有企業3社、3国家機関に絞って、準備をした。
- (5) 結果的に、出身地、天津に近い北京の国家機関に勤めることにした。統計関係を扱う研究所である。
- (6) 統計数値を用いて各種のシミュレーションを行い、政策に役立つ数値情報を作成する職務である。シミュレーションを行うためのソフトウェアも開発する。
- (7) 最終的に絞った6カ所のうち、賃金は最も低いところだが、仕事に興味を持てることが決定した理由である。お金で選んだわけではなく、仕事の中身で選んだ。
- (8) 労働契約は、3年の有期雇用で、2回更新した後、無期契約になる予定だ。
- (9) 大学院2年の時、外資系企業から入社のお誘いがあった。月給は5,000元(約7万円)が提示された。大学院の勉強を続けるつもりであったので、断った。
- (10) 大学に就職事務所があったが、情報が古く役に立たなかった。

4. 外国での就職について

- (1) 外国で勉強すること、研修を受けることには興味がある。
- (2) とくにアメリカのシリコンバレーに強い関心がある。

5. 将来の希望・展望

今回入る政府機関で長く勤め、頑張るつもりだ。

6. その他特記事項

弟が1人いる。大学に通っている。1人っ子政策からいえば、違法かもしれない。

北京 2

1. 属性

(1)年齢・男女別	26歳、男
(2)現住所	北京
(3)出身地	江西省永新県
(4)大学・学部・専攻	北京交通大学（国立）コンピュータ学部
(5)大学院・研究科・専攻・課程	北京交通大学大学院、コンピュータ工程、情報科学専攻、博士課程
(6)卒業予定年月	2011年12月
(7)言語 ①母語	中国語
②英語の能力(自己評価)	
a. 会話 b. 読み書き	a. 普通 b. 普通
③その他の言語	—
(8)その他特記事項	大学院生で構成される院生委員会の委員長を務める。

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) コンピュータ関連の分野は今後も限りなく発展すると考え、コンピュータ分野が充実している交通大学を選んだ。
- (2) 学部だけの勉強では物足りなくて、博士課程に入った。
- (3) 北京交通大学の場合、博士課程は、修士課程と一環。修士課程を経て、博士課程に入るわけではない。したがって、学部から博士課程に入ると博士をとって卒業する、学部から修士課程に入ると修士をとって卒業するのが通常コース。博士課程に入ると、修士号を取得することなく6年の課程を経て博士号を取得する。他の大学の制度は知らないが、北京交通大学ではこうした制度をとっている。
- (4) コンピュータ工程、情報科学専攻の修士課程には26人、博士課程には12人の学生がいる。博士課程の12人のうち2人は外国人（アメリカ人、ベルギー人）である。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 政府関係の研究所か、国有企業を希望する。
- (2) 理由の1つは自分が専攻したコンピュータ工程、情報科学の知識を活用できること。
- (3) 2つ目の理由は、自分には総合的な能力があり、また行政能力もあるので、政府機関や国有企業で総合的な仕事をする事に向いていることだ。
- (4) 大学院では、専門の研究をするとともに、研究生会（大学院の学生会）の会長をずっと務め、行政的な能力を養ってきた。
- (5) 外資系企業も民間企業も自分の勤め先としては考えられない。
- (6) 就職を考える場合、賃金は問題ではない。中国では、専門の基礎ができていれば、大きく飛躍できると考えられている。自分がしたい仕事をする事が最も重要で、お金は後からついてくるものだ。
- (7) どの政府関係の研究所、国有企業を選択するかは、知人の紹介を重視する。自分は人間関係を重要視しているので、知人の紹介が最も信頼がおけると考えている。
- (8) ただ、知人の紹介であっても、試験はあるので、落ちることもあり得る。

4. 外国での就職について

自分のこととしては、考えられない。

5. 将来の希望・展望

希望する政府関係の研究所か、国有企業に入ることができれば、そこで長く勤めると思う。

6. その他特記事項

- (1) 交通大学では、就職の情報を得るルートにつきのものがある。
 - ①就職担当事務室。
 - ②各学部、研究科に就職を担当する教員がいる。
 - ③学生会、研究生会などの学内組織にも企業などから情報が寄せられる。
 - ④同窓会に大学出身者から情報が寄せられる。
 - ⑤キャンパス内のイントラネット
- (2) どれが有用かは一概にいけない。
- (3) 民間企業、外資系企業の情報はインターネットで得られる。

北京 3

1. 属性

(1) 年齢・男女別	25歳、男
(2) 現住所	北京
(3) 出身地	河北省阿兆除州
(4) 大学・学部・専攻	北京化工大学（国立）経済管理学部（2008年6月卒業）

(5) 大学院・研究科・専攻・課程	北京交通大学大学院（国立）、情報管理学専攻、修士課程
(6) 卒業予定年月	2010年7月
(7) 言語 ①母語	中国語
②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. 普通 b. ほぼ完璧
③その他の言語	—
(8) その他特記事項	6月末に卒業予定だが就職先は未定

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 大学は、親の意見と、入学試験の成績を考慮して選択した。北京の大学であることは必須条件であった。
- (2) 大学では経済管理学を勉強したが、どうしても情報管理学を勉強したくなり、この大学院に入った。大学院に入るに際しては、親は自分の意見を尊重してくれた。
- (3) 情報管理学の分野は自分の性格にあっていると思う。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 北京で働くつもりである。
- (2) 企業に勤めるつもりだが、国有企業か、民間企業を選択する。外資系企業は選択しない。
- (3) 理由は、賃金よりも、自分の専門分野の知識を活かすことを優先するからだ。
- (4) 企業内部の者（職員）の推薦が得られれば入社できる可能性が高まる。ただし、筆記試験は免除されるが、面接は受けなければならない。推薦した学生が入社した場合、国有企業では推薦した職員に奨励金が出るようだ。
- (5) これまでにインターネット、キャンパス内のイントラネット、掲示板、知人からの情報など、利用できるものはすべて利用して情報を集めた。
- (6) なんとか、幾つかの企業から採用するとの感触を得ている。

4. 外国での就職について

考えたことがないので、何の意見も言えない。

5. 将来の希望・展望

同じ企業で長く勤めると思う。

6. その他特記事項

自分は少数民族出身で、1人っ子政策から除外されているので、兄がいる。兄は両親と河北省阿兆除州で暮らしている。

北京 4

1. 属性

(1) 年齢・男女別	24歳、男
------------	-------

(2) 現住所	北京
(3) 出身地	湖南省
(4) 大学・学部・専攻	北京交通大学（国立）交通・運輸学部
(5) 大学院・研究科・専攻・課程	北京交通大学大学院、交通・運輸・機械管理専攻、修士課程
(6) 卒業予定年月	2011年7月
(7) 言語 ①母語	中国語
②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. 普通 b. 普通
③その他の言語	—

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) まず北京交通大学を選択し、それから最も難しい学部である交通・運輸を選択した。
- (2) 将来の仕事を考えて大学、専攻を選んだわけではない。
- (3) この選択が良かったかどうかは分からないが、この分野の勉強は興味をもてる。自分ではかなりの知識を蓄えたと考えている。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 国有企業に入りたい。
- (2) 国有企業はかつては色々と問題があったが、多くの改革が実施され、最近では賃金も民間企業より高くなっている。
- (3) 交通・運輸・機械管理を専攻している。この分野での就職先は国有企業が最も多い。
- (4) インターネット、キャンパス内のイントラネットで第1次的な就職の情報は得られる。

4. 外国での就職について

- (1) 機会があれば、考えてもいい。
- (2) ただ、これまでは考えたことがない。

5. 将来の希望・展望

国有企業に入れば、長く同じ企業では働くことになる。

北京 5

1. 属性

(1) 年齢・男女別	24歳、男
(2) 現住所	北京
(3) 出身地	西安市
(4) 大学・学部・専攻	北京交通大学（国立）交通・運輸学部
(5) 大学院・研究科・専攻・課程	北京交通大学大学院、交通・運輸・機械管理専攻、修士課程

(6) 卒業予定年月	2011年7月
(7) 言語 ①母語	中国語
②英語の能力(自己評価)	
a. 会話 b. 読み書き	a. 普通 b. ほぼ完璧
③その他の言語	—

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 鉄道が子供の頃から好きだったので、鉄道に關係する大学を選んだ。
- (2) 交通大学は鉄道部（省）に所属する大学である。学部には、鉄道、道路、物流、地下鉄などがある。
- (3) 学部では、数学を中心に勉強したが、修士では大きく方向転換して管理を学ぶことにした。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 北京か、出身地の西安で働くつもりである。
- (2) 就職はまだ1年先のことなので、これからゆっくり考えるが、恐らく国有企業を志望することになると思う。
- (3) 理由は、交通・運輸・機械管理という専門分野を活かすことができる仕事は国有企業に多いと考えられるからだ。

4. 外国での就職について

- (1) アメリカやヨーロッパ、日本などの先進国に、留学、研修、就職などどのような形であっても行ってみたい。
- (2) 理由は、自分の技術を向上できると思うからだ。

北京 6

1. 属性

(1) 年齢・男女別	23歳、女
(2) 現住所	北京
(3) 出身地	広西省河池市
(4) 大学・学部・専攻	北京理工大学（国立）宇宙工学学部、力学専攻
(5) 大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業予定年月	2010年7月
(7) 言語 ①母語	中国語
②英語の能力(自己評価)	
a. 会話 b. 読み書き	a. 普通 b. 完璧
③その他の言語	ドイツ語
(8) その他特記事項	ドイツのミュンヘン大学大学院に留学予定

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 北京理工大学は BIT と略称され、アメリカの MIT (マサチューセッツ工科大学) と同じような性格の大学である。
- (2) 高校時代から宇宙工学に関心があり、この大学を選んだ。
- (3) 中国はロケットを発射して、宇宙船を保持するなど、宇宙工学に大きな力を入れ成功している。今後ますます発展していく分野である。
- (4) クラスは 30 人。うち男が 25 人、女が 5 人。北京出身者は 7 人、他は地方出身。30 人のうち 12 人は大学院進学希望。うち 70%は進学できると思う。12 人のうち自分を含め 4 人が女性。留学するのは自分 1 人。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 今年の 9 月からドイツ、ミュンヘンの大学院に留学する予定である。期間は 3 年。
- (2) ドイツを選んだのは、ドイツは古くから技術が進み、力学の分野で多くの先端的研究が行われている国であることが理由。
- (3) ドイツに留学するために、過去 3 年間、ドイツ語を集中的に勉強した。
- (4) ドイツの奨学金をもらうことになっている。
- (5) ドイツから帰ったら、国の研究機関に入りたいと思っている。国の機関の賃金は民間と比べて高くはないが、福利厚生が非常に充実している。民間企業は、経済状況によって雇用が安定しない。国の研究機関に入れなかった場合は、国有企業を選択する。
- (6) 働く場所は北京と考えている。

4. 外国での就職について

- (1) 現在は考えていない。
- (2) ドイツへ行けば、考えが変わるかもしれないが。

北京 7

1. 属性

(1) 年齢・男女別	27 歳、女
(2) 現住所	北京
(3) 出身地	北京
(4) 大学・学部・専攻	清華大学 (国立) 理学部
(5) 大学院・研究科・専攻・課程	清華大学大学院、数学系応用数学専攻、博士課程
(6) 卒業予定年月	2012 年 7 月
(7) 言語 ①母語	中国語
②英語の能力 (自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. 普通 b. 普通
③その他の言語	—

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 全国統一の大学入学試験の結果を考慮し、希望する理学部の水準の高い大学であることから、清華大学を選択した。
- (2) 両親、高校の教師の意見を十分に参考とした。
- (3) 学部の勉強に飽きたらず、両親に無理をいって博士課程に進学した。両親には感謝している。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 博士課程を終えるのは2年後だが、可能ならば先進国に留学したいと希望している。
- (2) 留学後のことは考えていない。
- (3) 留学先は、アメリカのどこかの大学。
- (4) そのためには奨学金の試験にパスしなければならないので、そのための準備をするつもりである。

4. 外国での就職について

就職については、外国に限らず、中国においても、どこに就職するか、できるかよく分からない。

5. 将来の希望・展望

- (1) 数学の分野で研究者になることは、非常に難しい。
- (2) いずれどこかで働くことになるが、今はそのイメージがわからない。

北京 8

1. 属性

(1)年齢・男女別	19歳、女
(2)現住所	北京
(3)出身地	湖南省
(4)大学・学部・専攻	中国人民大学（国立）哲学専攻
(5)大学院・研究科・専攻・課程	—
(6)卒業予定年月	2011年7月
(7)言語 ①母語	中国語
②英語の能力(自己評価)	
a. 会話 b. 読み書き	a. 普通 b. ほぼ完璧
③その他の言語	日本語（大学の科目で履修）

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 人民大学は、政治学や哲学の分野で水準の高い大学なので志望した。
- (2) 哲学について高校で話を聞き、非常に興味深い科目であるとの印象を持った。
- (3) 湖南省から出てきたので、大学の寮に暮らしている。地方出身者は例外なく寮生活をし

ている。あまり快適とはいえないが、大きな不満があるともいえない。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 修士課程に進学したいと思っている。
- (2) 修士課程では、哲学ではなく、政治学を専攻したい。
- (3) 修士を卒業したら、公務員になりたいと思う。
- (4) 場所は、北京でも、出身地の湖南省でもいい。
- (5) 1人っ子なので、両親は湖南省に帰ってきてほしいと希望している。
- (6) 就職に関する情報は、インターネットで得られる。
- (7) 大学の掲示板などでも募集が紹介されている。こちらの方が信頼性は高いと思う。

4. 外国での就職について

- (1) これまでに外国に行ったことがないので、外国に関する具体的な知識はない。
- (2) 就職できれば、数年は外国で暮らすことも悪くはないと思う。
- (3) しかし、実現性は乏しいと思う。

北京 9

1. 属性

(1) 年齢・男女別	23歳、女
(2) 現住所	北京
(3) 出身地	安徽省
(4) 大学・学部・専攻	北京大学（国立）政府管理学部
(5) 大学院・研究科・専攻・課程	北京大学大学院、人的資源管理専攻、修士課程
(6) 卒業予定年月	2011年7月
(7) 言語 ①母語	中国語
②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. ほぼ完璧 b. 完璧
③その他の言語	日本語（大学の科目で履修）

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 当初から北京大学に入学したいと思って受験勉強をした。北京大学が水準の高い大学であることが理由である。
- (2) 政府管理学部は高校の教師の助言によって選択した。
- (3) 大学院では人的資源管理を専攻しているが、これは政府管理の延長である。人的資源管理には様々なアプローチがあり興味が尽きない。
- (4) 大学の教授の薦めで、日本語を勉強している。同教授は、日本に留学していたことがある。
- (5) 北京大学の社会科学系の学部は4年、修士課程は学科により2年～3年、博士課程は3

年である。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 公務員が第1志望。
- (2) 理由は、政府管理を学んだから。また、生活が安定すると思う。
- (3) どの部（省）であるかは問わない。
- (3) 公務員に合格しなかった場合は、外資系企業か、民間の大企業を希望する。
- (4) 業種にはこだわらない。
- (5) 安徽省にはあまり産業がないので、北京で働こうと思う。

4. 外国での就職について

- (1) 考えたこともないので、答えられない。
- (2) ただ、日本の人的資源管理については、ある程度勉強したので、日本に行って知己を得ることに興味がある。また、アメリカの人的資源管理にも同じように興味がある。

北京 10

1. 属性

(1) 年齢・男女別	21歳、男
(2) 現住所	北京
(3) 出身地	湖南省
(4) 大学・学部・専攻	北京大学（国立）政府管理学部
(5) 大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業予定年月	2011年7月
(7) 言語 ①母語	中国語
②英語の能力(自己評価)	
a. 会話 b. 読み書き	a. 普通 b. 普通
③その他の言語	広東語

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 中国で最もレベルの高い大学であることから志望した。
- (2) 政府管理学部を志望したのは、社会や中国民族に貢献できる知識が得られることを期待したためである。
- (3) 希望どおりの知識が得られたと考えている。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 第1志望は国有か民間の大企業。
- (2) 大企業の方が、専攻した政府管理をより活かせると思う。
- (3) 第2志望は公務員。
- (4) 公務員の試験は11月末なので、それまでに準備をする。

- (5) 北京や上海の公務員試験は難しいので、地方にするかもしれない。
- (6) 公務員試験は全国統一だが、ポストごとの募集で、希望をあらかじめ表明しなければならない。また、ポストによっては2年間の実務経験が求められる。

4. 外国での就職について

- (1) 考えたことがない。
- (2) 仮にそういう機会があったとしても、自分は外国では就職しない。

5. 将来の希望・展望

- (1) 中国の一流大学の卒業生として、社会に役立ちたい。
- (2) 具体的には、国民の生活をよくするために働きたいと思っている。
- (3) そのために、中国の政治に関わることに興味がある。

北京 11

1. 属性

(1)年齢・男女別	24歳、女
(2)現住所	北京
(3)出身地	吉林省
(4)大学・学部・専攻	北京大学（国立）政府管理学部
(5)大学院・研究科・専攻・課程	北京大学大学院、行政管理専攻、修士課程
(6)卒業予定年月	2011年6月
(7)言語 ①母語	中国語
②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. 完璧 b. ほぼ完璧
③その他の言語	—

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 全国統一の大学入学試験の結果をみて、北京大学の各学部のなかから、入学可能な政府管理学部を選んだ。
- (2) 自分の場合は、理科系ではなく、社会科学系と決めていたので、政府管理を専攻することに大きな迷いはなかった。
- (3) 北京大学の学生の10%は北京出身だが、90%は地方出身で、色々な地方の人と知り合いになれてこの大学に入って良かったと思う。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 第1志望は有名な国有企業。
- (2) 理由は、大きな組織で行政管理を実践してみたいから。
- (3) 2008年のリーマンショックの大きな影響を民間企業や外資系企業は受けたが、国有企業はほとんど影響を受けなかった。最近は賃金もかなり高くなってきている。とくに有

名な国有企業の労働条件は良くなったと聞いている。

- (4) できれば、北京で働きたい。
- (5) 第2志望は公務員。
- (6) 理由は、行政管理を専攻しているからである。

4. 外国での就職について

- (1) とくに興味はない。
- (2) 外国には行ったことがない。

5. 将来の希望・展望

就職した企業で長く勤めることになる。

北京 12

1. 属性

(1) 年齢・男女別	26歳、男
(2) 現住所	北京
(3) 出身地	安徽省宿州市
(4) 大学・学部・専攻	北京大学（国立）計算機科学技術学部
(5) 大学院・研究科・専攻・課程	北京大学大学院、計算機系コンピュータ・システム構造専攻、修士課程
(6) 卒業予定年月	2010年7月
(7) 言語 ①母語	中国語
②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. ほぼ完璧 b. ほぼ完璧
③その他の言語	—
(8) その他特記事項	6月末に卒業予定で、就職先は「内定」

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 安徽省から北京大学の計算機科学技術学部に入學できる枠は1つしかなかったが、高校の教師のアドバイスで選択した。
- (2) コンピュータについてはよく知らなかったが、勉強してみて、非常に面白い分野だと考えるようになった。
- (3) 大学院に入ったのは、もっと多くの知識を得たいと考えたからである。

3. 卒業後の進路希望

- (1) アメリカ系の多国籍企業に就職したい。
- (2) 具体的には、世界的に有名な統計ソフトを開発した A 社の中国法人への就職を希望している。
- (3) 専門分野を考えての選択である。

- (4) 現在は「内定」段階で、まだ雇用契約は取り交わしていない。卒業証書をもってから、契約することになる。
- (5) 当初の雇用契約は有期で、3年、5年、7年のいずれかになると思うが、まだ知らされていない。
- (6) 中国の「内定」は、本人・企業・大学による「3者協定」に基づくもので、内定が取り消されることはない。
- (7) A社は直接、大学に来て募集活動した。30人が応募し、合格したのは自分を含め3人だけである。
- (8) 国有企業は最近では良くなったといわれるが、以前として①昇進が遅い、②企業体質が古い、③初任給が低い、という点は残っており、魅力に乏しい。
- (9) 公務員になるつもりはない。

4. 外国での就職について

- (1) アメリカで働いてみたいと考えたことはある。
- (2) アメリカ系の企業に就職すれば、アメリカで研修を受ける機会があるかもしれないと期待している。

5. 将来の希望・展望

- (1) 働き始めてみないとどうなるか分からないが、現時点では自分の能力を十分に発揮したいと思っている。

北京 13

1. 属性

(1) 年齢・男女別	24歳、男
(2) 現住所	北京
(3) 出身地	安徽省阜陽市
(4) 大学・学部・専攻	北京大学（国立）政府管理学部
(5) 大学院・研究科・専攻・課程	北京大学大学院、行政管理専攻、修士課程
(6) 卒業予定年月	2010年7月
(7) 言語 ①母語	中国語
②英語の能力(自己評価)	
a. 会話 b. 読み書き	a. ほぼ完璧 b. 普通
③その他の言語	—
(8) その他特記事項	6月末に卒業予定だが就職先は未定

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 高校の時、政治や歴史の科目が好きであったことから、政府管理（行政管理）を専門に選んだ。

- (2) 仕事のことを考えて、専門を選んだわけではない。
- (3) 政府管理は、多方面にわたった知識が必要で、興味深い分野であると思っている。
- (4) 修士のクラスは 20 人。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 国有企業の電力配電企業 B 社への就職を希望している。
- (2) B 社に合格しなかった場合でも、国有企業に入るつもりである。
- (3) 行政管理という専門分野と、自分の性格を考えた結論である。
- (4) 公共企業に入って仕事をすれば、社会に対する貢献度が高いと考えている。
- (5) 中国の学生に、「体制内」「体制外」という考え方があり。「体制内」とは国有企業、公務員のことで、「体制外」とは民間企業、外資系企業のことであり。自分は「体制内」の仕事をしようと思っている。
- (6) 古いことは分からないが、現在の国有企業は安定した企業として評価されている。
- (7) これに対し、「体制外」の民間企業、外資系企業では、雇用は常に不安定というリスクにさらされている。自分はリスクよりも、安定を取る。
- (8) 公務員にはポストによって 2 年間の実務経験が要求される。ポストごとの募集なので、思ったような職に就けないことがある。つまりポストが空くまで長く待つ必要があるわけだ。これが嫌われる 1 つの理由だろう。

4. 外国での就職について

- (1) 外国で働くとしたら、アメリカだ。
- (2) 現実的にどのような職業が可能かは分からないが。

5. 将来の希望・展望

- (1) 国有企業に入れば、長く勤めることになる。

北京 14

1. 属性

(1) 年齢・男女別	27 歳、女
(2) 現住所	北京
(3) 出身地	安徽省淮北市
(4) 大学・学部・専攻	北京大学（国立）心理学部
(5) 大学院・研究科・専攻・課程	北京大学大学院、社会心理学専攻、修士課程
(6) 卒業予定年月	2010 年 7 月
(7) 言語 ①母語	中国語
②英語の能力(自己評価)	
a. 会話 b. 読み書き	a. ほぼ完璧 b. 完璧
③その他の言語	—

(8) その他特記事項	卒業後にアメリカ、ケンタッキー州立大学大学院（博士課程）に留学が決まっている（3年間のスカラシップ）。
-------------	---

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 全国統一の入学試験で、良い点が取れたので北京大学に入った。
- (2) 心理学を選んだのは、高校の教師のアドバイスによる。
- (3) 大学に入って以来、ずっと大学の寮で暮らしている。1人部屋ではないが、図書館や研究室など勉強する環境は整っており、他のことに気を取られることなく勉強できた。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 今年の9月からアメリカのケンタッキー州立大学大学院（博士課程）に留学が決まっている。州立大学のスカラシップをもらうことになっている。
- (2) 留学の理由は、社会心理学を専攻しているが、さらに専門知識を得るためにはアメリカの大学院に入ることが望ましいと考えたからである。
- (3) 留学に関する情報はインターネットで自分で探した。2009年の9月から探し始め、14の大学にスカラシップを申請した。ケンタッキー州立大学からスカラシップ合格の連絡を受けたのは今年の5月で、活動を始めてほぼ10か月かかったことになる。この間、不合格も続いたが、めげないで申し込みを繰り返した。
- (4) 留学することは、自分で決めたが、両親もこの決定を尊重してくれた。
- (5) これまでに外国には行ったことがないが、英語には自信があるので、アメリカでもしっかり研究できると思う。
- (6) 社会心理学専攻の修士課程には24人いるが、半分くらいが留学を希望している。そのなかでアメリカに自分を含め3人、香港に2人留学が決まっている。アメリカの3人はいずれも女性で、香港は男1人、女1人である。

4. 外国での就職について

- (1) アメリカの大学院を卒業すれば、アメリカで働きたいと思うようになるかもしれない。
- (2) アメリカには、中国よりも、専門の社会心理学を活かすことのできる職業が多くあるのではないかと考えている。

北京 15

1. 属性

(1) 年齢・男女別	24歳、男
(2) 現住所	北京
(3) 出身地	湖南省新多市
(4) 大学・学部・専攻	中国科学院（国立大学）計算機科学部
(5) 大学院・研究科・専攻・課程	中国科学院大学院、形式化方法・模型計測専攻、

(6) 卒業予定年月	博士課程 2013年7月
(7) 言語 ①母語	中国語
②英語の能力(自己評価)	
a. 会話 b. 読み書き	a. 普通 b. ほぼ完璧
③その他の言語	—

(注) 中国科学院は附属教育機関として、中国科学技術大学(安徽省、「北京 1」参照)とともに北京に学部、大学院を有している。大学院の規模は大きく、学生数は2万人を超える。

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 入学試験の成績で入学可能な大学として選んだ。
- (2) 本当は、テレコミュニケーションが第1志望であったが、入学試験の点数が少し足りず、コンピュータ学部を選んだ。
- (3) 大学院は、学部の延長線上で専攻を選んだ。
- (4) クラスは12人。うち男10人、女2人。
- (5) 修士と博士を併せて5年。
- (6) 毎日、コンピュータの画面をにらんでいるが、結構楽しくやっている。
- (7) 論文を書くときは英語が必要になるが、英語は得意ではない。論文は、色々なものを参考にしながら何とかこなしている。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 漠然とだが、国有企業に入ろうと思っている。
- (2) 職種は、専門分野のコンピュータに関連したものが望ましい。
- (3) 国有企業は何よりも安定した雇用を提供してくれることが魅力だ。最近では賃金も高くなっている。
- (4) 外資系企業の職場環境はいいと聞いている。例えば、アメリカ系の大手コンピュータ会社に勤めている人を知っているが、国有企業と比べると格段に快適な職場だという。それを聞くと魅力的だとは思っている。
- (5) 公務員は嫌いだ。とくに理由はないが、なりたいとは思わない。
- (6) 博士課程に入って研究しているが、研究者になりたいとは思わない。それより身につけた技術を活かしたいと考えている。

4. 外国での就職について

- (1) 外国で働く気はない。
- (2) 理由は、テレビなどで見る外国の生活スタイルが嫌いだからだ。

5. 将来の希望・展望

まだ具体的イメージがない。

北京 16

1. 属性

(1)年齢・男女別	25歳、男
(2)現住所	北京
(3)出身地	湖北省荆州市
(4)大学・学部・専攻	中国科学院（国立大学）計算機科学部
(5)大学院・研究科・専攻・課程	中国科学院大学院、計算機軟件（ソフトウェア） 理論専攻、博士課程
(6)卒業予定年月	2013年6月
(7)言語 ①母語	中国語
②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. 普通 b. 普通
③その他の言語	—

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 北京の大学に入りたかったのが、現在の大学を選んだ第1の理由である。
- (2) 学科は、理科系で、将来性のあると思われるコンピュータを選んだ。この選択には、われながら良かったと思っている。
- (3) コンピュータの勉強が面白いので、大学院に入った。
- (4) 現在は、スーパーコンピュータのソフトウェア開発を研究している。非常に面白い。
- (5) 時々、教授が民間企業のプロジェクトに参加し、研究生もそれを手伝うことがある。一種のアルバイトになる。

3. 卒業後の進路希望

- (1) まだ先のことなので考えていない。
- (2) 国有企業、民間企業、外資系企業と選択肢の幅は広いと思う。
- (3) 今後、じっくりと考える。
- (4) いずれにせよ、専門を生かした仕事をするようになると思う。

4. 外国での就職について

- (1) 機会があれば、若いうちにしばらく外国で働いてもいいと思う。
- (2) その場合、先進国が望ましい。自分の技術が向上しないと意味がないと考えるからだ。

5. 将来の希望・展望

進路を決めていないので、コメントできない。

第4節 大連における調査結果

1 調査方法について

大連におけるヒヤリング調査は、大連理工大学の機械学部、機械／日本語強化班（専攻）

の3年生、4年生を対象に実施した。北京においては、複数の大学、大学院を対象にヒヤリング調査を実施したが、大連においては、大連理工大学の機械学部、機械／日本語強化班のみを対象に調査した。

後述するように、機械／日本語強化班は、日本語で機械工学を学ぶ極めてユニークな専攻である。当然のことながら日本および日本企業に関心の高い学生が多いと考えられることが、ここをヒヤリング対象として選んだ理由である。

ヒヤリング調査は6月下旬に実施した。6月の下旬は7月からの夏休み前の期末試験期間であったこともあり、個別のヒヤリングは学生の日程上難しいことから、4年生1グループ(8人)、3年生2グループ(11人、4人)のグループ・ヒヤリングとした。グループ・ヒヤリングではあったが、ヒヤリング自体は順番に1人ずつに質問する方法をとった。北京と同様、質問趣旨の説明などは繰り返す必要がなく時間の節約にはなったが、回答順序が後になるにしたがいそれ以前の回答に影響される回答があったことは否めない。

ヒヤリングにおいては調査対象の全員が、完璧ではないにしろ日本語を理解する学生で、そろって日本語で答えることを希望したため、日本語で質問し、大半を日本語で答えてもらい、理解が難しい場合のみ中国語・日本語の通訳者の手助けを借りた。したがって、調査記録の大半は調査対象の学生の日本語表現にそくしている。

2 大連理工大学機械学部、機械／日本語強化班について⁵

大連理工大学(Dalian University of Technology)は、遼寧省大連市に所在する国立総合大学で、「中国の高等教育の現状」のなかで述べた「211工程(プロジェクト)」に基づく重点校に指定され、さらに「985工程」にも指定されている。すなわち政府が地方(遼寧省)の重要大学として教育の質、研究水準を引き上げるために資金を優先的に配分している大学の1つで、遼寧省で2校だけの教育省直轄大学の1つである。創設は中華人民共和国が成立した直後の1949年。科学研究所の2009年総合ランキングは24位。

機械学部のほかに、物理、電子情報、ソフトウェア工学、土木水利などの理科系学部・専攻と、人文社会科学、外国語、経済、管理などの文科系の学部・専攻を持つ総合大学であるが、校名が示すとおり重点は理科系に置かれている。

2009年の学生数は3万2,000人で、4割の1万2,000人が大学院生である。教職員は3,600人。

ここで「機械学部」と訳したのは、「機械工程与材料能源学部」にある3つの学院の1つ「機械工程学院」のことである。日本の制度と異なるため、正確には「学部」と訳すべきではないかもしれないが、ここでは仮に「学部」と訳して記述する。

以下にヒヤリングで学生に聞いた機械学部、機械／日本語強化班の特徴について記す。

⁵ 大連理工大学の概況については以下を参照した。<http://www.dlut.edu.cn/>

- ①機械／日本語強化班は、機械学部に設置された特別な専攻で、機械学部の他の専攻が 4 年制であるのに対し、機械／日本語強化班は 5 年制である。
- ②大連理工大学の機械学部には男子学生が多く、管理学部、外国語学部では女子学生が多い。機械学部でも、機械／日本語強化班には女子学生が在籍するが、機械だけの専攻では女子学生がいないクラスもある。
- ③機械／日本語強化班を卒業すると、機械の「資格」と、日本語の「資格」の両方が授与される。2～3 年前に機械／日本語強化班に倣って、ソフトウェア／日本語強化班も設置された。この専攻の修業年限は 4 年。卒業時の「資格」はソフトウェアのみで、日本語の「資格」は授与されない。
- ④ 1～2 年生は、専ら日本語を中心に勉強する。3～5 年生では、機械を中心に勉強する。日本に留学していた教師の場合は、機械の講義を日本語で行っている。学生によると「分からない単語が沢山出てくるが、理解が難しい場合は中国語での解説がある」とのことであった。また 3～5 年生では機械に関する実験や製作の時間が多という。
- ⑤機械／日本語強化班は 1990 年頃に大連への日系企業の進出が多くなったことも設置された 1 つの理由のようである。

3 機械／日本語強化班と日本の関係

調査に当たって、機械学部副学部長の協力を得た。ヒヤリングに先立って同副学部長に機械／日本語強化班と日本との関わりについて話を聞いた。その概要を以下にとりまとめておく。

日本における就職について

- ① 2010 年は 60 人の機械／日本語強化班所属の学生が卒業する。うち 80%の学生は日本で就職するか、留学する予定である。
- ②留学の場合、奨学金を得た者が 5～6 人いるが、大半は自費である。最近奨学金が減っている。なかには企業で 2 年間働くことを条件に奨学金を出している企業もある。いずれにせよ学生は日本の有名大学への留学を希望している。留学はほとんど大学院である。
- ③最近日本で就職しても日本の景気が悪くて、すぐに中国に帰ってくる者が多い。2008 年 11 月に日本企業の募集に応じて、32 人の学生が内定を得た。しかし、2009 年 4 月に内定が取り消された例がある。卒業は 6 月なので、4 月から 2 カ月でつぎの就職先を見つけることは難しい。内定取り消しは良くない。この「内定取り消し」は、その後の学生の卒業後の進路選択に影響を及ぼしている。
- ④中国人が日本で就職しても住宅がない。日本企業は住宅（手当）を支給すべきだ。日本で就職した中国人にとって、住宅は最大の問題である。

- ⑤もう 1 つの懸念は、男女差別の問題だ。機械／日本語強化班出身の女性も多く日本で就職している。理工大学で機械の専門知識を身につけたにもかかわらず、女性は事務の仕事に多くが就いている。男性はほとんどが専門を生かした仕事をしているが。
- ⑥また、夫婦 2 人が日本で働いている者も少なからずいる。しかし、彼らにとって子供ができると、前途が見えなくなるという話をよく聞く。子供の世話を誰がするのかという問題である。世話をする者がいない。子供を預かる施設があるようだが、中国人には使いづらいようだ。就職先の会社は面倒をみてくれない。このため 4 ～ 5 年働いて帰ってくる者が多くなる。この点も大きな問題である。
- ⑦もう 1 つよく聞く話に、日本企業で何年か働いても、日本では仕事を細分化しているので、全体像が見えないということがあがる。全体像が見えないので、日本で何年か働いて経験を積んでも、中国に帰ってからどのように働けばいいのか分からないという。中国の企業では、まず全体像を見せるので、どの仕事が自分に向いているのか判断することができる。
- ⑧毎年秋の季節に日本企業の関係者が大連理工大学で就職説明会を開く。学生はここで日本企業の募集情報を得る。その後、入社試験を大学構内で行う企業もある。

日本の大学との交換留学制度

- ①日本の東京大学、東京工業大学、早稲田大学、熊本大学などの大学との「交換留学制度」がある。期間は 1 年間。大連理工大学の機械／日本語強化班からは毎年 7 ～ 8 人の 3 年生が 1 年間、交換留学で日本の大学に行く。
- ②機械／日本語強化班では、交換留学するための選抜試験を行っている。交換留学に際しては、学費、生活費は日本の相手先大学が負担するが、旅費は自己負担である。
- ③日本の交換留学生は「国際交流部」に入り、専ら中国語の勉強をする。機械／日本語強化班の学生と日常的な交流はない。現在、7 人の日本の交換留学生がいる。国際交流部には全部で 20 人ほどの学生がおり、日本人以外に、アメリカなど他の国の学生もいる。女性は 1 人だけである。全員が専ら中国語の勉強をしている。

ヒヤリングをした 3 年生 15 人のなかに、「今年 9 月から日本の大学に交換留学で行く」と答えた学生が 3 人いた。広島大学、北海道大学、横浜国立大学が留学先である。

また、留学ではないが、日本でインターンシップを受ける制度もあり、ヒヤリングで「愛媛の化学関係企業へ実習（インターンシップ）で 1 カ月半行ったことがある。生産技術センターで研修を受けた。賃金はなかったが実習手当が支給された」と話す学生がいた。

4 調査対象の学生について

調査対象は、機械／日本語強化班の 4 年生と 3 年生の学生である。

機械／日本語強化班の4年生は全部で60人で、これが2クラスに分けられている。ヒヤリングをしたクラスは30人で、男子学生23人、女子学生7人の割合である。同じクラスの8人に話を聞いた。

3年生は全部で47人で、4年生と同じく2クラスに分けられている。ヒヤリングをしたクラスは23人で、男子学生17人、女子学生6人の割合である。4年生と同様に同じクラスの15人に話を聞いた。

機械／日本語強化班の定員は60人程度で、志望者数により年によって変動がある。ちなみに現在の2年生は60人である。

大連理工大学の規則によれば、学生は、大学院生を含め、すべて学生寮に入らなければならない。大連市内に実家があり、通学が可能な学生も例外は認められず、寮生活を送っている。寮は男女で棟が分かれている。4人部屋、6人部屋などがあり、原則、同学部、同専攻、同学年、同クラスの学生が相部屋となっている。すなわち、機械／日本語強化班の場合は、同クラスの学生4人ないし6人が5年間生活をともにすることになる。食事は寮の食堂でとる。飲酒は原則禁止。「部屋は勉強するほどのスペースがなく、自習は図書館や教室などでする」とのことであった。

2-4-1 大連理工大学の調査対象者

(人)

学 年	合 計	男	女
4年生	8	6	2
3年生	15	14	1
合 計	23	20	3

5 調査結果

(1) 調査対象者の属性

ヒヤリングした学生は、表 2-4-1 で示したとおり、大連理工大学の機械／日本語強化班の4年生8人、3年生15人である。機械／日本語強化班は5年制であるため、4年生も卒業までにはまだ1年残している。男女比は、男子学生20人、女子学生3人。大連理工大学の機械学部は男子学生の多い学部で、機械／日本語強化班には他の専攻と比較して相対的に女子学生が多いが、それでも絶対数は少なく、調査対象者の男女比は概ね機械／日本語強化班全体の男女比にそくした割合である、との学生の説明があった。

調査対象者を出身地別にみると、地元大連市が3人、大連市以外の遼寧省出身者が9人（大連市は遼寧省に属する）、遼寧省以外の地方出身者が11人である。大連市を含む遼寧省出身者とその他の地方出身者の割合がほぼ等分で、この傾向は大連理工大学全体の傾向と類似しており、図らずも良いバランスとなった。

遼寧省以外の地方出身者の出身地は様々であるが、北京、上海、広州、深センの4大都市

出身者はいなかった。

大連における調査対象者は、北京と異なり、同一大学の同一専攻で、クラスも4年生、3年生各1クラスであり、出身地は異にするものの、属性から見た限り極めて同質性の高い学生グループであるといえる。

(2) 大連理工大学・機械／日本語強化班に進学した経緯

大連理工大学に入学した理由に関する調査対象者の回答は、北京の調査結果とほとんど同じ文脈で、「全国統一の大学入学試験を受け、その成績を勘案して、大連理工大学に入学した」「大連理工大学に入学した理由は、自分の入学試験の成績による」との答えが圧倒的であった。なかには地方大学らしく「大連市で生まれ育ったので、子供の頃から大連理工大学に入りたと思っていた。両親も常々、理工大学に入れればいいねといていた」との回答もあったが、大勢は入学試験の成績に応じて入学したとの回答である。

「両親の意見は、北京の大学に入ってほしいというものであった。しかし、北京の大学に入学できる成績ではなかった」「北京の大学には自分の成績では入ることが出来なかった」など受験戦争の厳しさを感じさせる回答もみられた。

機械学部を選択した理由は3つほどあった。第1には大学に入学した理由と連動し、「機械学部を選んだのは、理工大学の各学部のなかで、自分の入学試験の成績を考慮した結果である」など、入学試験の成績による選択である。第2には「機械が好きで、両親と相談した上で、大連理工大学機械学部を選んだ」「機械学部を選んだのは、高校の時に数学と機械が好きであったことが理由だ」などの回答にみられるように、自分の適性を考慮した理由である。第3には「中国では製造業が発展しており、機械はその中心的役割を担っている。将来どのような種類の製造業でも働くことができると考えた」「機械は、今の中国では発展している分野だと考えた」など将来の職業を意識して選択したとの回答である。いずれの学生も理由を1つだけ上げているわけではなく、機械学部の選択理由は、入学試験の成績、自分の適性、将来の職業などを総合的に検討した結果であろう。

機械学部の機械／日本語強化班を選択した理由も、やはり「機械学部のなかでレベルが高い専攻であった」と入学試験の成績を考慮したとの回答が最も多かった。なかには「機械／日本語強化班を選んだのは、機械学部のなかで最もレベルが高い専攻であったから。とくに日本語に興味があったわけではない」と、日本語に興味はないがレベルが高いから入ったという極端な回答もあった。

一方で、「機械が好きで、日本語も好きであったから、機械／日本語強化班を第1志望としていた。機械と日本語とどちらを先に選択したかといわれれば、日本語をまず選び、そのあと機械を選んだ」「日本語を勉強しようと思って機械／日本語強化班に入学した。この大学の日本語学部（日本語学院）に入ることもできたが、日本語だけよりは、機械をあわせて学んだ方が就職に有利であると考えた」「どこの大学にはいるかを検討していた時期に、各

大学を紹介する本で、日本語を学ぶことができ、かつ機械を学ぶことができる大連理工大学の機械／日本語強化班を発見し、是非入りたいと思った。語学を勉強することは非常に好きだ。高校では英語を一生懸命勉強した」と、日本語を優先してこの専攻を選んだとの回答もあった。調査対象者に女子学生は3人含まれていたが、3人の女子学生のいずれもが日本語を優先して機械／日本語強化班を選択したと答えた。

機械と日本語の組み合わせは確かにユニークだが、ユニークなだけではなく「就職がしやすい専攻である」との認識を複数の学生が持っていた。つぎの項目の「卒業後の進路希望」でもう1度検討するが、「就職がしやすい」との認識は、中国の日系企業ないし日本の企業に就職しやすいと認識していることを意味していた。

この項目の最後に、日本語に関する回答を2点紹介しておく。1つは、「日本語には興味を持っていた。理由は、ちょっと恥ずかしいが、日本のアニメ、例えば『名探偵コナン』などが好きであったことだ。日本語と機械の組み合わせが気に入って、この専攻を選んだ」「日本語に興味があったのは、日本のゲーム、アニメが好きであったことによる」との回答である。日本のアニメは中国でも人気を博しているようだ。

もう1つは、大学に入った後に日本語を勉強しての感想だが、「実際に日本語を勉強してみると、非常に難しいことが分かった。とくに漢字が難しい。これは予想外であった」「日本語は最初は簡単だと思ったが、漢字を覚えるのが難しい」と答える学生が何人かいた。

(3) 卒業後の進路希望

卒業後の進路希望については、北京と同じく、つぎの選択肢から1つ選んでもらう方法でヒヤリングを進めた。

- ①外資系企業
- ②民間企業
- ③国有企業
- ④公務員
- ⑤外国にある外国企業
- ⑥起業
- ⑦家業を継ぐ
- ⑧中国の大学院への進学
- ⑨外国への留学
- ⑩その他

調査対象者は4年生と3年生である。卒業後の進路希望に関する回答は、明らかに両者の間でニュアンスの違いがあった。4年生は「卒業まで後1年しかない。9月から就職活動をするつもりである」「この夏休み(7～8月)に故郷に帰り、両親とじっくり相談する」と答え、すでに卒業後の進路について検討を始めている様子であった。3年生の回答からは現

実的な検討は始めていない様子が垣間みえ、実際「まだ考えたことがない」との回答も何人かから出ていた。

23人のヒヤリング対象者の進路希望を分類すると、①外資系企業2人、②民間企業1人、③国有企業1人、⑤外国にある外国企業9人、⑧中国の大学院への進学1人、⑨外国への留学2人である。残る7人は上記項目に当てはまらず、特定の地域で「就職する」と答えた学生2人、「日本に行きたい。留学でも就職でもどちらでもいい」と答えた学生1人、「エンジニアになりたい。就職先は中国でも日本でもいい」と答えた学生1人、「まだ何も考えていない」と答えた学生が3人であった。このうち、⑤外国にある外国企業と答えた9人は、いずれも「日本にある日本企業」への就職を希望し、⑨外国への留学希望者は2人とも「日本」への留学を考えている。

④公務員、⑥起業、⑦家業を継ぐ、を卒業後の進路として考えている学生はいなかったが、日本企業志望者の1人から起業に言及した「日本から帰ったら、上海か青島で起業し、社長になりたい。どのような会社を起業するかはまだ分からないが、社長になりたいとのあこがれを持っている」との回答があった。

大学院への進学を希望していたのは3人。うち1人は中国の大学院（大連理工大学以外の大学の大学院を志望）、2人は日本の大学院への留学である。さらに3年生の1人が「日本の大学院に留学できたらいいと考えている」と願望を述べ、すでに述べたように「日本に行きたい。留学でも就職でもどちらでもいい」と答えた3年生もいた。

日本で就職したいと明確に答えたのは、9人である。この他に、「機械関係のエンジニアとして働くつもりである。大学を卒業した当初から中国で働いてもいいし、また日本で働いてもいい」と答えた学生、日本の大学院への留学希望者で「大学院を卒業した後、日本企業に就職するつもりである」と答えた学生がそれぞれ1人ずついた。

この9人のうち8人が日本で就職したい理由に、「日本語を勉強したからだ」「語学力を活かして働きたい」「日本語で機械を勉強したからだ」など日本語を第1に上げた。残る1人は「日本で働きたい理由は、機械の分野では、日本は中国より進んでいるからだ。日本で実戦的な技術を学びたい」と答えた。いずれにせよ機械／日本語強化班に在籍していることが日本で就職したい動機となっていることは間違いない。

つぎに、この9人の日本における就職先に関する希望をみると、全員が機械関係の企業と答えたが、特定の企業名を上げた学生はいなかった。大半が大企業を希望していたが、なかには「大企業でなくとも、中小企業でもいい。日本語能力を高めるためには、大企業より中小企業の方がいいのではないかと考えている」との答えも聞かれた。勤務地について特定する学生はいなかったが、「東京にある企業には入りたくない。東京は物価が高く、ストレスを感じる。日本の北の地方がいい。例えば北海道」「日本の大都市は希望しない。静かなところに住んで働きたい」との回答があった。

日本企業に就職した場合、どの程度の期間働くつもりか、との質問に対し、上記の9人の

うち「長く勤めたい」と答えたのはわずか1人で、他の者は「2～3年」「3～4年」「4～5年」「5年」「5～7年」「10年以下」との答えであった。中国への帰国後の就職先については、大都市の日系企業、大連の日系企業、技術関係の公務員、技術関係の国有企業とバラエティーに富んだ回答であった。

上記の9人は、日本における就職を目指すことになるが、日本企業への就職ができなかった場合の第2志望について、大半は大連、その他の大都市の日系企業を希望すると答えている。

上述した大学院への進学希望者（3人）、日本で就職したい学生（9人）、留学、就職のどちらかで日本に行きたい学生（1人）、中国か日本のどちらかで就職すると答えた学生（1人）以外の9人の卒業後の進路希望は、民間企業1人、国有企業1人、外資系企業2人、「働くつもりだがどのような職場で働くかは決めていない」2人、「まだ何も考えていない」3人であった。

民間企業希望者の理由は「出身地で就職する。出身地には外資系企業も国有企業もない」というもの。国有企業希望者は「金融関係の仕事をしたい。そのために証券会社で働くための資格を取得した。理工系の考え方は証券会社に勤めるのに適している。金融関係の企業は国有企業が多い。現在の中国で最も発展の可能性の高い業種であると考えている。賃金も高い。勤務場所は、北京、深セン、香港などの大都市を希望している。これらの都市には、国有の金融関係企業が多く、また飛躍のチャンスがあると思う」と述べていた。国有企業を志望する理由は、北京の学生のような「安定指向」ではなかった。

外資系企業希望者2人はいずれも大連の外資系企業を希望している。うち1人は日系企業を希望しその理由を「大連の外資系企業のなかでは、日系企業が最も賃金が高いと聞いている」と述べ、残る1人は外資系企業の「国籍」を特定しなかったが「賃金の高い、外資系企業が望ましい」と志望理由を答えた。2人とも「賃金が高い」ことが志望理由である。

「どのような職場で働くかは決めていない」2人は、いずれも「1人っ子である自分は、両親の近くで働くことが望ましい」との理由で、出身地か、その近隣の都市で「仕事をみつける」と話していた。

（4）外国における就職について

上記の項目でみた「日本での就職を希望する」とはっきりと意思表示していた9人を除いた14人に、外国（日本）における就職についての考え方を聞いた。

うち中国の大学院への進学希望者は、大学院修了後は「外国で働くかもしれない」と答え、日本留学希望者2人はいずれも「大学院修了後は日本で働きたい」との回答であった。

国営企業に勤めたいとしていた1人は「機会があれば日本で2年ほどは働いてもいい」と答え、中国か日本か決めかねていた2人は「外国で働くなれば日本しかない」「日本で就職する可能性有り」とそれぞれ回答。大連か北京で就職するとしていた1人は「1人っ子なので

親孝行する必要がある。親は日本には行くなという意見である」としながらも、「親を日本に連れて行くという方法もあるのではないかと考えている。日本でもし就職する機会があれば、4～5年は行ってもいいという気はある」と答えた。以上のように、卒業後の進路希望で当初は日本での就職を考えていないと答えた学生のうち7人は、日本における就職の可能性に言及していた。

「日本では就職しない」と答えたのはわずか2人で、その理由を「日本の賃金は中国より高いが、物価を考えると決して高いとはいえない。中国でいい仕事を見つければ、中国の方が暮らしやすいと思う」「機械／日本語強化班の先輩で、日本に行って働いている人がいる。先輩は、日本では昇進の機会がほとんどない、との不満を持っている。実際はどうかは知らないが」とそれぞれ説明してくれた。

外国での就職について「まったく考えたことがないので答えられない」と2人が答えた。いずれも3年生である。

以上を改めてとりまとめると、以下の表のようになる。

表 2-5-1 大連理工大学調査対象者の外国における就職意識

(人)	
・日本における就職希望者	9
・日本における就職の可能性を語った者	7
・日本留学後に日本での就職を希望	2
・中国の大学院修了後に「外国で働くかもしれない」者	1
・「日本では就職しない」と答えた者	2
・外国での就職についてまったく考えたことがない者	2
合 計	23

上記の表をみると、大連理工大学機械／日本語強化班の日本への関心度がいかに高いかがよく分かる。機械学部副学部長は「2010年の卒業生の80%が日本に留学するか、日本で就職する予定」であると説明、ヒヤリング対象者の言では、今年6月末に卒業する5年生の「半分くらいが就職か留学かで日本に行くことになっている」という。今回の調査でもこの点は十分に確認できた。

ただ、多くの学生が、2～3年から長くても10年以内に日本での仕事を切り上げ、中国に帰国したいと考えている。日本で「長く勤めたい」と答えたのはわずか1人であった。実際、先輩の例として「4～5年で多くの者が中国に帰ってくる。中国に帰ったら北京や上海の日系企業に勤めている者が多い」と説明する学生がいた。

日本で長く勤めない理由は幾つか上げられた。列挙すると以下のようになる。

- 日本で技術者として訓練を受け、中国に帰ってくる。
- 日本で経験を積めば、中国の会社でも必ず役に立つと思う。
- 日本で働いた経験があれば、技術の高い者と中国では認められる。

- 日本語が上達し、エンジニアとしての経験を積みばどこかに就職できると思う。
- 機械関係の企業で、実務的な経験を積みたい。
- 日本で実戦的な技術を学びたい。
- 日本では仕事をするだけでなく、社会的な経験を積みたい。
- 大手企業で経験を積みたい。
- 家族が中国にいるので、それほど長くは外国で暮らすわけにはいかないと思っている。
- 1人っ子なので親孝行する必要がある。
- 先輩は、日本では昇進の機会がほとんどない、との不満を持っていた。

以上を大雑把に分類すると、①日本で技術を向上させ、経験を積む、②親孝行をする、③日本企業に対する不満、の3点となる。

第1の理由「技術を向上させ、経験を積む」が圧倒的に多い。日本留学希望者も「研究ではなく、実務的な勉強をしたい」と述べていた。要するに、日本における就職は、日本企業に長く勤め、日本に根を下ろして暮らす、という意味ではなく、「経験を積み」「技術を向上させる」機会と捉えられており、この文脈において、大連理工大学機械／日本語強化班のヒヤリング対象者は、日本への留学と日本における就職は同次元で考えていた。このためか、日本企業の賃金について質問したところ、「中国より高い」との答えはあったが、それほど関心がなさそうであった。この意味では、すでに紹介した「日本に行きたい。留学でも、就職でもいい」との回答が最も機械／日本語強化班の意見を代表しているといえよう。

「親孝行をする」ために、日本で長く勤務できないという理由は、中国社会の良き伝統を反映していると考えられる。しかしながら、「親孝行をする」という回答は、「1人っ子なので」との前置きと繋がっていた。中国では1960年代に1人っ子政策が導入され、その適用範囲を都市から農村へと拡大しているが、現在でも「田舎の場合は1人目の子供が女の子ならば2人目が許される」「少数民族は例外とされている」などの理由で、必ずしも学生の全部が「1人っ子」ではなく、調査対象者の半数以上が兄弟を持っていた。

「日本企業に対する不満」は、大連理工大学におけるヒヤリングにおいては非常に例外的な回答であった。

第5節 大連におけるヒヤリング記録

大連 1

1. 属性

(1)年齢・男女別	24歳、男
(2)現住所	大連市
(3)出身地	遼寧省本溪市
(4)大学・学部・専攻	大連理工大学（国立）機械学部、機械／日本語強化班

(5) 大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業予定年月	2011年7月
(7) 言語 ①母語	中国語
②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. ほぼ完璧 b. ほぼ完璧
③その他の言語	ドイツ語、日本語

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 大連理工大学を選んだ理由は、遼寧省のなかで有名な大学であったから。
- (2) 機械を専攻した理由は、①機械が好きであったこと、②中国では製造業が発展しており、機械はその中心的役割を担っており、将来どのような種類の製造業でも働くことができると考えたこと、などである。ただ、将来、必ず機械に関連した仕事をしたいと思っているわけではない。
- (3) 機械と併せて日本語を専攻したのは、高校の教師の薦めによる。日本語を勉強できたことは、自分の視野を広げる意味で良かったと考えている。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 日本に行って働いてみたいと思っている。理由は、日本語を勉強したからだ。
- (2) ただ、日本で働くのは5～7年ほどで、日本で技術者として訓練を受け、中国に帰ってくる。
- (3) 最終的には、出身地の遼寧省本溪市に帰り、技術関係の公務員になりたい。
- (4) 公務員の賃金は低いけど、自分の性格など、色々考えて公務員になりたいと思う。
- (5) 父は地方公務員をしているが、自分は怒りっぽいので公務員は無理だと酒と一緒に飲んだ折りにいったことがある。父の意見によると、公務員は能力も大事だが、人間関係を大切にする必要があるという。そのために、父は、外国で訓練してもらったほうがいいとの意見であった。
- (6) 自分は、公務員になるために役立つと考え、学生会の部長や副書記を務め、共産主義青年団（共青）に加盟している。公務員になるためには、成績だけでなく、こうした活動が必要だといわれる。
* 中国共産主義青年団（共青）は、中国共産党による指導のもと14歳から28歳の若手エリート団員を擁する青年組織。
- (7) 今年の9月までには進路の希望をしっかりと決めて、就職活動を始めるつもりである。その前に、夏休みで故郷に帰り、両親とよく相談する。

大連 2

1. 属性

(1) 年齢・男女別	23歳、男
------------	-------

(2) 現住所	大連市
(3) 出身地	河南省商丘市
(4) 大学・学部・専攻	大連理工大学（国立）機械学部、機械／日本語強化班
(5) 大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業予定年月	2011年7月
(7) 言語 ①母語	中国語
②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. 普通 b. ほぼ完璧
③その他の言語	日本語

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 湖南省には水準の高い大学がなく、他の省の大学を選ばざるを得なかった。高校の成績を考慮して大連理工大学を選んだ。
- (2) 機械学部は第4志望であった。第1志望は電子工学であったが、入学試験の成績で入れなかった。
- (3) 機械／日本語強化班を選択した理由は、機械学部のなかでレベルが高い専攻であったからである

3. 卒業後の進路希望

- (1) 金融関係の仕事をしたいと考えている。例えば、銀行、基金、証券会社などである。そのために、証券会社で働くための資格を取得した。
- (2) 機械学科で理工系の勉強をしているが、この理工系の考え方は証券会社に務めるのに適している、と大連の証券会社の人事の人からのアドバイスされたことがある。
- (3) 金融関係の企業は国有企業が多いが、現在の中国で最も発展の可能性の高い業種であると考えている。賃金も高い。
- (4) 勤務場所は、北京、深セン、香港などの大都市を志望している。これらの都市には、国有の金融関係企業が多く、また飛躍のチャンスがあると思うからである。

4. 外国での就職について

- (1) 機械／日本語強化班で勉強したので、2年くらいは日本で働いてもいいと考えている。
- (2) 就職するとすれば、証券会社である。
- (3) 日本で経験を積めば、中国の証券会社でも必ず役に立つと思う。

大連 3

1. 属性

(1) 年齢・男女別	24歳、男
(2) 現住所	大連市

(3) 出身地	遼寧省管口市
(4) 大学・学部・専攻	大連理工大学（国立）機械学部、機械／日本語強化班
(5) 大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業予定年月	2011年7月
(7) 言語 ①母語	中国語
②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. ほぼ完璧 b. ほぼ完璧
③その他の言語	日本語

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 機械が好きで、両親と相談した上で、大連理工大学機械学部を選んだ。
- (2) 日本語強化班を選択した理由は、あまりはっきりと思い出せない。何となく選んだと思う。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 機械関係のエンジニアとして働くつもりである。
- (2) 大学を卒業した当初から中国で働いてもいいし、また日本で働いてもいい。
- (3) 日本で働らく場合は、最大 10 年間位である。理由は、家族が中国にいるので、それほど長くは外国で暮らすわけにはいかないと考えている。
- (4) 中国で就職するとすれば、大連の国有企業を志望する。
- (5) だが、大連の国有企業は競争率が高く、職種、ポストによっては 50 倍の応募者がいるといわれる。難しいが、チャレンジするしかない。
- (6) 国有企業の賃金は最近、高くなっているといわれるが、自分の知っている限りでは、企業によって大きく異なる。
- (7) 国有企業に入ることができたら、同じ企業で定年まで働くつもりである。
- (8) 大学は後 1 年しかないので、9 月になったら本格的に就職活動をするつもりである。

4. 外国での就職について

外国で働くとしたら日本しかないと考えている。

大連 4

1. 属性

(1) 年齢・男女別	23 歳、男
(2) 現住所	大連市
(3) 出身地	江西省方城市
(4) 大学・学部・専攻	大連理工大学（国立）機械学部、機械／日本語強化班

(5) 大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業予定年月	2011年7月
(7) 言語 ①母語	中国語
②英語の能力(自己評価)	
a. 会話 b. 読み書き	a. 完璧 b. 完璧
③その他の言語	日本語

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 大連理工大学に入学したのは、理科系で水準の高い大学であるから。
- (2) 機械学部、機械／日本語強化班を選んだのは、理工大学の各学部のなかで、自分の入学試験の成績を考慮した結果である。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 日本で機械関係の企業に就職したいと考えている。
- (2) 理由は、大学の機械／日本語強化班で学んだからである。語学力を活かして働きたいと思う。
- (3) 企業はどこでもいい。特定の企業ということではない。
- (4) 毎年9月に日本企業の説明会が開かれる。昨年、説明会の連絡が大学の掲示板に出いたので、参加してみた。その説明によると、履歴書をつけて応募すると、試験日の連絡が来るとのことであった。試験は大連で行われる。
- (5) 日本企業に入社できれば、技術を向上させて中国に帰ってきたいと思う。日本で働いた経験があれば、技術の高い者と中国では認められる。
- (6) 何年日本で働くかは、現時点でははっきりいえない。
- (7) 第2志望は、機械関係の国有企業である。
- (8) 働く場所は、大連か、大都市を志望する。その場合、出身地の江西省方城市からは遠い場所になるが、生活が安定したら両親を江西省から呼び寄せるつもりである。

大連 5

1. 属性

(1) 年齢・男女別	24歳、男
(2) 現住所	大連市
(3) 出身地	遼寧省管口市
(4) 大学・学部・専攻	大連理工大学(国立) 機械学部、機械／日本語強化班
(5) 大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業予定年月	2011年7月
(7) 言語 ①母語	中国語

②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. 普通 b. ほぼ完璧
③その他の言語	日本語

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 大連理工大学に入学したのは、遼寧省にある理科系の大学で水準の高いからである。
- (2) 機械学部、機械／日本語強化班を選んだ理由は、入学試験の成績で入学可能な範囲にあったからである。日本語を選んだ特段の理由はない。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 大学を卒業したら2～3年は日本で働きたい。
- (2) 理由は、日本語で機械を勉強したからである。
- (3) 就職先は、大企業でなくとも、中小企業でもいい。日本語能力を高めるためには、大企業より中小企業の方がいいのではないかと考えている。
- (4) 就職先の候補は、インターネットで調べたり、大連理工大学に来ている日本人留学生に聞いたりしている。
- (5) 日本の企業に就職できなかった場合、自分は国有企業には入りたくない。中国の大都市にある外資系企業に入社したいと思う。業種はとくに問わない。場合によって機械関係でなくともいいと思っている。
- (6) 国有企業ではなく外資系企業を選択する理由は、自分の能力を高めるチャンスがより多いと思うからである。

大連 6

1. 属性

(1)年齢・男女別	24歳、男
(2)現住所	大連市
(3)出身地	大連市
(4)大学・学部・専攻	大連理工大学(国立)機械学部、機械／日本語強化班
(5)大学院・研究科・専攻・課程	—
(6)卒業予定年月	2011年7月
(7)言語 ①母語	中国語
②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. ほぼ完璧 b. 完璧
③その他の言語	日本語

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 大連市で生まれ育ったので、子供の頃から大連理工大学に入りたいと思っていた。両親

も常々、理工大学に入れればいいねといていた。

- (2) 機械学部をえらだのは、理科系のなかで比較的興味をもてそうであったからである。実際は中身が分かっていたわけではない。
- (3) 機械／日本語強化班を選んだのは、機械学部のなかで最もレベルが高い専攻であったから。とくに日本語に興味があったわけではない。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 大学院に進学したいと考えている。大学の教員になるつもりはないので修士課程を志望している。大学院に入ることができれば奨学金が得られる。
- (2) 第1志望は中国の東北地方で最もレベルが高いといわれているロケット研究で有名な哈爾濱（ハルピン）工業大学である。試験は来年の1月で、非常に難しいといわれている。
- (3) 機械／日本語強化班の同級生で中国の大学院進学を希望しているのは、自分を含め2人だけである。他にも大学院進学を希望している者がいるが、いずれも日本の大学院への進学を考えている。
- (4) 就職のことを現在は考えていない。

4. 外国での就職について

大学院を卒業した後外国での就職を考えるかもしれないが、今は考えていない。

大連 7

1. 属性

(1) 年齢・男女別	21歳、女
(2) 現住所	大連市
(3) 出身地	大連市
(4) 大学・学部・専攻	大連理工大学（国立）機械学部、機械／日本語強化班
(5) 大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業予定年月	2011年7月
(7) 言語 ①母語	中国語
②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. ほぼ完璧 b. ほぼ完璧
③その他の言語	日本語

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 機械が好きで、日本語も好きであったから、大連理工大学の機械学部、機械／日本語強化班を第1志望としていた。この大学に入学できて幸運だと思っている。
- (2) 機械と日本語とどちらを先に選択したかといわれれば、日本語をまず選び、そのあと機械を選んだ。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 日本で働くことが第1志望である。機械関係のメーカーを希望している。システム・コントロールを職務としたい。
- (2) 日本の企業に就職できたら、長く勤めたいと思っている。
- (3) 日本企業への応募は、9月以降に大学で行われる日本企業の説明会を通じて行いたいと考えている。自分の希望するような企業が説明会に参加することを願っている。
- (4) 第2志望は、大連のシステム・コントロール職務のある製造業の企業である。
- (5) D社など日系の大企業が望ましい。

大連 8

1. 属性

(1) 年齢・男女別	22歳、女
(2) 現住所	大連市
(3) 出身地	遼寧省丹東市
(4) 大学・学部・専攻	大連理工大学（国立）機械学部、機械／日本語強化班
(5) 大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業予定年月	2011年7月
(7) 言語 ①母語	中国語
②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. 完璧 b. 完璧
③その他の言語	日本語

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 日本語を勉強しようと思って大連理工大学機械学部、機械／日本語強化班に入学した。
- (2) この大学の日本語学部（日本語学院）に入ることもできたが、日本語だけよりは、機械をあわせて学んだ方が就職に有利であると考えた。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 第1志望は日本への留学である。東大、東工大などのいい大学を希望している。
- (2) 母は日本で就職より、留学してほしいといっている。
- (3) 将来は機械関係のエンジニアになりたい。
- (4) 留学後は日本で就職する。大企業でも中小企業でもいい。勤務地は地方でもいい。
- (5) 何年かしたら大連に帰って日系の外資系企業に勤める。大連の外資系企業の70%は日系なので、日本で日本語が上達し、エンジニアとしての経験を積みばどこかに就職できる。

4. その他特記事項

- (1) 愛媛の化学関係企業へ実習（インターンシップ）で1カ月半行ったことがある。生産技

術センターで研修を受けた。賃金はなかったが実習手当が支給された。日本のエンジニアはほとんどが修士課程を修了した人であった。

- (2) 自分は少数民族出身なので1人っ子ではない。兄がいる。兄は大学を卒業して北京で働いている。

大連 9

1. 属性

(1)年齢・男女別	21歳、男
(2)現住所	大連市
(3)出身地	浙江省台州市
(4)大学・学部・専攻	大連理工大学（国立）機械学部、機械／日本語強化班
(5)大学院・研究科・専攻・課程	—
(6)卒業予定年月	2012年7月
(7)言語 ①母語	中国語
②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. 普通 b. 普通
③その他の言語	日本語

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 高校の時から大連が好きで大連理工大学を選んだ。
- (2) 機械学部を選んだのは、高校の時に数学と機械が好きであったことが理由だ。
- (2) 両親は浙江省の大学に進学することを希望していた。浙江省の大学にも機械学部あったが、大連理工大学に自分で決めた。
- (4) 大学で日本語を学んだ姉がいる。姉は現在、服装デザインの仕事をしており、仕事で時々日本に行っている。この姉の影響で、日本語を大学で学ぶことにした。
- (5) 1人っ子政策はあるが、田舎の場合は、1人目が女の子であると、2人目の子供を持つことが許されている。浙江省台州市は田舎である。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 日本に行きたい。留学か、就職か、どちらでもいい。
- (2) 留学の場合は、研究ではなく、実務的な勉強をしたい。
- (2) 就職の場合は、機械関係の企業で、実務的な経験を積みたい。
- (4) 日本に行きたい理由は、日本に行けば、個人的な能力の発展が期待できるからである。日本の企業は、人材を大切にすると聞いている。
- (5) どれくらい日本にいるかは、今のところ考えていない。

大連 10

1. 属性

(1)年齢・男女別	21歳、男
(2)現住所	大連市
(3)出身地	遼寧省
(4)大学・学部・専攻	大連理工大学（国立）機械学部、機械／日本語強化班
(5)大学院・研究科・専攻・課程	－
(6)卒業予定年月	2012年7月
(7)言語 ①母語	中国語
②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. ほぼ完璧 b. ほぼ完璧
③その他の言語	日本語

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 大連の有名な大学に行きたいと思って大連理工大学に入学した。
- (2) 機械学部を選んだのは、小さいときから機械的な玩具が好きであったことが理由である。
- (3) 日本語を選んだのは、①卒業した後、機械を専攻しただけより日本語ができる方が就職に有利であると考えたことが理由。高校の教師のアドバイスと、両親、両親の友人の意見を聞いてそのように考えるようになった。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 卒業後は、日本の企業で働くことが希望である。景気があまり良くないので、チャンスは少ないかもしれないが。
- (2) 日本で働きたい理由は、機械の分野では、日本は中国より進んでいるからだ。日本で「実戦的」な技術を学びたい。
- (3) だが、日本で長く働く気はない。日本で3～4年働いて、中国に帰り、中国の日系企業に就職するつもりだ。
- (4) 日本の企業に就職できなかった場合は、初めから中国の日系企業に就職するつもりである。

大連 11

1. 属性

(1)年齢・男女別	20歳、男
(2)現住所	大連市
(3)出身地	遼寧省管口市

(4) 大学・学部・専攻	大連理工大学（国立）機械学部、機械／日本語強化班
(5) 大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業予定年月	2012年7月
(7) 言語 ①母語	中国語
②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. 普通 b. ほぼ完璧
③その他の言語	日本語

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 高校の時は、どこの大学にはいるかはほとんど考えていなかった。全国统一の大学入学試験を受け、その成績を勘案して、大連理工大学に入学した。
- (2) 両親の意見は、北京の大学に入ってほしいというものであった。その理由は、兄が北京の大学で法律を学び、北京で働いているからである。しかし、北京の大学に入学できる成績ではなかった。遼寧省管口市からは、実際の距離ではなく、交通の便の関係では、北京の方が大連より近い。
- (3) 日本語強化班を選んだ理由は、まったく偶然である。初めは日本語強化班の意味がよく理解できていなかった。
- (4) 現在は、アメリカ、ヨーロッパという国のグループと同様に、東アジアの国のグループができていくといっている。こうした環境のなかで、日本語ができるということは、将来必ず役に自分の立つと考えている。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 卒業後は仕事をするつもりだ。
- (2) どこに就職するかはまだ考えていない。日本の企業、中国の企業、中国の外資系企業など選択肢はいくつもあると思っている。今後、1年間かけて、じっくりと考えるつもりだ。両親や先輩などの意見も聞く。

4. 外国での就職について

日本で就職する可能性はある。

5. その他特記事項

今年9月から広島大学に交換留学で1年間行くことになっている。

大連 12

1. 属性

(1) 年齢・男女別	21歳、男
(2) 現住所	大連市
(3) 出身地	江蘇省無錫

(4) 大学・学部・専攻	大連理工大学（国立）機械学部、機械／日本語強化班
(5) 大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業予定年月	2012年7月
(7) 言語 ①母語	中国語
②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. 普通 b. 普通
③その他の言語	日本語

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 大連理工大学に入学した理由は、自分の入学試験の成績による。
- (2) 江蘇省では大連理工大学への入学希望者が少なく、自分の成績でも入ることが出来た。
- (3) 機械学部を選んだのは、他の学部より機械がいいという曖昧な理由である。
- (4) ただ、日本語には興味を持っていた。理由は、ちょっと恥ずかしいが、日本のアニメ、例えば「名探偵コナン」などが好きであったことだ。日本語と機械の組み合わせが気に入って、この専攻を選んだ。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 卒業後は、日本の有名な大学に留学したい。修士課程だけでなく、博士課程にもいきたい。
- (2) 大学院修了後は、日本の企業で働きたい。
- (3) 日本である期間、人生を送ることは自分にとって必要なことだと考えている。日本で自分が認められるかは、必ずしも自信はないが。
- (4) 何年かして中国に帰り、江蘇省の日系企業に就職したいと思っている。

4. その他特記事項

今年9月から北海道大学に交換留学で1年間行くことになっている。

大連 13

1. 属性

(1) 年齢・男女別	21歳、男
(2) 現住所	大連市
(3) 出身地	湖北省
(4) 大学・学部・専攻	大連理工大学（国立）機械学部、機械／日本語強化班
(5) 大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業予定年月	2012年7月
(7) 言語 ①母語	中国語

②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. ほぼ完璧 b. ほぼ完璧
③その他の言語	日本語

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 大連理工大学を選んだ理由は、他の人と同様に入学試験の成績、両親、高校の教師のアドバイスなどによる。大連は綺麗な都市で気に入っている。
- (2) 機械学部もを選んだのも同様の理由だ。
- (3) 日本語を選んだのは、高校の先輩の「大連には日系企業が多く、日本語を勉強すれば色々な機会に恵まれる。就職、留学にも有利である」というアドバイスに従ったことによる。中国では、どの学生も英語は勉強しているが、多くのチャンスをつかむには英語だけでは不十分だと思う。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 卒業後のことはまだ何も決めていないし、考えてもいない。
- (2) ただ、自分の人生は自分で決めたいと思っている。じっくりと考えて決める。

4. 外国での就職について

働くとしたら日本であるが、まだ何も考えてもいない。

5. その他特記事項

1人っ子政策に違反しているかもしれないが、兄が1人いる。広東省で働いている。

大連 14

1. 属性

(1)年齢・男女別	21歳、男
(2)現住所	大連市
(3)出身地	安徽省
(4)大学・学部・専攻	大連理工大学(国立)機械学部、機械/日本語強化班
(5)大学院・研究科・専攻・課程	—
(6)卒業予定年月	2012年7月
(7)言語 ①母語	中国語
②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. 普通 b. 普通
③その他の言語	日本語

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 安徽省の大学は点数が低くても入れたが、入学試験の点数が割合に良くて、大連理工大学を選んだ。

- (2) 機械は、今の中国では発展している分野だと考えた。
- (3) 日本語は機械学部の専攻のなかで、最も高い点数を必要としていたので選択した。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 日本で就職したい。
- (2) 大企業がいいが、東京にある企業には入りたくない。東京は物価が高く、ストレスを感じる。日本の北の地方がいい。例えば北海道。大連は北海道と同じくらいに位置にある。
- (3) 日本で5年位勤めたい。日本では仕事をするだけでなく、社会的な経験を積みたい。
- (4) 日本から帰ったら、上海か青島で起業し、社長になりたい。どのような会社を起業するかはまだ分からないが、社長になりたいとのあこがれを持っている。

大連 15

1. 属性

(1) 年齢・男女別	22歳、男
(2) 現住所	大連市
(3) 出身地	遼寧省葫蘆島市
(4) 大学・学部・専攻	大連理工大学（国立）機械学部、機械／日本語強化班
(5) 大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業予定年月	2012年7月
(7) 言語 ①母語	中国語
②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. 普通 b. 普通
③その他の言語	日本語

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 大連理工大学は入学試験の成績で選んだ。
- (2) 日本語に非常に興味があり、日本語を学びたかったので、機械に興味はなかったが、機械／日本語強化班を選択した。外国語学部は、入学試験の高い点数を必要としなかった。
- (3) 日本語に興味があったのは、日本のゲーム、アニメが好きであったことによる。
- (4) しかし、大学に入って実際に日本語を勉強してみると、非常に難しいことが分かった。とくに漢字が難しい。これは予想外であった。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 大連でいい仕事を見つけたいと思っている。
- (2) 賃金の高い、外資系企業が望ましい。

4. 外国での就職について

- (1) 日本の企業には就職しないと思う。

(2) 日本の賃金は中国より高いが、物価を考えると決して高いとはいえない。

(3) 中国でいい仕事を見つけられれば、中国の方が暮らしやすいと思う。

5. その他特記事項

今年9月から横浜国立大学工学部に交換留学で1年間行くことになっている。

大連 16

1. 属性

(1)年齢・男女別	21歳、男
(2)現住所	大連市
(3)出身地	安徽省六安市
(4)大学・学部・専攻	大連理工大学（国立）機械学部、機械／日本語強化班
(5)大学院・研究科・専攻・課程	—
(6)卒業予定年月	2012年7月
(7)言語 ①母語	中国語
②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. 普通 b. ほぼ完璧
③その他の言語	日本語

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

(1) 理由は定かでないが、大連という都市が大好きで、大連で最もレベルの高い大連理工大学に入学した。出身地の安徽省からは遠いが、子供の頃からずっと遠いところで暮らしてみたいと思っていた。

(2) 理科系が得意で機械学部を選んだ。

(3) 日本語を選んだのは、子供の時から、テレビで日本語が話されるのを聞き、音楽的なリズムで話されている、非常に音楽的な言葉だと思い、是非習いたいと思っていたことによる。

3. 卒業後の進路希望

(1) 出身地の安徽省で働きたい。良い就職先が見つからなかったら、出来る限り安徽省に近いところで働きたい。

(2) 理由は、親孝行がもっとも大切だと考えているからだ。そのためには、1人っ子である自分は、両親の近くで働くことが望ましい。

(3) 仕事の内容は、日本語に関係し、機械に関係していることが望ましい。例えば、日本語の教師や、学校の教師などである。

4. 外国での就職について

考えていない。

5. その他特記事項

今年9月から熊本大学に交換留学で1年間行くことになっている。

大連 17

1. 属性

(1)年齢・男女別	22歳、男
(2)現住所	大連市
(3)出身地	遼寧省丹東市
(4)大学・学部・専攻	大連理工大学（国立）機械学部、機械／日本語強化班
(5)大学院・研究科・専攻・課程	—
(6)卒業予定年月	2012年7月
(7)言語 ①母語	中国語
②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. 普通 b. ほぼ完璧
③その他の言語	日本語

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 高校の教師のアドバイスで大連理工大学に入った。
- (2) 理科系が得意であったが、文系にも興味があったので、機械／日本語強化班を選択した。その意味で、いい専攻だと思う。
- (3) 日本語は最初は簡単だと思ったが、漢字を覚えるのが難しい。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 日本に行って働きたいと思っている。
- (2) 日本の大都市は希望しない。静かなところに住んで、働きたい。
- (3) 卒業前に、大学の就職課のホームページや掲示板に日本の各企業の情報が掲載される。それを検討し、説明会に出て、試験を受けることになる。
- (4) 今年の卒業生では、半分くらいが就職か留学かで日本に行くことになっている。大部分は日本の大都市に行くようだ。
- (5) これまでの例だと、4～5年で多くの者が中国に帰ってくる。中国に帰ったら北京や上海の日系企業に勤めている者が多い。自分も多分そうした経路をたどるであろう。

4. その他特記事項

- (1) 実習（インターンシップ）で愛媛の化学会社に1カ月行ったことがある。インターンシップ手当は月15万円であった。良い研修が出来たと思う。
- (2) 実習の申込書は提出したが、説明会には出なかった。それでも実習に行くことが出来た。

大連 18

1. 属性

(1)年齢・男女別	22歳、男
(2)現住所	大連市
(3)出身地	大連市
(4)大学・学部・専攻	大連理工大学（国立）機械学部、機械／日本語強化班
(5)大学院・研究科・専攻・課程	—
(6)卒業予定年月	2012年7月
(7)言語 ①母語	中国語
②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. 普通 b. ほぼ完璧
③その他の言語	日本語

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 大学を選ぶときに自分の入学試験の成績が大連理工大学にふさわしいものであったことが入学した理由である。
- (2) 両親は、北京か大連の大学への進学を望んでいた。北京の大学には自分の成績では入ることが出来なかった。
- (3) 以前から機械と通信が好きであったことが機械学部を選んだ理由である。
- (4) 機械とあわせて日本語を選んだのは、これも自分の成績に応じた結果である。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 中国の大連か北京で就職する。
- (2) 1人っ子なので親孝行する必要がある。親は日本には行くなという意見である。

4. 外国での就職について

- (1) 日本でもし就職する機会があれば、4～5年は行ってもいいという気はある。
- (2) 親が反対しているが、親を日本に連れて行くという方法もあると考えている。

大連 19

1. 属性

(1)年齢・男女別	21歳、女
(2)現住所	大連市
(3)出身地	湖南省
(4)大学・学部・専攻	大連理工大学（国立）機械学部、機械／日本語強化班
(5)大学院・研究科・専攻・課程	—

(6) 卒業予定年月	2012年7月
(7) 言語 ①母語	中国語
②英語の能力(自己評価)	
a. 会話 b. 読み書き	a. 普通 b. ほぼ完璧
③その他の言語	日本語

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) どの大学にはいるかを検討していた時期に、各大学を紹介する本で、日本語を学ぶことが出来て、かつ機械を学ぶことが出来る大連理工大学の機械／日本語強化班を発見し、是非入りたいと思った。中国中でこのようなユニークな機会を与えてくれるのはここだけである。この大学にはいることが出来てとてもラッキーだと思っている。両親や高校の教師の意見も聞いたが、最後は自分の意志でこの大学を決めた。
- (2) 語学を勉強することは非常に好きだ。高校では英語を一生懸命勉強した。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 日本に行って機械関係の大手企業に就職したいと思う。
- (2) 理由は、せっかく日本語を習ったからである。
- (3) 日本の機械に関する技術は進歩的であると思う。大手企業で経験を積みたい。
- (4) この就職を親はきっと賛成してくれると思う。
- (5) ただ、日本で働くのは10年以下と考えている。
- (5) その後は中国に帰り、銀行に入りたい。そこで一生働くつもりである。
- (6) なぜ銀行かという理由は、中国では今、銀行や金融関係が最もめざましい発展遂げているからである。機械は、すでにある程度は発展済みの分野といわざるを得ない。

大連 20

1. 属性

(1) 年齢・男女別	21歳、男
(2) 現住所	大連市
(3) 出身地	江蘇省
(4) 大学・学部・専攻	大連理工大学(国立) 機械学部、機械／日本語強化班
(5) 大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業予定年月	2012年7月
(7) 言語 ①母語	中国語
②英語の能力(自己評価)	
a. 会話 b. 読み書き	a. ほぼ完璧 b. ほぼ完璧
③その他の言語	日本語

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 全国統一入学試験の点数を考慮してこの大学に入った。従兄弟が審陽の東北大学にいますが、彼の意見は大連理工大学はいい大学だということであった。結局、父と従兄弟と自分3人で話し合いこの大学に入ることにした。北京大学、清華大学に入るには、点数がまったく足りなかった。来てみると大連はいいところだった。
- (2) 江蘇省の高校では、2年生の時に文化系と理科系にクラスが分かれる。自分は物理と化学が得意で理科系に入った。これが機械学部を選んだ1つの理由である。
- (3) もう1つの理由は、中国は経済発展しているが、その主要な分野は製造業であり、製造業に携わるには機械学部が良いと考えたからである。製造業には人材が集まるとも考えた。
- (4) 機械学部の機械／日本語強化班は、機械だけでなく日本語も学べるというユニークさに惹かれて選択した。機械の分野では、日本とドイツが技術的にリードしており、日本語を学ぶことは極めて有用であると考えた。
- (5) 実際に勉強してみて日本語は非常に面白い。知らなかった日本のことを色々と知ることが出来るようになった。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 卒業後のことはまだはっきりとは決めていない。
- (2) できれば日本の大学院に進学したいと考えたことがある。
- (3) 就職するとすれば、日本を希望しない。
- (4) 理由は、若者は色々なところに行ってみたがるものだが、自分の場合は、日本で働くことになれば今大切にしている親や友人と疎遠にならざるを得なくなり、それは耐えられないと思うからである。自分は1人っ子なので、親を大切にしたい。
- (5) 就職先は出身地の江蘇省か、江蘇省に近いところで、適当な企業を探す。大連で就職するつもりはない（大連は風が強くて、気候が良くない）。

4. 外国での就職について

日本で働く可能性はゼロではない。しかし、日本で働くことになったとしても短期間のことである。

5. その他特記事項

今年9月から早稲田大学に交換留学で1年間行くことになっている。

大連 21

1. 属性

(1) 年齢・男女別	22歳、男
(2) 現住所	大連市
(3) 出身地	遼寧省

(4) 大学・学部・専攻	大連理工大学（国立）機械学部、機械／日本語強化班
(5) 大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業予定年月	2012年7月
(7) 言語 ①母語	中国語
②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. 普通 b. ほぼ完璧
③その他の言語	日本語

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 入学試験の結果をみて、大連理工大学の機械学部への入学を決めた。
- (2) 主として父と相談し、この大学にした。（こうしたことは中国では父と相談する。結婚のことは母とだけ相談する。）
- (3) 日本語強化班を選んだのは、高校のクラスメートの兄に勧められたからである。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 卒業後は就職する。
- (2) 第1志望は日本での就職である。
- (3) 日本の企業の情報は、先輩が話してくれるし、自分でネットを使い探すことも出来る。企業による説明会も10～12月頃に大学で開かれ、情報が得られる。
- (4) 日本企業に就職しない場合、中国の企業に勤めることになる。
- (5) いずれにせよ、これから時間をかけて考え、卒業時には就職先が決まっているようにしたい。

大連 22

1. 属性

(1) 年齢・男女別	21歳、男
(2) 現住所	大連市
(3) 出身地	江蘇省泰州市
(4) 大学・学部・専攻	大連理工大学（国立）機械学部、機械／日本語強化班
(5) 大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業予定年月	2012年7月
(7) 言語 ①母語	中国語
②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. 普通 b. ほぼ完璧
③その他の言語	日本語

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 大連理工大学に入学したのは、学試験の点数で入学できる最も水準の高い大学であったことが理由。
- (2) 高校の教師が、大連理工大学では機械のレベルが高いとアドバイスしてくれた。
- (3) 自分は文系の科目、中国語、歴史、地理、政治などが嫌いで、理系の機械を選んだ。しかし、江蘇省に割り振られた大連理工大学機械学部の入学試験の点数では、機械／日本語強化班が最も低かったので、日本語は嫌だったが、この専攻を選んだ。他の省では機械／日本語強化班が最も点数が高いと聞き、驚いている。
- (4) 自分は、漫画を読み、アニメをみるので、日本の漫画、アニメは中国のものとは比べて非常に面白いので、日本語を習って良かったのかなと思っている。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 出身地の江蘇省で就職しようと思っている。
- (2) 江蘇省には外資系企業があまりないので、民間企業に勤めることになると思う。
- (3) 就職する企業は、①発展性があるが、②自分の能力を発揮できるか、を考えて選びたいと思う。
- (4) 一度入社すれば、転職はしないと思う。

4. 外国での就職について

外国、日本で働くことを考えたことはない。

大連 23

1. 属性

(1) 年齢・男女別	23 歳、男
(2) 現住所	大連市
(3) 出身地	遼寧省丹東市
(4) 大学・学部・専攻	大連理工大学（国立）機械学部、機械／日本語強化班
(5) 大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業予定年月	2012 年 7 月
(7) 言語 ①母語	中国語
②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. やや不足 b. 普通
③その他の言語	日本語

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 大連理工大学を選んだのは、有名な大学で、①いい勉強ができる、②就職しやすい、と考えたからである。

- (2) 機械／日本語強化班を選択したのは、大連理工大学にいた先輩から、就職がしやすい専攻であるとのアドバイスがあったからである。先輩から、ネットを通じて多くの情報ももらった。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 大連の日系企業に就職しようと思っている。
- (2) 大連の外資系企業のなかでは、日系企業が最も賃金が高いと聞いている。
- (3) ただ、他の大都市の外資系企業と比べると、大連の日系企業の賃金は必ずしも高いとはいえず、むしろ低いのではないかと聞いている。
- (4) 奨学金がもらえれば、大学院に入りたい。
- (5) 大連理工大学の大学院には、教授の推薦ではいることが出来るが、試験を受けてももっといい大学の大学院に入りたいと思う。

4. 外国での就職について

- (1) 日本で働くことは、これまでは1度も考えたことがない。
- (2) 機械／日本語強化班の先輩で、日本に行って働いている人がいる。先輩は、日本では昇進の機会がほとんどない、との不満を持っている。実際はどうかは知らないが。

第3章 ベトナムにおける調査結果

本章では高度人材を各国に送り出しているベトナムにおける調査結果を検討する。

ベトナムにおいては、中国と同様、将来の高度人材の予備軍である大学、大学院の学生を調査対象とした。ヒヤリングでは年齢、男女別、現住所、出身地、母国語、その他の言語などの属性、所属する大学、大学院の専攻、卒業予定年などを確認した上で、現在の大学、大学院に進学した経緯、現在の専攻を選択した理由、将来の就職、職業に対する考え方、卒業後の進路希望を中心に聞いた。(質問項目は別添資料を参照のこと)

調査対象となった学生のほとんどが、現在所属している大学、大学院を選択した理由に関する質問に対し、「入学試験の成績」に言及して回答していた。これは中国と同じ傾向であった。そこで調査結果を検討する前に、ベトナムの高等教育制度と大学入学試験制度について簡潔に説明しておく。

第1節 高等教育制度の現状

ここでは教育訓練省および各大学の資料とヒヤリングで聞いた内容をもとに高等教育制度の現状をとりまとめる。教育訓練省や各大学の資料とヒヤリング対象者の回答が異なる点はいくつかみられた。この場合、制度的な事項は資料に従ったが、実態的な側面は、資料の発行年が不明確であることから、ヒヤリング対象者の回答を優先した。

1 学校制度の概要⁶

教育制度が全国的に一本化されたのは1989年のことで20年程しか経ていない。1975年の南北両ベトナムの統一以前は、南北で制度が異なっており、統一後6年たった1981年に旧南ベトナムの制度を採用することにしたが、その後の協議に時間がかかった。現在においても、とくに高等教育機関についてはたびたび制度変更がある。

1981年以降、初等教育(小学校)5年、前期中等教育(中学校)4年、後期中等教育(高等学校)3年となっている。初等教育の5年間は義務教育である。教育年度は9月から翌年の6月で、旧正月(テト)休日(1月下旬頃)を境とした2学期制を採用している。夏季休暇は7～8月。現在の初等教育就学率は95%、前期中等教育就学率は65%、後期中等教育就学率は38%である。

旧北ベトナムの高等教育制度は、旧ソ連邦の影響を受けて、工業、農林水産、教育、医学など専門単科大学を中心としてきたが、南北両ベトナムの統一以降、国家大学、地方総合大学などの新しい形態の高等教育機関が設置された。現在、大学は合計214校存在し、①国家

⁶ ベトナムの学校制度については以下のWebを参照した。

<http://en.moet.gov.vn/>、<http://www.jsctokyo.org/japaviet/japanese/chao.../p002.html>

大学（2校）、②地方総合大学（12校）、③専門大学（53校）、④公開大学（2校）、⑤私立大学（私立大学、18校）、⑥短期大学（127校）、に分類されている。

国家大学はハノイ（1993年設立）、ホーチミン（1995年設立）の両市に、それぞれ以前の主要な専門大学を数校統合して設置されたが、各旧専門大学の独自性が強く、本格的な統合はこれまでのところ進んでいないようである。例えば、教育訓練省の資料では、国家大学を *Univesity* と英語表現し、統合した旧専門大学を *College* と表現して学部扱いしているが、旧専門大学の資料ではそれぞれ *Univesity* と表現、独立した大学であると主張している。地方総合大学は、主要な地方都市に、国家大学に倣って複数の専門大学を統合して設置されたものだ。短期大学は、地方の小中高の教員養成校が半数を占める。

入学試験制度については後述するが、入学試験の難易度でみる限り、いわゆる「有名大学」は専門大学が中心で、国家大学の入学試験の難易度はそれほど高くない。

大学の修学年限は、一般的に学部が4年（工学部は5年、医学部は6年）、大学院修士課程2年、博士課程3年、短期大学は3年制が一般的である。現在の大学進学率は10%程度である。

各大学の資料によると、教育の目的は「ベトナムの発展に必要な人材を育成する」としており、教養を高め、崇高な人格を形成するといったいわゆる「教養主義」を目的に掲げる大学はみられなかった。この方針に基づき設置されている学部・専攻は「職業教育」を強く意識した構成になっている。入学定員は、理科系が文科系を大幅に上回っている。

ヒヤリングのなかで聞いたところ、調査対象の大学はすべて午前、午後の2部制をとっていた。小学校、中学校も2部制が多く、高校の大半は2部制であるという。開発途上国では校舎不足を理由に小学校、中学校を2部制としている国は多いが、大学の2部制は極めてまれなケースであろう。

大学ではクラス制がとられている。ヒヤリングで聞いた限りでは、1クラス50～60人で、工学部など理科系の学部のクラスの方が文科系より1クラス当たりの人数が多いようであった。

ハノイの大学の学生で、ハノイ出身者はほとんど自宅から通学している。地方出身者のうち男子学生は大学近くの学生用アパート（下宿）で自炊生活し、女子学生は大半が大学構内の寮で生活しているとのことであった。男子学生が寮生活をしない理由は、「自由がない」「門限が午後10時であること」などと説明された。女子学生の場合は、寮生活が一般的で、女子学生用のアパート（下宿）は皆無であるという。また両親が「寮に入ることを奨めた」との答えも聞かれた。

2 大学入学試験制度

大学に入学するためには、教育訓練省の実施する中等教育修了試験に合格し、受験資格を得る必要がある。試験は4科目（数学、文学〔ベトナム語〕、外国語、その他の科目から1

科目選択)で、各科目10点満点。合計点数が20点未満の者は不合格で大学受験資格が得られない。

現在の大学入学試験制度は2002年から実施されている。具体的な内容は、ヒヤリング調査対象の学生の説明をもとに以下にとりまとめておく。

- ①ベトナムの大学入学試験は全国全大学統一試験である。各省(市)ごとに試験が実施され、2010年には、理科系は4月4、5日、文科系は4月9、10日に行われた。理科系、文科系の両方を受験することはできない。
- ②試験科目は、理科系が数学、化学、物理の3科目、文科系は数学、文学(ベトナム語)、英語の3科目。1科目10点満点で合計30点。この入学試験の点数によって、入学可能な大学、学部を選択し、志望大学を決める。
- ③各大学、学部の入学可能点数は、過去の入学者の点数を平均した資料があり、これを目安に受験生は志望大学、学部を選択する。
- ④ハノイ外国貿易大学、ハノイ工科大学などの有名大学に入学するには、入学試験で25～28点の成績を取る必要がある。すなわち、各大学の難易度が入学試験の点数によって極めて明確に示されており、学生はこの点を熟知している。

第2節 調査結果

1 調査方法について

ベトナムにおいてはハノイで調査を実施した。ベトナムは第2次世界大戦後に独立したが、独立後間もなく南北に分裂した。1975年に北が南を併合する形で統一し、現在のベトナム社会主義共和国となった。統一後35年を経た現在でも北と南では生活習慣、経済活動に関する考え方に違いがあるといわれる。高等教育機関も北の中心地ハノイと南の中心地ホーチミンに同系列の大学、大学院がほぼ同数存在する。このため「外国の企業への就職」に対する学生の考え方も北と南では違いがあると考えられる。したがって、本調査は北と南の双方の学生をヒヤリング対象とすべきであったが、調査日程の都合から今回は北の中心地であるハノイ所在の大学、大学院の学生に対するヒヤリングのみを行った。

調査対象は「高度人材予備軍」である大学、大学院の学生で、北京と同様、一般的な社会通念に基づき、いわゆる「有名大学」の学生を調査対象とするよう努めた。ここでいう「有名大学」とは、入学試験の難易度が高く、高校における成績が優秀であった学生が多く在籍している大学を意味する。

ハノイにおけるヒヤリング調査は6月下旬に実施した。調査対象はハノイにある大学、大学院の学生14人である。北京の調査と同様、理科系、文科系の学生、学部生と大学院生、男女をバランスよく選択することを試みたが、必ずしも意図したとおりに調査対象を選定できなかった。

調査は1人1時間程度の個別ヒヤリングとした。

ヒヤリングにおいてはベトナム語・日本語の通訳を介して実施した。したがって、通訳者の訳語に基づいて記録をとった。訳語の意味が不明確な点は、通訳者にヒヤリング後に確認し、回答内容の訳語を一部訂正した。

表 3-2-1 ベトナムの調査対象者

							(人)	
大学・大学院名	合計	理科系	文科系	学部	大学院	男	女	
ハノイ外国貿易大学	2	—	2	2	—	—	2	
ハノイ工科大学・大学院	4	3	1	3	1	4	—	
ハノイ農業大学	1	1	—	1	—	1	—	
交通・運輸大学・大学院	2	2	—	1	1	2	—	
ハノイ経済大学	5	3	2	5	—	3	2	
合計	14	9	5	12	2	10	4	

2 調査対象者の所属大学・大学院の概要⁷

調査対象となった 14 人が現在所属している大学、大学院の概要を各大学の「資料」により以下に紹介しておく。

ハノイ外国貿易大学 (Hanoi University of Foreign Trade)

1960 年設立の国立大学。外国貿易経済学部、外国語学部、経営管理学部など 5 学部。経済実務とともに語学に重点を置き、英語、ドイツ語、フランス語、中国語と並んで日本語学科がある。語学はいずれもビジネス用語を中心としている。設立時から 1963 年にかけて外務省の国際部門に所属し、外交・貿易職員の訓練大学であった。1985 年から教育訓練省に所属。学部 4～4.5 年、修士課程 2 年、博士課程 3 年。総学生数 5,200 人、内訳は学部 5,000 人、大学院生が修士課程 150 人、博士課程 50 人の計 200 人。ヒヤリングのなかでは「ベトナムにおいて文科系で最も入学が難しい大学」との評価。

ハノイ工科大学 (Hanoi University of Technology)

1956 年にベトナムで最初の国立科学技術大学として創設。電子工学部、電気工学部、機械工学部など 13 学部。学部は 5 年、大学院は修士課程 2 年、博士課程 3 年。2008 年現在、教職員数 1,200 人、学部生 2 万 9,000 人、大学院生 2,000 人。ヒヤリングのなかでは「ベトナムにおいて理科系で最も入学が難しい大学」との評価。

ハノイ農業大学 (Hanoi Agricultural University)

ベトナムで最初に設立された国立大学の 1 つである。1956 年に設立された農林業研究所を前身として、1963 年に大学となった。作物栽培学部、畜産・獣医学部、工学部、経済・

⁷ ベトナムの大学の概況については以下を参照した。ハノイ外国貿易大学 <http://www1.ftu.edu.vn/>、ハノイ工科大学 <http://www.hut.edu.vn/web/vi/home>、ハノイ農業大学 <http://www.hua.edu.vn/en/>、交通・運輸大学 <http://www.uct.edu.vn/utc/>、ハノイ経済大学 <http://www.en.neu.edu.vn/>

農村開発学部、人文・社会科学部など 8 学部を持つ。学生数は全日制学部が 4 万人、修士課程 100 人、博士課程 50 人。教員数 1,500 人。

交通・運輸大学 (University of Transport and Communications)

ハノイ所在の国立大学 (ホーチミン市に第 2 キャンパス有り)。1945 年、国土開発を目的に創立。土木学部、機械工学部、運輸経済学部、電気・電子工学部など 6 学部を持つ。2010 年現在、学生数は学部、大学院あわせて 3 万人。教員 780 人。

ハノイ経済大学 (National Economics University)

1956 年設立。経済学部、会計学部、国際経済ビジネス学部など 15 学部を持つ国立大学。学部は 4 年、大学院は修士課程 2～3 年、博士課程 3 年 (学士卒は 5 年)。2008 年現在、教職員 730 人、全日制学部生 1 万 3,000 人、職業人向けコース、定時制学生、大学院生を含む総学生数は約 3 万人。

3 調査結果

(1) 調査対象者の属性

ヒヤリング対象とした学生は、先の表 3-2-1 で示したとおり、5 大学・大学院の 14 人である。所属学部・専攻を理科系、文科系別にみると、理科系 9 人、文科系 5 人である。男女別では男子学生 10 人、女子学生 4 人。

ヒヤリングでは、「文科系は女性が多く、理科系は男性が多い」との意見が聞かれた。これを跡づけるかのように、ヒヤリング対象者の女子学生は 4 人全員が文科系で、男子学生は 10 人のうち 9 人が理科系、文科系は 1 人であった。実際、理科系学部の大部分は男子学生で、逆に文科系学部の過半数は女子学生であるという。日本においても同様の傾向がみられ、工学部などの理科系には男子学生が多いが、文科系でも経済学、経営学、法律などの学部では男子学生が多い。しかし、ベトナムではそれらの学部においても文科系一般の傾向にそくして女子学生が多いという。この理由についてヒヤリングした 1 人から「文科系の入学試験は数学、文学、英語の 3 科目で、女性に向いている。これに対し、理科系は数学、物理、化学が試験科目で、男性に向いている」との説明があった。

14 人のうち学部生は 12 人、大学院生は 2 人である。大学院生の割合をもう少し多くしたいと要望したが、ベトナムでは大学院生は働きながら夜間の修士課程に通う者が多く、全日制の修士課程、博士課程に所属する大学院生は研究者を目指す者がほとんどで、彼らは企業に就職することを考えていないとの説明であった。

先の項目の「調査対象者の所属大学・大学院の概要」をみると、例えばベトナムで「最も水準が高い」といわれるハノイ工科大学の場合でも、学部生が 3 万人であるのに対し、大学院は修士課程、博士課程あわせて 2,000 人ほどに過ぎない。これと比較して、第 1 節でみた中国の北京大学の場合は、学生数 3 万人でハノイ工科大学と同規模であるが、大学院生が修士課程、博士課程あわせて 1 万人と多い。教員の数もハノイ工科大学が約 1,200 人、北京大

学は 3,000 人である。大連理工大学の場合も学生数は 3 万 2,000 人で、4 割の 1 万 2,000 人が大学院生、教職員は 3,600 人である。ベトナムの高度人材を育成する高等教育機関の整備は中国と比較してかなり差があるようである。

（２）現在の大学・大学院に進学した経緯

ハノイのほとんどの学生は、現在所属する大学に入学した理由を、北京と同様に、「入学試験の成績を考慮して」と回答した。学部、専攻についても入学試験の成績を考慮して選択したとの答えが大半であった。なかには「両親の意見を参考にして決めた」との回答も多かったが、さらに質すと、両親も入学試験の成績をみて、その範囲で入学できる必要点数の高い大学、学部、専攻を奨めたようである。

このため、「入学試験の成績により、入学可能な大学として現在の大学を選んだ。本当は、財政学を専攻したかったが、入学試験の点数が少し足りなくて入れなかった。財政学を専攻できる他の大学はあったが、いずれも人気のない、それほど入学が難しい大学ではなかったので、入らなかった」との意見にみられるように、本来希望していた専攻より、「有名大学」であることを優先したケースもあるようだ。

一方で、「当初、ハノイ工科大学に入学したが、2 年で退学した。退学理由は、大学も専攻も入学試験の成績をみて親を選んだもので、専攻分野に興味を持てなかったからである。親が工科大学を選んだ理由は、有名大学であるからであった」という声も聞かれた。この回答者はハノイ工科大学を退学した後、自分で選んだハノイ経済大学に入学し「親も何とか賛成してくれた」と話している。

いずれにせよ、大学選択は入学試験の成績如何であるようだ。これに対して学部、専攻の選択は、入学試験の成績に大きく左右されながらも、「語学が好きであった」「機械に興味があった」「自分の性格に合っていると思ったから」などの回答にみられるように、ある程度は自分の適性を考慮して選択していると考えられる。

しかしながら、一方で「工学部（応用数学、IT）を選んだのは、数学が好きであったから。いまでも数学はすごく面白いと思っている。興味が尽きない」という幸運な学生もいれば、他方で「ハノイの有名大学に入りたいと考えていたから、経済大学は志望どおりの大学。ただし、第 1 志望の銀行学部には点数が足りなくて、第 2 志望の行政学部（管理学専攻）に入った」と当初の志望を変えざるを得なかった事例もあった。

ここでみたように大学・大学院に進学した経緯は、中国の北京、大連のヒヤリング結果と類似点が多い。

ヒヤリングをして印象深かったのは、入学試験制度に関する項目でも記したが、ヒヤリング対象となった学生が例外なく入学可能な点数を大学別のみならず、学部、専攻別に詳しく知っていたことである。この点も中国と同様に、各大学、学部、専攻のランキングが、政府（教育訓練省）が公表する資料で明確な形で示されている結果である。ベトナムの「受験戦

争」は日本以上に厳しいとの印象を受けた。

もう 1 点印象に残ったのは、「学費は、父親が国家に貢献した（ベトナム戦争で負傷して障害者になった）ため、免除されている」との回答である。教育訓練省の資料では何人の大学生がこの制度を適用されているか確認できなかったが、調査対象者の話によると、こうしたケースはそれほど少なくはないようだ。ただ、本人はあまりこのことを話題にしたがらないとの回答があった。ベトナム戦争は 1975 年に終了し、35 年を経たが、戦争の傷跡はまだ深くベトナム社会に影を落としているようだ。

（3）卒業後の進路希望

卒業後の進路希望については、まずつぎの選択肢から 1 つ選んでもらう方法でヒヤリングを進めた。

- ①外資系企業
- ②民間企業
- ③国有企業
- ④公務員
- ⑤外国にある外国企業
- ⑥起業
- ⑦家業を継ぐ
- ⑧（学部生の場合）大学院への進学
- ⑨外国への留学
- ⑩その他

14 人の回答をみると、「⑤外国にある外国企業」「⑦家業を継ぐ」の 2 項目は皆無であった。②民間企業を第 1 志望として選択した学生も皆無であった。ヒヤリングを終えた後、幾人かの調査対象者と雑談をしたが、そのなかで上記の選択肢について聞いたところ、「家業を継ぐ例は、ベトナムでは大学に進んだ者ではほとんどない」と学生は話していた。例に上げられたのは、「農家」が多かったが、農家を継ぐ予定の子供を親は大学には入れないとのことであった。

「②民間企業」については、第 1 志望の「①外資系企業」や「③国有企業」に就職できなかった場合は、「民間企業に就職せざるを得ない」との消極的な回答のなかで言及されたに過ぎない。この理由は、ベトナムにおいては、国有企業のほとんどは大企業かつ独占企業であり、外資系企業も多くは大企業で、規模が小さくとも賃金は高いのに対し、民間企業は大半が中小企業で賃金が低いことが理由である、と学生は説明していた。

「⑤外国にある外国企業」が選択されなかった理由は、後段の「外国での就職について」で検討する。

10 項目の選択肢のなかで最も回答数が多かったのは、「①外資系企業」である。14 人のう

ち、7人が外資系企業と答え、すでに外資系企業に勤めながら夜間の大学院に通っている学生を加えると8人が外資系企業と答えたことになる。

外資系企業と答えた8人の専攻科目をみると、文科系が6人、理科系が2人である。

文科系6人のうち、4人は「外資系の銀行、証券などの金融機関」を希望しており、この4人はいずれも経済学、経営学が専攻科目である。銀行を希望する理由は一様に「ベトナムでは急速に金融機関の整備が進んでおり、今後、高い賃金を得られることが期待できるから」で、外資系企業の「国籍」については「どこの国の外資系かは問わないが、条件の良いところ」を希望するとの答えであった。

残る文科系学部2人のうち1人は、外国語学部で日本語を専攻しており、「日系企業に勤めたい」との回答で、他の1人は経営学専攻で「1年生であり、職業、就職についてあまり考えたことがない。想像だが、アメリカ系の外資系企業に入社できればいいと思う。職場環境が良く、賃金が高そうであるからだ」と答えた。

一方、理科系の2人はいずれも工学部で、1人は特定の企業名をあげ「外資系のソフトウェア開発会社に入りたい。ベトナムでは有名な企業で、テレビ・コマーシャルでもよくみる」と答え、その理由を「自分の学んだ専門技術が活用できるからである」と説明した。他の1人は夜間の大学院に通っている学生で、すでに外資系のメーカーに勤めており、「自分の専門が活かせるのでこの企業に就職した」と話している。

外資系企業を選択した8人に共通する選択理由は、「外資系企業は賃金が高い」「自分の専門が活かせる」の2点である。他方で、「外資系は外国人の上司がいるので嫌だ、という友人が多い」との声も聞かれた。

外資系企業のつぎに回答が多かったのは、③国有企業の4人である。共通点は、4人のいずれも工学部の学生で、「雇用が安定している」ことを理由に上げていたことだ。しかも、4人が共通して「国有企業の賃金は外資系企業より低いが、雇用が安定している」「場合によりボーナスが期待できる」と答えている。なかには「外資系企業は仕事が厳しいと聞いているが、国有企業は休暇が多く、リラックスして生活できる」との回答もあった。

外資系企業8人、国有企業4人で、残る2人は、④公務員を希望していた。2人とも経済学専攻で、1人は「体が弱いので、比較的仕事が楽といわれる公務員になりたい」との希望理由であり、他の1人は「安定した職である」ことを希望理由としている。この結果をみると一見公務員の人気は低そうだが、「公務員試験は全国一斉に実施され、共通試験を受けるが、募集は空きポストに限られる。平均して20倍の倍率である」との説明があり、必ずしも人気は低いわけではないようだ。2人の回答に共通していたのは「公務員の賃金は低い」との認識である。

ここで学生の回答のなかから賃金（大卒初任給）に言及した箇所を抜き出して比較してみると、つぎのようになる。

①外資系企業の賃金が最も高い。月額300～500US\$。

②民間企業は月額 240US\$程度。

③国有企業の賃金は月額 200US\$程度。ボーナスが期待できる。

④公務員は月額 100US\$程度。

賃金は、外資系企業が最も高く、民間企業、国有企業、公務員の順で低くなるとの認識である。一方、「仕事の厳しさ」については、外資系企業が最も厳しく、民間企業がこれにつき、国有企業、公務員の仕事は相対的に「厳しくない」との共通認識があるようだ。また、雇用の安定について、国有企業、公務員は極めて「安定している」が、外資系企業や民間企業は「景気変動に影響されて不安定である」と考えているようだ。

賃金額について調査対象者はいずれも US\$で答えていた。当初は、通訳者がドル換算しているのかと考えたが、確認すると学生が US\$で答えていたという。これについて学生に質すと、「物価上昇率が高いので、賃金額は通常、US\$で示される。だが、実際の賃金支給はベトナム・ドン」であるとの説明であった。

つぎに、就職を希望する地域についてみると、外資系企業を希望する学生の大半はハノイ出身者、地方出身者ともに「ハノイ」との回答であったが、「条件が良ければ、ハノイにはこだわらない」との回答もみられた。ハノイと答えた回答者に「ホーチミンはどうか」と尋ねると、「ホーチミンには行ったことがないので答えられない」との答えが多かった。

国有企業、公務員希望者はすべて「勤務先はどこでもいい」との回答であった。国有企業、公務員の場合、勤務地を選択する余地はないようである。

就職情報の入手経路は、外資系企業希望者の場合は「インターネットの募集広告をみる」との回答で、国有企業希望者の場合は「知人や国有企業勤務者の親類の者から募集情報を聞く」とのことであった。公務員の場合は毎年、12月に全国統一試験があるとのことである。

また、文科系の学生にはアルバイトの機会は少ないが、理科系の学生には専攻に関連した企業でアルバイトをする者が多く、アルバイト先に誘われて就職する者も多いという。

なお、ヒヤリング対象者のなかには⑧大学院への進学、⑨外国への留学、を具体的に検討しているケースはみられなかった。

(4) 外国での就職について

卒業後の進路希望に関する質問に対して、「外国にある外国企業」への就職希望者は皆無であった。そこで、「外国での就職について」の質問では、①なぜ外国にある外国企業への就職を希望しないのか、②将来外国にある外国企業への就職の機会があったらどうするか、③もし外国で就職するとすればどこの国がよいか、との角度から質問した。

なぜ外国にある外国企業への就職を希望しないのかとの質問に対しては「外国には1度も行ったことがない」ので、「外国での就職は考えたこともない」「外国の企業に関する知識がない」というのが共通した反応であった。14人中、13人が「外国には1度も行ったことがない」と答えた。1人の外国経験者は「外国には、1度、中国の『ナンニン』に行ったこ

とがある。ベトナムと中国の国境から 200 km のところにある中都市で、観光旅行である。とくに強い印象は受けなかった」とのことであった。サンプル・サイズが極小なので一般的な結論は導き出せないが、ハノイの学生の大部分は外国経験がないと考えてよいのではないか。

知人に外国で就職した人はいないか、との質問に対しては、「知っている」という調査対象者はなく、「大学の先輩で、外国に留学した人は知っている」との回答が幾つかあったのみである。留学先として名前が上がった国は、日本、イギリス、フランス、オーストラリアの 4 カ国。「チャンスがあれば留学はしたい」との声は幾つか聞かれた。

もう 1 点、外国で働かない理由に、「ベトナムは今後、さらに発展することが期待できるのでベトナムで働く」という考え方もあった。

将来外国にある外国企業への就職の機会があったらどうするか、との質問に対しては、「働くチャンスがあれば、行きたい」との積極派から、「外国で働くのも悪くはない」「検討するかもしれない」との中間派、「チャンスがあっても、たぶん外国の企業には入らない」との消極派までバラエティーがあった。働きに行きたい、と答えた積極派に具体的国名を上げてもらうと、日本、アメリカ、イギリス、シンガポール、中国の名前が上がった。理由は、第 1 に「先進国」であること、第 2 に「言葉が通じる」こと、第 3 に「発展している国」である。

日本をあげた調査対象者は、「ビジネス日本語」を専攻している学生と、日系外資系企業に勤めながら夜間の大学院に通っている学生である。アメリカ、イギリス、シンガポールはいずれも英語圏であるとの理由による。アメリカについては「外国で働くならば、アメリカがいい。最も金融機関が進んだ国だからである」と外資系銀行就職希望者が語っていた。彼は日本に対して「日本は銀行の分野では有名ではない。技術は進んだ国だが、金融機関は進んでいないのではないか」との意見を持っていた。中国を上げたのもこの外資系銀行就職希望者で「中国も最近著しく発展しているので興味がある」という。アメリカについては「社会が安定していなくて危険な国だ」との印象を持つ学生が複数みられた。いずれもテレビ映画からの印象である。

積極派のなかでも「外国で働くにしても、長くは働かない。ベトナムに家族がいるからだ」との回答が複数みられた。また、中国でよく聞かれた「外国で働き、経験を積んで、出身国に帰り、その経験を活かしたい」との考え方も聞かれた。

(5) 将来の希望・展望

就職した企業に長く働くか、転職を考えるか、を聞いたところ、「考えたことがない」と、まだ就職していない学生としては当然の反応が多かった。

1 つの傾向として回答に表れていたのは、「安定した雇用を望む」ことを理由に国有企業への就職や公務員になることを希望していた者がいずれも、希望どおり就職できれば「長く働くつもりである」「定年（男 60 歳、女 55 歳）まで勤めるつもり」と答えていたことだ。

一方、外資系企業希望者は「外資系の銀行に入行したとしても、3～5年で転職すると思う。実務経験があれば転職は容易であり、転職によって賃金が上がり、昇進できるといわれている」と考えているようだ。外資系企業希望者で「基本的には、最初に入ったところで長く働くつもりである」としながらも、「賃金が上がらず、プロモーションのチャンスがなければ転職するだろう。また、自分の能力を企業が十分に評価してくれない場合も、転職ということになると思う」と回答する学生もいた。

いずれによ、安定指向で就職する者は国有企業、公務員を選択して、最初に就職した職場に長く勤め、高い賃金を希望して外資系企業に就職した者は、より高い賃金、昇進を求めて「転職」を視野に入れているという傾向があるといってよさそうだ。

女子学生からは、「結婚後も引き続き働くつもりである」「結婚後も仕事を続けたいと思っている」との意見が聞かれた。これについて「ベトナムでは、大卒の女性はほとんど結婚後も働いている。専業主婦は、大学に行っていない人が多い」との女子学生の解説があった。

第3節 ヒヤリング記録

ハノイ 1

1. 属性

(1) 年齢・男女別	23歳、女
(2) 現住所	ハノイ
(3) 出身地	ハノイ
(4) 大学・学部・専攻	ハノイ外国貿易大学（国立）外国語学部（ビジネス日本語専攻）
(5) 大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業予定年月	2010年6月
(7) 言語 ①母語	ベトナム語
②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. ほぼ完璧 b. ほぼ完璧
③その他の言語	日本語

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 大学、専攻を選択するに当たっては、父親の意見を参考にした。
- (2) 高校の時、英語を勉強し、好きだったので、大学でも語学を勉強しようと考えた。
日本語を選んだのは、すでに英語はある程度できるので、他の言語にしようと思ひ、日本はもっと発展する国だと考え選んだ。
- (3) ハノイには15の大学があるが、外国語学部があるのは、①外国貿易大学、②工科大学、③国家大学、の3大学で、このなかで外国貿易大学の外国語学部の水準が最も高いので、この大学を選んだ。水準が高いとは、入学試験の点数が最も高いという

意味である。教育の中身は、分からない。理科系学部では、ハノイ工科大学が最も点数が高い。

- (4) 女性は言語の勉強に向いていると思う。
- (5) 外国語学部の試験は、数学、文学、英語の3科目で、女性に向いている。
- (6) これに対し、理系は数学、物理、化学が試験科目で、男性に向いている。
- (7) 外国語学部には、英語、日本語、フランス語、中国語、韓国語の学科がある。この順序で人気がある。韓国語はできたばかりであり学生が少ない。
- (8) クラスは23人、うち男1人、女22人の割合。
- (9) ベトナムでは、他の学部は英語を最初の2年間勉強するだけで、第2外国語はない。英語は文法と読解が中心で、試験のための英語という気がする。だから会話など実践的な英語はベトナムの学生は苦手だ。
- (10) ビジネス日本語と普通の日本語の違いは、よくは分からない。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 日本語をもっと訓練できる日系の外資系企業に就職したい。
- (2) 文法、漢字などはできるが、話すことは苦手である。こういう場合にどのように話すかは、日本人と沢山接しないと分からない。
- (3) 日系の外資系企業は数が多いので、現在、募集情報を収集しているところ。好条件の企業に応募するつもり。業種、職種はとくに問わない。勤務地はハノイ以外考えない。

4. 外国での就職について

- (1) 外国には1度も行ったことがない。
- (2) 日本語を勉強したが、日本にも行ったことがない。今年卒業するので、就職して、お金を貯めて、観光で日本に行きたいと思っている。雪がみたい。
- (3) もし外国で働くことができれば、先進国がいい。例えば日本かイギリス。日本は日本語を勉強したことが理由。イギリスは、とくに大きな理由はないが、ヨーロッパの国で英語が通じる国であることで思いついた。
- (4) 外国で働くにしても、30歳くらいまでで、その後はベトナムに帰って外国での経験を活かして働きたい。

ハノイ 2

1. 属性

(1) 年齢・男女別	22歳、男
(2) 現住所	ハノイ
(3) 出身地	ハノイ
(4) 大学・学部・専攻	ハノイ農業大学（国立）工学部（電気機械専攻）
(5) 大学院・研究科・専攻・課程	—

(6) 卒業予定年月	2011年7月
(7) 言語 ①母語	ベトナム語
②英語の能力(自己評価)	
a. 会話 b. 読み書き	a. やや不足 b. やや不足
③その他の言語	—
(8) その他特記事項	4年生

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 現在の大学は、全国統一の入学試験の成績で入学できる大学のなかで、自宅から近いところを選択した。
- (2) 工学部・電気機械専攻を選んだ理由は、子供の頃から電気工作が好きであったことによる。また、卒業後、いい仕事、賃金の高い仕事が得やすい分野であることも理由の1つ。
- (3) 大学名は「農業大学」であるが、各種の学部がある。例えば、農業、畜産、生物技術、経済、地質、工業などの学部である。工学部は農学部より入学試験の成績が良くないと入れない。
- (4) 農業大学であるから、都心部からは離れており、各種施設があるため、面積はどの大学よりも広い。学生数は約4万人。
- (5) 修学年限は専攻によって4年制と5年制があるが、電気機械専攻は5年制である。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 企業に就職するつもりである。
- (2) 可能なら、国有企業である「電力グループ」の企業に入社したい。希望する企業に入れば、当初の勤務地はどこでもいいが、いずれはハノイで勤務したい。
- (3) 理由は、国有企業は、賃金は民間企業より低い、ボーナスがあり、休暇も多く、雇用が安定していることである。とくに「電力グループ」は、独占企業であり、雇用はとりわけ安定している。休暇が多く、リラックスして生活することも魅力である。
- (4) 国有企業は、雇用は安定しているが、個人の能力はあまり重視してもらえないといわれる。「雇用は安定している」ことの意味は、国有企業に入った者の多くが、定年まで勤めていることである。定年は男60歳、女55歳である。
- (5) 国有企業の勤務時間は、午前8時から午後4時半であると聞いている。
- (4) ベトナムの民間企業は、国有企業より賃金は高いが、ボーナスがなく、休暇も少ないといわれている。規模も小さいところがほとんどである。
- (5) 外資系企業は、賃金は最も高いが、ルール(就業規則)が厳しいといわれる。ただ、能力が高ければ、それを発揮する機会は多いといわれている。しかし、就職先として考えると、不安が多い。
- (6) 公務員は、賃金が低く、ほとんど魅力がない。大学でも公務員になりたいと考えている者はほとんどいないのではないかと。

4. 外国での就職について

- (1) 外国には1度も行ったことがない。
- (2) 外国にある外国企業に勤めることは、考えたことがない。外国企業に関する知識がないので、何も答えられない。

5. 将来の希望・展望

- (1) 国有企業に入ることができたら、長く勤めると思う。
- (2) ただ、高収入が得られると聞いている不動産業に興味がある。不動産業で、可能なら自分の会社をつくることができたらと考えたことがある。これはほとんど想像したことがあるだけで、具体的にどうすればよいのかは分からない。
- (3) 外国に行って働くことは、恐らくないと思う。
- (4) 将来は、結婚して、両親とは別に暮らすと思うが、ハノイで暮らしたいと思うので、両親とは近い場所で暮らすことになると思う。

ハノイ 3

1. 属性

(1)年齢・男女別	19歳、女
(2)現住所	ハノイ
(3)出身地	ハノイ
(4)大学・学部・専攻	ハノイ外国貿易大学（国立）経営管理学部（会計学）
(5)大学院・研究科・専攻・課程	—
(6)卒業予定年月	2013年6月
(7)言語 ①母語	ベトナム語
②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. やや不足 b. 不足
③その他の言語	—
(8)その他特記事項	1年生

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) ハノイの大学で、自分の入学試験の成績で入学可能な大学として選択した。
- (2) 経営管理学部（会計学）を選んだ理由は、親の意見を参考に、女性が高賃金の仕事をしやすい学科であると考えたためである。実際に勉強してみて、神経質な自分の性格に合った学科だと思っている。
- (3) 会計学のクラスは24人、うち男2人、女22人。当初予想通りに女性の多い学科であった。
- (4) まだ本格的には会計学は勉強していないが、自分の性格に合っていると思う。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 1年生であり、職業、就職についてあまり考えたことがない。
- (2) これは想像だが、アメリカ系の外資系企業に入社できればいいと思う。職場環境が良く、賃金が高そうであるからだ。
- (3) (日系企業はどうかとの質問に) 日本語を勉強していないので、無理だと思う。それに日系企業はハノイの街から遠い工業団地に位置しており、通勤が大変だと思う。ベトナムでは普通、自宅の近くで働きたいと誰もが考えている。また、日系企業は残業が多いと聞いたことがあり、大変だと思う。

4. 外国での就職について

- (1) 外国に行ったことがない。
- (2) 外国での就職については、想像したこともない。ただ実際にそのような機会があれば、検討するかもしれない。

5. 将来希望・展望

- (1) 現在は、大学を良い成績で卒業できるよう集中している。
- (2) 両親もそれを期待している。

ハノイ 4

1. 属性

(1)年齢・男女別	25歳、男
(2)現住所	ハノイ
(3)出身地	ハノイ
(4)大学・学部・専攻	ハノイ工科大学(国立)工学部(電子・テレコミュニケーション)
(5)大学院・研究科・専攻・課程	ハノイ工科大学大学院、電子・テレコミュニケーション、修士課程
(6)卒業予定年月	2012年6月
(7)言語 ①母語	ベトナム語
②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. 普通 b. 普通
③その他の言語	—

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 入学試験の成績がよかったので、最も難しい大学に入ることができた。両親も喜んでくれる。
- (2) 工学部を選択したのは、理科系の科目が得意であったこと、IT関係に興味があったことなどが理由である。将来の職業との関連はあまり考えなかった。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 電子・テレコミュニケーションという専門性を活かした職業に就ければと考えている。
- (2) 具体的には、国有企業、外資系企業が考えられると思うが、今のところどの企業がいいのかは自分では判断できない。これからじっくりと検討する。
- (3) ただ、勤務地はハノイがいい。

4. 外国での就職について

- (1) 外国に行った経験はない。
- (2) チャンスがあれば、外国の企業で働くのも悪くはないと思う。
- (3) 具体的な国といわれても、よく分からない。アメリカには良い印象を持っていない。いずれにせよ、先進国ならば、と思う。

ハノイ 5

1. 属性

(1) 年齢・男女別	20 歳、男
(2) 現住所	ハノイ
(3) 出身地	ハノイ
(4) 大学・学部・専攻	交通・運輸大学（国立）建設・交通インフラ学部 （道路、橋建設）
(5) 大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業予定年月	2012 年 6 月
(7) 言語 ①母語	ベトナム語
②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. 普通 b. 普通
③その他の言語	—

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 入学試験の成績で入学可能ななかから、父親のアドバイスで、建設関係の充実した学部のある大学を選んだ。
- (2) 建設関係を選んだのは、建設関係の国有企業に勤めている父親のアドバイスによる。建設関係の学部は、あまり人気がなく、入学が容易であったことも理由の1つである。
- (3) ベトナムの大学は午前、午後の2シフト制で、自分は午後シフト（12時15分～17時15分）に属している。1日5時間で、2時間30分の講義を毎日2講義受けている。
- (4) 月曜から金曜まで毎日講義を受けている。出席はすべての講義でチェックされている。出籍日数が少ないと試験が受けられなくなる。
- (5) 試験は科目により多少異なるが、各科目ともほぼ年2回で、一定の点数に達しないと追試が科される。

- (6) 試験の成績が悪いと、1 年間は留年できる。しかし、2 年失敗すると、卒業資格が取得できなくなる。この制度は、どの大学も同じだと思う。
- (7) 建設関係の講義はとくに力を入れて勉強している。
- (8) 外国語は英語を習っているのみ。技術系の学科では、交通大学にロシア語を習うコースがあるが、これは例外で、ほかは自分の知っている限りでは英語のみである。英語の教員は全員ベトナム人で、外国人教員はいない。
- (9) 交通・運輸大学の学部は4年制。学生数は約5,000人。
- (10) 学部は会計、銀行財務、鉄道、建築、メカニク(機械)、交通・運輸がある。
- (11) 会計は男女半々、銀行財務は女性が大半、鉄道、建築、メカニク(機械)、交通・運輸は男性が大半。
- (12) クラスは60人で、男59人、女1人。
- (13) クラスは60人のうちハノイ出身は10人、ほかは地方出身。
- (14) 地方出身者は、大学の近くに学生用下宿に住んでいる。
- (15) 学生寮はあるが、入寮しているのはほとんどが女性で、男性はごく僅か。理由は「自由」がない(夜10時が門限)。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 国有企業に就職したい。建設関係だが、父親とは異なる企業に入りたいと思っている。
- (2) 理由は、雇用が安定していることである。父親の影響が大きいと思う。
- (3) 国有企業の初任給は月額200US\$程度で、外資系企業の月額500US\$と比べて低いが、国有企業にはボーナスがあると聞いている。
- (4) 勤務先は、ベトナムのどこでもかまわない。
- (5) 国有企業の入社試験は、大学卒業資格を得てから受けることになる。
- (6) 募集の情報は、国有企業に勤めている親戚(4人いる)から入手することになると思う。大学の掲示板に、募集情報が掲載されることもある。
- (7) 外資系企業に入るのならば、日系企業がいい。理由は、日本はアジアの国で、労働慣行などが馴染みやすいと考えるからである。日本の建築デザインは独特で、好印象を持っている。ただし、日本の建築デザインはインターネットでみた印象で、何が書いてあるかは理解できなかった。
- (8) 外資系企業の募集情報は、インターネットで入手できる。

4. 外国での就職について

- (1) 外国には行ったことがない。
- (2) アメリカや日本などの先進国には関心がある。その理由は、講義でアメリカや日本の建設の技術が高いと聞いているからである。とくにビル建築がすばらしいと習った。そうした技術を習いたい。
- (3) ヨーロッパの国には関心がない。

(4) ベトナムの企業に入って、外国に行くチャンスが与えられれば、喜んでいくと思うが、外国の企業に就職することはないと思う。

5. 将来希望・展望

- (1) もし、国有企業に入社できたら定年の60歳まで同じ企業で勤めると思う。
- (2) 外資系企業に入った場合は、恐らく転職すると思う。理由は、先輩などの話から、転職しないとプロモーションがないと聞いているからだ。
- (3) 大学院に入ることは考えていない。大学院に行くのは、大学の教員になりたい場合だけである。
- (4) ただし、国有企業に入って、夜間の大学院に入ることはあり得ると思う。

ハノイ 6

1. 属性

(1) 年齢・男女別	27歳、男
(2) 現住所	ハノイ
(3) 出身地	ハタイ（ハノイの西側）
(4) 大学・学部・専攻	交通・運輸大学（国立）工学部
(5) 大学院・研究科・専攻・課程	交通・運輸大学大学院、機械メカニク、修士課程（夜間コース）
(6) 卒業予定年月	2012年6月
(7) 言語 ①母語	ベトナム語
②英語の能力（自己評価） a. 会話 b. 読み書き	a. 普通 b. 普通
③その他の言語	日本語（ごくわずか）
(8) その他特記事項	日系企業勤務

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 大学を卒業してハノイにある日系企業（モーターバイク製造）に1年間勤め、大学院の夜間コースに入った。勤務は継続している。
- (2) 現在の企業に入ったのは、機械メカニクを学んだので、この技術を活かせる企業であることが理由である。モーターバイク製造には、日系企業3社と中国系企業がある。日系企業のモーターバイクの方が値段は高いが、品質がよく、将来性があると考えた。
- (3) 現在の企業の募集情報はインターネット（ベトナム語の「仕事ネット」）で得た。試験はIQテスト、専門学科のテスト（筆記テスト）、面接の3段階であった。
- (4) 職務は、製造工場のエンジニアである。
- (5) 初任給は高いが、毎年少しずつしか上がらない。就業規則の適用が厳格で、場合により「厳しい」と感じている。

- (6) 日本での研修を希望したが、研修に行くには日本語ができる必要があり、まだ実現していない。日本語は英語より難しい。
- (7) 大学院に入ったのは、知識をさらに向上させたいと考えたため。
- (8) 大学院に通うための、特別の支援を企業からは受けていない。
- (9) 大学院の修士課程は、昼間コースは2年制だが、夜間コースは3年制。講義は午後6時から8時。
- (10) 大学院にはほとんど欠席することなく通っており、計画通り卒業できると思う。
- (11) 大学院を卒業して修士号を取得しても、賃金が上がるかは不明。

3. 卒業後の進路希望

当面は、現在の企業で働く。

4. 外国での就職について

- (1) 日本で働くチャンスがあれば、行きたい。
- (2) 理由は、日本は高い技術があり、自分の技術を向上できると思うから。また、日本は先進国であり、現在よりも高い賃金を得られると思う。
- (3) とはいえ、研修にもいけないほど日本語ができないので、かなりハードルは高いと考えるを得ない。

ハノイ 7

1. 属性

(1) 年齢・男女別	23歳、男
(2) 現住所	ハノイ
(3) 出身地	ゲアン（中部地方）
(4) 大学・学部・専攻	ハノイ工科大学（国立）工学部（電子・テレコミュニケーション）
(5) 大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業予定年月	2010年6月
(7) 言語 ①母語	ベトナム語
②英語の能力（自己評価） a. 会話 b. 読み書き	a. 不足 b. 不足
③その他の言語	—
(8) その他特記事項	6月末に卒業予定だが就職先は未定

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 出身地のゲアンにも大学はあるが、電子工学の学科はない。ゲアンに近い大都市のフエの大学には電子工学はあるが、ハノイ工科大学の方がレベルが高いため選択した。
- (2) 電子・テレコミュニケーションを専攻した理由は、この分野はベトナムでは新しく、発

展の可能性があるからである。この分野を専門とすればたぶん仕事に困ることはないと考えた。

- (3) 父は国有企業（電力グループの企業）に勤めており、母は中学校の教師だが、電子・テレコミュニケーションを専攻することに賛成してくれた。高校の先生も同じ考えだった。
- (4) クラスは 80 人。技術系は 1 クラスの人数が多い。男女比は、男 65 人、女 15 人。出身地別では、ハノイ出身が 20%、残りの 80%は地方出身。大学全体では、男が 80%ほど。教員はほとんど男性。女性の教員はごくわずかである。
- (5) 地方からの出身者は、大学近くの学生用の下宿に住んでいる。今住んでいるところは、7 部屋あり、4 人の学生が住んでいる。食事は自分で作っている。
- (6) 大学では、基本的な知識をしっかりと身につけようと考えて勉強した。
- (7) 大学は 5 年制で、最初の 2 年間は数学、物理、哲学などを中心に学び、つぎの 3 年間は電子・テレコミュニケーションの専門の勉強をした。
- (8) ハノイ工科大学の学生数 3 万人。大学院は修士課程、博士課程をあわせて約 200 ～ 300 人。教員は約 800 人。

3. 卒業後の進路希望

- (1) すでに卒業できることは決まっている。今後、引き続きハノイに住んで仕事を探す予定。
- (2) 理由は、ハノイの方が出身地よりいい仕事が見つかるチャンスが多いことだ。
- (3) 国有企業に就職したい。国有企業の賃金は低いが、安定した雇用が期待できる。
- (4) できれば電力グループのテレコム関係の企業に入りたい。そのための準備をしている。
- (5) テレコム関係の企業は、7 月と正月（テト）前（1 月）に募集がある。試験は、筆記と面接。人気があり、倍率は 10 倍以上といわれている。この情報は、テレコム関係の企業に勤めている叔父（母親の弟）から教えてもらった。
- (6) 卒業資格がまだ取得できていないので、まだ応募していないが、取得次第応募する。
- (7) もし国有企業に合格しなかったら、外資系企業を探すつもりだ。外資系企業の募集はインターネットで探すことができる。
- (8) 大学では就職の世話をしてくれない。ただ、企業から募集の情報が寄せられれば、掲示板に張り出されることはある。また、企業のプロジェクト参加している教員は、募集の情報があれば講義の時に教えてくれる。

4. 外国での就職について

- (1) 外国には行ったことがない。
- (2) 外国の企業で働くことを、これまでに考えことがない。
- (3) チャンスがあっても、たぶん外国の企業には入らないと思う。理由は、ベトナムに家族がおり、遠く離れることはできない。
- (4) 大学の友人も、外国で働こうと思っている者はいない。
- (5) 大学の先輩で、外国に留学した人は知っているが、働きに行った人はいない。留学先は、

イギリスとオーストラリアで、奨学金に応募して合格したので留学した。日本に留学した人は知らない。

- (6) 自分も、留学はしたいと思う。ただ、留学が終わればベトナムに帰って、仕事を探すことになる。ただ、英語があまり得意ではないので、留学は難しいと思う。
- (7) 留学してベトナムに帰ってきた人は、いずれもいい仕事に就いている。留学でより高い知識を身につけたからだと思う。

ハノイ 8

1. 属性

(1) 年齢・男女別	28歳、男
(2) 現住所	ハノイ
(3) 出身地	ハノイ
(4) 大学・学部・専攻	ハノイ工科大学（国立）経営管理学部銀行学専攻
(5) 大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業予定年月	2011年6月
(7) 言語 ①母語	ベトナム語
②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. ほぼ完璧 b. ほぼ完璧
③その他の言語	—
(8) その他特記事項	①当初はベトナム国家大学ホーチミン校に入学しソフトウェア技術を専攻したが、3年で中途退学。2年働いた後、現在の大学に入学。 ②既婚。妻は大学院生（夜間コース）。妻の勤務先は国有企業の電力グループ（会計部門）。

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 高校を卒業してベトナム国家大学ホーチミン校に入学した。この大学を選択した理由は、入学試験の成績で入学可能な、最も良い大学を選んだことによる。
- (2) ソフトウェア技術を選んだのは、当時は最も興味もてる分野であったことによる。
- (3) だが、3年間勉強して、ソフトウェアに興味もてなくなった。そこで仕方なく、中退し、ハノイで2年間働いた。この間、学資を貯めるとともに、受験勉強をして現在の大学に入った。
- (4) 現在の大学を選んだ理由は、①ハノイにある有名校であること、②希望する銀行の勉強ができること、などである。
- (5) ベトナムでは、銀行（金融機関）の発展が著しい。株式会社形態の民間銀行の発展がとくにめざましく、高賃金が期待でき、将来性も高いといわれている。

- (6) 両親も賛成してくれた。
- (7) 大学のクラスは30人。男女の内訳は、男9人、女21人。銀行分野を選ぶ学生は、どこの大学でも女性が多い。
- (8) 現在の大学の学資は親が負担している。国家大学でソフトウェアを専攻していたときには、アルバイトができたが、銀行を専攻している今は、アルバイト先はない。妹も大学生で、会計を勉強している。親は大変だと思う。いずれ恩返しするつもりだ。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 将来は銀行で働くことを希望。
- (2) 銀行には、国有銀行（4行）、民間銀行、外資系銀行があるが、アメリカ系か、イギリス系の外資系銀行に入りたい。そのために英語の勉強に力を入れている。
- (3) 外資系銀行に入りたい理由は、賃金が高いからである。外資系銀行の月額初任給は300US\$、これに対し民間銀行は4分の3の240US\$に過ぎない。国有銀行はさらに低い。
- (4) 勤務地は可能ならばハノイ。

4. 外国での就職について

- (1) グローバル化の進展とともに、いずれ外国で働くことが当たり前になると思う。
- (2) 外国で働くならば、アメリカがいい。最も金融機関が進んだ国だからである。中国も最近著しく発展しているので興味がある。こうした国で働き、経験を積んで、ベトナムに帰りその経験を活かしたい。
- (3) （日本はどうかとの質問に）日本は銀行の分野では有名ではない。技術は進んだ国だが、金融機関は進んでいないのではないか。

5. 将来希望・展望

- (1) 外資系の銀行に入行したとしても、3～5年で転職すると思う。
- (2) 実務経験があれば転職は容易であり、転職によって賃金が上がり、昇進できるといわれている。
- (3) 将来どのように考え方が変わるかわからないが、現時点では、安定した雇用より、新しいことに挑戦したいと考えている。

6. その他特記事項

2年前に自宅近くの幼なじみの女性と結婚した。妻は国有企業の電力グループ（会計部門）に勤めながら、大学院（夜間コース）に通っている。妻は外国で働くことに強い興味を持っている。

ハノイ 9

1. 属性

(1) 年齢・男女別	25歳、男
(2) 現住所	ハノイ

(3) 出身地	ナムディン市（ハノイの南部）
(4) 大学・学部・専攻	①ハノイ工科大学（国立）工学部（2008年6月に卒業） ②ハノイ経済大学（国立）（計量経済）
(5) 大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業予定年月	2010年6月（卒業式は9月）
(7) 言語 ①母語	ベトナム語
②英語の能力（自己評価）	
a. 会話 b. 読み書き	a. やや不足 b. 普通
③その他の言語	—
(8) その他特記事項	6月末に卒業予定だが就職先は未定

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 高校の時、物理が得意であったので、最初はハノイ工科大学工学部に入ったが、物理の学科には入れなかった。それでも工科大学に入ったのは、有名な大学であるからだ。
- (2) 工科大学を卒業したあと、計量経済を勉強したくて経済大学に入った。工科大学を卒業しているので、経済大学は2年で卒業できる。
- (3) 大学に2度入ったことについて、両親は賛成してくれた。学費はすべて親が払っている。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 卒業は確定したので、現在は就職の準備中。
- (2) 体が弱いので、比較的仕事が楽といわれる公務員になりたい。
- (3) 試験は、筆記試験（計量モデルの試験）と面接があると聞いている。公務員試験は全国の公務員が共通試験を受けるが、募集は空きポストに限られる。
- (4) 公務員の賃金は月額100US\$（180万ドン）程度で安いですが、20倍の倍率である。
- (5) 公務員試験に合格しなかったら民間企業で働くしかない。

4. 外国での就職について

- (1) 以前は外国の企業で働きたいと思ったことがある。どこの国がいいとはいえないが。
- (2) 外国には、1度、中国の「ナンニン」に行ったことがある。ベトナムと中国の国境から200kmのところにある中都市で、観光旅行である。とくに強い印象は受けなかった。

5. 将来の希望・展望

- (1) 公務員になれば、転職は考えない。
- (2) 民間企業に入った場合は、転職もあり得ると思う。

ハノイ 10

1. 属性

(1) 年齢・男女別	27歳、男
------------	-------

(2) 現住所	ハノイ
(3) 出身地	タンフオア市 (ハノイの南)
(4) 大学・学部・専攻	ハノイ経済大学 (国立) (数学・経済)
(5) 大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業予定年月	2010年6月
(7) 言語 ①母語	ベトナム語
②英語の能力(自己評価)	
a. 会話 b. 読み書き	a. 不足 b. 不足
③その他の言語	—
(8) その他特記事項	ハノイ工科大学 (数学・通信技術専攻) を2年で退学。

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 当初、ハノイ工科大学 (数学・通信技術専攻) に入学したが、2年で退学した。
- (2) 退学理由は、同大学も専攻も入学試験の成績をみて親が選んだもので、専攻分野に興味を持てなかったからである。親が工科大学を選んだ理由は、有名大学であるからであった。
- (3) 現在の経済大学は自分で選んだ。親も何とか賛成してくれた。
- (4) 学費は、父親が「国家に貢献した」(ベトナム戦争で負傷して障害者になった) ため、免除されている。しかし、ハノイでの生活費は親に払ってもらっている。
- (5) 経済大学は学生が約2万人。男が30%、女が70%といわれている。大学院生は昼間コース、夜間コースあわせて500人ほど。
- (6) 学部には、会計、財政、不動産、計画経済、投資、国際経済、経営管理などがある。
- (7) 数学・経済のクラスは54人で、男37人、女17人である。例外的に女性が少ない学科である。

3. 卒業後の進路希望

- (1) ハノイで働きたい。
- (2) 国有企業に入るか、公務員になりたい。
- (3) かつて労働・傷病兵・社会省で実習 (インターンシップ) を3カ月した経験がある。労働力人口、賃金、失業率などの統計分析のレポートづくりの作業をした。公務員になるとすれば、労働・傷病兵・社会省のような数学部門の仕事をしたいと考えている。
- (4) 国有企業や公務員は、安定した職であることが、希望する理由である。民間企業は、景気変動に雇用が左右され、安定しているとはいえない。
- (5) しかし、国有企業や公務員の試験に合格しなかった場合は、民間企業で働かざるを得ないだろう。
- (6) 民間企業ならば、発展のチャンスの多い企業が望ましい。

4. 外国での就職について

- (1) 大学に入ったばかりの頃、外国へ働きに行くことを考えたことはある。
- (2) その時は、アメリカ、フランス、日本を考えた。これらの国に留学した人を知っていたからである。
- (3) 今でも先進国には興味があるが、現実的な就職は考え難い。

ハノイ 11

1. 属性

(1) 年齢・男女別	22歳、男
(2) 現住所	ハノイ
(3) 出身地	ニンビン市 (ハノイの南)
(4) 大学・学部・専攻	ハノイ経済大学 (国立) (数学・経済)
(5) 大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業予定年月	2010年6月
(7) 言語 ①母語	ベトナム語
②英語の能力(自己評価)	
a. 会話 b. 読み書き	a. 不足 b. 不足
③その他の言語	—
(8) その他特記事項	6月末に卒業予定だが就職先は未定

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 入学試験の成績により、入学可能な大学として現在の大学を選んだ。
- (2) 本当は、財政学を専攻したかったが、入学試験の点数が少し足りなくて入れなかった。
- (3) 財政学を専攻できる他の大学はあったが、いずれも人気のない、それほど入学が難しい大学ではなかったため、入らなかった。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 卒業できることは確定している。現在は卒業証書を待っている段階。
- (2) 試験は受けていないが、幾つかの外資系企業に応募している。
- (3) いずれも銀行、証券などの金融機関である。賃金は平均して月額320US\$程度。
- (4) 試験は7～8月に行われる予定。卒業証書を提出しなければ試験は受けられない。
- (5) どこかには入れると思うが、できる限り条件の良いところに就職したい。
- (6) 条件が良ければ、ハノイにはこだわらない。
- (7) 募集情報は、インターネットを通じ自分で調べている。

4. 外国での就職について

- (1) 外国で働くことは、考えたことがない。
- (2) 企業に就職して、出張で外国に行くことは問題ない。

(3) これまでに外国に行ったことはない。

5. 将来希望・展望

(1) 基本的には、最初に入ったところで長く働くつもりである。

(2) しかし、賃金が上がらず、プロモーションのチャンスがなければ転職するだろう。

(3) また、自分の能力を企業が十分に評価してくれない場合も、転職ということになると思う。

ハノイ 12

1. 属性

(1) 年齢・男女別	23 歳、男
(2) 現住所	ハノイ
(3) 出身地	ハノイ
(4) 大学・学部・専攻	ハノイ工科大学（国立）工学部（応用数学、IT）
(5) 大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業予定年月	2010 年 6 月（すでに論文を発表し、卒業は確定）
(7) 言語 ①母語	ベトナム語
②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. 普通 b. 普通
③その他の言語	—
(8) その他特記事項	6 月末に卒業予定だが就職先は未定

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

(1) 工科大学は有名校でレベルが高いため選んだ。技術系では工科大学はベトナムで最もいい大学であるといわれている。自分の入学試験の成績は良かった。

(2) 工学部（応用数学、IT）を選んだのは、数学が好きであったから。いまでも数学はすごく面白いと思っている。興味が尽きない。

(3) クラスは 44 人、男 35 人、女 9 人である。

(4) 工科大学では、外国語学部だけは女性が多いが、他の学部は男性が多い。

(5) 講義は、午前 6 時 45 分～11 時 45 分の午前部と、12 時 15 分～17 時 20 分の午後部の 2 シフトがある。学生数は約 2 万人。

3. 卒業後の進路希望

(1) 外資系の C ソフトウェア開発会社に入りたいと思っている。ベトナムでは有名な企業で、テレビ・コマーシャルでもよくみる。

(2) 理由は、自分の学んだ専門技術が活用できるからである。

(3) C 社が大学新卒者を募集していることは、インターネットで知った。大学の同級生も知

っている。

- (4) C社は競争率も高そうだが、チャレンジする。
- (5) C社ならば、勤務地はハノイでなくとも、フエでも、ダナンでもいい。
- (6) 試験は7月中旬が予定されている。IQ試験、数学、英語、専門分野の筆記試験、面接試験がある。合格すれば、1週間後から働き始めることになる。
- (7) C社に入れなかったら、銀行の数学に関連した部門に入りたい。

4. 外国での就職について

- (1) 外国に行ったことはない。
- (2) 外国の企業に入ることを考えたことはない。
- (3) 外国に就職するなら、政治が安定した国がいい。例えば、シンガポールなど。シンガポールは、ITの世界では有名な国の1つである。
- (4) アメリカは、危険な国との印象。
- (5) 現在はベトナムでの就職だけを考えている。ベトナムはこれからもっと発展する国だと思う。

5. 将来希望・展望

希望するC社に入ることができたら、長く、少なくとも10年以上は働きたいと思う。

6. その他特記事項

- (1) 大学で入手できる企業の募集情報は、学生会の掲示板、学生会のイントラ・ウェブを通じてである。
- (2) 大学に就職担当者もいるが、きめ細かい情報は持っていない。
- (3) クラスの大部分の者は、IT関係の企業でアルバイトをし、アルバイト先の企業に入社を決めている。

ハノイ 13

1. 属性

(1)年齢・男女別	22歳、女
(2)現住所	ハノイ
(3)出身地	プトォ県ベッチー市
(4)大学・学部・専攻	ハノイ経済大学(国立)(数学・経済)
(5)大学院・研究科・専攻・課程	—
(6)卒業予定年月	2010年1月(卒業済み)
(7)言語 ①母語	ベトナム語
②英語の能力(自己評価)	
a. 会話 b. 読み書き	a. 不足 b. やや不足
③その他の言語	—

(8) その他特記事項	既卒。夏休み期間中（7～8月）に受講できる科目を多くとると早期卒業が可能。
-------------	---------------------------------------

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 経済大学に入った理由は、水準の高い大学であるから。また、経済に興味を持っていたから。
- (2) 将来の職業を考えて大学を選んだわけではない。大学に合格することだけを考えて勉強していた。
- (3) クラスは53人、男13人、女40人である。
- (4) 今年1月に卒業した。1月に卒業できたのは、多くの科目に登録して、早めに卒業に必要な科目数を確保した結果。クラスでは18人が1月に卒業、他は6月卒業である。
- (5) 科目の取り方によって、夏休みのない科目を多く履修すると、卒業時期を早めることができる。夏休みのない科目の理由の詳細は知らないが、たぶん教員の都合によると思われる。
- (6) 1月に卒業はしたが、現在も大学の寮で生活し、就職活動をしている。寮は7月まで入っていることができる。地方出身の女子学生の大半は寮で生活している。男子学生で寮に入っている者はごく少数のみ。
- (7) 経済大学は学生数1万7,000人。男女比は、男30%、女70%。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 銀行に就職したいと思っている。
- (2) できれば外資系の銀行がいいが、試験が難しいので、民間の銀行に行くことになるかもしれない。その場合、民間の銀行で経験を積み、外資系銀行に再度挑戦しようと考えている。
- (3) 銀行を希望する理由は、ベトナムでは急速に金融機関の整備が進んでおり、今後、高い賃金が得られることが期待できるからである。
- (4) 外資系は外国人の上司がいるので嫌だ、という友人が多いが、自分は気にしない。
- (5) できればハノイでの勤務が望ましい。

4. 外国での就職について

- (1) 外国に行ったことはない。
- (2) オーストラリア（キャンベラ）と日本（東京）に留学している先輩がいる。いずれも男性。現地の様子を聞いたことがある。留学したいとは思ったが、働いてみたいとは考えなかった。

5. 将来希望・展望

- (1) 結婚後も仕事を続けたいと思っている。ベトナムでは、大卒の女性はほとんど結婚後も働いている。専業主婦は、大学に行っていない人が多い。
- (2) 英語をもっと勉強しなくては、と考えている。

ハノイ 14

1. 属性

(1)年齢・男女別	22歳、女
(2)現住所	ハノイ
(3)出身地	ソンラ市（ハノイの西7時間）
(4)大学・学部・専攻	ハノイ経済大学（国立）行政学部（管理学）
(5)大学院・研究科・専攻・課程	—
(6)卒業予定年月	2010年7月
(7)言語 ①母語	ベトナム語
②英語の能力(自己評価)	
a. 会話 b. 読み書き	a. 普通 b. 不足
③その他の言語	—
(8)その他特記事項	6月末に卒業予定だが就職先は未定

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

- (1) 経済大学は志望どおりの大学。ハノイの有名大学に入りたいと考えていた。
- (2) ただし、第1志望は銀行学部で、行政学部（管理学専攻）は第2志望であった。
- (3) 理由は、銀行が発展していると聞いていたから。
- (4) 管理学を専攻して、勉強したところ、興味がわいてきた。
- (5) クラスは51人、うち男15人、女36人。
- (6) 科目では、人事・労務管理、財政管理、プロジェクト管理が役立つと思う。
- (7) 英語をもっと勉強する必要があると思っている。

3. 卒業後の進路希望

- (1) 外資系の銀行に勤めたい。
- (2) どこの国の外資系かは問わないが、条件の良いところを希望。
- (3) 募集情報は、インターネットで探している。
- (4) 大学の紹介する銀行には、好条件のところなかった。
- (5) 銀行に勤めたいと考え始めたのは、親の意見に影響された結果だと思う。
- (6) 銀行は賃金が高く、スキル・アップが期待でき、男女同一の労働条件だといわれている。
- (7) ハノイの銀行に就職できなかった場合は、ブンタオ（中部）に行き、そこの銀行に入るつもり。ブンタオの銀行は親戚の紹介で入ることが可能。ブンタオで5年ほど働き、ハノイに帰ってくることもできる。

4. 外国での就職について

- (1) 外国で働いてみたいと思う。ただし、短い期間。理由は、ベトナムに家族がおり、長く離れて暮らすことは苦痛であるから。

- (2) 具体的な国は思い浮かばない。
- (3) 留学するならば、フランスか、オーストラリアがいい。友人でこれらの国に留学している者がいる。
- (4) 外国にはこれまで行ったことがない。

5. 将来希望・展望

- (1) 結婚後も引き続き働くつもり。
- (2) 1つの銀行に長く勤めたいと思うが、好条件での転職のチャンスがあれば、転職するかもしれない。

6. その他特記事項

- (1) インターンシップで国有企業の事務作業に3カ月従事した経験がある。インターンシップは単位となる。
- (2) インターンシップを外資系企業は受け入れていない。
- (3) 出身はソンラ市だが、父親が軍人（高級仕官）で、現在は転勤しハノイで勤務している。したがって、ハノイで家族と暮らしている。

第4章 シンガポールにおける調査結果

本章では高度人材を各国から受け入れているシンガポールの調査結果を検討する。

調査対象は現在、シンガポールの企業で働いているアジア各国を出身国とする高度人材である。高度人材の定義は「少なくとも大学卒である」ことを原則として、その他の条件はシンガポールの高度外国人材の就業許可、滞在許可に関する法律の規定に従った。

シンガポールは外国人のいわゆる「一般労働者（マニユアル・ワーカー）」を100万人以上受け入れているが、法制度上は「高度人材（ホワイトカラー）」を想定した制度とは明確に区分している。外国人マニユアル・ワーカーの管理は非常に厳格であるのに対し、高度人材については積極的に受け入れる方針であり、雇用上限率や雇用税の対象外である。

詳細は調査結果のなかで述べるが、シンガポールが法律で定めている高度外国人材の実質的な定義は、日本の制度ともほぼ共通した考え方に基づいているといい。ただ、シンガポールの制度は高度外国人材の「質」と「職務」を「賃金額」で定めており、日本とはその手法が大きく異なる。

ヒヤリングでは年齢、男女別、現住所、出身国（出身地）、母国語、その他の言語などの属性、現在所属する企業、職務・職種、賃金・労働条件などを確認した上で、現在の企業に就職した経緯、とくにシンガポールで就職することにした理由、過去の職歴、将来の計画・希望を中心に話を聞いた。（質問項目は別添資料を参照のこと）

第1節 高度外国人材受入制度の概要と実態

1 高度外国人材受入制度の概要⁸

シンガポールで外国人が働くためにはつぎのいずれかの許可証を取得する必要がある。

- ① Eパス（employment pass）：月例賃金が2,500S\$（約16万3,000円）以上
- ② Sパス（S pass）：月例賃金が1,800S\$（約11万7,000円）以上
- ③ワーク・パーミット（work permit）：月例賃金が1,800S\$以下
- ④起業家パス（EntrePass）：少なくとも5万S\$（約325万円）の資本金を持つ企業をシンガポールで登録し、30%以上の株式を保有する者

Eパスは専門職（professional）や管理職に就く者、Sパスは技能労働者、ワーク・パーミットは未熟練労働者（マニユアル・ワーカー）や家事労働者（メイド）に適用される。高度外国人材は、Eパスによって雇用を許可される外国人と考えられる。ただし、Eパスは、企業内転勤者、例えば日本に本社のある企業の従業員がシンガポールの子会社に派遣された場合も適用されるが、本調査では企業内転勤者は調査対象から除外した。なお、起業家パスに関する説明はここでは省略する。

⁸ 資料出所：シンガポール労働省ホームページ <http://www.mom.gov.sg/foreign-manpower/Pages/default.aspx>

E パス、S パス保有者は、配偶者、21 歳未満の子弟、高齢の両親の滞在許可（ビザ）が認められる。

E パスは個人が申請するのではなく、採用を決めた企業が労働省に申請する。企業が採用を決めた以上、賃金額は E パス申請時には決定済みである。すなわち、高度人材であることを一義的に認めるのは企業であるといえよう。

E パスはさらにつきの 3 つのカテゴリーに細分化されている。

- ① P1：月例賃金が 7,000S\$（約 45 万 5,000 円）以上。
- ② P2：月例賃金が 3,500S\$（約 22 万 8,000 円）以上。承認された資格を所有すること。
- ③ Q1：月例賃金が 2,500S\$（約 16 万 3,000 円）以上。承認された資格を所有すること、あるいは承認された資格に代わるものとして、報酬に見合うスキルと経験年数（最低 5 年間の当該職務の経験が望ましい）を証明すること。

適用職種は、3 つのカテゴリーともに同一表現で「専門職」「管理職」（Professional, Managerial, Executive or Specialist jobs）である。だが、上記の規定のとおり、P1-E パスは月例賃金額のみが承認要件となっているのに対し、P2-E パスは月例賃金額に加えて「承認された資格を所有すること」が承認要件に加わり、さらに Q1-E パスの場合は月例賃金額に加えて「承認された資格を所有すること」あるいは「報酬に見合うスキルと経験年数を示すこと」となっている。

ここで「承認された資格を所有すること」とは、具体的にはシンガポールにおいて就こうとする職務が大学・大学院の専攻と関連するものであること、また学士号、修士号、博士号のいずれかを取得していることを意味する。しかし、「承認された資格を所有すること」についての承認基準は明示されていない。労働省の E パス取得の手引きには「承認された資格を所有すること」に関するサンプル・リストが掲載されている。同リストは世界 38 カ国の大学リストで、国の大小により大学数は異なり、1 カ国 4 ～ 60 校ほどの大学がリストアップされている。ちなみに日本の大学は 50 校が掲載され、シンガポールの大学は 4 校が掲載されている。これらの大学の選定理由はとくに示されていない。労働省の担当官に質問すると、「このリストに含まれている大学の出身者は容易に E パス申請が承認される」との答えであった。

上記のようにシンガポールで働く外国人は、専門職・管理職であるか、技能労働者であるか、あるいは一般労働者であるかを「賃金額」によって区分されている。さらに高度人材向けの E パスについても専門職・管理職の「質」を「賃金額」で区分している。企業が月額 7,000S\$以上で雇用する外国人は高度な専門性を有する者として、何らの証明証も不用で、企業が定める「賃金額」のみで専門性が計られる。言い換えれば、月額 7,000S\$以上で企業が雇用する外国人は、仮に当人が大学を卒業していなくとも、過去に職務経験がなくとも、P1-E パスの申請は承認される。

他方、P2-E パスや Q1-E パスは、賃金額以外に大卒資格や職務経験の証明を求めているが、基本は「賃金額」である。

先の労働省担当官によると、「職務経験の審査は手間取ることもあるが、通常、大学の卒業資格は、リストにある大学であれば問題はなく、賃金額さえクリアしていれば、ほぼ E パス申請は承認される」と説明していた。

不承認の場合は、ヒヤリング対象者の説明によると、その旨を知らせる 2～3 行の通知書が届くだけで、不承認理由は明らかにされない。E パス申請が不承認となれば、企業が採用を決めていても当該外国人はシンガポール滞在が許可されず、働くことはできない。

さて、上記の E パスは、企業を退職、辞職、解雇されれば、自動的に失効する。E パスが失効すれば滞在許可（ビザ）も同時に失効するので、シンガポールに留まって求職活動をすることはできない。これを解決する方法は 2 つある。

1 つは永住権（PR）の取得である。E パスで雇用されている外国人は無条件で PR を申請できる。昨年までは E パスで就職して半年を経れば、ほぼ自動的に PR 申請は承認された。PR を取得すれば離職してもシンガポールに留まって求職活動をすることができる。2010 年 7 月現在では E パスで 2 年間働いていることが PR 承認要件となっている。

つぎの項で詳しく説明するが、PR を取得すると実質的な所得増となる CPF（中央積立基金）加入や公共住宅（HDB フラット）への入居が可能となり、メリットは大きい。

高度外国人材が離職しても引き続きシンガポールに留まって求職活動ができるもう 1 つの方法として、「個人 E パス（Personalised Employment Pass）」制度が用意されている。E パスは企業が申請し、対象外国人が当該企業を離れば失効する。これに対して「個人 E パス」は外国人自身が申請する。申請条件はつぎのとおりである。

- ① P1-E パス保有者。
- ② P2-E パス保有者で、少なくとも 2 年間、シンガポールで働き、前年の年収が少なくとも 3 万 S\$（約 200 万円）である者。
- ③ Q1-E パス保有者で、少なくとも 5 年間、シンガポールで働き、前年の年収が少なくとも 3 万 S\$（約 200 万円）である者。
- ④ 外国で専門職に就いており、月額賃金が 7,000S\$（約 45 万 5,000 円）以上の者。
- ⑤ P1-E パス保有経験があり、現在外国に住んでおり、6 カ月以上失業していない者。

個人 E パスを取得すると、E パスによって雇用されている企業を失職しても、半年間はシンガポールで求職活動ができる。新しい就職先が決まっても、E パスを改めて申請する必要はない。個人 E パスは、出身国の法制度、その他の理由で PR を取得できない、あるいは PR 取得を躊躇する高度外国人材のために設けられた制度である。

PR と個人 E パスを比較すると、PR の方が CPF への加入などメリットが大きいと考えられる。このためか、ヒヤリング対象者はほとんどが PR を取得しており、個人 E パス保有者はいなかった。

2010年6月現在、約11万人のEパス所有者がいる。先に述べたようにこのなかには「企業内転勤者」が含まれている。

Eパス所有者は「専門職」や「管理職」でなければならない。シンガポールでは、ホワイトカラー（managerial or executive position）の職務にある者は、日本の労働基準法に相当する雇用法の適用除外とされている。したがって、Eパス所有者は雇用法の適用除外である。

以上みたように、シンガポールの高度外国人材受け入れ制度は、極めて緩やかなものであるといい。このことは一般労働者受け入れ制度と比較してみると一層明確になる。

シンガポールにとって一般労働者も高度人材も、ともに必要とされる重要な労働力である。しかし、一般労働者は極めて厳密に管理されている。賃金は1,800S\$以下。就業期間は2年を限度とする。家族呼び寄せは不可能。Eパス同様にワーク・パーミットは企業が申請し、就業期間が切れれば、あるいは当該労働者が離職すれば、企業の責任において直ちに帰国させなければならない。賃金の上限規制をしているため、低賃金で企業が外国人を雇用し、シンガポール人労働者の雇用を脅かさないよう「ワーク・パーミット労働者」を雇用するためには1人当たり470～160S\$の賦課金（levies）が課されている。

これに対しEパスで就業しているPR保有者は、少なくとも労働面においては、ほぼシンガポール国民（国籍保有者）と同等に扱われることになる。例えば、シンガポールの労働統計では、労働力人口は「localあるいはresident」と「外国人労働者」にブレイク・ダウンされる。ここでいう「localあるいはresident」とは、「シンガポール国民（国籍保有者）+PR保有者」を意味する。「localあるいはresident」をシンガポール国民（国籍保有者）とPR保有者に区分した統計は公表されていない。失業率も「合計（Total）」と「resident」の数値を公表している。「合計」とは「resident+外国人」を意味する。この外国人には「ワークパーミット外国人労働者」と「PR未取得のEパス保有者」が含まれている。上述したようにEパス保有者の多くはPRを取得しており、「PR未取得のEパス保有者」の絶対数が少ないことから、失業統計の「外国人」の大多数は「ワークパーミット外国人労働者」である。彼らはシンガポールで失業者となることは認められず、失業すれば出身国に直ちに帰国しなければならない。したがって、失業率は当然ながら「resident」が「合計」より高くなっている。シンガポールの失業率は過去10年以上、2%台で推移している。労働力人口300万人の3分の1に当たる100万人の「ワークパーミット外国人労働者」を厳格に管理することによって、すなわち景気変動の調整弁にすることによってこの低い失業率を維持している。

シンガポール政府は明らかに「ワークパーミット外国人労働者」の社会への統合を企図していないが、高度人材に対しては社会への統合を図っているといえよう。

この項の最後に、Eパスを得てシンガポールで就業しようと考えている外国人に対する政府の手厚いサービス、便宜を労働省担当官の説明をもとにとりまとめておく。

- ①第1に情報提供である。労働省はウェブ・サイトで、企業の最新の募集情報を提供している。更新頻度は極めて高く、賃金、労働条件を含むきめ細かな情報を掲載している。

- ②シンガポールが今後戦略的に必要とする人材を業種別、職務・職種別に分類した情報をウェブ・サイトで提供している。これの更新頻度も極めて高い。
- ③シンガポールで就業することを希望する外国人が求職活動をするために滞在する便宜として「Eパス資格証明書 (Employment Pass Eligibility Certificate)」がある。これを取得すると1年間滞在して求職活動ができる。ただし就業はできない。

2 高度外国人材に関連する制度・慣行について

ここではヒヤリング対象者の多くが共通に言及したシンガポールで高度外国人材が働くに当たって重要なシンガポールの労働慣行や社会制度について主要なものを取りまとめておく。

人材あっせん会社

調査対象者の多くが、シンガポールの人材あっせん会社を通じて就職先を探していた。この報告書では「人材あっせん会社」と意識したが、シンガポールの法規では、人材あっせんを業務とする企業は Employment Agency と呼ばれ、労働省に登録してライセンスを取得する必要がある。2010年6月現在、2,442社⁹が登録している。

各 Employment Agency は得意分野があり、例えばインドネシアのメイドを中心に扱う会社、製造業で働く外国人労働者を中心に扱う会社、ホワイトカラーの転職を中心に扱う会社などがある。日系企業を主たる顧客として業務を運営している日本から進出した会社も複数存在する。

高度外国人材を専門に扱う会社もある。その1つを訪ねて話を聞いたところ、顧客はシンガポールの企業で「求人は多数有り問題はない」が、企業の要望する高度外国人材をいかに確保するかが「他社との競合に勝つための要素である」とのことであった。この企業では、「外国の大学に在学している学生のプール」を拡大するため、奨学金の提供、大学との業務提携などを幅広く行い、各分野あわせてシンガポール、中国、インドネシア、マレーシア、ベトナム、ミャンマーなど各国の学生を常に5,000人以上プールしているという。

同社は「人材あっせん」を主要業務としているが、人事・労務関係の各種教育訓練プログラム、キャリア・アップのための学位取得プログラムなども幅広く実施している。

職務・職種

企業がホワイトカラー労働者と雇用契約を締結する場合、職務内容、職務権限は最重要項目である。このため職務内容、職務権限は各企業により厳密に定義されているが、職務の呼

⁹ 資料出所：シンガポール労働省ホームページ

<http://www.mom.gov.sg/foreign-manpower/employment-agencies/employment-agency-directory/Pages/employment-agency-directory.aspx>

称は企業により多少異なる。

基本的には、事務職の場合は、エグゼクティブ（セクレタリー）、マネジャー、ディレクターの順で昇進するが、各職務間に、例えばシニア・エグゼクティブ、アシスタント・マネジャー、シニア・マネジャー、アシスタント・ディレクターなどが介在する。

技術系の場合は、エンジニア、エンジニアリング・マネジャー、エンジニアリング・ディレクターが基本。各職務間に、シニア・エンジニアなどが介在するのは事務系と同様。このほか、職務内容によって、IT エンジニア、プロダクション・エンジニアなどの呼称となる。

賃金・労働条件など

シンガポール政府の賃金統計は、各職務別の最低額と最高額を公表している。民間の人材あっせん会社の賃金統計も基本的には政府統計と同じであるが、職務区分が詳細で、かつ各職務を経験年数別にさらに区分している。人材あっせん会社の話によると、職務別賃金は、企業規模による差はあまり大きくない。

政府の統計には業種別の賃金統計もあるが、ブルーカラーとホワイトカラーの賃金格差が大きく、業種別統計は両者を区分していないため、人材あっせん会社によると、ホワイトカラーの賃金資料としては用いないという。

ヒヤリング調査では、時間節約のために、調査対象者の属性に関して「質問用紙」を準備し、調査対象者に直接記入してもらった。この「質問用紙」に「賃金・労働条件など」の欄を設け、月例賃金額の記入を求めたが、あらかじめ記入されたのは1例にとどまる。これについてヒヤリングのなかで質したが明確な回答は少なく、質問者が「これくらいか」と数字を例示して確認したにとどまる。したがって、本章第3節の「ヒヤリング記録」で記した「賃金・労働条件など」で示した金額は、あくまで推定値である。なお、労働条件はヒヤリングのなかでとくに言及のあった事項である。

CPF（中央積立基金）¹⁰

調査対象者の大半が CPF（中央積立基金）加入に対するメリットについて言及していた。すなわち、CPF の加入資格は、シンガポール国民（国籍保有者）と永住権（PR）保有者に限られる。E パスで働いている外国人就業者でも PR 非保有者は CPF に加入できない。CPF に加入すれば、以下で説明するように使用者の拠出金の分だけ実質的に「賃金が上がる」と考えられているようだ。

CPF は政府が管理する基金に従業員名の個人口座を開き、ここに労使が月例賃金の一定割合の拠出金を振り込む。拠出金は 2010 年 9 月から労働者 20%、使用者 15% の計 35% となっている。使用者側の拠出金は景気変動によりたびたび改定され、2010 年 8 月までは 14.5% となっていた。

CPF は実質的には公的年金制度に当たり、労働者は CPF の積立金を退職時に一時金とし

¹⁰ 資料出所：中央積立基金ホームページ <http://mycpf.cpf.gov.sg/Members/home.htm>

て引き出すか、年金方式で毎月一定額を引き出すかが選択できる。また、住宅購入資金として口座残額の 20%を限度に退職前に引き出すことも可能である。さらに健康保険の機能も担っており、拠出金の一定割合は「メディセイブ・アカウント」に貯蓄される。

政府はこの基金を「財政投融资」財源として活用し、公共住宅（HDB 住宅）建設などに充てている。シンガポールの社会保障制度の中核がこの CPF であるといっている。

公共住宅¹¹

公共住宅は、HDB（Houseing Development Board）住宅、HDB フラットと呼称される高層の集合住宅である。シンガポール国民（国籍保有者）、永住権保有者の 80%は公共住宅に居住している。通常、1 棟が単独で建設されていることは少なく、大半は「団地」形式で、団地は 10～20 棟で構成されている。この公共住宅は賃貸が多いが、購入もできる。標準的な HDB フラットは 100 m²を超えかなり広い。ヒヤリング対象者の住む HDB フラットを 1 件見せてもらったが、親子 4 人とメイド 1 人の住居としては十分な広さがあった。最寄りの地下鉄から 5 分ほどの距離で、共働きの 2 人とも職場まで地下鉄を利用し 30 分程度の通勤時間だという。「団地」の中は小規模の公園があり、近くに飲食店街もあった。シンガポールの住居としては平均的なものとの説明であった。当のヒヤリング対象者は「住環境は満足している」とコメントしていた。

大連でヒヤリング調査をした際に、大連理工大学機械学部の副学長から「中国人が日本に行って企業に勤めた際に、大きな問題の 1 つは住宅である」との説明があったが、シンガポールにおいては、外国人がシンガポールに来て、シンガポール企業に勤める際に、住宅問題は公共住宅によって解消されているのではないかと、この印象を持った。

第 2 節 調査結果

1 調査方法について

シンガポールにおけるヒヤリング調査は 7 月上旬に実施した。調査対象は、シンガポールにある企業で働くアジア各国出身の高度外国人材である。ここにおける高度人材の定義は、すでに第 1 節で述べたように、シンガポールの高度外国人材受け入れ制度に従って以下のとおりとした。

- ①少なくとも大学卒であること。
- ②シンガポールの雇用法の適用除外とされているホワイトカラー（managerial or executive position）の職務にある者。
- ③エンプロイメント・パス（E パス）によって雇用を許可されている外国人。
- ④ただし E パスは、企業内転勤者、例えば日本に本社のある企業の従業員がシンガポールの子会社に派遣された場合も適用されるが、こうした企業内転勤者は調査

¹¹ 資料出所：住宅開発委員会（HDB）ホームページ <http://www.hdb.gov.sg/>

対象から除外した。

調査は原則、1人1時間程度の個別ヒヤリングとし、英語で直接実施した。

表 4-2-1 シンガポールの調査対象者

(人)

出身国	合計	男	女	大学卒	大学院修了
マレーシア	7	4	3	6	1
インドネシア	5	1	4	4	1
フィリピン	2	—	2	1	1
ニュージーランド	1	—	1	1	—
合計	15	5	10	12	3

2 調査結果

(1) 調査対象者の属性

ヒヤリング調査対象者は表 4-2-1 に示したとおり 15 人で、出身国別にみると、マレーシア 7 人、インドネシア 5 人、フィリピン 2 人、ニュージーランド 1 人である。マレーシア出身者が多いことは、ヒヤリングを企業関係者に依頼する前から予想していた。シンガポールはマレー半島の先端の小島に位置する、1975 年にマレーシアから分離独立した国である。地理的、歴史的に、マレーシアの一部と考えられなくもない。多くのシンガポール人は中国系で、祖先の多くはイギリス植民地時代の 18 世紀にマレーシアのマラッカから移住してきたといわれている。農業はほとんどないに等しい。このため、食料品の多くを輸入しているが、輸入元はマレーシア、タイである。タイからマレー半島を縦断してトラック輸送で野菜類を輸入している。この点でもマレーシアと緊密な関係にある。飲料水も隣接するマレーシアのジョホール州から購入している。1990 年にマレーシアの首都クアラルンプールに株式市場が開設されるまで、シンガポールの株式市場がマレーシアの株式市場の機能を担っていた。現在でも両国の経済関係は極めて緊密である。

こうした関係からシンガポールはマレーシアを「伝統国」と位置づけ、他の国との関係と比較して特別な配慮を様々な側面で払っている。例をあげれば、出入国に際し、マレーシアパスポート保持者には、パスポートあるいは ID カードの提示で許可している。この便宜により、シンガポールとジョホールを結ぶ約 800m のジョホール水道に架けられた橋（コーズウェイ）を渡って、ジョホールからシンガポールに日々通勤する労働者が数万人存在する。今回のヒヤリングでも対象者の 1 人は、ジョホールから片道 2 時間かけて通勤していた。

インドネシアはシンガポールにとって隣接する大国で、独立以来、多大な外交的配慮を払ってきた国である。

調査対象者の男女比は、男 5 人、女 10 人で、女性に偏った嫌いはある。ただ、先に触れた人材あっせん会社の説明によると、シンガポールで働いている高度外国人材の男女比は「女性の方が多いいのではないかとの印象を持っている」とのことで、調査対象者に女性が多

いことで調査結果に大きなバイアスは必ずしもかからないと考えている。女性が多い理由の1つは、シンガポール人男性と結婚した外国人女性が働いていることによる。シンガポールで知り合って結婚したのか、外国で知り合ったのか、この種の統計がないので不明だが。ただ、ヒヤリングで確認したところでは、シンガポール人と結婚した女性は結婚後、永住権（PR）は取得するが、国籍を取得することはまれであるという。調査対象者15人のうち既婚者は7人、独身者7人、「ノーコメント」1人で、既婚者と独身者は同数であったが、結婚事情については、調査趣旨から少し距離があり、プライバシーに関わることなので、あまり多くの話は聞けなかった。

学歴は、大卒者が12人と大多数で、大学院修了者は3人。大学院修了者はいずれも修士課程で、博士課程修了者はいなかった。出身大学、大学院の所在国は、出身国11人、シンガポール1人、日本2人、イギリス1人である。日本の大学、大学院所在地は2人とも名古屋である。出身大学、大学院に日本が含まれ、ともに所在地が名古屋であるのは全くの偶然であり、意図したものではない。

言語について、母語、英語能力、その他の言語を聞いた。母語を聞いた意図は、シンガポールに多い中国系の東南アジア諸国出身者を確認するためである。

ここで「中国系」と呼称するのは文化人類学でエスニック・グループの1類型として用いる用語である。かつては「華僑」と呼称されることもあったが、現在ではほとんど使われない。シンガポール政府もかつては国民の「民族（race）」別割合を公表していたが、現在ではこれを「エスニック・グループ」と表現している。「中国系」の英語表記は Chinese であるが、これを「中国人」と訳すと誤解を与えかねないので避けることにした。シンガポールにおける漢字表記は「華人」であるが、これも避けることにする。

調査の企画段階では対象者に直接、「エスニック・グループ」について聞くことをためらい、母語を聞くことで代替したが、結果的には「自分はインドネシア国籍の中国人（Chinese）である」と自ら答えており、「エスニック・グループ」を直接聞くことに障害はなかったと思われる。

調査結果からこの「エスニック・グループ」属性をみると、中国系は11人である。出身国別内訳は、マレーシアが7人中6人、インドネシアが5人中4人、ニュージーランド1人である。先に紹介した人材あっせん会社は、「シンガポールで働く外国人の大多数は、アセアン諸国の中国系である」と説明していた。

ヒヤリングでは、中国語の能力に出身国によって明らかに差異が観察できた。マレーシア出身者は、母語ではなく、初等教育を中国語（北京語）で受けており、会話だけでなく、漢字もほぼ完璧に修得している。これに対しインドネシア出身者は、家庭内の、あるいは独習による中国語（広東語などの方言を含む）修得が中心で、自ら「中国語は理解できるが、完璧ではない」と話す調査対象者がいた。つぎの「現在の所属企業」の項でもう1度触れるが、シンガポールの多くの企業では、仕事上の言語は英語であるが、会社内においての日常会話

は中国語である場合が多い。日常生活においては、中国語が中心で、英語との「ミックス」状態であるといわれる。政府の「職務遂行上の言語（公用語）」は英語で、公式書類はすべて英語表記である。しかし、官庁内の日常会話は中国語が中心だ。この意味で、中国語を解するか否かは、シンガポールで働く場合、極めて大きな意味を持っているといえよう。

ただし、中国語と一口に言っても、シンガポールでは「北京語」が中心ではなく、広東語、福建語、客家語などの「方言」が多く話され、実際の言語状況は相当に複雑である。さらにシンガポールの国語はマレー語であり、言語事情を一層複雑にしている。

英語はこの複雑な言語環境のなかで、リンガフランカとして、共通語として使用されているようだ。このため調査対象者は、英語の能力に対する質問に対し、例外なく「完璧」「ほぼ完璧」と答えている。英語ができることが、シンガポールで働く上での最低条件であるといつて間違いなさそうだ。

調査対象 15 人の年齢は、28 ～ 38 歳である。企業の中堅どころといった年齢であろう。

ヒヤリングで、女性が年齢を「意識的に誤って」答えることがあった。大学卒業年や勤続年数は正確に答えていたので、「推定」実年齢が分かる。なかには、会社のセキュリティ上の身分証明書（企業内の ID カード）を首にかけており、これの記載と回答年齢が食い違うこともあった。当初はそれを指摘しなかったが、何人目かに「意識的に誤って」答えた理由を聞くと、「プライバシーだから普通のことね」との回答であった。したがって、この後に掲げる「ヒヤリング記録」に記した年齢は、本人の答えと、卒業年次や勤続年数とのつじつまが合わない場合は、原則として調査実施者の「推定年齢」とした。

（２）現在の所属企業

現在の所属企業については、業種、従業員規模、および個人に関することとして職務・職種、賃金・労働条件など、企業で使う言語、企業に対する満足度、現在の職務に対する満足度を聞いた。このうち、企業に対する満足度、現在の職務に対する満足度については「満足」「ほぼ満足」「可もなく不可もなし」「やや不満」「不満」の 5 段階の指標で答えてもらい、その理由を質問した。

所属企業の業種は、製造業 6 人、ロジスティック（運輸サービス）2 人（同一企業）、コンピュータ・ソフトウェア開発 2 人（同一企業）、IT 関連 3 人、金融・保険業 2 人である。従業員規模は 100 ～ 3,000 人。企業は合計 13 社であるが、多国籍企業か地元企業かの区分では、多国籍企業が 12 社、地元企業 1 社である。ただし、地元企業も資本構成をみると、外国資本が 30%程入っていた。シンガポール労働省で聞いた話では、シンガポールには現在、約 7,000 社の多国籍企業が登録されており、従業員数が 100 人以下の企業もあるが、シンガポールではそれらを含め多国籍企業はすべて大企業と考えているという。これに対し、地元企業は中小企業がほとんどで、例外は政府関連企業（かつての国営企業が民営化された企業）であるとの説明であった。また、高度外国人材の多くは多国籍企業で働いているとの

ことであった。

ヒヤリング対象者の職務・職種は、大雑把に分類して各種の「エンジニア」が7人、総務、人事、財務、顧客サービスなどの「管理系の職種」が8人であった。「エンジニア」「管理系の職種」とともにマネジャー、アシスタント・マネジャーなどの管理職が合わせて5人いた。

15人の調査対象者全員が、大学・大学院における専攻と現在の職種はほぼリンクしていた。本章のシンガポールの「高度人材受入制度の概要と実態」で説明したように、外国人がシンガポールで職を得るためには「専門性」が極めて重要なファクターで、専門性を証明するために「大学・大学院の専攻」「過去の職歴（主として職務）」に関する書類の提出がEパス取得の必須条件となっていることから、今回の調査結果は、当然の帰結であるといえよう。

賃金・労働条件では、賃金額を中心に聞いた。

シンガポール政府の賃金統計では、職務別賃金の最低額と最高額を公表している。民間の人材あっせん会社の賃金統計も基本的には政府統計と同じであるが、職務区分が詳細で、かつ各職務を経験年数別にさらに区分している。人材あっせん会社の話によると、職務別賃金は、企業規模による差はあまり大きくない。

政府の統計には業種別の賃金統計もあるが、ブルーカラーとホワイトカラーの賃金格差が大きく、業種別統計は両者を区分していないため、人材あっせん会社によると、ホワイトカラーの賃金資料としては用いないという。

ヒヤリング調査では、時間節約のために、調査対象者の属性に関して「質問用紙」を準備し、調査対象者に直接記入してもらった。この「質問用紙」に「賃金・労働条件など」の欄を設け、月例賃金額の記入を求めたが、あらかじめ記入されたのは2例にとどまる。これについてヒヤリングのなかで質したが明確な回答は少なく、質問者が「これくらいか」と数字を例示して確認した。したがって、本節の最後に掲げた「ヒヤリング記録」の「賃金・労働条件など」に示した金額は、あくまで推定値である。なお、労働条件はヒヤリングのなかでとくに言及のあった事項である。

調査対象者の推定月額賃金額は3,000～6,000\$である。2010年7月現在の為替レートで計算してみると、約20～40万円となる。日本の賃金との比較は難しいが、調査対象者の1人は「日本の賃金水準より多少低い（10%程度）」と話していた。

企業で使う言語は、全員が「英語」と答えた。企業の公式の会議、打ち合わせはほとんど英語で行われ、書類もすべて英語で作成されているようだ。同僚などとの日常会話は、「英語」と「各種中国語」が用いられ、通常両言語の「ミックス」であるとの回答が多かった。しかしながら、属性の項で述べたように、「中国語を解さない」者は、日常会話を含めて英語のみで仕事をしているようである。ヒヤリング後の雑談では、昼食などはどうしても「中国語を話す者と話さない者」に別れがちだとの話を聞いた。ヒヤリング対象者では、マレーシア出身者1人、インドネシア出身者1人、フィリピン出身者2人が中国語を解さない者で

あった。

調査対象者の1人に、インド系マレーシア出身者がいた。彼は「宗教的な理由で、昼食は1人で食べることが多い」と話していた。シンガポールの企業では、社内にキャンティーンなどの設備がある場合は、必ず「各エスニック・グループの宗教上の理由を配慮したメニュー構成になっている」という。社内食堂がない場合も、会社近辺に「各エスニック・グループの宗教上の理由」を充足できる飲食店が存在している。シンガポールでは、食事に関する宗教上の慣習の違いを起因とする問題はないように思われた。

企業に対する満足度、現在の職務に対する満足度は、上記したように、5段階の指標で答えてもらった。その結果を表4-2-2にまとめた。

表 4-2-2 企業と職務に対する満足度

(人)

	企業に対する満足度	現在の職務に対する満足度
満 足	—	1
ほぼ満足	9	10
可もなく不可もなし	5	4
やや不満	—	—
不 満	1	—
	15	15

上記の表をみると、企業に対する満足度では「ほぼ満足」が多く、「可もなく不可もなし」が3分の1、「不満」も1人いる。この理由は、ほとんどが「現在の賃金に対する満足度」と解釈してよさそうであった。これに対して、職務に対する満足度は相対的に高い。この理由は、就職に際して契約した職務どおりの仕事をしている結果であると考えられる。換言すると、意に反した職務・職種に就いていないとっていいようだ。

(3) 現在の所属企業に就職した経緯

現在の企業に就職した経緯は、予想以上に実に多様であった。サンプル・サイズが極小なので類型化は難しいが、あえて各事例の共通点を探ることにする。

まず15人の調査対象者のなかから、全体的にみて多くの共通点を有していると思われるケースを4つ取り上げ、これを基準に他の調査対象者を比較してみる。

第1のケースには、勤続年数の比較的短い4人のなかから1人を選んだ。選んだのは、中国系マレーシア人（男性）である。彼は、英語、中国語を解する。彼の現在の所属企業に就職した経緯を簡単にみておく。日本の大学院を終了して「出身地のマレーシア、ジョホール州に近いこと」「賃金がマレーシアより高いこと」を理由にシンガポールの製造業の企業に就職、「大学院における専攻を活かした」エンジニアとして3年間勤めている。今のところ「仕事に大きな不満はなく」、今後も現在の会社に長く勤めるつもりだと話している。

このケースは、シンガポールで働く高度外国人材の典型例の1つであると考えられる。すなわち、①大学・大学院を卒業して最初の就職地としてシンガポールを選択した、②中国系マレーシア人で英語、中国語を解する、③シンガポールでの就職理由に「専門を活かすこと」「賃金が高いこと」をあげている、ことである。

第2のケースは、インドネシア人の男性で、彼も中国系である。ジャカルタで就職し、結婚して子供ができ、さらに賃金の高い会社への転職を考えたが、インドネシアでは希望する条件の会社が見つかることができなかった。そこで「自分の専門を活かし」「賃金の高い」企業を求めてシンガポールへ来る決断をした。シンガポールには、多くのインドネシア人が暮らしており、英語が得意で、中国語もできるので「大きな不安はなかった」。希望どおりの企業は直ぐに見つかり、就職した。シンガポールで働くことに「妻は賛成した」。

このケースと第1のケースの共通点は、「中国系で英語、中国語を解する」「シンガポールでの就職理由に“専門を活かすこと”“賃金が高いこと”をあげている」ことである。加えて、シンガポールには「多くのインドネシア人が暮らして」おり、生活する上での不安が少ないことが理由としてあげられている。

第3のケースは、フィリピン人の女性である。フィリピンの大学卒業後、多国籍企業のマニラの関連会社に就職した。ここでの実績が認められて、シンガポールの関連会社への転職を勧められ、これに応じた。企業内転勤ではなく、転職である。当人は「スカウトされた」と話している。転職して昇進し、賃金も上がった。転職理由は、「自分の職務における成果が認められた」「昇進、賃金が高くなること」「シンガポールにはフィリピン人の友人が何人か住んでおり、兄弟の1人も働いている」ことである。

このケースと第1、第2のケースの共通点は、シンガポールで「専門を活かす」仕事に就き、昇格して「賃金が高くなった」ことである。第3のケースと第2のケースの共通点は、シンガポールに出身国人、友人などが多く住んでおり外国で暮らす不安を和らげている点である。

第4のケースは、今回の調査対象者のなかで最も長い13年間、シンガポールで勤めているケース（女性）である。彼女は中国系のニュージーランド出身者で、英語、中国語を解する。大学卒業後、「経営学という専攻を活かす職がニュージーランドでみつからず」、知人の紹介でシンガポールの企業に就職した。その後、シンガポール人と結婚し、シンガポールで引き続き勤務している。

彼女と、先のケースの共通点は、「英語、中国語を解する」「専攻を活かす職」を求めたことである。15人の調査対象者のうち既婚者は7人であるが、シンガポール人と結婚したのは彼女1人であった。結婚して、子供をもうけ、長く働くようになったようだ。ただ、彼女は「賃金が高い」ことをシンガポールで就職した理由に上げていない。ニュージーランドでは希望する就職先がなかったことを強調していた。

さて、上記の4ケースから共通する点を見るとつぎのようになる。

①シンガポールで働くことにした理由

- ・言葉の問題がないこと（最低限、英語ができること。中国語を解すればさらに有利）
- ・出身国の人、友人が多く住んでおり外国生活の不安がないこと。

②現在所属する企業に就職した理由

- ・専門分野が活かせること。
- ・言葉の問題がないこと（最低限、英語ができること）。
- ・賃金が出身国より高いこと。

①と②の条件は必ずしも分けるべきではなく、不離一体の条件かもしれない。いずれにせよ、シンガポールで就職した動機は、上記の条件の幾つかを満たした結果であろう。このなかで最低限の条件は、「英語」と「専門」であろう。英語ができなければ、仕事をする事は不可能である。専門性が認められなければ、E パスを取得することができず、就職はできない。

「賃金」については、E パス承認要件が先にみたように「2,500S\$以上の賃金」となっており、少なくとも 2,500S\$以上の賃金が前提となっている。この金額が、出身国の賃金と比較して高いものであれば、シンガポールで働く大きな動機となり得る。調査対象者の出身国の平均的な賃金は、ニュージーランドを含めて、シンガポールよりかなり低いといっている。

中国語を解することは、「属性」の項ですでにみたように、これも大きなインセンティブの1つである。

つぎに、過去の職歴の有無について検討する。大学を卒業、大学院を修了して直接、現在の会社に入ったのは 15 人中 5 人である。当然ながらこの 5 人には過去の職歴はない。5 人の勤続年数をみると、3 年、2 年、4 年、2 年、13 年である。勤続年数の比較的短い 4 人の年齢は低く、13 年勤続している調査対象者は、「職歴」を持つ者を含む全調査対象者のなかで最も勤続年数が長かった。

一方、転職経験のある 10 人をさらに細かく分類するとつぎのようになる。

- ①出身国で大学・大学院を卒業、出身国で就職し、その後、シンガポールで就職したケース：3 人
- ②出身国で大学・大学院を卒業、出身国で就職し、その後、出身国で転職、その後、シンガポールで就職したケース：3 人
- ③出身国で大学・大学院を卒業、出身国で就職し、その後、出身国で転職、その後、シンガポールで就職、その後、シンガポールで転職したケース：1 人
- ④出身国で大学・大学院を卒業、その後、シンガポールで就職、その後、シンガポールで転職したケース：1 人
- ⑤シンガポールの大学を卒業、シンガポールで就職、その後、シンガポールの他の企業に転職したケース：1 人

⑥シンガポール以外の外国の大学を卒業、出身国・大学所在国・シンガポール以外の外国で就職し、その後、シンガポールで就職したケース：1人

わずか10人で6パターンが見出された。多様という他ない。上記を4つのパターンに括ってみると、つぎのようになる。

①出身国・外国で就職、シンガポール企業へ転職：4人

②出身国でのみ転職を経験：3人

③シンガポールでのみ転職を経験：2人

④出身国、シンガポール双方で転職を経験：1人

つぎに転職回数をみると、1回が6人、2回1人、3回2人、4回1人である。このうちシンガポール国内での転職人数、回数をみると、2人が各1回である。調査対象者のシンガポールにおける滞在年数は1～13年で、転職者の滞在年数は1人が12年、もう1人は6年である。

上述した調査対象者の「転職経験」をみる限りでは、シンガポールにおける転職はそれほど多くないといえるのではないか。

さて、今回の調査対象者はシンガポールにおける勤務年数（滞在年数）は1～13年である。ここで第1節でみた「シンガポールで働く際に有用である」といわれる永住権（PR）の保有者を確認しておく。調査対象者15人のうち13人がPRを保有していた。調査対象者は口を揃えてPR入手の利点を「転職が可能になる」「雇用が安定する」「CPFに加入できる」「公共住宅（HDBフラット）への入居が容易になる」をあげていた。また「友人が皆取得しているから」との理由をあげる者もいた。こうした点からみて、Eパスで働く高度外国人材にとって、ある程度の期間働けば、PRを取得することはごく当たり前の行動であるといえよう。シンガポール政府は、Eパス取得者が長くシンガポールで働き、経済活動に貢献することを期待しており、その1つの手段としてPR取得を奨励しているが、ここでみた調査対象者の行動からみる限り、政府の意図は達成されているようだ。

PRを保有していない2人のうち1人は、マレーシアのジョホール・バルから通勤している者で、もう1人は「今年2月に申請したが、承認されなかった」という。承認されなかった当人は、落胆している様子はなく、「理由は知らされなかったが、恐らく、今年からシンガポールで2年以上勤務しないと承認しない方針に変わったと聞いているので、仕方がない」と話していた。

イミグレーションの資料をみる限りでは、PR取得の承認要件として今年から「Eパスで2年働いたこと」は確認できなかった。現地紙の報道では、「シンガポール人の雇用を優先する」政策が2008年のリーマン・ショック後の景気後退を理由に打ち出されており、PR承認要件が幾分厳しくなったのはその一環であると考えられる。

この項の最後に就職情報の入手方法についてみておく。ここではシンガポール国内で転職して現在の所属企業に勤めている者については、初めてシンガポールで就職した際の情報入

手方法とした。

- シンガポールで企業募集をみて：4人
- 海外から人材あっせん会社に登録して情報入手：3人
- インターネットで情報入手：3人
- 出身国で勤めていた企業のシンガポールの関連会社にスカウトされた：2人
- 出身国の人材あっせん会社に登録して情報入手：1人
- 現在の企業に勤めていた友人の紹介：1人
- シンガポールに住んでいる親戚の紹介：1人

上記で分かるように、就職情報の入手方法は多様である。「シンガポールで企業募集をみて」が最も多いが、これには新聞、雑誌の広告が含まれる。人材あっせん会社がシンガポールと出身国とあわせて4人である。人材あっせん会社の説明によると、現在ではインターネットの募集広告でまず情報を得て、人材あっせん会社に登録する者が多いという。いずれにせよ、募集情報を入手するのに困ったと答えた調査対象者は1人もいなかった。このことから情報入手は極めて容易であることが窺われる。

(4) 将来の計画

将来の計画については、主として現在所属している企業に今後も長く勤めるつもりか、あるいは転職を考えているのか、に焦点を当て質問した。15人の回答を類型化するとつぎのようになる。

- 「現在の企業に長く勤めるつもり」3人
- 「当面は勤めるつもり」7人
- 「転職するつもり」2人
- 「その他」3人
 - ・「留学を計画」
 - ・「結婚後、10年くらい勤めた後、出身国に帰国」
 - ・「昇進できなければ、転職」

「現在の企業に長く勤めるつもり」と答えた3人は、いずれも「属性」の項でみた現在所属している企業に対する満足度が高く、「企業に将来性があると思うから」「現在の生活が安定しているから転職など考えない」「できる限り転職などのリスクを回避して安定した仕事をしていきたい」などの理由で、今後も長く勤めると話している。この3人のうち2人は現在所属する企業が初めて就職した企業で、転職の経験はない。

「当面は勤めるつもり」と答えた6人は、いずれは転職するかもしれないとの含みのある回答であった。

転職の可能性をほのめかした回答の例をあげると「もっといい職があるのではないかと考えているが、先頃始まった新しいプロジェクトが非常に興味深く、自分のスキルを向上させ

と思うので、これが終了するまでは今の仕事を続ける」「好条件で、良い機会があれば、どこの国の、どこの企業に移ってもよいと考えている。日本企業でも、東京でも、好条件ならば移る。ただし自分の専門を活かせる職であればである」「あと2～3年働いて、オーストラリアで職を見つけたいと思っている。理由は、オーストラリアが最も近い英語圏の国であること。先進国で自分に適した仕事が見つかると思う」などがある。これらの回答をした3人の共通点は、女性で、比較的若く、独身であることだ。

「転職するつもり」と明言した2人の理由はそれぞれ異なっている。1人は「今の会社に満足していない。もう4年働いたので、もっと違った仕事を経験したいと思っている」と回答した。

別の1人の理由は深刻で、つぎのように転職理由を説明していた。

「現在の企業に移って、最初の1年間は順調であった。だが、2年目に、現在のマネジャーが入社してきて不満が多くなった。自分には2人の上司がいる。1人はディレクターで、もう1人はマネジャーである。ディレクターはアメリカ人で、自分を採用してくれた人である。彼の下では仕事は快適に進められる。仕事外でのつきあいは、非常にフランクである。しかし、マネジャーはまったく異なる。マネジャーは45歳で、女性、シンガポール人である。彼女は、以前勤めていた企業から、何人かのスタッフをつれてきた。重要な仕事は、彼女とそれらのスタッフで進めている。つれてきたスタッフはいずれもシンガポール人である。自分には重要な仕事は任せてくれない。彼女は非常に有能である。自分より有能であると思う。だが、彼女が連れてきたスタッフと比べると、自分は同じ程度か、より有能であると考えている。数カ月のうちに、現在のディレクターが外国に転勤する。そうなれば自分は現在の会社を辞める。つぎの勤め先の情報を集めている最中である。シンガポールの企業の情報を集めている」。

このように深刻な事情ではあるが、この調査対象者はこれまでに何度か転職を経験しており、「悲観はしていない。経済の状況にもよるが、新しい職場はすぐにみつかると思う。現在より賃金がかかることはない。経験を積んだので賃金は上がると考えている」と極めて楽観的であった。どの程度“本音”であるかは不明であるが。

「その他」の3人の回答は、1人はこれまでの勤務で預金した資金を使つての「留学を計画」していた。その理由は「会社を辞める理由は、2年間同じ仕事をしてきて、最初は興味深かったが、少し飽きてきたこと。まだ若いので新しいことにチャレンジしたい」とのことであった。他の1人は先にも紹介したマレーシアのジョホールから通勤している女性で、「もうすぐ結婚する予定だが、結婚後も仕事は続けるつもりである。結婚相手はジョホール・バルで働いている。子供ができて、メイドを雇えば問題はない。10年後くらいには、ジョホールに帰って仕事をしていると思う」と将来計画を話してくれた。

残る1人は、保険業の企業に勤めるインド系マレーシア出身者で「現在の会社に5年勤め、アシスタント・マネジャーとなった。マネジャーになるチャンスはまだない。向こう2～3

年でマネジャーに昇進できなければ転職するだろう。転職先は、シンガポールの金融機関を第1に考える」と、昇進できなければ転職するつもりであるという。この考え方が、転職理由としてはシンガポールでは最も一般的なものであると当人が語っていた。

以上をまとめると、職場の上司への不満、昇進、賃金などを理由に「転職」することは、シンガポールで働く高度外国人材にとっては特別なことではないようだ。この背景には、シンガポールの高度人材の労働市場がこうした慣行になっているからであろう。すなわち、高度外国人材のみならず、シンガポール人高度人材にとっても「転職」は特別なことではない。

ただし、こうした考え方が一般的であるからといって、実際には「転職」がそれほど多いわけではないようだ。シンガポール使用者連盟（SNEF）を訪ねた際にこの点を質問すると、「実際に企業を渡り歩いているのは“役員層”であって、ホワイトカラー層の転職は10%程度である」との説明であった。

（5）その他特記事項

ここでは調査結果から2点を取りあげる。1つは日本の大学・大学院卒業後にシンガポールで就職した事例、もう1つはシンガポールで長期にわたって働く際の「住宅」「子育て」に関連する事例である。

先にも触れたが、調査対象者に日本の大学、大学院を卒業した者が2人いた。彼らがなぜ、日本ではなくシンガポール企業を就職先に選んだのか。今回の調査の趣旨に深く関係するケースでもあり、詳しく話を聞いた。

1人は、大学院で土木を専攻した調査対象者（男）である。彼は「大学院で学んでいた頃は、日本で就職することを考えていた」。しかし、「卒業間近になって、両親、友人、留学経験のある先輩などに相談した後、マレーシアか、シンガポールで就職しようと決めた」。日本での就職を中止し、シンガポールで就職することにした理由を2つあげた。1つは「日本で就職したとしても日本に長く住むわけではなく、いずれマレーシアに帰ることになる。それならば初めからマレーシアか、故郷に近いシンガポールで就職しようと考えた」ことで、2つ目の理由は「日本とマレーシア、シンガポールの企業の“文化”の違いがある。日本で就職した留学生の話では、日本企業には“残業文化”があるという。終業時間になって、自分の仕事は終わっていても、上司が残っていると帰れないと聞いていた。マレーシアとシンガポールは同じ文化で、仕事と家庭の両方を大切にしている。日本の企業文化になじめないと考えた」結果である。

さらに彼の場合、マレーシアでの就職については「クアラルンプールならば好条件の企業があった」が、生まれがシンガポールに近いジョホール州であることから、少しでも故郷に近いシンガポールで就職先を探した。「クアラルンプールの企業より、シンガポールの企業の方が賃金が高い」こともシンガポールを選んだ理由の1つである。こうした考え方は、中国系マレーシア人にとっては特別なものではないようだ。

もう1人のケースは、日本の大学で経営学部を卒業した調査対象者（女）である。彼女は日本企業への就職を希望し、実際に入社試験を受けた。「大手電機メーカーに応募し、試験を受けた。面接では、同社のマレーシア、シンガポールの関連企業の人事担当者が参加しており、マレーシア、シンガポールの関連企業の双方からオファーがあった」。だが、入社はしなかった。その理由を3つあげた。1つは「賃金が期待したより低く」、2つ目は「職務に関する説明が明確でなかった」、3つ目は「日本で働こうと考えていたのに、海外の関連会社からのオファーというのも違和感があった」からである。賃金が期待したより低く、専門を活かした仕事に就くことが不明で、かつ勤務地が日本国内でないことが、彼女が日本企業への就職をとりやめた理由である。

第2章の大連における調査結果のなかで紹介したが、大連理工大学機械学部の副学部長が、中国人が日本で働く場合、住宅の問題と、結婚した後の子育ての問題が大きなネックとなって「長く日本で働くことができない」と指摘していた。この点について、シンガポールで働く高度外国人材の場合、一定期間勤めて永住権（PR）を取得すれば、安価で快適な公共住宅（HDB フラット）に入居することが容易になる。子育てにはメイド（外国人）を雇っている。

第3節 ヒヤリング記録

シンガポール 1

1. 属性

(1) 年齢・男女別（独身・既婚）	31歳、男（既婚）
(2) 現住所	シンガポール
(3) 出身国（出身地）	マレーシア（ジョホール州クルアン）
(4) 出身大学・学部・専攻	名古屋工業大学工学部土木学科
(5) 出身大学院・研究科・専攻・課程	名古屋工業大学大学院、土木専攻、修士課程
(6) 卒業年月	2007年3月
(7) 言語 ①母語	中国語（北京語）
②英語の能力（自己評価）	a. ほぼ完璧 b. ほぼ完璧
a. 会話 b. 読み書き	
③その他の言語	マレー語、広東語、日本語

2. 現在の所属企業

(1) 業種

製造業（建設資材の製造、販売、メンテナンス・サービス）

(2) 企業規模

約100人（グループ企業全体で1,000人）

(3) 職務・職種

エンジニア。グループ企業が製造した建設資材の設置、メンテナンス

(4) 賃金・労働条件など

①月例賃金は約 3,200S\$。シンガポールでは、職種ごとの賃金水準を示す統計が多数あるが、それで見ると同業他社と比べて悪くはない。

②年1回、ボーナスが出る。企業の業績によるが、月例賃金の1～2カ月程度。

(5) 企業で使う言語

①社長がドイツ人で、社内の会議は原則英語。会議資料等はすべて英文。

②電話による応答は、顧客の話す言葉によって中国語（北京語）であることも多い。運送業者等との折衝も中国語（北京語）か、英語と中国語の混ざった会話もまれではない。

③資材の設置現場に出かけることも多いが、ここでの会話も「電話による応答」と類似した状況。

④会社の同僚はほとんどが中国語（北京語）を解するので、企業内の日常会話は中国語（北京語）が中心。時に応じ、英語と中国語の混ざった会話となる。

⑤日系企業の顧客とは、まれに日本語を使って話す。

(6) 企業に対する満足度

①（5段階の自己評価）「ほぼ満足」

②理由は、賃金にほぼ満足していること。

③上司、同僚とも人間関係がうまくいっている。

④将来性のある企業で、今後の業績は向上していくと考えられる。

(7) 現在の職務に対する満足度

①（5段階の自己評価）「ほぼ満足」

②理由は、大学院で専攻した自分の専門分野が100%生かせる職務であること。

3. 現在の企業に就職した経緯

(1) 日本の大学、大学院で学んでいた頃は、日本で就職することを考えていた。しかし、卒業間近になって、両親、友人、留学経験のある先輩などに相談した後、マレーシアか、シンガポールで就職しようと決めた。決めたのは自分自身である。

(2) マレーシアか、シンガポールでの就職を決めた理由は、日本で就職したとしても日本に長く住むわけではなく、いずれマレーシアに帰ることになる。それならば初めからマレーシアか、故郷（マレーシアのジョホール州クルアン。シンガポールから車で2時間程度）に近いシンガポールで就職しようと考えた。

(3) 就職先に関する情報を集めると、マレーシアの場合は、クアラルンプールならば好条件の企業があったが、クアラルンプールは故郷から車で6時間と遠い。より故郷に近いシンガポールを選んだ。シンガポールの企業の賃金水準が、クアラルンプールの企業より

高いことも理由の1つとっていい。自分の知っている限りでは、シンガポールの賃金は日本より少し低い(10%程度)。

- (4) 日本での就職を選択しなかった理由の1つとして、日本とマレーシア、シンガポールの企業の「文化」の違いがある。日本で就職した留学生の話では、日本企業には「残業文化」があるという。終業時間になって、自分の仕事は終わっていても、上司が残っていると帰れないと聞いていた。マレーシアとシンガポールは同じ文化で、仕事と家庭の両方を大切にしている。日本の企業文化になじめないと考えた。
- (5) シンガポールの企業の募集に関する情報は、シンガポールの「人材あっせん会社」に登録し、日本にいてメールによって情報を得た。登録に際しては、自分の専門、希望する職種、業種、労働条件(賃金)などを詳細に記入した。これに基づき、人材あっせん会社からかなり頻繁に情報が届けられ、そのなかから選んで応募した。応募しても採用の可否が決まるまでにかかなりの時間がかかると聞いていたが、幸いにして自分の場合は、2社目で採用が決まった。正式な契約は、シンガポールに出向いて、面接を受けたあとに結んだ。期間に定めのない雇用契約である。
- (6) 人材あっせん会社への登録は無料。料金は人材を紹介された企業が負担する。
- (7) 当初は、ジュロン工業団地(シンガポールの南西部)にある現在の所属企業の親会社に就職した。1年後、親会社が現在の企業を買収して、自分の属していた部門を新会社に移したので、現在の企業に移った。雇用契約、労働条件は継続されている。

4. 過去の職歴

現在の企業が初めての職場である。

5. 将来の計画・希望

- (1) 今のところ、現在の企業で長く勤務するつもりである。法定の62歳の定年まで勤めるかは分からない。転職は考えていない。
- (2) 理由は、今の仕事に大きな不満がないこと、それに企業に将来性があると思われるからである。

シンガポール 2

1. 属性

(1) 年齢・男女別(独身・既婚)	38歳、男(既婚)
(2) 現住所	シンガポール
(3) 出身国(出身地)	マレーシア(サワラク州クチン)
(4) 出身大学・学部・専攻	シンガポール大学経営学専攻
(5) 出身大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業年月	1999年7月
(7) 言語 ①母語	中国語(客家語:父、福建語:母)

②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. ほぼ完璧 b. ほぼ完璧
③その他の言語	中国語（北京語）、マレー語、広東語、タイ語

2. 現在の所属企業

(1) 業種

製造業

(2) 企業規模

シンガポール国内で約 1,500 人（販売会社、関連サービス会社を含む）

(3) 職務・職種

①アドミニストレーション・マネジャー

②職務権限は総務、来訪者受け入れ、資料管理など

(4) 賃金・労働条件など

①月例賃金約 4,000S\$

②不満ではない金額

(5) 企業で使う言語

①英語がほとんど。

②しかし、会議でも白熱すると中国語（北京語）、マレー語が混ざる。

(6) 企業に対する満足度

①（5段階の自己評価）「可もなく不可もなし」

②大きな不満はないが、もう少しプロモーションのチャンスがあればと思う。収入には満足している。

(7) 現在の職務に対する満足度

①（5段階の自己評価）「ほぼ満足」

②自分の専門分野を生かして、楽しく仕事をしている。

3. 過去の職歴・現在の企業に就職した経緯

(1) マレーシアのサワラク州クチンの高校を卒業後、シンガポールの大学に進学した。マレーシアでは中国系マレーシア人は進学の手続きが少なかったため、シンガポール、ブルネイ、香港の大学を比較検討し、シンガポールの大学を選んだ。

(2) シンガポールを選んだ理由は、近隣諸国のなかで最も経済が発展しており、中国系の住民が多いからである。また、サワラク州の約 5 万人のマレーシア人がシンガポールに在住しており、親しみやすいことも理由の 1 つである。

(3) 大学卒業後、シンガポールの建設会社（現地企業）で 1 年働いた後、ドイツ系の企業に移り 2005 年まで勤め、2005 年に現在の会社に転職した。転職理由は、自分の希望する職種で、賃金が高い企業であったことである。こうした転職理由は、シンガポールではよく見られるケースだと思う。

- (4) シンガポールで大卒の外国人が職を得る場合、企業は雇用許可書（Employment Pass : EP）を政府に申請しなければならない。外国人が転職する場合、新しく勤める企業は新規に EP を申請することになるが、当該外国人が永住権（PR）を保有しているとほとんど問題なく EP が認められる。自分は、PR をかなり以前に取得しており、転職は何の問題もなく可能である。
- (5) また、PR を取得すると中央積立基金（CPF）に加入することが可能となり、実質的に所得が上がるというメリットがある。
- (6) 自分の場合は、大学在学中に PR を取得した。PR を取得することによって、シンガポール政府が学資を一定額援助してくれた。この学資援助は、大学の成績によるものだが、PR 保有者には国籍保有者と同じ援助が与えられる。

4. 将来の計画・希望

- (1) 今のところ、転職は考えていない。
- (2) 建設会社に勤めていた時期にシンガポール人と結婚した。こうしたこともあって、今後もシンガポールで働くことになると思う。
- (3) とはいえ、この企業グループは、外国に関連企業を多く持っているので、企業が派遣命令を出してくれれば、シンガポール以外の外国でしばらく働くのも悪くはないと思っている。

シンガポール 3

1. 属性

(1) 年齢・男女別（独身・既婚）	36 歳、女（既婚）
(2) 現住所	シンガポール
(3) 出身国（出身地）	インドネシア（スラバヤ）
(4) 出身大学・学部・専攻	ガジャマダ大学文学部
(5) 出身大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業年月	1998 年 2 月 * 学科によって年 4 回の卒業時期がある。大半は 6 月だが自分の場合は 2 月。
(7) 言語 ①母語	インドネシア語
②英語の能力（自己評価） a. 会話 b. 読み書き	a. ほぼ完璧 b. ほぼ完璧
③その他の言語	中国語（北京語）

2. 現在の所属企業

(1) 業種

製造業

(2) 企業規模

グループ全体で約 1,500 人

(3) 職務・職種

エグゼクティブ・セクレタリー（総務関係業務担当）

(4) 賃金・労働条件など

① 3,200S\$

②有給休暇は年 20 日。有給病気休暇は年 5 日。

(5) 企業で使う言語

①ほとんどが英語。書類も英語。

②上司、同僚との日常会話は中国語（北京語）の方が多い。

(6) 企業に対する満足度

①（5 段階の自己評価）「ほぼ満足」。

②ただし、「賃金」については「可もなく不可もなし」である。

③理由は、うまく説明できないが、自分の性格にあった職場だと考えている。職場環境も快適である。

(7) 現在の職務に対する満足度

①（5 段階の自己評価）「ほぼ満足」

②大学では英語を専攻したので、職務には直接関係はないが、研修を受けながら職務遂行能力は高くなっていると考えている。

3. 現在の企業に就職した経緯

(1) 大学を卒業し、ジャカルタで家電製造会社と銀行に勤めた経験がある。職務はいずれも役員秘書である。最初の就職先は、大学の紹介による。

(2) その後、結婚して 5 年間、専業主婦をした。この間、パート・タイムで短期間、働いたこともある。また長男を出産した。

(3) 2004 年に夫が、シンガポールで働くことを提案した。シンガポールに移り住むことについては、何の異論もなかった。夫はより良い仕事が決まっていたし、シンガポールには約 30 万人のインドネシア人が暮らしており、確固としたインドネシア人コミュニティーが成立していることを知っていた。実際、シンガポールに移って生活する上で大きな困難にあったことはない。

(4) 言葉の障害が少ないこともシンガポールに移る際の大きな要素であった。自分も夫も英語ができる。ともに中国系インドネシア人で、学校では習っていないので完璧ではないにしても中国語（北京語）ができる。インドネシア語はマレー語と 70%ほどは共通の言語である。つまり、シンガポールの国語であるマレー語、ビジネス言語である英語、日常生活に必要な中国語の 3 言語ができることが不安を取り除いていた。実際、シンガポールに移って、快適な職業生活を送り、近所づきあいをするためには、マレー語はあ

まり使う機会はないが、英語と中国語は必須であると考えている。

- (5) シンガポールに移るに際し、自分も再度働きたいと考え、就職先を探した。ジャカルタの人材あっせん会社を通じて、シンガポールに来る前に電気化学関係の現在の企業に採用が決まった。契約期間に定めのない雇用契約である。職務は事務・会計である。とくに資格（クオリフィケーション）は求められなかったが、大学卒であることが必須条件であった。大学の成績証明書を提出した。
- (6) シンガポールに移って5年目だが、仕事も生活も順調である。この5年間に2人の子供をもうけた。産前産後の休暇も希望通りに取得できた。
- (7) シンガポールの移って自分が働くようになり、子供の世話のためにインドネシア人のメイドを雇った。彼女に食事もほとんど作ってもらっている。メイドの賃金は月 450S\$（約3万円）である。ジャカルタに住んでいたときもメイドを雇っていた。
- (8) シンガポールに移って6カ月後に自分も夫も永住権（PR）を取得した。これにより、公共住宅（HDB住宅）に入居することができた。HDB住宅は大規模な集合住宅団地で、地下鉄の駅に近い立地が多く、広さも100～150㎡で不自由はない。3ベッド・ルームとメイドの部屋がある。立地もある程度は希望することができ、自分も夫も職場まで地下鉄を使って30分程度で通勤している。

4. 将来の計画・希望

- (1) シンガポールに移って6カ月後に永住権（PR）を取得、容易に転職できる資格を得ているが、現在の企業で当面は勤務を続けるつもりである。
- (2) 理由は、現在の企業、職務に大きな不満がないことである。
- (3) また、シンガポールに住み続けるつもりである。
- (4) 理由は、夫もシンガポールで働いており、子供の教育を英語で行うシンガポールが、子供にとって好ましい環境であることだ。
- (5) 遠い将来のことはあまり考えたことはない。恐らくシンガポールで教育を受けた子供は、シンガポールで職を得ることになるだろう。その後、私たち夫婦はインドネシアに帰国することもあり得る。

シンガポール 4

1. 属性

(1) 年齢・男女別（独身・既婚）	33歳、女（既婚）
(2) 現住所	シンガポール
(3) 出身国（出身地）	マレーシア（クアラルンプール）
(4) 出身大学・学部・専攻	名古屋市立大学経済学部経営学科
(5) 出身大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業年月	2008年3月

(7) 言語 ①母語 ②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き ③その他の言語	中国語（北京語） a. ほぼ完璧 b. ほぼ完璧 マレー語、日本語
--	---

2. 現在の所属企業

(1) 業種

運輸サービス（ロジスティック）

(2) 企業規模

約 500 人

(3) 職務・職種

顧客サービス担当エグゼクティブ

(4) 労働条件（賃金など）

①月例賃金は約 3,000S\$

②ロジスティック企業では高い水準

(5) 企業で使う言語

①社内の会議、書類はすべて英語。

②同僚との会話は、中国語（北京語）が多い。

(6) 企業に対する満足度

①（5段階の自己評価）「ほぼ満足」

②理由は、賃金にほぼ満足していること。

(7) 現在の職務に対する満足度

①（5段階の自己評価）「ほぼ満足」

②理由は、自分の専門分野である経営学が活かせる職務であること。また、上司の指示が極めて少なく、自分のしたい方法で職務が遂行できること、スキルアップの機会が多いことも理由である。

3. 現在の企業に就職した経緯

(1) 日本の大学にはクアラルンプールの日本語学校に1年半通って勉強し、日本語の試験を受けて入学した。入学に際しては、外国人枠があったと思う。大学の学資は、文部科学省（1年時）、名鉄育英会（2～3年時）、ロータリー米山奨学金（4年時）からのスカラシップで賄った。

(2) 日本の大学に入ろうと決めたのは、クアラルンプールで開かれた日本文化を紹介するイベントをみて、強く日本に惹かれたことによる。

(3) 名古屋市立大学を選んだのは、友人が名古屋に住んでいたため。経営学科を選択したのは、経営に興味があったため。高校を卒業して一時、クアラルンプールのオランダ系の電機機器製造会社で働いた時、経営管理に強い興味を持った。

- (4) 2008年3月に卒業を控え、当初は日本企業への就職を考えた。大手電機メーカーに応募し、試験を受けた。面接では、同社のマレーシア、シンガポールの関連企業の人事担当者が参加しており、マレーシア、シンガポールの関連企業の双方からオファーがあった。しかし、賃金が期待したより低く、職務に関する説明が明確でなかったため、断った。日本で働こうと考えていたのに、海外の関連会社からのオファーというのも違和感があった。
- (5) 結局、日本で働くことは諦めて、マレーシアかシンガポールで職を見つけることに決め、両方の人材あっせん会社に自分の資料を登録し、情報を集めた。この結果、マレーシアよりシンガポールの賃金が高いことなどを考慮し、シンガポールで働くことに決めた。マレーシアとシンガポールでは初任給はそれほど違いはないが、入社後の昇給がかなり異なることが分かった。マレーシアでは昇給額が低く、結果として数年を経ると大きな賃金差となる。
- (6) 2008年3月に卒業し、4月にクアラルンプールに帰った後、5月にシンガポールに来て、現在の企業の入社試験を受け、6月から働き始めた。11月には永住権（PR）を取得した。シンガポールではPRがないと、雇用が安定しないといわれている。

4. 将来の計画・希望

- (1) 現在の企業でしばらく勤務する予定である。
- (2) 1年前にシンガポールで働くマレーシア人と結婚した。シンガポールは小さな国だが、社会インフラがよく整備されており、地下鉄でどこにでも行ける。シンガポールの仕事、生活全般にほぼ満足している。将来、転職するかもしれないが、シンガポールで働き続けようと考えている。

シンガポール 5

1. 属性

(1) 年齢・男女別（独身・既婚）	28歳、女（独身）
(2) 現住所	シンガポール
(3) 出身国（出身地）	マレーシア（ジョホール州ムアール）
(4) 出身大学・学部・専攻	マレーシア理科大学（国立）経営学部
(5) 出身大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業年月	2006年8月
(7) 言語 ①母語	中国語（福建語）
②英語の能力（自己評価）	a. ほぼ完璧 b. ほぼ完璧
a. 会話 b. 読み書き	
③その他の言語	マレー語、中国語（北京語）

2. 現在の所属企業

(1) 業種

運輸サービス（ロジスティック）

(2) 企業規模

従業員 500 人ほど。

(3) 職務・職種

オフィス・エグゼクティブ（書類、伝票作成など）

(4) 賃金・労働条件など

少なくとも賃金はシンガポールの同職務の水準のなかでは高い。

(5) 企業で使う言語

①現在勤めている企業は他の企業と比較して従業員の国籍が極めて「多国籍」であるといえる。シンガポール人が最も多く、ついでマレーシア人、その他にベトナム人、フィリピン人、中国人（中国国籍）、インド人（インド国籍）がいる。日本人もいる。シンガポール人でもエスニック・グループでいうと、中国人、マレー人、インド人がいる。この方針は、顧客に外国人が多いという点を考慮した結果だと思う。

②社内の共通語は英語である。ただ、その他の言語も日常の会話のなかには色々な組み合わせで入り交じっている。英語以外の共通の言語を話す者同士は、親しくなりやすいのは事実である。それが仕事に影響しているのは確かだが、どのような影響かはうまく説明できない。

(6) 企業に対する満足度

①（5段階の自己評価）「ほぼ満足」

②理由は、賃金に満足しているから。

(7) 現在の職務に対する満足度

①（5段階の自己評価）「ほぼ満足」

②理由は、大学で専攻した経営学を活かすことができる職務であること。

3. 現在の企業に就職した経緯

(1) 大学はペナン（マレーシア北部）にあった。マレーシアでは国立大学の試験は全国統一試験で、成績に応じて大学に進学する。この際、大学の所在地は出身地の近くになるとは限らない。むしろ出身地から離れる可能性の方が高い。

(2) 経営学を選択したのは、比較的女性向きと思われたからである。経済学は男性が多い。

(3) 大学を卒業する際、就職をペナンにする気はなかった。首都のクアラルンプールも出身地のジョホール州ムアールからは遠く、ジョホール州に好条件の職がなかったため、シンガポールで勤めることにした。ジョホール州ムアールからシンガポールまではバスで2時間ほどの距離である。両親もシンガポールで働くことに賛成した。

(4) シンガポールで勤めることを決めた後、人材あっせん会社を通じて職を探した。希望は

経営学を活かせる職種であった。それに賃金も高い方がいいと考えていた。現在勤める企業は、ほぼ希望に沿ったものであるといえる。

- (5) 3年前(2007年)に永住権(PR)を取得した。当時は半年在住すれば大体取得できたが、今年(2010年)から2年間在住しないと取得できないことになった。2008年以來の不況で政府がシンガポール人の雇用を優先することにしたので、外国人の雇用許可書(EP)を企業が取得することが難しくなっている。PRも同じ理由で2年にしたのではないかとわれている。PRがないと外国人は転職が難しい。

4. 将来の計画・希望

- (1) 来年、会社を辞めて海外に留学することを現在、計画している。そのための資金を蓄えている。
- (2) 会社を辞める理由は、2年間同じ仕事をしてきて、最初は興味深かったが、少し飽きてきたこと。まだ若いので新しいことにチャレンジしたい。
- (3) シンガポールの企業では、職務に応じて人を募集、採用しており、企業のなかで職務を変えることは極めてまれである。他の職務の者を異動させて新しい職務の訓練をするより、必要な職務のスキルを有した者を新しく採用した方がいいと考えている。このため、現在の企業のなかで別の仕事をするのは難しい。
- (4) 留学先はオーストラリア、日本などを考えている。日本の場合は、日本語を学ぶための留学になる。色々と語学学校などを調べている。場所は東京がいい。日本語ができるようになって、チャンスがあれば、日本で働くことにも挑戦してみたい。
- (5) とはいえ、留学後はシンガポールに帰ってくるつもりである。

シンガポール 6

1. 属性

(1) 年齢・男女別 (独身・既婚)	29歳、女 (独身)
(2) 現住所	シンガポール
(3) 出身国(出身地)	インドネシア (ジャカルタ)
(4) 出身大学・学部・専攻	ビナ・ヌサンタラ大学 (国立) 情報システム、コンピュータ・サイエンス
(5) 出身大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業年月	2004年4月
(7) 言語 ①母語	中国語 (客家語)
②英語の能力(自己評価)	
a. 会話 b. 読み書き	a. 普通 b. ほぼ完璧
③その他の言語	インドネシア語、中国語 (北京語)

2. 現在の所属企業

(1) 業種

コンピュータ・ソフトウェア開発

(2) 企業規模

約 600 人

(3) 職務・職種

ソフトウェア・アナリスト

(4) 賃金・労働条件など

① 3,200\$

②労働時間は、午前 9 時始業、午後 6 時終業の 1 日 8 時間。シンガポールではどこの企業も就業時間はこの時間帯である。

(5) 企業で使う言語

①企業では主として英語と中国語（北京語）を使っている。

②会議も場合により英語だけでなく、中国語（北京語）で行われることもある。大体は両方の言葉をミックスして話している。どちらか一方だけということはまれだ。

(6) 企業に対する満足度

①（5 段階の自己評価）「可もなく不可もなし」

②理由は、ほぼ予想通りの賃金で、予想通りの職場環境であったこと。

(7) 現在の職務に対する満足度

①（5 段階の自己評価）「可もなく不可もなし」

②理由は、これも予想通りの職務であったこと。

3. 現在の企業に就職した経緯

(1) 大学を卒業後、ジャカルタで銀行に 2 年半、デベロッパー（土地・住宅開発）に 1 年半勤めた。職務はセクレタリー（一般事務）であった。いずれも賃金は悪くはなかった。

(2) 現在の企業に勤めていた友人に誘われ、この企業に入った。

(3) 理由は、大学で学んだ情報システム、コンピュータ・サイエンスを活用できる職務であったからだ。ジャカルタでは専門を活かすことができる職が見つからなかった。

(4) インドネシアでは、最近では大学で情報システムやコンピュータ・サイエンスを専攻する学生が増えているが、情報システムやコンピュータ・サイエンスを専攻したからといってその専門を活かすことができる就職先は十分にあるわけではない。

(5) 加えて、シンガポールの賃金が高いことが魅力であった。

(6) また、シンガポールは中国語（北京語）、マレー語（＝インドネシア語）、英語を話す人が混じり合った国で、自分はそのいずれも話すことができることが、シンガポールで働くことにした動機の 1 つである。

(7) シンガポールで職を得ることは自分自身で決めた。4 人の兄弟がいるが、いずれもイン

ドネシアで働いている。両親を含め、家族からとくに反対はなかった。

- (8) まず、シンガポールに来て、現在の企業の募集に応じ、採用試験にパスして、採用された。勤め始めて1年と少しになる。

4. 将来の計画・希望

- (1) 少なくとも向こう1年半は現在の企業で勤務する。
- (2) もっといい職があるのではないかと考えているが、先頃始まった新しいプロジェクトが非常に興味深く、自分のスキルを向上させると思うので、これが終了するまでは今の仕事を続ける。
- (3) 1年半後は分からないが、必ずしもシンガポールで新しい職を探すとは限らない。先日、オーストラリア（パース）で働いている友人（大学の同級生）と話した。その時、オーストラリアは労働時間が短いと聞き、行ってみたいと思った。

シンガポール 7

1. 属性

(1) 年齢・男女別（独身・既婚）	31歳、女（独身）
(2) 現住所	シンガポール
(3) 出身国（出身地）	フィリピン（マニラ）
(4) 出身大学・学部・専攻	科学技術大学（フィリピン）工学部
(5) 出身大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業年月	2000年4月
(7) 言語 ①母語	タガログ語
②英語の能力（自己評価）	a. ほぼ完璧 b. ほぼ完璧
a. 会話 b. 読み書き	
③その他の言語	アラビア語（幼少時に在住経験有り）

2. 現在の所属企業

(1) 業種

コンピュータ・ソフトウェア開発

(2) 企業規模

約600人

(3) 職務・職種

ソフトウェア・アナリスト

(4) 賃金・労働条件など

① 3,000S\$

② ボーナスは年1回。

③ 休暇が多い。年休は年14日、病気休暇が年10日。

(5) 企業で使う言語

英語のみ。

(6) 企業に対する満足度

① (5段階の自己評価)「ほぼ満足」

②理由は、賃金水準にほぼ満足していること。

(7) 現在の職務に対する満足度

① (5段階の自己評価)「満足」

②理由は、大学で専攻した専門分野が活かせる職務であること。

3. 現在の企業に就職した経緯

(1) 大学卒業後に現在の企業の親会社（銀行）のマニラ支店に勤めていた。

(2) 7年前にこの企業が創立され、誘われてシンガポールに移ってきた。

(3) マニラ支店でも現在と同じ職務（銀行のコンピュータ・システムのソフトウェアを扱う）であった。ただマニラではジュニア・レベルであったが、シンガポールに来てシニア・レベルに昇進した。

(4) 友人がシンガポールに多くいるので、シンガポールに来ることにためらいはなかった。

(5) 兄弟が3人おり、うち1人はシンガポールで働いている。

4. 将来の計画・希望

(1) 当面は現在の企業で勤務する。

(2) ただ、好条件で、良い機会があれば、どこの国の、どこの企業に移っても良いと考えている。日本企業でも、東京でも、好条件ならば移る。ただし自分の専門を活かせる職であればである。

シンガポール 8

1. 属性

(1) 年齢・男女別（独身・既婚）	31歳、男（独身）
(2) 現住所	シンガポール
(3) 出身国（出身地）	マレーシア（ジョホール州）
(4) 出身大学・学部・専攻	マレーシア工業大学（国立、ジョホール州）機械工学
(5) 出身大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業年月	2003年4月
(7) 言語 ①母語	中国語（北京語）
②英語の能力（自己評価） a. 会話 b. 読み書き	a. ほぼ完璧 b. ほぼ完璧
③その他の言語	マレー語、中国語（福建語、広東語）

2. 現在の所属企業

(1) 業種

製造業

(2) 企業規模

1,200 人

(3) 職務・職種

プロダクション・エンジニア

(4) 賃金・労働条件など

約 3,500S\$

(5) 企業で使う言語

①ほとんど英語。

②日常会話では中国語（北京語）、マレー語、英語を交えている。

(6) 企業に対する満足度

①（5段階の自己評価）「可もなく不可もなし」

②賃金がもう少し高いといいのだが。

(7) 現在の職務に対する満足度

①（5段階の自己評価）「可もなく不可もなし」

②自分で選んだ職務で、うまくこなしていると思う。

③昇進、昇格のチャンスが少ないのが欠点。

3. 現在の企業に就職した経緯

(1) 大学を卒業して、最初はマレーシアのジョホールで働いた。

(2) 最初はトラベル・エージェント、つぎが家具メーカーである。今の会社はシンガポールにあるが、機械製造の会社なので、職務は3つとも異なる。理由は、違った仕事が見たかったことによる。今後も、何か1つの業種、職務にこだわって働くつもりはない。

(3) 職を選ぶとき、最も重視するのは賃金である。シンガポールに来て、現在の会社に入ったのも、マレーシアよりシンガポールの会社の賃金が高かったことが大きな理由の1つである。

(4) いずれの企業も友人がインターネットで情報を入手し、教えてくれた。

(5) シンガポールの現在の会社に勤めて、4年になる。この間に、永住権（PR）を取得した。これがあるとシンガポールで転職することが容易になる。

(6) 4人兄弟で、いずれも大卒。自分を含め3人がシンガポールで働いている。ジョホールとシンガポールが近いことが第1の理由で、第2の理由は、中国系マレーシア人であることだと思う。中国系マレーシア人にとって、シンガポールはマレーシアと何の違もないと感じられる。仕事をする上でも、マレーシアとシンガポールはほとんど差がないと、自分の経験から考えている。賃金水準は違うが。

4. 将来の計画・希望

- (1) 今の会社に満足していない。もう4年働いたので、もっと違った仕事を経験したいと思っている。（「他のヒヤリングを受けた人に比べ、自分を不真面目と思うか」と質問された。）
- (2) チャンスがあれば、どこの国とは特定しないが、マレーシア、シンガポール以外の国に行って働いてみたい。
- (3) （「例えばどこの国か」との質問に対して）ヨーロッパのどこかの国に行ってみたい。英語を理解してくれる国なら、どこでもやっていけると思う。アメリカは嫌いだ。中国は論外で、魅力なし。日本は嫌いではないが、言葉の点で自分にとって働くのは難しいと思う。

5. その他特記事項

（ヒヤリングを終えての雑談の中で）実はジョホールで最初に勤めたトラベル・エージェンツをやめた後、日本に留学している友人に誘われ、日本に行き働こうと考えた。実際に日本に行き仕事を探したが、就職先は見つからなかった。結局、3カ月「皿洗い」をして帰ってきた。

シンガポール 9

1. 属性

(1)年齢・男女別（独身・既婚）	26歳、女（独身）
(2)現住所	マレーシア（ジョホール・バル）
(3)出身国(出身地)	マレーシア（ジョホール・バル）
(4)出身大学・学部・専攻	マレーシア・プトラ大学（国立、クアラルンプール）コンピュータ・サイエンス、マルチメディア
(5)出身大学院・研究科・専攻・課程	—
(6)卒業年月	2008年6月
(7)言語 ①母語	中国語（北京語）
②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. ほぼ完璧 b. ほぼ完璧
③その他の言語	マレー語
(8)その他特記事項	マレーシア（ジョホール・バル）から約2時間かけて通勤。

2. 現在の所属企業

(1) 業種

コンピュータ技術サービス

- (2) 企業規模
 - 約 350 人
- (3) 職務・職種
 - システム・エンジニア
- (4) 賃金・労働条件など
 - ①約 3,000\$
 - ②他社と比べて大きな違いはないと思う。
- (5) 企業で使う言語
 - ①英語。
 - ②同僚と話すときは中国語（北京語）と英語のミックス。
- (6) 企業に対する満足度
 - ①（5段階の自己評価）「不満」
 - ②賃金を含めて労働条件はいいと思う。
 - ③だが、マネジメントはいろんな点でノー・グッド。自分たちの意見を聞こうとしない。
- (7) 現在の職務に対する満足度
 - ①（5段階の自己評価）「可もなく不可もなし」
 - ②自分の能力は、ある程度発揮していると思っている。
 - ③だが、スキル・デベロップメントはあまり期待できない。その意味では良い職務といえないのかもしれない。

3. 現在の企業に就職した経緯

- (1) 大学を卒業して現在の会社に就職し、2年間働いている。
- (2) シンガポールで就職した理由は、出身地のジョホール・バルから近いことと、マレーシアより労働条件がいいこと。
- (3) ジョホール・バルの自宅からバスを使って、片道2時間かけて通勤している。入社当初は1時間半ほどのところに会社があったが、1年前に現在の新しいビルに移転した。職場環境は格段に良くなったが、通勤時間は長くなった。
- (4) 現在の会社の募集情報は、インターネットで見つけた。

4. 将来の計画・希望

- (1) 現在は新しいプロジェクトが始まって、仕事が面白くなっているので、当面辞めるつもりはない。
- (2) しかし、新しいプロジェクトがなかったら、辞めていたかもしれない。
- (3) もうすぐ結婚する予定だが、結婚後も仕事は続けるつもりである。結婚相手はジョホール・バルで働いている。子供ができれば、メイドを雇う。
- (4) 10年後くらいには、ジョホールに帰って仕事をしていると思う。

シンガポール 10

1. 属性

(1)年齢・男女別（独身・既婚）	28歳、女（独身）
(2)現住所	シンガポール
(3)出身国(出身地)	インドネシア（カリマンタン州バラット）
(4)出身大学・学部・専攻	ノッティンガム大学（イギリス）コンピュータ・サイエンス
(5)出身大学院・研究科・専攻・課程	－
(6)卒業年月	2005年6月
(7)言語 ①母語	中国語（潮州語）
②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. ほぼ完璧 b. ほぼ完璧
③その他の言語	インドネシア語、中国語（北京語）

2. 現在の所属企業

(1) 業種

コンピュータ技術サービス

(2) 企業規模

約350人

(3) 職務・職種

システム・エンジニア

(4) 賃金・労働条件など

約3,200S\$

(5) 企業で使う言語

ほとんど英語。

(6) 企業に対する満足度

①（5段階の自己評価）「ほぼ満足」

②理由は、賃金、その他の労働条件にほぼ満足していること。

(7) 現在の職務に対する満足度

①（5段階の自己評価）「ほぼ満足」

②忙しいときはストレスがあるが、概ね現在の職務は自分に向いていると思っている。

3. 現在の企業に就職した経緯

(1) 大学卒業後、マレーシア（クアラルンプール）のコンピュータ技術サービスの企業で3年間働いた後、シンガポールに来て現在の企業に就職した。

(2) イギリスの大学を選んだのは、高校で英語が得意であったから。

- (3) ノッティンガム大学を選んだのは、スカラシップの審査に合格したから。
- (4) コンピュータ・サイエンスを選択したのは、最先端の技術の1つで、将来良い仕事に就くことが期待できるから。
- (5) 兄弟は3人。いずれも外国（台湾、香港、中国・ウーハン）の大学に入った。インドネシアのカリマンタン州にはあまりいい大学がなく、成績のいい者は、ジャワ島に行くよりは外国を選ぶ者が多い。
- (6) 大学では、勉強だけに集中し、かなり頑張った。生活を楽しむ（リラックスする）ことは、ほとんど考えなかった。コンピュータ・サイエンスは非常に興味のもてる分野であった。論文はあまり書かなかったが、多くの論文を読み、レポートを作成した。それでも成績は中ぐらいであった。才能の問題かもしれない。
- (7) 大学卒業後、マレーシア（クアラルンプール）で就職したのは、インドネシアよりマレーシアは経済力があり、英語で仕事ができる国であることが理由である。
- (8) 就職先は、クアラルンプールに行って、インターネットで募集情報を検索し、比較的容易に見つけた。民間企業で、あまり大きな企業ではなかったが（従業員は200人程度、オフィスが複数あり詳細不明）、仕事は専門をある程度活かすことができた。賃金は悪くはなかったと思う。
- (9) シンガポールに来たきっかけは、シンガポールの現在の企業で働いていた友人（インドネシア、カリマンタン州時代の友人）が「募集があるので応募してはどうか」と誘ってくれたことである。
- (10) 理由の第1は、賃金が高かったこと。高い賃金を得て、預金ができると思った。
- (11) シンガポールに来て、まだ2年だが、仕事、生活にあまり不満はない。シンガポール人の友人も沢山できた。シンガポール人の友人とは、英語と中国語（北京語）をミックスして話している。
- (12) 永住権（PR）は2008年に取得した。必要書類を提出し、3週間くらいで返事が来た。3行くらいの短い書類で、「承認」を知らされた。詳しい審査過程などは何の説明もなく、分からない。PRを申請したのは、シンガポールで働いているインドネシア人の友人が皆取得していることが理由で、これにより利益があるというが、CPFに加入したこと以外、とくに利益があったとは実感していない。

4. 将来の計画・希望

- (1) あと2～3年働いて、オーストラリアで職を見つけたいと思っている。
- (2) 理由は、オーストラリアが最も近い英語圏の国であること。先進国で自分に適した仕事が見つかると思う。
- (3) 英語圏でもアメリカは好きではない。ギャングが多くて、社会のイメージが悪い。
- (4) イギリスは、勉強するには良い環境だが、生活するには気候が悪く、長く住む国ではない。

- (5) (日本はどうかとの質問に) 日本企業であっても、英語で仕事ができれば問題はないと思うが、日本には行ったことがないので、これまでは考えたことがない。

シンガポール 11

1. 属性

(1) 年齢・男女別 (独身・既婚)	28 歳、女 (独身)
(2) 現住所	シンガポール
(3) 出身国 (出身地)	インドネシア (ジャカルタ)
(4) 出身大学・学部・専攻	ビヌス大学 (インドネシア、ジャカルタ) コンピュータ・サイエンス
(5) 出身大学院・研究科・専攻・課程	ビヌス大学大学院コンピュータ・サイエンス、修士課程
(6) 卒業年月	2008 年 4 月
(7) 言語 ①母語	インドネシア語
②英語の能力 (自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. ほぼ完璧 b. ほぼ完璧
③その他の言語	—

2. 現在の所属企業

- (1) 業種
IT 関連
- (2) 企業規模
約 800 人
- (3) 職務・職種
IT エンジニア
- (4) 賃金・労働条件など
約 3,500\$
- (5) 企業で使う言語
①英語のみ。
②同僚は中国語 (北京語) で話しているが、自分は中国語 (北京語) はあまりうまくないので、英語で話すことが多い。
- (6) 企業に対する満足度
① (5 段階の自己評価) 「可もなく不可もなし」
②理由は、シンガポールの企業のなかでは賃金が高い方ではないこと。
- (7) 現在の職務に対する満足度
① (5 段階の自己評価) 「ほぼ満足」

②理由は、スキル・アップを期待できる職務であること。この仕事をインドネシアで探すことは極めて難しいと思う。

3. 現在の企業に就職した経緯

- (1) 大学卒業後に最初に就いた職はジャカルタの IT コンサルタントの企業で、約 8 カ月働いた。賃金はジャカルタでは高い水準であった。同企業は大学の掲示板をみて応募した。
- (2) シンガポールに来ることにしたのは、よりやりがいのある仕事をするため。ジャカルタでも探したが、希望する仕事が見つからなかった。シンガポールで働くことは、インドネシア人にとってそれほど難しいことではない、という知識は持っていた。その第 1 の理由は、言葉の問題がないことである。
- (3) シンガポールでの就職に、父はネガティブで、母はポジティブな意見であった。母の後押しでシンガポールで就職できたと考えている。
- (4) 現在の会社は、まずシンガポールに来て、インターネットで募集を知り、応募し、試験を受けて入社した。思ったより簡単であった。応募したのは 3 社で、1 社は不合格、2 社に合格し、現在の会社を選択した。応募したのはいずれも IT 関連の企業である。年齢が低いことは多少、有利であったのではないかと思う。その分、賃金が低いのかも知れない。提出した資料は、大学の成績表、職務経験などである。面接では、英語能力が試されたと思う。
- (5) シンガポールはアセアン加盟国で、インドネシア人が入国することに何の問題もない。
- (6) また、暮らしてみて、シンガポールはジャカルタと比べ安全な国で、生活の上で不安を感じたことはない。これは非常に重要なことだと思う。夜遅く、ジャカルタでは若い女性は外出できないが、シンガポールでは何の問題もない。
- (7) 兄弟は 3 人いる。いずれも男で、大学を卒業し、インドネシアで働いている。

4. 将来の計画・希望

- (1) さらに 2 年現在の企業で働いて、別の企業を探したいと考えている。
- (2) その場合、シンガポールか、外国ならばオーストラリア（パース）がいいと思っている。パースには親戚がおり、良い就職先が見つかると思う。アメリカは、IT 産業は進んでいると思うが「ノー」である。日本企業は、日本語ができないので考えたことがない。

5. その他の特記事項

ビヌス大学にいた頃、インドネシアの日系企業が、大学に寄付して日本語講座をつくり、日本企業で働く者を養成していたことがあるが、不況時に寄付を中止したので日本語講座は廃止になった。

シンガポール 12

1. 属性

(1)年齢・男女別（独身・既婚）	37 歳、男（既婚）
------------------	------------

(2) 現住所	シンガポール
(3) 出身国(出身地)	インドネシア (スラバヤ)
(4) 出身大学・学部・専攻	ガジャマダ大学 (国立、ジャワ島中部のジョクジャカルタにある名門校) 文学部
(5) 出身大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業年月	1998年6月
(7) 言語 ①母語	インドネシア語
②英語の能力(自己評価)	a. ほぼ完璧 b. ほぼ完璧
a. 会話 b. 読み書き	
③その他の言語	中国語 (北京語)、ジャワ語、日本語
(8) その他特記事項	日本の文部科学省の日本文化研修プログラムで京都大学に1年間留学経験有り。

2. 現在の所属企業

(1) 業種

製造業

(2) 企業規模

従業員約 1,200 人。

(3) 職務・職種

アシスタント・マネジャー (工場管理、コスト管理)

(4) 賃金・労働条件など

①約 5,000S\$

②賃金にそれほど不満はない。

(5) 企業で使う言語

①ほとんど英語。

②時折、中国語 (北京語) も使う。

(6) 企業に対する満足度

① (5段階の自己評価) 「可もなく不可もなし」

②賃金にほぼ満足しているが、会社のマネジメントには不満。

(7) 現在の職務に対する満足度

① (5段階の自己評価) 「ほぼ満足」

②理由は、これまでの経験を活かすことができる職務であること。

3. 現在の企業に就職した経緯

(1) 大学卒業後、ジャカルタの日系企業 (自動車製造) で 2004 年まで勤務した。

(2) 職務は、コスト管理、工場管理である。当初は、知識がなかったが、会社に入って各種の研修 (主として外部研修) を受け、知識を身につけた。研修は非常に大切に、極めて

有用であった。日本にも1週間、研修を受けるために行った。わずか1週間であったが、日本の会社を知ることができて良い研修だった。

- (3) ガジャマダ大学の卒業生の多くはジャカルタで就職しており、ジャカルタで働くことはごく普通のことである。
- (4) 日系企業に就職したのは、多少日本語を理解するので、大学の教師が推薦してくれたことが理由である。専攻した文学とは無縁の職種であったが、インドネシアでは大学の専攻と仕事が直接関係のないことはよくある。決して例外ではない。
- (5) 日系企業に大きな不満があったわけではないが、もっと飛躍するために、別の企業を探すようになった。2004年にそんな企業が見つかり、転職することにした。この間に結婚をして子供ができたことも、飛躍したいと考えた理由の1つである。
- (6) 転職先として見つけ企業は、やはり日系企業（オーディオ・メーカー）で、シンガポールにあった。シンガポールに限らず、インドネシアを含め、外国に広く募集をしていたようだ。シンガポールに移ることにためらいはなかった。良い仕事を得られることが重要であった。妻も賛成してくれた。
- (7) ジャカルタにいる間に入社が決まった。職務はコスト管理、工場管理のマネジャーであった。
- (8) 2004年7月にシンガポールで勤務を始めた。そこで2年間働き、不満はなかった。しかし、2006年に会社がバンコクに移転することになり、自動的に失職した。シンガポールからは誰もバンコクに移動する機会とは与えられなかった。
- (9) そこで、シンガポールで新しい勤め先を探し、現在の企業に移った。今度は日系企業ではなく、アメリカ系の企業である。職務はアシスタント・マネジャーであるが、企業規模が前の企業より大きく、賃金は少しだが上がった。
- (10) 現在の企業に移って、最初の1年間は順調であった。だが、2年目に、現在のマネジャーが入社してきて不満が多くなった。
- (11) 自分には2人の上司がいる。1人はディレクターで、もう1人はマネジャーである。ディレクターはアメリカ人で、自分を採用してくれた人である。彼の下では仕事は快適に進められる。仕事外でのつきあいは、非常にフランクである。
- (12) しかし、マネジャーはまったく異なる。マネジャーは45歳で、女性、シンガポール人である。彼女は、以前勤めていた企業から、何人かのスタッフをつれてきた。重要な仕事は、彼女とそれらのスタッフで進めている。つれてきたスタッフはいずれもシンガポール人である。自分には重要な仕事は任せてくれない。彼女は非常に有能である。自分より有能であると思う。だが、彼女が連れてきたスタッフと比べると、自分は同じ程度か、より有能であると考えている。
- (13) 近いうちに、現在のディレクターが外国に転勤することになった。ディレクターが転勤すれば、自分は現在の会社を辞めると思う。

(14) 永住権(PR)はシンガポールに来て半年後に取得した。

(15) 現在は、公営住宅(HDB住宅)に住んでいる。子供は3人。上2人は公立小学校に入り、英語で教育を受けている。下の1人は公立保育園に通っている。妻もフルタイムの仕事をしており、子供の世話はメイド(インドネシア人)がしている。

4. 将来の計画・希望

(1) 数カ月のうちに、現在のディレクターが外国に転勤する。そうなれば自分は現在の会社を辞める。つぎの勤め先の情報を集めている最中である。シンガポールの企業の情報を集めている。

(2) 悲観はしていない。経済の状況にもよるが、すぐに見つかると思う。現在より賃金が下がることはない。経験を積んだので賃金は上がると考えている。

(3) 今後も引き続きシンガポールで働くつもりである。理由は、ジャカルタと比較して、仕事が容易に見つかること、子供が英語教育を受けられること、などである。

シンガポール 13

1. 属性

(1) 年齢・男女別(独身・既婚)	38歳、女(独身・既婚はノーコメント)
(2) 現住所	シンガポール
(3) 出身国(出身地)	フィリピン(マニラ)
(4) 出身大学・学部・専攻	フィリピン大学(国立) 経営学部
(5) 出身大学院・研究科・専攻・課程	フィリピン大学大学院 経営学 修士(MBA)
(6) 卒業年月	1997年6月
(7) 言語 ①母語	タガログ語
②英語の能力(自己評価) a. 会話 b. 読み書き	a. 完璧 b. 完璧
③その他の言語	—

2. 現在の所属企業

(1) 業種

製造業

(2) 企業規模

従業員約30人(持株会社)

シンガポールのグループ企業全体では約3,000人

(3) 職務・職種

人事担当マネジャー

(4) 賃金・労働条件など

①賃金はノーコメント

②労働条件全般は悪くはない。ただ夜におよぶ会議が多く、出張（海外）も多いが特別な手当はない。

(5) 企業で使う言語

ほとんど英語のみ。

(6) 企業に対する満足度

①（5段階の自己評価）「ほぼ満足」

②賃金は、ほぼ満足。そのほか全般的に会社の方針にも満足している。

(7) 現在の職務に対する満足度

①（5段階の自己評価）「ほぼ満足」

②理由は、これまでの経験した仕事を活かした職務であること。

3. 現在の企業に就職した経緯

(1) 大学卒業後、フィリピン（マニラ）にある現在勤めている会社のフィリピン法人に勤務。その後、昇進して人事担当マネジャーとなった。

(2) 3年前に、シンガポールにある地域統括会社に転職した。現在は、同地域統括会社アジア地域の法人の持株会社となり、そこに異動。

(3) フィリピン法人勤務時にスカウトされたことは事実だが、企業内転勤ではなく、フィリピン法人を退社し、シンガポールの地域統括会社に転職した。

(4) 現在は持株会社の人事担当マネジャーとして、持株会社の人事を担当するとともに、持株会社の人事方針をグループ企業全体の人事担当者に伝えるための会議などを主催している。また、グループ企業全体の訓練計画なども担当している。

4. 将来の計画・希望

(1) 現在の企業で当面は勤務を続ける。

(2) 転職するとすれば、マニラに帰って職を探す。

シンガポール 14

1. 属性

(1)年齢・男女別（独身・既婚）	36歳、男（既婚）
(2)現住所	シンガポール
(3)出身国(出身地)	マレーシア（クアラルンプール）
(4)出身大学・学部・専攻	マラヤ大学（国立）政治経済学部
(5)出身大学院・研究科・専攻・課程	—
(6)卒業年月	1998年6月
(7)言語 ①母語	タミール語
②英語の能力(自己評価)	
a. 会話 b. 読み書き	a. ほぼ完璧 b. ほぼ完璧

③その他の言語	マレー語
(8)その他特記事項	インド系マレーシア人

2. 現在の所属企業

(1) 業種

海運を中心とした保険業（イギリス系企業）。

(2) 企業規模

約 600 人

(3) 職務・職種

アシスタント・マネジャー（リスク担当）

(4) 賃金・労働条件など

①約 5,500\$

②賃金は悪くはないと思う。

(5) 企業で使う言語

①業務上で使用するのはほとんど英語。書類もすべて英語。

②業務以外でも自分の場合は、英語のみ。

(6) 企業に対する満足度

①（5段階の自己評価）「ほぼ満足」

②理由は、賃金が比較的高いこと、会社の業績が伸びていることである。

(7) 現在の職務に対する満足度

①（5段階の自己評価）「ほぼ満足」

②理由は現在の会社で働いて、やりがいがあると感じている。スキルも向上できている。

3. 現在の企業に就職した経緯

(1) 大学を卒業した当初からシンガポールで就職しようと考えていた。

(2) 理由は、①比較的容易に就職先が見つかることを知っていたこと、②マレーシア人にとって働きやすい環境であること（知人の多くがシンガポールで働いている）、③金融関係を専門としており、マレーシアよりも多国籍企業を含めた金融機関が多いこと、④賃金が高いこと、などである。

(3) シンガポールに来て最初に就いた職は、ロジスティックの会社（アメリカ系）の経理担当である。金融機関を希望していたが、適当な会社が見つからなかった。ここで3年働き、現在の会社に転職した。

(4) 知人の紹介で募集を知り、応募、面接試験を受けて採用された。当時は設立から1年ほどの会社で、規模も現在の3分の1ほどであった。賃金はロジスティックの会社とほぼ同水準であった。

(5) 5年ほど前に、インターネットを使った顧客サービスを始め、会社は飛躍的に業績が伸

び、従業員数も3倍ほどになった。この間に、オフィスは2度移転した。

- (6) 自分は一貫して顧客管理の仕事を担当している。入社当初はエグゼクティブ（担当者）であったが3年でアシスタント・マネジャーに昇進した。昇進に伴い、かなりの昇給があった。
- (7) 社長はイギリス人で、役員の大半はイギリスの親会社の役員で、シンガポールに来るのはまれである。シンガポール人の役員も1人いる。従業員のほとんどはシンガポール人であり、親会社から来ているイギリス人従業員はディレクターが1人だけである。入れ替わりがあるので正確には分からないが、外国人はマレーシア人とインドネシア人がいる。ごく少数である。
- (8) 1999年に永住権（PR）を取得した。これがないと、現在の会社にスムーズに転職できなかったと思う。

4. 将来の計画・希望

- (1) 現在の会社に5年勤め、アシスタント・マネジャーとなった。マネジャーになるチャンスはまだない。向こう2～3年でマネジャーに昇進できなければ転職するだろう。
- (2) 転職先は、シンガポールの金融機関を第1に考える。

5. その他の特記事項

- (1) 5年前に結婚し、公共住宅（HDB住宅）に入居した。妻もインド系マレーシア人で、結婚後、クアラルンプールからシンガポールに来た。
- (2) 結婚して生活は安定した。とくに精神的に安定した。子供は1人。
- (3) クアラルンプールには両親、兄弟が住んでいる。シンガポールからクアラルンプールまで高速道路が繋がっているの、車で5～6時間で行くことができる。休暇にはほとんどクアラルンプールに帰る。

シンガポール 15

1. 属性

(1) 年齢・男女別（独身・既婚）	38歳、女（既婚）
(2) 現住所	シンガポール
(3) 出身国（出身地）	ニュージーランド（オークランド）
(4) 出身大学・学部・専攻	オークランド大学経営学部
(5) 出身大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業年月	1997年6月
(7) 言語 ①母語	中国語（福建語）
②英語の能力（自己評価）	a. 完璧 b. 完璧
a. 会話 b. 読み書き	
③その他の言語	中国語（北京語）

2. 現在の所属企業

(1) 業種

金融

(2) 企業規模

約 700 人

(3) 職務・職種

財務管理担当のマネジャー

(4) 賃金・労働条件など

①月例賃金は約 6,000S\$

②賃金は満足している。

(5) 企業で使う言語

①業務上で使用するのほとんど英語。

②ただ、クランクの一部は英語が不十分な者もあり、中国語（北京語）で話すこともある。ビルの清掃婦などにもものを頼む場合も中国語は必要。

(6) 企業に対する満足度

①（5段階の自己評価）「ほぼ満足」

②理由は、10年以上勤務しており、上司から信頼を得ている。

③現在の会社は今後大きく拡大するとは考え難いが、不景気に強く堅実に事業を運営しており、雇用不安はない。

④賃金はシンガポールの平均水準と考えている。

(7) 現在の職務に対する満足度

①（5段階の自己評価）「ほぼ満足」

②理由は、10年以上勤務しており、かなりの程度習熟しているからである。

3. 現在の企業に就職した経緯

(1) 大学卒業時にニュージーランドで専門性（経営学）を活かせるよう希望していた職が見つからず、シンガポールに在住していた親戚の紹介で、金融関係多国籍企業（アメリカ系）のシンガポール法人に職を得た。

(2) 企業では、財務管理を担当、現在はマネジャーのポストに就いている。転職経験はない。企業に入った当初はアシスタント・マネジャーで、10年後にマネジャーに昇格した。一貫して財務管理を担当している。

(3) シンガポール人と結婚したが、国籍はニュージーランドのまま。永住権（PR）を取得している。子供（2人）はシンガポール国籍。将来、ニュージーランドに帰国して生活することはないと考えているが、現在のところ、シンガポール国籍を取得する考えはない。ニュージーランド国籍は一度手放すと再取得は不可能に近い。

(4) 夫は中国系シンガポール人で、家庭では中国語（北京語）を日常語としている。子供に

対しては中国語（北京語）を最初に教えたが、小学校に入学してからは、学校が英語教育であることを考え、子供と英語による会話も交えている。

- (5) 夫婦共働きであるため、子供の世話と食事の支度はもっぱらメイド（フィリピン人、住み込み）に委ねている。メイドの賃金は月額 700S\$（約 5 万円）である。

4. 将来の計画・希望

- (1) 当面は、生活が安定しているので転職などは考えていない。
- (2) シンガポールでは、雇用者の上位 10%が転職を繰り返し、昇進を図っているといわれるが、一方で、1 つの企業で長く勤める者も少なくはない。自分は外国人であるけれども、今後も長くシンガポールで生活していくつもりである。そのためには、できる限り転職などのリスクを回避して安定した仕事をしていきたいと考えている。

第5章 韓国における調査結果

第1節 高度人材受入制度の概要と実態

1 ビザ類型別にみた高度外国人材受入制度

韓国で就業するために入国する外国人専門人材に関する在留資格をみると、つぎのとおりである。

韓国科学技術院など学術機関や専門大学（日本の短大に相当）以上の教育機関で任用する専任講師以上の教員には「教授（E-1）」という在留資格が与えられる。医学部の場合、講義の延長で実験・実習指導などは認められるが、診療費を受け取る診療行為は認められず、診療行為を行おうとするなら、別途専門職業（E-5）資格を受けなければならない。

「研究（E-3）」の在留資格が与えられるのは、①特定研究機関育成法および政府外郭研究機関などの設立・運営および育成に関する法律に基づく研究機関、②防衛産業に関する特別措置法によって国防大臣が委嘱した研究機関、③技術開発促進法令に基づいて研究担当要員を持続的に確保し独立した研究施設を備えた企業附属研究機関、④産業技術基盤づくりに関する法律による技術支援機関、⑤その他民法または他の法律によって設立された科学技術分野の非営利法人である研究機関およびその他科学技術分野の研究機関や団体、⑥営利を目的とする法人で自然科学分野の研究または産業上の高度技術の研究開発に従事する科学技術者、などである。

また、原則的に数次ビザ発給は国家間条約や相互主義によってなされるのが国際慣行であるが、韓国の場合、理科系修士学位以上の所持者であって該当分野の研究開発業務に3年以上従事した経験のある者や理科系博士学位の所持者に、韓国の技術開発向上に大きな貢献が期待できる人材である点を勘案して、有効期間3年の数次ビザを発給している。したがって、こうした専門人材の場合、一度ビザが発給されると別途のビザの発給を受けずに3年間自由に出入国ができる。

「専門人材（E-5）」資格が与えられるのは、①韓国の法律によって認定された外国の国家公認資格証を所持する者で、国土海洋大臣の推薦を受けた航空機操縦士、②最新医学および先端医療技術保有者で保健福祉大臣の雇用推薦を受けて国または地方自治体の医療機関、医療法人、非営利法人および政府投資機関が開設した医療機関に勤務しようとする医師、③国内の医（歯）学部を卒業した後に大学附属病院または保健福祉大臣が指定する病院などでインターン・レジデント課程を研修する者、④南北交流協力に関する法律の規定により南北協力事業の承認を受けた者が金剛山観光開発事業などの目的で招へいした者、⑤国内航空会社に雇用されて航空機操縦士として勤務しようとする者、⑥国内運送会社などに雇用されて船長など船舶運航の必須専門要員として勤務しようとする者、⑦南北交流協力に関する法律の規定により南北協力事業の承認を受けた者、などの専門人材である。

表 5-1-1 高度外国人材の在留資格別活動範囲と在留期間

	在留資格該当者または活動範囲	在留期間	ビザ発給申請時添付書類
教授 (E-1)	高等教育法による資格要件を備えた外国人であって、専門大学以上の教育機関またはこれに準ずる機関で専門分野の教育または研究指導活動に従事しようとする者	1年	①経歴証明書、②雇用契約書または任用予定確認書
会話指導 (E-2)	法務大臣が定める資格要件を備えた外国人であって、外国語専門学校、小学校以上の教育機関および附属語学研究所、放送会社および企業附属語学研修所、その他これに準ずる機関または団体で外国語会話指導に従事しようとする者	1年	①学位証または卒業証明書の写し、②雇用契約書、③学校または団体設立関連書類、④身元保証書
研究 (E-3)	韓国内の公・私機関から招へいを受けて各種研究所で自然科学分野の研究または産業上の高度技術の研究開発に従事しようとする者〔教授（E-1）資格に該当する者は除く〕	2年	①招へい機関設立関連書類、②学位証および経歴証明書、③雇用契約書
技術指導 (E-4)	自然科学分野の専門知識または産業上の特殊な分野に属する技術を提供するために、韓国内の公・私機関の招へいを受けて該当業務に従事しようとする者	2年	①派遣命令書または在職証明書、②技術導入契約申告受理書・技術導入契約書（もしくは用役取引認証書）または防衛産業指定書の写し、③公共・民間機関設立関連書類
専門職業 (E-5)	韓国の法律によって資格が認定された外国の弁護士、公認会計士、医師、その他国家公認資格を所持する者であって、韓国の法律によって該当職業活動を行うことができるようになっている法律、会計、医療などの専門業務に従事しようとする者〔教授（E-1）資格に該当する者は除く〕	2年	①学位証および資格証の写し、②所管中央行政機関の長の雇用推薦書または雇用の必要性を立証することのできる書類、③雇用契約書
芸術興行 (E-6)	収益が伴う音楽、美術、文学などの芸術活動と収益を目的とする芸能、演奏、演劇、運動競技、広告・ファッションモデル、その他これに準ずる活動を行おうとする者。芸術芸能（E-6-1）、ホテル遊興（E-6-2）、運動（E-6-3）	6カ月	(1)観光ホテル、遊興施設で公演または芸能活動に従事しようとする場合：①映像物等級委員会の公演推薦書、②公演計画書、③後天性免疫不全症候群（HIV）テスト証明書、④身元保証書 (2)その他の場合：①所管中央行政機関の長の雇用推薦書または雇用の必要性を立証することのできる書類、②資格証明書または経歴証明書、③身元保証書
特定活動 (E-7)	韓国内の公・私機関などとの契約によって法務大臣が特に指定する活動に従事しようとする者	2年	①学位証または資格証の写し、②雇用契約書、③所管中央行政機関の長の雇用推薦書や雇用の必要性を立証することのできる書類、④公共・民間機関設立関連書類、身元保証書

出所：出入国管理法施行令〔別表1〕（改正2009.3.31.）、出入国管理法施行規則〔別表1〕（改正2009.4.3.）

創作活動を行う作曲家、画家、彫刻家、工芸家、著述家および写真作家などの芸術家、音楽、美術、文学、写真、演奏、舞踊、映画、体育、その他の芸術上の活動に関する指導を行う者に対しては、「芸術興行（E-6）」資格がある。

2 高度外国人材誘致のための政府支援制度

(1) ITカード制度

ITカード制度はIT分野先端外国人材の誘致を制度的に支援する目的で導入された制度で、①海外IT専門人材の発掘、誘致支援のための大臣推薦状の発給を通じてIT分野専門人材難解消と高度な技術の確保、②IT技術人材人件費上昇による価格競争力の低下を防ぎ、IT産業をグローバル化すること、に目的がある。対象および資格基準は情報技術（IT）、電子商取引と企業情報化（e-business）関連分野に5年以上従事した経験のある者、同関連学科の学士以上学歴所持者であって該当分野に2年以上従事した経験のある者、または学士学位所持者のうち国内で学士学位を取得した者と国内で修士以上の学位取得者（施行日2005.6.27）であって所管省庁（情報通信省）大臣の雇用推薦がある者などである。

ITカードを申請するためには、①履歴書（学士以上の学位所持者は学位証の写しを添付）、②雇用契約書、③所管省庁大臣の雇用推薦書、を提出しなければならない。ITカード保有者には数次ビザが発給され、勤務先の変更が可能である。雇用推薦申請対象は海外IT技術人材を雇用しようとする法人企業で海外の高度IT技術人材の雇用を希望する企業がITベンチャー企業連合会（KOIVA）に該当人材の雇用推薦を申請すると、KOIVAは資格基準および先端技術範囲の該当の有無を審査して情報通信大臣の雇用推薦状を発給することになる。

表 5-1-2 ITカードの短期および数次ビザの比較

	一次ビザ	数次ビザ
有効期間	1年	3年
在留資格	短期就業（C-4）	長期就業（E-7）
在留期間	90日以下（雇用契約期間の間）	3年以下（雇用契約期間の間）

(2) ゴールドカード制度

ゴールドカード制度は知識経済省が主管する「海外技術人材導入制度」で、海外技術人材を雇用しようとする企業に知識経済大臣の委任を受けた韓国産業技術財団が事務総長名義の雇用推薦状を発給して、「特定活動ビザ（E-7）」発給を支援することによって出入国上の特典を付与する制度である。該当分野は、①情報技術分野、②電子商取引など企業情報化（e-business）分野、③生物産業分野（BT）、④ナノ技術分野（NT）、⑤新素材分野（金属、セラミックス、化学）、⑥輸送機械分野、⑦デジタル家電分野、⑧環境・エネルギー分野、などである。

資格基準は関連分野に5年以上従事した経験がある者、同関連学科の学士以上の学歴所持者であって該当分野に2年以上従事した経験のある者などである。学士所持者のうち韓国で学士を取得した者と修士以上の学位取得者は実務経験がなくとも就業を許容（施行日2005.6.27）することになっている。

出入国上の特典としてはビザ発給において有効期間5年（一般E-7は3年）の「特定活動（E-7）」数次ビザを発給する。ただし、短期雇用契約者は有効期間1年の短期就業（C-4）数次ビザを発給する。在留許可は1回に在留期間3年で、在留資格以外の活動を許容し、勤務先の変更が許可される（一般的な場合は有効期間1年の一次ビザ発給、1回の在留期間は2年である）。

（3）サイエンスカード制度

サイエンスカード制度は教育科学技術省（旧科学技術省）が主管して外国高度科学技術人材に対するビザ発給や在留許可を認める制度で、2001年12月1日から施行された。外国人高度科学技術人材に韓国のビザ取得と国内在留関連（資格、活動、期間など）許可過程における便宜が、①専門大学以上の教育機関や政府外郭（研）、国・公立（研）、企業付属（研）など理科系研究機関の研究開発業務に3年以上従事した経験がある者、②理科系博士学位所持者、に提供される。

資格基準に該当して大学などに雇用予定である外国人科学技術者に対しては、国内入国に関連して取得するビザ、在留資格、在留期間関連支援を行い、発給されるビザおよび在留期間は数次ビザで在留期間は5年である。在留資格は教授（E-1）は教育法による資格要件を備えた外国人であって専門大学以上の教育機関、またはこれに準ずる機関で専門分野の教育または研究指導活動に従事しようとする者であり、研究（E-3）は韓国内の公共・民間機関から招へいされて各種研究所で自然科学分野の研究、または産業上の高度技術の研究開発に従事しようとする者である。資格基準は博士学位所持者、修士以上の学歴所持者であって該当分野に3年以上従事した経験のある者である。

（4）韓国科学技術団体総連合ーブレイン・プール制度

この制度は国際化、情報化にともなう競争力強化のために、優秀な海外在住韓国人および外国人科学技術者を組織的に招へいして、研究開発段階の最新科学技術やノウハウなどを早期に習得し、国際的水準の科学技術者を研究開発現場に投入、研究開発水準を高めることによって、先進国の中核技術移転忌避など技術保護主義障壁を打破し、研究の環境づくりを促進することを目的に導入された。

対象分野は国家戦略開発対象の科学技術のあらゆる分野であり、①基礎分野（数学・物理学・化学・生物・地球科学・測定・標準・天文など）、②機械・素材・航空宇宙分野（機械・船舶・航空・宇宙・素材など）、③電気・電子・情報通信分野（電気・動力・電子・コン

ピュータ・通信・光技術・応用物理など)、④化学工学・生命科学分野(応用化学・化学工学・生命工学・農水産・保健など)、⑤資源・海洋分野(資源・海洋・環境・建設など)、⑥エネルギー分野(原子力など)、が含まれる。

支援内容は滞在費、往復航空料金、引越費用、傷害・疾病保険などである。滞在費は招へい対象者の研究経験や出身国における報酬、科学論文引用指数(SCI)、雑誌論文掲載実績、特許件数などを考慮した算定基準により支援する。航空料金はエコノミークラス往復航空料金を支援(招へい期間6カ月以上の場合配偶者の往復航空券支援)し、引越費用は招へい期間12カ月以上の場合、招へい対象者の地域を考慮して入国時にのみ支給し、傷害・疾病保険料は受入機関が指定保険会社に直接加入した後、財団に通知すると保険会社から受入機関に保険証券を交付する方式により支援する。

(5) 中小企業振興公団-高度外国人材導入支援事業

この事業は基礎技術や情報通信分野の高度研究人材が豊富なロシア、インドなどから高度技術人材を韓国の中小企業に長期導入することを支援して、中小企業の高度技術労働力難を解消し、新技術開発を通じて国際競争力を強化する目的で発足した。支援対象、条件、支援内容は表5-1-3に整理した。

(6) 韓国科学財団-外国人科学技術者国内招へい研修事業

この事業は新進科学技術研究人材の研究能力培養と併せて、科学技術人材の交流を促進することによりAPEC加盟国の科学技術研究の活性化と科学技術交流の促進、協力を拡大する目的で導入された。対象分野は理科系全分野であり、研修期間は6カ月以上、1年以下(追加支援なしで延長可能)で、支援対象はAPEC加盟国の博士学位所持者で40歳以下に優先権が与えられる。研究機関は研究施設が良好な大学、国・公立(研)、政府外郭(研)、企業(研)などであり、滞在費(130万ウォン/月)、保険料、往復航空券などが支援される。

(7) 慶南テクノパーク-海外技術者招へい技術指導事業

機械産業分野(一般機械、電気機械、輸送機械、精密機械、機械部品・素材、科学・技術サービス業種のうち建築物、製品検査業など韓国産業分類による機械産業)と機械産業関連技術分野(情報通信およびソフトウェア分野)において、国籍に関係なく該当分野の優秀な技術を有する者(韓国国籍者を除く)、支援分野に関連する中核技術を保有する者に支援を行う制度である。招へい期間は1カ月以上、12カ月以下であり、契約期間終了後、成果により継続課題で支援を受けることが可能である。航空料金、諮問料、移転費(6カ月以上在留時にのみ支給)、住宅賃借料などが支援される。

表 5-1-3 中小企業振興公団－海外高度技術人材導入支援事業

区分	専門外国人材の導入
専門分野	○製造業（専業率 30 %以上） ○製造業以外の知識基盤サービス業のうち中小企業人材支援 ○特別法施行令で定めた業種（付加通信業、情報処理およびその他コンピュータ運営関連業、自然科学研究開発業、エンジニアリングサービス業、専門デザイン業）
支援対象企業	○海外高度技術人材を導入しようとする上記分野中小製造企業 （知識基盤サービス業を含む）
学歴および経歴	○学士学位以上の者であって該当分野 3 年（修士学位以上の場合 2 年）以上の経験者 ○学士学位所持者のうち国内で学士学位を取得した者と国内で修士以上の学位取得者（施行日 2005.6.27） ※ただし一般製造業の場合、技術先進国の高卒以上の者であって該当分野で 10 年以上の経験のある者
活用期間	最少 6 カ月以上当該海外高度技術人材と労働契約締結予定企業

○支援内容

	専門外国人材導入
滞在費	○海外高度技術人材が入国した日から 6 カ月間滞在費支援 ○導入人材の専門分野による支援 -製造業関連人材は年俸ベース 40 %、-知識基盤サービス業人材は年俸ベース 30 %支援 -支援限度：年 1,000 万ウォン/人（海外技術人材活用期間により支援） ※製造業分野で知識基盤サービス関連人材を導入する場合は知識基盤サービス支援基準による。
航空料金	○往復航空料金支援。国内線は支援せず、国際直航路線ベース。-導入人材の入国時に支援
発掘手数料	○発掘機関に人材導入依頼時（独自発掘は除く）。導入人材 1 人当たり 220 万ウォンを限度に導入人材の入国時に支援
支援人員	○1 企業当たり 5 人が限度 ○事業年度に対する制限なしに毎年申請可能
受付期間	○年間を通じて随時受付

2. 専門外国人材の状況

2009 年末現在の専門外国人材ビザで入国して在留している人材（不法在留者を含む）は、教授（E-1）2,056 人、会話指導（E-2）22,642 人、研究（E-3）2,066 人、技術指導（E-4）197 人、専門職業（E-5）536 人、芸術興行（E-6）4,305 人、特定活動（E-7）8,896 人である。以下において 2008 年 9 月末現在の法務省資料を用いて専門人材の特徴を記す。

（1）年齢別、ビザ類型別分布

専門人材の年齢をみると 30～40 歳代が大部分であり 50 歳以上は少ない。

ビザ類型別に区分してみると、E-3 と E-7 は 30 代の占める比率が高いが、E-4 と E-5 は 50 代が最も高い比率を占める。E-4 は 50 歳以上がビザ取得者全体の 50.0%に達し、E-5 は 50

代が 53.4%を占める。ビザ類型別出身国分布をみると、専門人材は 100 余カ国から入国したことが明らかになったが、いくつかの特定国出身者の比率が著しく高い。

中国出身専門人材が 30.6% (2,782 人) で最も多く、ついでインド (11.9%)、米国 (10.2%)、日本 (7.8%)、フィリピン (4.4%) の順で、アジア出身の専門人材の比率が高い。ビザ類型別に区分してみると、E-3 はインドが 27.4%で最も高い比率を占め、次に中国、日本、ロシアの順に高い。先進国出身者の比率は低く、開発途上国や旧社会主義国出身者の比率が高い。

表 5-1-4 ビザ類型別専門人材の年齢と入国年の分布

		2005 年以前 (%)	2005 年 (%)	2006 年 (%)	2007 年 (%)	2008 年 (%)	合 計	
							人数	%
E-3	30 歳未満	13.2	27.5	28.7	25.1	25.9	490	23.4
	30 歳代	47.2	47.5	52.2	52.6	49.8	1,050	50.1
	40 歳代	20.1	15.4	10.7	12.3	13.1	301	14.4
	50 歳以上	19.5	9.6	8.4	9.9	11.3	255	12.2
	人数計	508	240	429	513	406	2,096	100.0
E-4	30 歳未満	0.0	12.5	0.0	7.5	5.3	8	5.2
	30 歳代	25.0	12.5	8.3	17.0	22.8	30	19.5
	40 歳代	16.7	25.0	16.7	35.8	28.1	43	27.9
	50 歳以上	58.3	50.0	75.0	39.6	43.9	73	47.4
	人数計	24	8	12	53	57	154	100.0
E-5	30 歳未満	1.2	3.4	0.0	0.9	1.0	5	1.1
	30 歳代	1.2	0.0	3.0	17.4	9.1	32	6.7
	40 歳代	26.2	24.1	37.3	43.1	58.6	182	38.2
	50 歳以上	71.5	72.4	59.7	38.5	31.3	257	54.0
	人数計	172	29	67	109	99	476	100.0
E-7	30 歳未満	16.0	27.7	31.9	38.2	37.5	2,060	32.4
	30 歳代	39.1	43.9	45.4	43.8	41.7	2,743	43.1
	40 歳代	20.3	18.1	14.9	10.2	12.2	885	13.9
	50 歳以上	24.6	10.3	7.8	7.7	8.6	677	10.6
	人数計	921	697	1,358	2,235	1,154	6,365	100.0

注：入国年情報不在者（9 人）があり、ビザ類型別人員の合計は各年齢層の合計と一致しない。

出所：韓国法務省、外国人材データベース

E-5 は外国の弁護士、公認会計士、医師、その他国家公認資格を所持する者であって、法律、会計、医療などの専門業務に従事しようとする者に発給されるビザで、米国、カナダ、英国のような先進国のほかに、インドネシア、ブラジル、マレーシアの占める比率が高い。

E-7 は中国が取得者全体の 36.8%を占める。韓国系中国人を加えると、中国が占める比率が 40%に達している。主に飲食業従事者の比率が高い。

専門人材のビザ類型別平均在留期間をみると、平均在留期間は 29.0 カ月である。ビザ類

表 5-1-5 ビザ類型別専門人材の主要出身国

(人、%)

E-3			E-4			E-5		
国名	人数	%	国名	人数	%	国名	人数	%
インド	575	27.4	日本	25	16.2	米国	64	13.4
中国	431	20.5	ロシア	19	12.3	カナダ	45	9.5
日本	302	14.4	フィリピン	17	11.0	インドネシア	40	8.4
ロシア	206	9.8	ドイツ	16	10.4	ブラジル	35	7.4
韓国系中国人	98	4.7	米国	15	9.7	オーストラリア	33	6.9
米国	59	2.8	フランス	15	9.7	フィリピン	30	6.3
ウクライナ	47	2.2	英国	11	7.1	英国	26	5.5
ベトナム	46	2.2	インド	5	3.2	マレーシア	26	5.5
バングラデシュ	31	1.5	デンマーク	4	2.6	ロシア	22	4.6
フランス	24	1.1	中国	3	1.9	台湾	17	3.6
ベラルーシ	22	1.0	トルコ	3	1.9	ブルガリア	14	2.9
ドイツ	21	1.0	オーストリア	3	1.9	ドイツ	11	2.3
ネパール	18	0.9	ウクライナ	2	1.3	メキシコ	11	2.3
パキスタン	18	0.9	インドネシア	2	1.3	ベルギー	9	1.9
ウズベキスタン	17	0.8	カナダ	2	1.3	南アフリカ共和国	9	1.9
その他	183	8.7	その他	12	7.8	その他	84	17.6
合計	2,098	100.0	合計	154	100.0	合計	476	100.0
E-7			合計					
国名	人数	%	国名	人数	%			
中国	2,348	36.8	中国	2,782	30.6			
米国	788	12.4	インド	1,081	11.9			
インド	500	7.8	米国	926	10.2			
日本	378	5.9	日本	706	7.8			
フィリピン	337	5.3	フィリピン	401	4.4			
カナダ	203	3.2	ロシア	367	4.0			
ベトナム	198	3.1	韓国系中国人	290	3.2			
韓国系中国人	192	3.0	カナダ	262	2.9			
英国	141	2.2	ベトナム	244	2.7			
タイ	141	2.2	英国	186	2.0			
ロシア	120	1.9	タイ	152	1.7			
オーストラリア	83	1.3	オーストラリア	120	1.3			
フランス	73	1.1	ドイツ	119	1.3			
ドイツ	71	1.1	フランス	116	1.3			
ネパール	63	1.0	インドネシア	105	1.2			
その他	736	11.6	その他	1,243	13.7			
合計	6,372	100.0	合計	9,100	100.0			

出所：韓国法務省、外国人材データベース

型別に比較してみると、E-5 が 48.5 カ月で平均在留期間が最も長く、他のビザは大きな差はない。年齢別に比較してみると、E-5 の 30 歳未満を除き、おおむね年齢が高いほど平均在留期間が長い。

表 5-1-6 ビザ類型別平均在留期間

						(カ月)
		E-3	E-4	E-5	E-7	計
年 齢	30 歳未満	25.1	13.3	155.7	20.7	21.6
	30 代	28.6	28.8	14.7	24.5	25.6
	40 代	35.1	18.9	32.6	32.9	33.0
	50 歳以上	42.2	32.5	60.2	42.8	45.7
不法かどうか	不法	28.8	42.4	71.6	31.7	32.9
	合法	31.0	26.5	47.2	26.7	28.7
入国年度	2005 年以前	68.2	109.1	104.9	77.4	77.9
	2005 年	38.9	38.7	37.7	37.7	38.0
	2006 年	25.9	27.3	26.6	26.4	26.3
	2007 年	14.3	13.5	14.7	14.8	14.7
	2008 年	5.3	4.5	5.7	4.5	4.7
合 計		30.8	27.5	48.5	26.9	29.0

出所：法務省、外国人材データベース

(2) 高度外国人材を雇用する事業所の状況

専門人材全体の 24.3%が飲食宿泊業に雇用されており、製造業 21.2%、社会サービス業 16.0%、教育サービス業 14.2%の順で、これら 4 業種で専門人材全体の 75.7%を占めている。残りの業種は比率が低い。

ビザ類型別に就業業種を比較してみると、E-3 は製造業が 38.7%で最も高い比率を占め、ついで事業サービス業 (25.1%)、教育サービス業 (21.2%)、公共行政・国防・社会保障行政 (12.0%) の順で高く、E-3 ビザ専門人材を活用する企業はいくつかの業種に集中している。

E-3 ビザは各種研究所で自然科学分野の研究または産業上の高度技術の研究開発に従事しようとする者に発給されるビザであるが、教育サービス業就業者の比率が高いのが特徴である。

E-4 は製造業 (53.8%) と事業サービス業 (31.9%) の比率が 85.7%と大部分を占め、残りの業種は 1～2 人に過ぎない。

E-5 ビザの場合、弁護士、会計士などの公認資格を所持する者に発給するビザであるにもかかわらず、韓国の場合、航空機操縦士だけが活用し、残りの専門資格取得者の活用はほとんどないのが特徴である。

E-7 は飲食宿泊業が 35.4%で最も多く、製造業 (16.2%)、事業サービス業 (13.8%)、教育

サービス業（13.3%）の順で高い。E-7 ビザの場合、比較的多様な性格の職種が混在しているが、相対的に調理師の比率が高い。

専門人材雇用企業の事業所規模をみると、30 人未満の企業就業者が専門人材全体の 40.2%を占めるなど、43.7%が 100 人未満の企業に就業している。1,000 人以上の大規模事業所に就業している者は 24.8%で、300 人以上の事業所に 36.6%が雇用されている。

表 5-1-7 高度外国人材雇用企業の業種別分布

	E-3		E-4		E-5		E-7		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
農林業	1	0.1	—	—	—	—	—	—	1	0.0
漁業	—	—	—	—	—	—	3	0.1	3	0.0
鉱業	—	—	—	—	—	—	1	0.0	1	0.0
製造業	753	38.7	64	53.8	—	—	903	16.2	1,720	21.2
電気・ガス・水道事業	3	0.2	1	0.8	—	—	5	0.1	9	0.1
建設業	24	1.2	8	6.7	—	—	357	6.4	389	4.8
卸小売業	16	0.8	2	1.7	—	—	333	6.0	351	4.3
宿泊・飲食店業	—	—	1	0.8	—	—	1,970	35.4	1,971	24.3
運輸業	1	0.1	0	—	465	98.5	114	2.0	580	7.2
通信業	—	—	0	—	—	—	25	0.4	25	0.3
金融・保険業	—	—	0	—	—	—	165	3.0	165	2.0
不動産賃貸業	—	—	0	—	—	—	33	0.6	33	0.4
事業サービス業	488	25.1	38	31.9	—	—	769	13.8	1,295	16.0
公共行政・国防・社会保 障行政	233	12.0	4	3.4	—	—	30	0.5	267	3.3
教育サービス業	413	21.2	—	—	—	—	739	13.3	1,152	14.2
保健・社会福祉事業	6	0.3	—	—	7	1.5	6	0.1	19	0.2
娯楽・文化・運動関連サ ービス業	1	0.1	—	—	—	—	65	1.2	66	0.8
その他公共・修理・個人 サービス業	5	0.3	1	0.8	—	—	51	0.9	57	0.7
全体	1,944	100	119	100	472	100	5,569	100	8,104	100.0

出所：法務省、外国人材データベース

ビザ類型別に比較してみると、E-3 は 300 人以上規模の企業の就業者が 60.2%に達し、E-4 もやはり 74.7%が 300 人以上の企業に就業している。E-5 は大部分が航空機操縦士である関係で 99.4%が 300 人以上の事業所就業者であるのに比べて、E-7 は 30 人未満の事業所就業者が 53.8%に達し、300 人以上の事業所就業者は 22.5%にとどまっている。結論として、E-7 を除く専門人材の大部分が事業所規模が大きい企業に雇用されているが、E-7 のみ宿泊・飲食店業就業者の比率が高いことから 30 人未満の事業所就業者の比率が相対的に高い。

表 5-1-8 ビザ類型別にみた就業事業所規模

	E-3		E-4		E-5		E-7		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
30 人未満	212	11.9	11	9.9	0	0.0	2,840	53.8	3,063	40.2
30～99 人	207	11.6	2	1.8	1	0.2	819	15.5	1,029	13.5
100～299 人	292	16.3	15	13.5	2	0.4	430	8.2	739	9.7
300～999 人	437	24.5	43	38.7	131	29.3	291	5.5	902	11.8
1000 人以上	638	35.7	40	36.0	313	70.0	895	17.0	1,886	24.8
合 計	1,786	100.0	111	100.0	447	100.0	5,275	100.0	7,619	100.0

注：不法在留者は除外。

出所：韓国法務省、外国人材データベース

専門人材のうち最も高い比率を占めている E-7 ビザ取得者の細かい職種別分布をみると、調理師長・調理師が 2,107 人で取得者全体の 33.1% を占める。

続いて、外国学校教師（12.6%）、自動車、造船、飛行機、鉄道車両分野の工学分野専門家（5.0%）、飲食サービス関連管理者（4.3%）、プラント工学技術者と海外営業員（それぞれ 3.1%）の順である。

表から確認できるように、E-7 ビザの場合、非常に多様な職種が混在している。これは E-7 ビザが公共・民間機関などとの契約によって法務大臣が特に指定する活動に従事しようとする者に発給されるためである。すなわち該当分野の管理者から技術関連専門家、調理師、デザイナー、語学分野（教師、通訳者）まで職務分野が非常に多様である。同一のビザ類型であるにもかかわらず専門性の程度が異質な職種が混在している。

表 5-1-9 E-7 ビザ取得者の主な職種

(人、%)

職 種	人数	%	職 種	人数	%
調理師長・調理師	2,107	33.1	経済支援管理者	100	1.6
外国人学校、外国教育機関、国際高校教師	804	12.6	通信工学技術者	97	1.5
自動車、造船、飛行機、鉄道車両工学専門家	318	5.0	商品企画専門家	91	1.4
飲食サービス関連管理者	277	4.3	情報通信関連管理者	82	1.3
プラント工学技術者	196	3.1	金融・保険専門家	81	1.3
海外営業員	196	3.1	販売事務員	78	1.2
翻訳者・通訳者	192	3.0	機械工学技術者	77	1.2
電子工学技術者	149	2.3	営業・販売関連管理者	74	1.2
システムソフトウェア開発者	109	1.7	その他教育関連専門家	62	1.0
応用ソフトウェア開発者	107	1.7	経営・診断専門家	61	1.0
建築家・建築工学技術者	105	1.6	保険・金融管理者	61	1.0
—	—	—	合 計	6,372	100.0

注：E-7 ビザのみ。

出所：韓国法務省、外国人材リストデータベース

表 5-1-10 国別にみた就業職種

(人、%)

米 国		
職 種	人 数	%
外国人学校、外国教育機関、国際高等学校教師	478	60.66
翻訳者、通訳者	32	4.06
金融・保険専門家	24	3.05
経営・診断専門家	23	2.92
その他教育関連専門家	22	2.79
E-7 ビザ小計	579	73.48
総 合 計	788	100.00
日 本		
職 種	人 数	%
電子工学技術者	39	10.32
技術経営専門家	31	8.20
機械工学技術者	27	7.14
翻訳者、通訳者	27	7.14
自動車、造船、飛行機、鉄道車両工学専門家	26	6.88
E-7 ビザ小計	150	39.68
総 合 計	378	100.00
ロ シ ア		
職 種	人 数	%
翻訳者、通訳者	19	15.83
海外営業員	12	10.00
自動車、造船、飛行機、鉄道車両工学専門家	9	7.50
商品企画専門家	8	6.67
営業・販売関連管理者	7	5.83
E-7 ビザ小計	55	45.83
総 合 計	120	100.00
イ ン ド		
職 種	人 数	%
自動車、造船、飛行機、鉄道車両工学専門家	118	23.6
調理師長、調理師	109	21.80
プラント工学技術者	43	8.60
通信工学技術者	29	5.80
システムソフトウェア開発者	28	5.60
E-7 ビザ小計	327	65.40
総 合 計	500	100.00
中 国		
職 種	人 数	%
調理師長、調理師	1,646	70.10
飲食サービス関連管理者	247	10.52
海外営業員	64	2.73
情報通信関連管理者	33	1.41
運送サービス従事者	31	1.32
E-7 ビザ小計	2,021	86.08
総 合 計	2,348	100.00
韓 国 系 中 国 人		
職 種	人 数	%
調理師長、調理師	44	22.92
海外営業員	15	7.81
翻訳者、通訳者	12	6.25
運送サービス従事者	11	5.73
情報通信関連管理者	10	5.21
E-7 ビザ小計	92	47.92
総 合 計	192	100.00

注：総合計は「E-7 ビザ」以外の専門人材向けビザ取得者を含む合計人数。

出所：法務省、外国人材リストデータベース

調理師長・調理師以外に販売事務員、運送サービス従事者、航空運送事務員、造船溶接技能工も専門人材に分類されている。これらの職種が高い知識と学力、専門性を要する職務であるとみるには難しい面もある。

最後に E-7 ビザ取得者のうち国籍別に就業者比率が高い上位 5 職種をみると、国籍別職種構成に大きな差があることが分かる。

米国出身専門人材の場合、英語関連教育や通訳・翻訳分野（64.7%）従事者が最も多く、その次に金融・保険分野の専門家、経営・診断専門家の順が多い。米国出身専門人材の大部分は教育や金融・経営分野に従事している。

日本は電子工学技術者が 10.3%で最も高い比率を占め、技術経営専門家、通訳・翻訳の順で比率が高い。日本の人材は技術や工学分野に雇用される比率が高い。

インドはよく知られているように、工学技術者、ソフトウェア分野の比率が高く、調理師も 21.8%に達する。

中国出身専門人材は大部分が飲食関連分野（80.6%）に就業している。韓国系中国人も飲食分野就業者の比率が最も高いが、韓国語と中国語を駆使することができるという長所があるためか、通訳・翻訳、海外営業員として活動している比率も高い。

参考文献（本節のみ）

- イ・ギュヨン他（2007）「外国人材労働市場分析及び中長期管理体系改善方向の研究」韓国労働研究院（韓国語）
- イ・ギュヨン他（2005）「専門技術外国人材労働市場分析」韓国労働研究院（韓国語）
- イ・ギュヨン他（2008a）「海外優秀技術人材誘致支援制度発展方策」韓国労働研究院（韓国語）
- イ・ギュヨン他（2008b）「専門外国人材ビザ制度改善方策に関する研究」法務省（韓国語）

第 2 節 調査結果

1 調査方法について

韓国における調査は、韓国労働研究院（KLI）との共同調査として 6 月下旬から 7 月末にかけて実施した。

ヒヤリング調査に先立ち、労働政策研究・研修機構の要望により KLI 研究員が高度外国人材の受入制度と実態に関する文献サーベイを実施した。これに基づきヒヤリングの調査項目などの基本的設計は労働政策研究・研修機構が行い、韓国特有の事情を加味して KLI がこれを一部修正、ヒヤリングは KLI 研究員が各調査対象者について個別に実施した。

高度人材の定義は、基本的には序章「調査の目的と概要」で示した本調査の定義に基づき、韓国の受入制度にそくして「教授（E-1）」「研究（E-3）」「技術指導（E-4）」「専門職業（E-5）」「特定活動（E-7）」の各ビザを取得して韓国で働いている外国人とした。各ビザに関しては本章第 1 節で詳細に説明した。韓国におけるこれらのビザ取得者は、本

調査の定義から大きく逸脱することはない。日本のビザ制度の「研究（企業内の研究者）」「技術（機械工学等の技術者、システムエンジニア等のエンジニア）」「人文知識・国際業務（企画、営業、経理などの事務職、企業内通訳、デザイナー等）」などは、韓国の制度と極めて類似している。なお、韓国の高度外国人材に発給するビザには上記以外に「会話指導（E-2）」「芸術興行（E-6）」が含まれるが、本調査ではこの2つのビザ取得者は調査対象から除外した。

2 用語の定義について

「職務・職種」の呼称については各企業によって異なり、またヒヤリング対象者の表現にもかなりの違いがあった。「シンガポールにおけるヒヤリング記録」で述べたようにシンガポールにおいては企業の枠を超えてある程度、社会的に共通した「職務名」が定着しているようであるが、韓国においては必ずしもそうした状況にないことから、ヒヤリング対象者が説明した具体的な仕事の内容を「職務・職種」とした。

「賃金・労働条件など」については、月例賃金額を中心に、ヒヤリング対象者の回答をそのまま記した。

表 5-2-1 韓国の調査対象者

(人)					
出身国	合計	男	女	大学卒	大学院修了
中国	6	3	3	2	4
ベトナム	5	4	1	3	2
合計	11	7	4	5	6

3 調査結果

(1) 調査対象者の属性

調査対象者は表 5-2-1 に示したとおり 11 人で、出身国別にみると中国 6 人、ベトナム 5 人である。男女別では男 7 人、女 4 人。年齢は 26 ～ 43 歳であるが、43 歳の 1 人を除くと 26 ～ 30 歳であり、比較的若いことが調査対象者の属性の 1 つの特徴である。

学歴をみると、大学卒が 5 人で、うち 4 人が出身国の大学、1 人が韓国の大学を卒業している。大学院修了は 6 人で、全員が韓国の大学院を修了。すなわち、韓国への留学生が 7 人含まれており、7 人とも韓国企業に就職している。留学生が全員韓国で就職していることも特徴の 1 つである。

留学生の出身国別内訳をみておくと、中国が 6 人中 5 人で、留学経験のない 1 人は上記した 43 歳と比較的年齢の高い者（男性）で、かれはこの調査対象者のなかではやや例外的な存在である。ベトナムは 5 人中 2 人が留学経験がある。理科系・文科系別でみると、理科系が 8 人、文科系が 3 人である。

つぎに韓国で高度人材として働く際のビザの種類別に調査対象者をみると、つぎのようになっている。

表 5-2-2 調査対象者の取得ビザ

(人)

	合 計	中国出身者	ベトナム出身者
教授 (E-1)	1	1	—
研究 (E-3)	1	1	—
技術指導 (E-4)	1	1	—
特定活動 (E-7)	8	3	5
合 計	11	6	5

上の表で分かるように、ベトナム出身者は全員 E-7 ビザで、中国出身者も E-7 ビザが 3 人と多い。本章の第 1 節でみたように、高度人材として韓国の企業で働く際のビザは E-7 が最も一般的で、今回の調査対象者もその例にもれない。

この項の最後に言語事情をみておく。中国出身者は全員、中国語を母語としており、全員が韓国語を解すると答えている。なかには「中国国籍の朝鮮族」で、「中国語より韓国語が得意」と答えた者が 1 人いる。また、中国の大学の「朝鮮語学科」を卒業した者が 2 人いる。これが韓国に留学した理由であるようだ。いずれにせよ、中国出身者の韓国語能力は高いといえる。

これに対し、ベトナム出身者は、留学経験のある 2 人を除いて「韓国語が難しい」と答えており、まったく韓国語を解さない者も 1 人いた。この点は、この後の「現在の企業に対する貢献、職場生活など」の項でもう 1 度検討する。

既婚者は 4 人、独身者が 7 人。既婚者の配偶者はいずれも出身国の者である。既婚者のうち 2 人は韓国で「単身赴任」生活をしている。うち 1 人は「家族を呼び寄せようとしたが、ビザを取るのが難しかった」と諦め顔で語った。

(2) 現在の所属企業

現在の所属企業は、1 つはビザの種類で分類できる。「教授 (E-1)」ビザの 1 人は大学、「研究 (E-3)」ビザの 1 人は政府関係研究機関、「技術指導 (E-4)」の 1 人は民間企業であるが製薬会社で薬品開発を指導、他の 8 人は「特定活動 (E-7)」ビザで、うち 7 人が民間企業、1 人が政府関係研究機関である。

民間企業の業種は、IT 関連・通信が 3 社、いずれもベトナムから来たエンジニアである。これに IT 関連・通信の政府関係研究機関に勤めるベトナム出身者を加えると、ベトナムの 5 人のうち 4 人は IT 関連・通信の業種で働いていることになる。

業種からみたもう 1 つの特徴は、市場コンサルティング会社、投資分析会社で働く中国出身者である。いずれも女性で、中国語を活かした職務に就いている。

賃金は税金、社会保険料を差し引いた手取額で 100 ～ 250 万ウォンと差が大きい。2010 年 7 月時点の為替レートで約 9 ～ 23 万円である。第 4 章でみたシンガポールと比較して、半額ほどだ。この賃金について、中国出身者は 6 人中 2 人が「中国の約 2 倍」と答え、4 人は「中国と同水準」と答えている。一方、ベトナム出身者は 5 人中 4 人が「ベトナムの約 2 倍」と答え、1 人は「3 倍」と自分の賃金を評価している。

企業に対する満足度、現在の職務に対する満足度について、第 4 章のシンガポールと同様に、「満足」「ほぼ満足」「可もなく不可もなし」「やや不満」「不満」の 5 段階の指標で答えてもらい、その理由を質問した。結果はつぎの表のとおりである。この結果から大きな特徴は見い出せないが、あえていえば、「不満」「やや不満」の回答がないことである。

表 5-2-3 企業と職務に対する満足度

(人)

	企業に対する満足度	現在の職務に対する満足度
満 足	4	3
ほぼ満足	5	5
可もなく不可もなし	2	3
やや不満	—	—
不 満	—	—
	11	11

(3) 現在の企業に就職した経緯

韓国で就職した理由は「外国で仕事をする経験を積みたかったから」が 11 人中 7 人と最も多かった。後段の「将来の計画・希望」の項でも検討するが、「経験」を就職理由にあげた回答者は、いずれも近い将来に出身国に帰ることを考えている。

「賃金が高い」と答えた者は、ベトナム出身者の 3 人である。うち 2 人は「賃金」と並んで「経験」と答えている。「賃金が高い」とする回答が予想外に少なかった。

その他の理由は、「夫が韓国で勤めているので」「技能を見込まれてスカウトされたので」が各 1 人あった。

「スカウト」された者の回答は例外的であるが、高度人材の 1 つのあり方として以下に紹介しておく。

「現在勤めている韓国の会社の社長が、自分が勤めていた中国の会社に要請し、当初は“派遣形式”で韓国の会社に勤務することになった。現在は、韓国の会社に就職し仕事をしている」「自分が韓国に来た当初は、韓国には自分と類似の技術を持ったエンジニアはいなかった。現在は他の韓国人エンジニアもこの技術を学んで中国人エンジニア(自分)がいなくても工場が稼働できるようになっている」。

募集情報の入手経路は、「インターネット」が大半で 6 人、「知人の紹介」が 3 人、「スカウト」1 人、「留学先の大学院に企業が直接募集に来た」が 1 人である。

就労ビザの取得は個人では難しいようで、多くが就職先の企業の手助けを受けている。印象に残ったのは、中国国籍の朝鮮族のつぎのような回答である。「自分は中国国籍の朝鮮族で、“技術指導（E-4）”ビザの制限に関係なく、韓国にとっての“在外同胞”としていつでも韓国で暮らすことができる」。

（４）現在の企業に対する貢献、職場生活など

ここでは 3 つの点のみをみておく。1 つは、高度外国人材が韓国企業の職場をどのように考えているか、2 つ目は不満な点、3 つ目に韓国の職場で遭遇した問題点である。

まず、韓国企業の職場をどのように考えているかであるが、複数の調査対象者が、出身国の労働慣行と韓国の慣行が異なることを認め、その上で「韓国人の同僚は勤勉である」「韓国人は几帳面に仕事をする」「企業では規則が厳格に守られる」「韓国人の同僚は責任感が強い」「よくあいさつをする」との好意的な感想を述べている。

しかし一方で、「勤務時間が長い」「退社時間が守られない」「上司より先に退社するとよく思われない」との意見が聞かれた。「責任感」が強いので、仕事が終わらないと帰らない、したがって「退社時間が守られない」ことになるようだ。

こうした問題に対して「自分は上司に悪く思われても退社時間になったら帰る」という回答と、「できる限り韓国の慣行にあわせるよう努力している」との 2 つの異なった対応がみられた。

もう 1 点、例外的とは考えられるが、高度外国人材は、韓国人と比較して賃金が低いとの意見があったので紹介しておく。「韓国の国立大学で修士課程を終えた中国人（女性）が 1 人、中国との貿易分野で勤務していた。だが、現在の会社は中小企業で、給与水準が年俸 1,800 万ウォン程度と低く、1 年間働いただけで中国に帰った。韓国人新入社員の年俸が 2,000 ～ 2,500 万ウォン程度であるにもかかわらず、貿易分野を担当していた中国人の賃金は低かった」。

3 つ目に韓国の職場で遭遇した問題点では、言葉、コミュニケーションにまつわる回答が多かった。とくに、韓国語のできないベトナムから来て就職した者は「韓国語が分からないことが最も困る」と深刻だ。彼の場合は、IT 関連のエンジニアで、業務そのものは英語で遂行しているが、同僚とのコミュニケーションに苦労しているようだ。韓国語が良くでき、韓国人の同僚とも問題なく業務をしている中国出身の女性も「会社に中国人アルバイトが 5 人いる。食事をする時はいつも、中国人は中国人同士、韓国人は韓国人同士で別々に食べている」と回答している。これも言葉の問題の一種であろう。

（５）過去の職歴

現在の所属企業が初めての就職先である調査対象者が 11 人中 4 人いた。いずれも中国出身者である。中国で大学を卒業し、韓国の大学院に留学、大学院を修了して韓国で就

職した者である。

中国出身者で残る 2 人は、中国で就職した経験を持っている。うち 1 人は上海で貿易会社に勤めていたが、韓国に留学することになり、辞職。もう 1 人はすでに紹介した「韓国の企業にスカウトされた」調査対象者である。

ベトナム出身の 5 人は大学卒業後、ベトナムで 4 人、マレーシアで 1 人が就職している。うち 2 人は韓国政府の奨学金を得て、韓国の大学院に留学、大学院修了後に韓国で就職した。他の 3 人は「賃金の高い」企業を求めて韓国の企業に転職した。

いずれにせよ、韓国の調査対象者で「転職」経験のある者は、出身国から韓国企業への「転職」というシンプルなケースに限られる。

（6）将来の計画

「韓国で長く働き続けるつもりか」との質問に対して、11 人中 8 人が「韓国企業で長く仕事をしてくれと請われても、韓国で長く暮らす気はない」と否定的で、なかには「今年の 9 月に契約が終了するのでその後、ベトナムに帰る」など、すでに帰国のスケジュールのある回答者が 2 人いた。

他の 3 人のうち 2 人は「長くいてくれとの要請があれば、韓国に長くいることもあり得る」との曖昧な回答で、明確に「長く韓国で働きたい」と答えたのは 1 人とどまる。

「長く勤める気はない」理由は、「現在の企業に就職した経緯」の項でみた就職理由、すなわち「韓国の企業で経験を積む」との回答と軌を一にするもので、韓国で経験を積んで出身国に帰り、より良い職を探すとの考え方である。この考え方は、第 2 章で検討した「大連理工大学機械／日本語強化班」の学生の日本で就職したい理由と極めて類似しているといえよう。中国出身者からは「両親がいるので、故郷に帰る」との回答も聞かれた。これも「大連理工大学機械／日本語強化班」の学生と同趣旨の回答である。

「長く韓国で働きたい」と答えたのは 1 人（ベトナム出身、女性）で、現在勤める会社の賃金が低いので転職するつもりだが、転職先は韓国の企業であるという。理由は「韓国が好きになった」ので「韓国で結婚して長く暮らしたい」と希望を述べている。

質問のなかで、「日本で働く気はないか」と聞いたところ、肯定的意見は少なく「興味がある」と答えた回答者は 2 人のみである。大きなネックは「言葉」で、「日本語を今後勉強することは大きな負担になる」との意見が複数みられた。

第 3 節 ヒヤリング記録

韓国 1

1. 属性

(1) 年齢・男女別（独身・既婚）	29 歳、女（既婚）
(2) 現住所	韓国（ソウル）

(3) 出身国(出身地)	中国 (吉林省白城市)
(4) 出身大学・学部・専攻	延辺科学技術大学 (中国) 朝鮮語学科
(5) 出身大学院・研究科・専攻・課程	高麗大学消費者心理学科、修士課程 * 韓国・ソウル所在の私立大学
(6) 卒業年月	2009 年
(7) 言語 ①母語	中国語
②その他の言語	韓国語、英語
(8) ビザの種類	「特定活動 (E-7)」
(9) その他特記事項	子供あり (1 人)

(注) 延辺大学は、中国吉林省延辺朝鮮族自治州延吉市に所在する総合大学。中国の少数民族である朝鮮族の高等教育のため、朝鮮語を中国語とともに教授言語とする。中国の国家重点大学に指定されている。

2. 現在の所属企業

(1) 業種

市場コンサルティング

(2) 企業規模

職員 5 人

(他にアルバイト多数)

(3) 職務・職種

- ①中国や台湾に輸出したり代理店を探す仕事を行っている。
- ②中国語が上手である点で現在の会社にとって自分は必要な人材だと思っている。
- ③しかしながら、中国や台湾に留学した経験のある韓国人専門家も自分と同じ役割を担っている。

(4) 賃金・労働条件など

- ①月例賃金は 120 万ウォン。税金と社会保険料を差し引いた手取額は 100 万ウォン。
- ②現在の韓国企業における賃金水準は中国とほぼ同じ水準と考えている。
- ③現在の月給水準に満足していない。
- ④1 カ月に生活費として 50 万ウォン使い、50 万ウォン貯蓄できる。

(5) 企業で使う言語

- ①主なコミュニケーション手段は韓国語と中国語である。
- ②現在の韓国企業におけるコミュニケーションは円滑である。
- ③(韓国人従業員とコミュニケーションが難しい時どのようにしてきたか、との質問に対し) 分かりやすく話したりボディランゲージを使う。

(6) 企業に対する満足度

ほぼ満足。

(7) 現在の職務に対する満足度

ほぼ満足。

3. 現在の企業に就職した経緯

- (1) 夫が先に韓国で就職していたので一緒に生活するために韓国で就職した。
- (2) 2009年10月に就職してこれまでに約10カ月となる。夫が韓国にいる限り韓国にいるつもりで、少なくとも向こう2、3年は現在の会社に勤める予定である。
- (3) 「特定活動（E-7）」ビザを取得する際の手続きは複雑ではなかったが、高麗大学心理学科を卒業した最初の外国人学生であったため、学科に経験がなく、大学が証明書類を提供するのに協力的ではなく難しい点があった。
- (4) 会社はビザ発給に必要な書類の提供において協力的であった。
- (5) 修士以上の学位を取得した学生なら、「特定活動（E-7）」ビザを取得するのはそれほど難しくはないと思う。

4. 現在の企業に対する貢献・職場生活など

- (1) 中国や台湾の企業経営者との相談会を準備し、訪問団を出迎え、貿易を促進する面で現在の企業に寄与していると考えている。
- (2) 会社において韓国人の同僚との関係は普通だと思う。社員は各自がそれぞれ自分が担当する仕事をしており、協力して仕事をするのはまれである。
- (3) 韓国人同僚の自分に対する特別な配慮はない。
- (4) 現在、会社に中国人アルバイトが5人いる。食事をする時はいつも、中国人は中国人同士、韓国人は韓国人同士で別々に食べている。
- (5) 韓国企業で働いていて、学ぶに値する点が多い。韓国企業で仕事したことが今後の自分の経歴に役立つと思っている。
- (6) 韓国企業における仕事の方法や慣行は中国とは異なるが、戸惑ったことはない。方法や慣行が異なると思っても、通常自分の方法で行っている。
- (7) 韓国企業における仕事上の最も大きな不満は、退社時間が守られない点である。退社時間になったにもかかわらず、上司の仕事が終わらなければ、部下は仕事を終えていても退社できない。このような場合、自分は上司の不興をかうことになったとしても先に退社するようにしている。
- (8) 韓国企業で仕事をして、韓国人が勤勉に仕事をし、責任感が強いことを学ぶことができた。例えば、自分がしなければならない仕事で退社時間になっても終わっていないならば、たとえ残業代が支給されなくとも残業をしてその仕事を終わらせることである。韓国人は常に職場を失って生活に困ることにならないかと心配し、他の同僚より仕事をしなければならないと考えているため、常に多くの仕事をして業績を上げようと最善をつくしている。ささいな電話や自分の業務に直接関連しない事柄も上司に逐一報告し、電話を受けるべきか、どのように処理すべきか確認している態度が、強い責任感を示している

と思う。

5. 過去の職歴

- (1) 学生時代にインターンシップで情報通信企業のフィルム戦略計画部で熱収縮フィルムを中国に輸出するプロジェクトを担当したことがある。
- (2) 正社員としては現在の会社が最初の職場である。

6. 将来の計画・希望

- (1) 韓国企業で長く仕事してくれと請われても、韓国で長く暮らす気はない。
- (2) (日本で就職する希望はないか、との質問に対し) 夫が現在、韓国で大学院経営学科に在籍しており、自分も朝鮮語を専攻して韓国に来たので、日本など他の外国に将来行くつもりはない。日本に行こうと考えても、日本語をまた学ぶことは大きな負担になる。

7. その他特記事項

- (1) 親しい韓国の友人があまりおらず、主に中国人の友人と付き合っている。
- (2) 夫と一緒にいるので寂しいことはない。週末に韓国の語学学校で中国語を教えるので、いつも慌ただしく過ごしている。
- (3) 韓国で生活する上で、コミュニケーションの問題はほとんどない。
- (4) ソウルで暮らし、1カ月に家賃70万ウォン余り支出する。
- (5) 韓国の食べ物は大丈夫だが、普通は自分でつくって食べる。
- (6) 食費は1カ月に約30万ウォン支出している。
- (7) 韓国生活でわずらわしい点は、先に話した従業員が退社時間をあまり守らないこと以外に、複雑な先輩・後輩関係と上下関係がある。この関係はよく理解できない。文化の違いとってしまえばそれだけだが。
- (8) 韓国の法律が健全で、各種のサービスが行き届いている点は良いと思う。
- (9) 韓国人は初めて会った時はとても親切でよくしてくれるが、後で深く接しようとする、よその国の人、すなわち他民族に対する拒否感が強い。
- (10) 中国の漢族がビザを取得するのに限定条件がとても多い。学部生が卒業し「特定活動(E-7)」ビザを取ろうとすると、とても難しい。わずか10の専門分野の専門家のみがE-7ビザ取得が可能で、それ以外の専門家の場合は、たとえ企業に就職が決まっても、E-7ビザの申請ができない。この点は非常に不合理だと思う。
- (11) 中国の家族とは、電話をしたり、中国の専門的なチャットプログラムQQを利用して連絡をとっている。ほとんど毎日、両親に連絡している。
- (12) 韓国で仕事を見つけた後、1回も中国には帰っていない。会社で仕事をするようになって1年以下の社員が休暇を申請しても7日しかもらえないのに、中国の出身地まで往復で6日間もかかるので帰れない。韓国から吉林省白城市に行く直行の飛行機便がないためである。

韓国 2

1. 属性

(1) 年齢・男女別（独身・既婚）	27歳、女（独身）
(2) 現住所	韓国（京畿道安山市）
(3) 出身国（出身地）	中国（吉林省汪清市）
(4) 出身大学・学部・専攻	延辺大学（中国）医学部薬学科
(5) 出身大学院・研究科・専攻・課程	朝鮮大学薬学部薬品合成学科、修士課程 *韓国・光州市所在の私立大学
(6) 卒業年月	2009年
(7) 言語 ①母語	中国語
②その他の言語	韓国語、英語
(8) ビザの種類	「技術指導（E-4）」
(9) その他特記事項	中国国籍の朝鮮族

2. 現在の所属企業

(1) 業種

製造業（化学、薬品）

(2) 企業規模

2,000人

(3) 職務・職種

①現在の企業では有機合成について研究している。

②研究に必要な中国語の論文を翻訳できるという点で、現在勤める企業では自分は必要とされていると思う。しかし、現在自分が果たしている役割を担う他の韓国人専門家もいる。

(4) 賃金・労働条件など

①月額賃金は約170万ウォンで、税金、社会保険料を差し引いた手取額は約150万ウォンである。

②中国と比べて韓国の賃金水準は2倍程度高いと考えている。

③しかし、現在の自分の賃金水準には満足していない。

④1カ月に生活費で約70万ウォンを使い、80万ウォンを貯蓄している。

(5) 企業で使う言語

①企業でのコミュニケーションは極めて円滑である。朝鮮族なので、中国語より韓国語がむしろ得意で、主なコミュニケーション言語は韓国語である。

②コミュニケーションの点ではまったく問題ないと思っている。

(6) 企業に対する満足度

ほぼ満足

(7) 現在の職務に対する満足度

ほぼ満足

3. 現在の企業に就職した経緯

- (1) 各種の求職サイトを通じて探した。
- (2) 中国で就職せずに韓国で就職した理由は、外国で仕事をして経験を積もうと考えたからである。
- (3) 韓国企業に就職して1年1カ月を経た。
- (4) 自分は中国国籍の朝鮮族で、「技術指導 (E-4)」ビザの制限に関係なく、韓国にとっての「在外同胞」としていつでも韓国で暮らすことができる。
- (5) F-4 ビザをとる手続きは複雑ではなかった。大学院に通いながらすべて自分で手続きをした。

4. 現在の企業に対する貢献・職場生活など

- (1) 現在の会社に対し、有機合成研究はもちろんのこと、中国の論文に関連する業務がある場合、韓国語に翻訳することで、大きく寄与していると考えている。
- (2) 企業内での韓国人同僚との関係は良好である。長期的な研究は韓国人同僚とともに協力しながら行い、短期的な研究は1人で行っている。
- (3) 韓国人の同僚はとてもよくしてくれる。
- (4) 一緒に仕事をする同僚の大部分が博士号取得者で、一緒に仕事をしながら専攻分野に関連する多くのことを学ぶことができ、この会社で働いていることは自分の将来の経歴に役に立つものと思っている。
- (5) (韓国企業と中国企業との仕事の方法や慣行の違いについて、との質問に対し) 現在の会社が自分にとっては初めての職場なので、中国企業の仕事の方法や慣行はよく分からないが、現在の職場で仕事をしていて戸惑ったことはない。
- (6) 韓国企業で仕事をしていて、コミュニケーションに問題がない上に、両親がともに韓国におり、これまでに困難や不便を感じたことはまだない。
- (7) 韓国企業に就職して最も良いと思う点は、韓国語でコミュニケーションできることである。これは自分にとっては非常に楽なことである。

5. 過去の職歴

現在の会社が自分にとっては初めての職場である。

6. 将来の計画・希望

韓国でずっと暮らすつもりはない。ボーイフレンドが中国ですでに就職しており、いずれ中国に帰国する予定だ。

7. その他特記事項

- (1) 同僚のなかで何人かの韓国人と親しく付き合っているが、やはり中国の友人との付き合いの方が頻繁である。

- (2) 休日は家でコンピュータをしながら過ごしたり、外に出かけてショッピングしたりしている。
- (3) 会社以外でも、日常生活でコミュニケーションにはまったく問題はない。
- (4) 京畿道安山市で暮らし、1カ月の家賃は30万ウォン。
- (5) 朝鮮族なので韓国の食べ物に問題はない。主に自分で作っている。
- (6) 食費には1カ月に約20万ウォン支出している。
- (7) 韓国での生活でとくに不便を感じる点はない。
- (8) 韓国人は外国人に対して親切で、近づきやすいと考えている。
- (9) 韓国で就職してまだ1年であるが、中国にはすでに3回帰った。
- (10) 韓国の大企業は、現場の労働者には外国人を使うが、研究開発などには外国人を使わない傾向が以前はあったと思う。現在は研究開発のためにも外国人を雇用するように変わってきているが、企業によっては韓国人と外国人が同じ仕事をしていても待遇がは外国人の方が悪い場合もあると聞いている。

韓国 3

1. 属性

(1) 年齢・男女別（独身・既婚）	26歳、男（独身）
(2) 現住所	韓国（京畿道安山市）
(3) 出身国（出身地）	中国（山東省煙台）
(4) 出身大学・学部・専攻	延辺大学（中国）機械工学科
(5) 出身大学院・研究科・専攻・課程	慶北大学機械工学科、修士課程 *韓国大邱市所在の国立大学
(6) 卒業年月	2009年
(7) 言語 ①母語	中国語
②その他の言語	英語、韓国語
(8) ビザの種類	「研究（E-3）」
(9) その他特記事項	英語が得意

2. 現在の所属企業

(1) 業種

政府関係の研究機関（生産技術）

(2) 企業規模

420人

（この他に非正規職380人）

(3) 職務・職種

現在は、機械部品の加工方法を開発する仕事をしている。

(4) 賃金・労働条件など

- ①月例賃金は200万ウォンである。税金と社会保険料を差し引いた手取額は約180万ウォンである。
- ②韓国の賃金は、中国の中規模都市の賃金と比較すると2倍程度高いと思う。しかし、北京、上海などでは韓国と同じ水準であると思う。
- ③現在の賃金水準については、満足でも不満でもない。
- ④1カ月に生活費として70～80万ウォン使い、100万ウォン貯蓄することができる。

(5) 研究機関で使う言語

- ①通常は韓国語で仕事をしている。
- ②論文発表を行う際は英語で行う。

(6) 研究機関に対する満足度

ほぼ満足。

(7) 現在の職務に対する満足度

満足。

3. 現在の研究機関に就職した経緯

- (1) 大学教授の推薦により就職することになった。
- (2) 韓国の慶北大学の成績がよかったため、指導教授が韓国で必要な人材として現在の研究機関に推薦したと思っている。
- (3) 中国で就職しないで韓国で就職した理由は、外国で仕事をして経験を積もうと考えたためである。
- (4) E-3 ビザの申請手続きは複雑ではなかった。しかし、就職することにした研究機関との契約書が必要であったが、取得するまでに時間がかかった。研究機関はビザ取得を手伝ってくれた。

4. 現在の企業に対する貢献・職場生活など

- (1) 自分は英語が得意なので、職場では自分を必要としていると思う。
- (2) 現在、自分が果たしている役割を担う韓国人専門家はいる。しかし、自分が外国人であり、英語が相対的にうまく、英語で論文を作成するのに修正があまり必要でないという点で、他の韓国人専門家に比べて有利な点があると思う。
- (3) 就業してからいくらも経っておらず、まだ所属する研究機関に貢献できるような成果は上げていない。
- (4) 職場でのコミュニケーションは「可もなく不可もなし」といった状況で、主なコミュニケーション言語は韓国語である。コミュニケーションが難しい時は英語で話す。
- (5) 職場での韓国人の同僚との関係は良好である。韓国人の同僚と協力しながら仕事をしている。
- (6) 韓国人の職場の同僚は大変よくしてくれるが、問題がないわけではない。

- (7) 韓国の研究機関である現在の職場で学ぶ点は非常に多い。韓国の組織で働いた経験は、将来の自分のキャリアに役立つと考えている。
- (8) 韓国で働き、仕事の方法や慣行が中国と異なり戸惑ったことはない。
- (9) 韓国では、昼食休憩が短くて仮眠する時間がないことで不便を感じる。午後1時頃はよく眠くなる。
- (10) 研究機関では宿舍と食事を提供してくれない。それで毎月の支出が多くなるのが不満である。
- (11) 現在の上司がこれまでに会った韓国人のなかで最も良い方であり、中国に関してよく知っている。中国に対する先入観がなく、外国人によく配慮してくれる。
- (12) 韓国企業で仕事をして最も良い点は、賃金が中国より高いことである。

5. 過去の職歴

現在の研究機関が初めての職場である。

6. 将来の計画・希望

- (1) 韓国で就職して11カ月になる。さらに1～2年は韓国にいる予定である。
- (2) (韓国で長く仕事してくれと請われたら長く韓国で働くか、との質問に対し) まだ考えたことがない。
- (3) (日本で仕事をするつもりは、との質問に対し) 延辺大学に通っている時に韓国語を勉強し、韓国の大学院に進学することになって韓国語に一層慣れ親しむようになったので、日本へ行って仕事をするつもりはない。現在韓国でうまく適応しており、良い職場を得たので、日本や他の外国に行く考えはない。
- (4) ただ、中国でより良い職場を見つけて帰りたいとは考えている。

7. その他特記事項

- (1) とくに親しい韓国の友人はいない。主に中国人の友人と付き合っている。
- (2) 寂しい時はコメディ映画を見たりコンピュータをしたりしている。休日は寝ている。
- (3) 韓国における日常生活でコミュニケーションに問題はほとんどない。問題があっても英語で解決している。
- (4) 1カ月の家賃は35万ウォンである。
- (5) 韓国料理は口に合わないため、食事は主に自分で作っている。
- (6) 食費には約30万ウォン支出している。
- (7) 韓国生活で最も不都合な点は韓国料理が口に合わないことで、良い点は治安がよく、銀行のサービスが良いことである。
- (8) 中国の家族とは電話でしばしば連絡をとっている。1週間1～2回である。
- (9) 韓国で仕事を見つけた後、休暇がないので現在まで中国には帰っていない。今年8月に一度帰るつもりである。
- (10) 韓国人は外国人に親切であると思う。

(11) 韓国はアメリカを好み中国に対する偏見がある。こういう先入観と偏見は主にマスメディアを通じて持つようになったようだ。韓国マスメディアは今後中国についてもっと客観的に報道してほしい。

韓国 4

1. 属性

(1) 年齢・男女別（独身・既婚）	30歳、女（独身）
(2) 現住所	韓国（ソウル麻浦区）
(3) 出身国（出身地）	中国（江蘇省宿遷市）
(4) 出身大学・学部・専攻	高麗大学経済学、社会学（学部複数専攻） *韓国・ソウル所在の私立大学
(5) 出身大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業年月	2008年
(7) 言語 ①母語	中国語
②その他の言語	韓国語、英語
(8) ビザの種類	「特定活動（E-7）」

2. 現在の所属企業

(1) 業種

企業への投資分析ソリューション提供

(2) 企業規模

50人

(3) 職務・職種

①韓国の証券会社、資産運用会社、研究機関に提供するための中国金融データベース（株式市場データ、上場企業データ、外部監査法人、Pre IPO企業データ）を管理している。

②中国の企業と協力してデータベースを構築し、韓国の顧客に提供サービスを行い、また海外の顧客管理も行っている。

(4) 賃金・労働条件など

①賃金は250万ウォンである。税金と社会保険料を差し引いた手取額は220～230万ウォンである。

②現在の賃金水準は、中国と大体同じ水準だと思う。中国では、経験が多い者はさらに高いこともある。

③現在の賃金水準については、満足していない。

④1カ月に生活費として120万ウォン前後使い、100万ウォン程度を貯蓄することができる。

(5) 企業で使う言語

①現在の会社で他の社員とのコミュニケーションは円滑であり、主なコミュニケーション手段は韓国語である。

②仕事上では、中国語のデータベースを扱っている。

(6) 企業に対する満足度

ほぼ満足。

(7) 現在の職務に対する満足度

ほぼ満足。

3. 現在の企業に就職した経緯

(1) 中国の金融データベース・サービスに対する需要が次第に増えている。自分は中国市場に関することをよく知っており、外部からの問い合わせに答えることができる者として会社で必要とされていると思っている。

(2) 現在自分が担当している中国市場金融データベースを扱っている韓国人の専門家は社内にはいない。

(3) 現在の会社には知人の紹介で就職することになった。

(4) 中国で就職して働いた後、韓国の大学に留学し、学部を卒業した後に韓国で就職した。理由は、外国で勉強するという経験と、仕事をするという経験を積むためである。

(5) E-7 ビザをとる手続きは複雑ではなかった。現在勤める会社には以前にも外国人社員がいて、E-7 ビザを処理した経験があったので、ビザ発給に際して色々と手伝ってくれた。

4. 現在の企業に対する貢献・職場生活など

(1) 中国と韓国の資本市場は発展過程と段階が異なるために、資料を探して具体的な例を上げて説明しなければならないことが多く、そうした際のコミュニケーションに苦勞する。

(2) 会社の韓国人同僚との関係は良好であり、韓国人の同僚と協力しながら仕事を行っている。

(3) 韓国人の同僚はとても親しく接してくれる。

(4) 韓国の企業で働いて学ぶに値する点が多くある。韓国の企業で仕事をしたことが将来役に立つと思う。

(5) 韓国の企業における仕事の方法や慣行は中国とは異なるが、戸惑ったことはない。

(6) ただ、中国についてよく理解していなかったり、中国人に対して先入観を持つ者が見受けられ、その点では戸惑うことがある。

(7) 会社に対する希望は、賃金をもっと上げてほしいことだ。

(8) 韓国人はとても几帳面で慎重に仕事をしていると思う。

5. 過去の職歴

(1) 2002～2003年の間、中国の上海の国際貿易会社で会計の仕事をしていた。

(2) その後、韓国に留学し、卒業後に現在の会社に就職した。

6. 将来の計画・希望

- (1) 現在の会社に就職してから1年半になり、今後さらに3年勤める予定である。
- (2) 会社に長く働いてほしいと請われても、韓国で長く暮らすつもりはない。理由はどうしても外国で仕事をするだけでは、自分自身の能力の向上に限界があると思うからだ。
- (3) 偶然、知人を通じて韓国の大学に入ることになり、また知人を通じて就職することになった。韓国でもっと良い職場があれば、もう少し長くいるつもりはあるが、ずっと暮らす気はない。
- (4) 機会があれば、日本、台湾、香港などで働いてみたいと思う。
- (5) しかし、結局は両親がいる中国に帰らなければならない。
- (6) 個人的な経験を積み、自分を向上させるための機会があれば、中国と近い日本、韓国、台湾、香港などを移動しながら仕事をしたい。

7. その他特記事項

- (1) 何人かの親しい韓国人の友人もいるが、主には中国人の友人と付き合っている。
- (2) 寂しいと感じる時は、友人と遊んだり、一緒に旅行に行ったりしている。1カ月に1、2回週末の集まりを持っている。
- (3) 日常生活でのコミュニケーションの問題はない。
- (4) ソウル麻浦区大興洞で暮らしており、1カ月の家賃は約40万ウォンである。
- (5) 韓国料理には慣れており、主に外食している。
- (6) 食費は1カ月に40～50万ウォンである。
- (7) 中国の家族とは電話で連絡をとっている。1カ月に2～3回両親と電話で話す。
- (8) 現在の会社に就職した後、よく中国に出張する。就職後に6～7回、中国に出張に行った。ほとんど四半期に1回である。
- (9) 日常生活で不満な点は、中韓の文化の違いや、中国人に対する偏見のために不愉快な思いをすることだ。自分が積極的に対応しても不愉快なことはなくなる。
- (10) 韓国の良い点は、整備された交通機関と公共施設があり、生活が便利なことである。
- (11) 韓国人が一般的に外国人に親切であるとは思わない。東洋人の顔を持っていなかったら韓国社会に合わせるのがとても難しいだろうと思う。
- (12) 外国人が韓国に移民したり、韓国にいる家族を訪問するのに際して規制が多い。韓国は単一民族であると考え、他民族に対する拒否感がとても激しいのではないか。多くの高度外国人材を必要とするならば、韓国政府はもっと緩やかな政策をとった方が、経済発展に結びつくのではないかと思う。

韓国 5

1. 属性

(1)年齢・男女別（独身・既婚）	30歳、男（既婚）
------------------	-----------

(2) 現住所	韓国（ソウル）
(3) 出身国(出身地)	中国（山東省済南市）
(4) 出身大学・学部・専攻	延辺科学技術大学（中国）朝鮮語学科、経営管理学科（複数専攻）
(5) 出身大学院・研究科・専攻・課程	高麗大学大学院 経営学（修士・博士統合） *韓国・ソウル所在の私立大学
(6) 卒業年月	2009年
(7) 言語 ①母語	中国語
②その他の言語	韓国語、英語
(8) ビザの種類	「教授（E-1）」

2. 現在の所属組織

(1) 業種

教育機関（大学）

(2) 企業規模

（職員数不明）

(3) 職務・職種

①大学教員

②英語で国際経営戦略とチャイナ・ビジネスの授業を行っている。

(4) 賃金・労働条件など

①年俸は 4,000 万ウォン前後であり、税金、社会保険料を差し引いた手取額は約 3,000 万ウォンである。

②韓国における大学教員の収入は中国とほぼ同じである。中国の大学教員の賃金は低いが、講演、コンサルティングなどで副収入が多い。

③現在の賃金に満足していないが、大きな不満もない。

④1カ月の生活費と貯蓄は、それぞれ 50% である。

(5) 職場で使う言語

①主に英語と韓国語を使う。

②職場でのコミュニケーションには時々問題がある。学生にとって授業自体が難しく、授業する際に英語の経済専門用語を理解できない者がいる。

③このためコミュニケーションが難しい場合には、さらに具体的に説明するようにしている。

(6) 組織に対する満足度

ほぼ満足している。

(7) 現在の職務に対する満足度

①ほぼ満足している。

②研究も講義も充実している。

3. 現在の大学に就職した経緯

- (1) インターネットの広告をみて、応募した。
- (2) 求人広告では、外国人、博士、英語で講義することのできる者に応募者が限定されていた。
- (3) 中国人なのでチャイナ・ビジネスに関することを比較的よく知っており、その上大学に英語で国際経営戦力とチャイナ・ビジネスの講義を行う教授がいなかったため採用されたと思う。国際経営戦略とチャイナ・ビジネスを研究する韓国人教授はいない。
- (4) 大学が中国ビジネス専攻者を探していて、自分は英語が比較的得意で、韓国で経営学を勉強した者よりも競争力があつたので、就職は比較的容易であつた。
- (5) 「教授 (E-1)」ビザをとる手続きは複雑ではなかった。大学が発給を手伝ってくれた。
- (6) 博士の必要単位を取得して大学院は修了したが、博士の学位は未取得で ABD (all but dissertation、論文審査待ち) であるため韓国で就職した。

4. 現在の大学に対する貢献・職場生活など

- (1) 大学では、韓国企業が中国市場に進出する場合の経営戦略、直面する問題、中国市場調査の方法を教えている。学生に中国市場の巨視的な環境と韓国以外の他国と競争する環境を理解するよう務めている。
- (2) 職場での韓国人同僚との関係は良好である。共同プロジェクトを研究する場合は協力しながら仕事をし、その他の場合は個別に仕事をしている。
- (3) 韓国人の教授は自分と上下関係にはないので、よくしてくれる。
- (4) 他の教授とともに研究しながら学ぶことがとても多い。学生は創造力が豊かで、授業の雰囲気は活気に満ちている。その上、学生たちとの年齢差が大きい教授に比べると自分はいずれも年齢が違わないので、学生たちとうまく付き合っている。こうした経験は、将来役立つと考えている。
- (5) 職場で仕事の方法や慣行が中国と異なることで戸惑ったことはない。
- (6) 職場慣行でとくに異なっているのは、他の教授とミーティングしようとする場合、必ず2日前に予約を取らなければならないことである。しかし、戸惑ったことはない。
- (7) 仕事をしていて体験した不便な点としては、朝はパンを食べ、定食を食べることのできる食堂がないことである。
- (8) いずれにせよ、雇ってくれたことに感謝している。今後も期待に応えるべく努力するつもりである。
- (9) 韓国で仕事をして良いと思われる点は、大学が研究に対して多くの支援をしてくれることである。研究環境は非常に整っていると思う。

5. 過去の職歴

現在の大学が初めての職場である。

6. 将来の計画・希望

- (1) 今年3月に就職して現在までに約5カ月が過ぎた。さらに2、3年は現在の職場にいる予定である。
- (2) 韓国で長く仕事してくれと請われたら、考えてみる価値はあると思っている。
- (3) 当初は韓国ではなく、米国に行くつもりであったが、ある事情で行くことができなくなった。そのため、中国で朝鮮語を専攻したので韓国に来ることになった。現在は韓国の大学で働くことに満足しているので、大学から長くいてくれとの要請があれば、韓国に長くいることもあり得る。
- (4) しかし、今後機会があったとしても、日本へ行きたいとは思わない。機会があれば香港かマカオに行きたいと思っている。中国に帰ることもあり得る。

7. その他特記事項

- (1) 親しい韓国人の友人とも付き合っているが、とても親しい友人はやはり中国人の友人である。
- (2) 妻とともにいるので韓国にいても寂しいと思ったことはない。休日は本を読んだり、あるいはただ休んで時間を過ごしている。
- (3) 職場以外でも韓国でコミュニケーションに関する問題はほとんどない。
- (4) ソウルで暮らし、1カ月の家賃は70～80万ウォンである。
- (5) 韓国の食べ物に問題はない。平日は外食を主にし、休日は自分で作って食べる。
- (6) 食費は1カ月に約50万ウォン。
- (7) 韓国における生活では、朝食を食べるレストランがないことが最も不便で、銀行、スーパーなどのサービスが充実していることが良い点であると考えている。
- (8) 韓国人は外国人に親切であると思う。
- (9) 中国の家族とは、電話したり画像チャットを通じて連絡している。
- (10) 韓国で就職した後、出張で中国に1、2回戻った。
- (11) 韓国政府には、自転車専用道を早く整備してほしい。自転車を買ったが、まだ2、3回しか乗っていない。

韓国 6

1. 属性

(1) 年齢・男女別（独身・既婚）	43歳、男（既婚）
(2) 現住所	韓国
(3) 出身国（出身地）	中国（内モンゴル）
(4) 出身大学・学部・専攻	専門大学（中国・内モンゴル所在）化学工学科
(5) 出身大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業年月	1987年

(7) 言語 ①母語	中国語
②その他の言語	韓国語、英語
(8) ビザの種類	「特定活動 (E-7)」
(9) その他特記事項	①家族を中国に残し単身で働いている ②当初は中国企業の「派遣」で韓国に来る。その後、転籍して現在は韓国企業の社員。 ③高校2年生の子供あり

2. 現在の所属企業

(1) 業種

製造業（潤滑油、ワックスなどの光沢剤生産）

(2) 企業規模

20人

(3) 職務・職種

①エンジニア。

②現在の会社では、Castor Oil（ひまし油）をインドから輸入して再加工し、精製している。自分はこの仕事に20年の経験がある。現在、ひまし油の精製に関連して相当な経験とノウハウを必要とする仕事をしている。

(4) 賃金・労働条件など

①韓国に来た当初（2004年）は、月額賃金110万ウォンで、現在は月額200万ウォンである。

②税金、社会保険料を差し引いた手取額は約178万ウォンで、生活費50万ウォンを除き、残る130万ウォンを中国の家族に送金している。

③中国では月額2,500元の賃金であった。

④夜間勤務を行う場合、超過勤務手当が支給される。

⑤現在は社会保険（4大保険）に加入している。

(5) 企業で使う言語

主として韓国語。中国人労働者とは中国語。

(6) 企業に対する満足度

①満足している。

②理由は、賃金や処遇が悪くはないこと。

(7) 現在の職務に対する満足度

①ほぼ満足している。

②自分の20年を超える経験を活かすことができている。

3. 現在の企業に就職した経緯

(1) 現在勤めている韓国の会社の社長が、自分が勤めていた中国の会社に要請し、当初は

「派遣形式」で韓国の会社に勤務することになった。現在は、韓国の会社に転職し仕事をしている。

- (2) 韓国では、2004年から2010年現在までに6年間働いていることになる。
- (3) 「特定活動（E-7）」ビザで専門技術者として招へいを受けて韓国にきた。
- (4) 現在の会社は、自分にとっては学ぶことが多い。また賃金や処遇が悪くはないと考えている。
- (5) 現在の会社では、ひまし油を精製して化粧品原料、医薬品原料を生産し、またひまし油に水素を添加して固化化し、潤滑油やワックス等光沢剤を生産している。売上高は年50億ウォン。競合する会社はない。ただし完成品を輸入して販売する会社はある。
- (6) 原料を輸入して加工しており、販路は国内中心である。
- (7) 以前は中国人の労働者が2～3人がいたが、現在は1人だけである。他の者は中国に帰った。現在残っている中国人労働者は、中国国籍の朝鮮族労働者（52歳）である。
- (8) 朝鮮族の中国人労働者は技能職で、月額賃金は140万ウォンと低いが、韓国人労働者を採用することが難しいので、朝鮮族を雇用している。韓国人労働者は朝鮮族労働者より月額20～30万ウォン賃金が高い。
- (9) 大卒を2人雇っているが、大卒を補充するのは容易ではない。会社の所在地が不便な場所にあり、通勤が極めて不便であるためだ。

4. 現在の企業に対する貢献・職場生活など

- (1) 自分が韓国に来た当初は、会社には自分と類似の技術を持ったエンジニアはいなかった。現在は他の韓国人エンジニアもこの技術を学んで中国人エンジニア（自分）がいなくても工場が稼働できるようになっている。
- (2) エンジニア（自分）以外に、郡山大学（韓国の国立大学）で修士課程を終えた中国人（女性）が1人、中国との貿易分野で勤務していた。だが、現在の会社は中小企業で、年俵が1,800万ウォン程度と低く、1年間働いただけで中国に帰った。韓国人新入社員の年俵が2,000～2,500万ウォン程度であるにもかかわらず、貿易分野を担当していた中国人の賃金は低かった。
- (3) 現在の会社のチーム長は、勤続4年で年俵3,000万ウォンを得ている。

5. 過去の職歴

- (1) 高校卒業後、18歳で中国で就職して働き始めた。
- (2) その後、内モンゴル所在の専門大学化学工学科に入り、卒業した後、中国で現在の会社の中国における関連会社に就職した。そこでエンジニアとして20年ほど勤務した。
- (3) 中国では、エンジニアだけでなく、主任として現場管理者の役割も果たしていた。主任になるには専門大学を卒業し、多くの経験を積む必要があった。

6. 将来の計画・希望

- (1) 現在勤めている会社に満足している。家族とあまり会えない点が不都合ではあるが。韓

国でもっと暮らしたい考えもあるが、家族がいる中国にいずれ帰るつもりだ。

- (2) (日本で働く希望はないか、との質問に対して) 韓国に来ることになった契機は偶然、現在の会社の社長が自分が持っている技術を必要としていたためである。日本からそのような提案がないので考える余地はない。
- (3) 韓国を離れて日本で勤務する機会があっても日本に行くつもりはない。

7. その他特記事項

- (1) 同じ会社の韓国人社員とともに会社のアパートで生活しており、韓国料理などには適応している。
- (2) 中国の家族には定期的に電話をしている。1年に1～2回長期休暇(2週間～1カ月)を利用して中国の家族に会いに帰る。中国の家族を韓国に連れてくることは招へい手続きが複雑で難しい。
- (3) 週末は家でテレビを見ていることが多い。
- (4) 韓国の気候は悪くはない。出身地の内モンゴルは寒い。
- (5) 現在は韓国人の友人がいる。
- (6) 自分は韓国の食べ物にもよく適応しているが、文化生活、趣味生活の面では不便を感じている。

韓国 7

1. 属性

(1) 年齢・男女別(独身・既婚)	30歳、男(既婚)
(2) 現住所	韓国(仁川市西区)
(3) 出身国(出身地)	ベトナム(タイビン)
(4) 出身大学・学部・専攻	ハノイ工科大学 オートメーション工学
(5) 出身大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業年月	2004年
(7) 言語 ①母語	ベトナム語
②その他の言語	韓国語、英語
(8) ビザの種類	「特定活動(E-7)」

2. 現在の所属企業

- (1) 業種
食品・飲料水用の機械の製造・販売
- (2) 企業規模
250人
- (3) 職務・職種
①デザイン・エンジニア(設計技術者)。

- ②会社で販売する機械を設計している。
- ③企業におけるステイタスは一般社員。
- (4) 賃金・労働条件など
 - ①月例賃金は税金と社会保険料を差し引いた手取額で 210 万ウォンほど。
 - ②現在の韓国企業における賃金水準はベトナムと比較して 2 倍ほど高い。
 - ③現在の賃金水準に満足していない。
 - ④ 1 カ月に生活費として 80 万ウォン使い、120 万ウォン貯蓄できる。
- (5) 企業で使う言語
 - ①企業で使用する言語は韓国語と英語である。
 - ②現在の韓国企業におけるコミュニケーションに問題はない。
 - ③（韓国人従業員とコミュニケーションが難しい時どのようにしてきたか、との質問に対し）英語が上手な副社長に頼んで解決している。
- (6) 企業に対する満足度
 - ①可もなく不可もなし。
 - ②理由は、毎日同じ仕事を繰り返すので退屈。
- (7) 現在の職務に対する満足度
 - 可もなく不可もなし。

3. 現在の企業に就職した経緯

- (1) 現在の企業に就職したのは、外国で仕事をしてみたかったからだ。
- (2) ベトナムで開かれたあるセミナーで偶然、現在働く韓国の企業の社長に会って誘われたのが契機である。
- (3) 韓国で就職した理由は、短い期間、新しい方法で仕事する経験を持ちたかった。また、自分の能力向上の機会がほしかったことによる。
- (4) 韓国の会社で働いて 3 年になり、さらに半年ほど働く予定。
- (5) E-7 ビザを取る手続きで、問題が少し生じたが、会社が助けてくれた。

4. 現在の企業に対する貢献・職場生活など

- (1) 現在働いている企業では自分の専門知識が必要とされている。
- (2) 現在働いている企業で、自分の業務行うことができる韓国人専門家がいる。
- (3) 現在の企業では、製品に対する説明方法を改善したり、公開入札に必要な申請書を専門的な方法で作成するのに寄与している。
- (4) 企業で韓国人同僚たちと関係は、とりわけ良くもないし、悪くもない。
- (5) 韓国企業では、会社の規則をよく守ることを学んだ。ベトナムより規則が厳格である。また、仕事の業務効率を高める能力を養った。業務に対する時間管理を学んだ。これらが今後の経歴に役に立つと思う。
- (6) 韓国企業で仕事の方法や慣行は明らかにベトナムと異なる。したがって、韓国の会社に

適応しようと努力してきた。

- (7) 働いていて体験する最も大きな困難は言語だ。
- (8) 韓国企業で働いて良いと思われる点は、社員の仕事に対する責任感が強いことである。監督業務が円滑に進む。

5. 過去の職歴

- (1) 韓国に来る前は、ベトナムの建設関係の国有企業に勤めていた。
- (2) 職務は、電気システムを設計、監督する仕事。
- (3) 辞めた理由は賃金が低く、出張が多いため。

6. 将来の計画・希望

- (1) 韓国の現在の会社をやめ、2010年末にベトナムに帰るつもりである。
- (2) 理由は、故郷であるベトナムで家族と暮らしたく、またベトナムで安定した職業に就きたいからだ。
- (3) 具体的には、ハノイで軽工業関係の事業を自分で起こしたいと考えている。
- (4) 現在の企業で長く働いてくれと頼まれても、韓国で長く暮らすつもりはない。
- (5) (日本企業で仕事をするつもりはないか、との質問に対し) そういうつもりはない。日本と日本人をよく知らないからだ。

7. その他特記事項

- (1) 韓国で生活する上で、時にはコミュニケーションの問題がある。しかし、深刻ではない。韓国語でまず話し、理解されないときは英語を使う。もし相手が理解できなければ、そのままにしている。
- (2) 韓国でも主にベトナムの友人と親しく付き合っている。
- (3) 韓国で休日や寂しい時は、友人に会い、運動し、ショッピングをしている。
- (4) 韓国の仁川で暮らし、家賃は月 30 万ウォンである。
- (5) 食費には月に 25 万ウォン。韓国の食べ物はとくに問題はない。
- (6) 韓国の生活で最も難しい点は、現地人と合わせることだ。良い点は韓国の天候だ。
- (7) ベトナムの家族とは電話でよく連絡している。ベトナムには 1 年に 2 回ほど帰っている。

韓国 8

1. 属性

(1) 年齢・男女別 (独身・既婚)	26 歳、男 (独身)
(2) 現住所	韓国 (ソウル瑞草区)
(3) 出身国 (出身地)	ベトナム (ホーチミン)
(4) 出身大学・学部・専攻	ベトナム国家大学ホーチミン校自然科学部 ソフトウェア・エンジニアリング
(5) 出身大学院・研究科・専攻・課程	国民大学大学院 コンピュータ工学 修士課程

	*ソウル所在の私立大学
(6) 卒業年月	2009 年
(7) 言語 ①母語	ベトナム語
②その他の言語	韓国語、英語
(8) ビザの種類	「特定活動 (E-7)」

2. 現在の所属企業

(1) 業種

IT 関連業種

(2) 企業規模

15 人

(3) 職務・職種

①コンピュータ・プログラマー

②企業におけるステイタスは一般社員

(4) 賃金・労働条件など

①月例賃金は 230 万ウォン。税金と社会保険料を差し引いた手取額で 210 万ウォン。

②現在の韓国企業における賃金水準はベトナムと比較して 2 倍ほど高い。

③現在の賃金に満足していない。

④1 カ月に生活費として 100 万ウォン使い、100 万ウォン貯蓄できる。

(5) 企業で使う言語

①企業で使用する言語は英語。

②現在の韓国企業におけるコミュニケーションは時々問題がある。問題があるときは自分が分かる言語（英語、韓国語）を最大限使って理解させる。

(6) 企業に対する満足度

①満足

②同僚がよくしてくれ、業務環境が良い。

(7) 現在の職務に対する満足度

可もなく不可もなし。

3. 現在の企業に就職した経緯

(1) 会社の採用担当者が大学を訪ねてきて、奨学生のうち就業を望む者を雇用したいというので応募した。

(2) 韓国で就職した理由は、韓国で業務経験を積むこと、高い賃金を得ることである。

(3) 現在の企業に就職して 5 カ月になる。今後どれくらい勤務を続けるかは分からない。

(4) E-7 ビザを取る手続きは複雑ではなかった。会社がすべて手伝ってくれた。

4. 現在の企業に対する貢献・職場生活など

(1) 現在所属する企業は、難しいプログラム開発ができる点で自分を必要としていると思う。

- (2) 現在の企業で自分が行っている業務や役割を行うことのできる韓国人専門家はいる。
- (3) 現在の企業にどんな点で寄与をしているかは、仕事を始めてから間がないのでよく分からない。
- (4) 企業で韓国人同僚は親切にしてくれる。
- (5) 韓国企業で学ぶに値する点が多い。それは今後の自分の経歴に役に立つと思う。
- (6) 韓国企業の仕事の方法や慣行は、ベトナムの会社と異なる。例えば、韓国の会社は勤務時間が長い。しかし、韓国人社員は仕事に情熱がある。
- (7) 韓国企業で働いて最も大きな困難は、韓国語が分からずコミュニケーションが難しいことだ。
- (8) ベトナムの専門職を雇用しようと思う韓国企業は、該当社員に希望するポジションや業務についてまず確認すべきだ。これにより当該社員は自分が望む分野で仕事をし、能力を発揮することができる。また、企業は外国人社員に長時間勤務を要求しているが、規定された勤務時間を守ったほうがいい。労働時間が長いと能率が上がらない。
- (9) 韓国企業で働いていて良い点は、業務環境が良いことだ。
- (10) 韓国企業で長く働いてほしいと依頼されれば、労働条件がよく、福利・厚生がよければ長く仕事をしたい。

5. 過去の職歴

- (1) ベトナムの証券会社で10カ月間働いた。
- (2) 証券取引のためのコンピュータ・プログラム開発と管理を行っていた。
- (3) 辞めた理由は韓国政府から奨学金を得て韓国の国民大学で修士課程の勉強することになったからである。

6. 将来の計画・希望

- (1) 現在の企業に今後どの程度の期間勤めるかは、分からない。様々な条件を考えてみなければならない。労働条件が良くなれば、長く働いてもいい。
- (2) (韓国以外の外国で働くとしたらどこか、との質問に対して) アメリカか、オーストラリアである。業種はIT分野。
- (3) (日本企業はどうか、との質問に対して) 興味がある。理由は、日本の会社は仕事の方法に専門性がある。機会があれば日本に行きたい。
- (4) シンガポールにも行ってみたいと思う。
- (5) (いずれはベトナムに帰って仕事をするつもりか、との質問に対して) そのつもりである。時期はまだ考えていない。

7. その他特記事項

- (1) 韓国でコミュニケーションには時々問題がある。問題がある場合は、自分が知っている外国語能力を最大限使ってみる。
- (2) 韓国では、ベトナムの友人と主に付き合っているが、時には親しい韓国人の友人とも付

き合う。

- (3) 韓国で休日は、遊びに行く。映画を観たり、音楽を鑑賞したりする。
- (4) 韓国のソウルに暮らし、1カ月の家賃は52万ウォンである。
- (5) 食費には月に約50万ウォン程度。韓国の食べ物は、まあまあである。
- (6) 韓国生活で最も困るのは、コミュニケーションだ。良い点は公共サービスが良いことである。
- (7) 韓国人は、外国人に親切であると思う。
- (8) ベトナムの家族とは、電話とインターネットで連絡している。1週間に1回は連絡する。
- (9) ベトナムへは1年に1回は帰る。

韓国 9

1. 属性

(1) 年齢・男女別（独身・既婚）	28歳、女（独身）
(2) 現住所	韓国（ソウル瑞草区）
(3) 出身国（出身地）	ベトナム（フエ）
(4) 出身大学・学部・専攻	フエ大学自然科学部 情報工学専攻 *フエ所在の国立大学
(5) 出身大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業年月	2005年
(7) 言語 ①母語	ベトナム語
②その他の言語	韓国語、英語
(8) ビザの種類	「特定活動（E-7）」

2. 現在の所属企業

(1) 業種

IT 関連

(2) 企業規模

15人

(3) 職務・職種

①デザイン・エンジニア（設計技術者）。

②企業におけるステイタスは主任。

(4) 賃金・労働条件など

①年収は約2,400万ウォン

②月例賃金は200万ウォン、税金と社会保険料を差し引いた手取額で194万ウォン。

③現在の韓国企業における賃金水準はベトナムと比較して2倍ほど高い。

④現在の賃金水準に満足していない。

- ⑤ 1 カ月に生活費として 100 万ウォン使い、100 万ウォン貯蓄できる。
- (5) 企業で使う言語

- ① 企業で使用する言語は英語と韓国語である。
- ② 現在の韓国企業におけるコミュニケーションに問題はない。

- (6) 企業に対する満足度

可もなく不可もなし。

- (7) 現在の職務に対する満足度

可もなく不可もなし。

3. 現在の企業に就職した経緯

- (1) 韓国企業に就職することにした契機は、韓国の賃金水準がベトナムより高く、預金を多くすることができると思った結果である。
- (2) 就職先は、インターネットの募集公告で調べた。
- (3) 韓国で就職して、2 年 6 カ月になる。
- (4) 現在は、韓国で長く働きたいと思っている。
- (5) E-7 ビザを取る手続きは複雑ではなかった。会社がすべて手続きをしてくれた。
- (6) (日本で仕事を探すつもりはあったか、との質問に対して) 考えてみたが、機会がなかった。
- (7) (台湾、香港、中国、シンガポールについてはどうか、との質問に対して) もし機会があればシンガポールで働きたいと思う。

4. 現在の企業に対する貢献・職場生活など

- (1) 現在の企業は、自分を勤勉で英語と韓国語ができ、業務能力があるとして評価していると思う。
- (2) 現在の企業では、自分が行っている業務を行うことのできる韓国人専門家がいる。
- (3) これまでに多くのプロジェクトで良い結果を生み、会社に寄与をしてきたと考えている。
- (4) 現在の企業で韓国人の同僚との関係は良い。
- (5) 韓国企業で学ぶに値する点は、それほど多くない。
- (6) 韓国企業で仕事の方法や慣行がベトナムとは異なる。韓国の会社は社員の勤務時間が長く、上司より先に退勤するとよく思われない。
- (7) 人と交際する文化と言語が異なる点で困難さを感じている。
- (8) ベトナムの専門職を雇用しようと思う韓国企業は賃金を高くすべきだと思う。
- (9) 韓国企業で働いていて良い点は、すべての人が互いに配慮し、よくあいさつすることだ。
- (10) 必ずしも、現在の企業ではないが、韓国が好きなので韓国で働き、韓国で暮らしたいと思っている。

5. 過去の職歴

- (1) マレーシアの IT 関連企業にコンピュータ・プログラマーとして 2 年 5 カ月勤務した。

(2) 辞めた理由は、賃金と労働環境が良い会社を探すためである。

6. 将来の計画・希望

(1) 現在の会社より条件の良いところを見つけ、結婚して韓国に住みたい。

(2) 現在の企業で今後どれくらい仕事をするかは、まだ分からない。良い会社を見つければ移ってそちらで長く働きたい。現在の企業の賃金が低いことが理由だ。

(3) 他の企業に転職する場合も、国としては韓国で、場所はソウルを希望する。業種は IT 関連会社（プログラム）。時期はまだ分からない。

(4)（日本企業に移って仕事をするつもりはないか、との質問に対し）日本企業に移って仕事をするつもりはない。日本語を学びたくないからだ。

(5) ベトナムに帰って仕事をするつもりはない。

7. その他特記事項

(1) 韓国での生活は気に入っている。

(2) 韓国でコミュニケーションに問題はない。

(3) 韓国人の友人がたくさんおり、韓国文化を理解できた。

(4) 休日や寂しい時は、友人とどこかに遊びに行く。

(5) ソウルで暮らしている。1カ月の家賃は35万ウォン。食費は約45万ウォンである。

(6) 韓国の食べ物は口に合う。

(7) 韓国の生活で不便なことはない。公共交通が便利で安い。食堂が多くて価格が安い。

(8) 韓国は外国人に親切で近づきやすいところだと思う。

(9) 韓国政府には外国人を保護する政策がないと思う。例えば銀行でクレジットカードをつくろうとしたが容易ではなかった。

(10) ベトナムの家族とは電話やインターネットでよく連絡する。

(11) ベトナムへは1年に1回、正月（テト）に帰っている。

韓国 10

1. 属性

(1) 年齢・男女別（独身・既婚）	28歳、男（独身）
(2) 現住所	韓国（大田市儒城区）
(3) 出身国（出身地）	ベトナム（タンホワ）
(4) 出身大学・学部・専攻	ベトナム国家大学ハノイ校工学部 応用数学
(5) 出身大学院・研究科・専攻・課程	韓国の大学院 修士課程（校名は公開しないようにと要望）
(6) 卒業年月	2009年
(7) 言語 ①母語	ベトナム語
②その他の言語	韓国語、英語

2. 現在の所属企業

(1) 業種

通信分野（政府関係の研究機関）

(2) 企業規模

2,000 人

(3) 職務・職種

①業務は研究開発。

②研究機関におけるステイタスは研究員。

(4) 賃金・労働条件など

①月例賃金は税金と社会保険料を差し引いた手取額で 250 万ウォンほど。

②現在の賃金水準はベトナムと比較して 3 倍ほど高い。

③現在の賃金水準に満足していない。

④ 1 カ月に生活費として 200 万ウォン使い、50 万ウォン貯蓄できる。

(5) 研究機関で使う言語

①研究機関で使用する言語は韓国語である。

②現在の研究機関におけるコミュニケーションはほとんど問題はない。

③（韓国人とのコミュニケーションが難しい時どのようにしてきたか、との質問に対し）もし難しい場合があれば英語を使用している。

(6) 研究機関に対する満足度

①満足。

②理由は、業務環境が良いこと。

(7) 現在の職務に対する満足度

満足。

3. 現在の研究機関に就職した経緯

(1) 現在の研究機関のホームページで募集公告を見て応募した。

(2) 韓国で就業した理由は、韓国で大学院を修了したので、韓国の職場を体験をしたかったことである。

(3)（日本で仕事を探すつもりはあったか、との質問に対し）検討しなかった。

(4)（台湾、香港、中国、シンガポールはどうか、との質問に対し）検討しなかった。

(5) 研究機関に就職して 1 年になる。さらに 1 年は働くつもりだ。

(6) E-7 ビザを取る手続きで複雑なことはなかった。研究機関が手伝ってくれた。

(7) 現在の研究機関に長く働いてくれと頼まれても、韓国で長く暮らすつもりはない。

4. 現在の企業に対する貢献・職場生活など

(1) 就職した研究機関は、自分を業務に関しての専門的な能力を持っていると評価している。

- (2) 自分は、現在の研究機関に就職するに際し試験を受け、成績が多くの韓国人を上回った。
- (3) 研究機関に対し、研究プロジェクトに参加して成功させた点で寄与したと考えている。
- (4) 研究機関で韓国人同僚との関係は良い。
- (5) 現在の職場で学ぶことはあるが、今後の自分の経歴に役に立つかはまだ確信できない。
- (6) 研究機関での仕事の方法や慣行はベトナムと少し違うが、慌てたことはまだない。
- (7) 働いていて、韓国人の仕事の解決する方法が自分と違うので難しい点がある。
- (8) ベトナムは高度人材が豊富で、今後の見通しも明るい。韓国企業が仕事の方法をもう少し専門的にすれば、容易にベトナム人高度人材を雇用できると思う。
- (9) 韓国で働いていて良いと思われる点は、秩序をよく守り、規則が厳格なことだ。

5. 過去の職歴

- (1) 大学卒業後、ベトナムの IT 分野の企業に 2006 年 6 月～2007 年 3 月の間勤めた。
- (2) 業務は研究開発。
- (3) 辞めた理由は、韓国に留学するためである。

6. 将来の計画・希望

- (1) 韓国の現在の職場では今後、2 年ほど仕事をするつもりだ。
- (2) 理由は、ベトナムに帰ってベトナムを発展させたいことだ。
- (3) 具体的には、ハノイで働きたいと思っている。業種はまだ分からない。
- (4) とにかく故郷に帰りたい。

7. その他特記事項

- (1) 韓国の日常生活でコミュニケーションには問題はとくにない。
- (2) 韓国では親しい韓国人の友人が何人かいる。
- (3) 韓国で休日や寂しい時は旅行をする。
- (4) 韓国の大田市にある研究機関の寄宿舎で暮らしている。1 カ月の家賃 15 万ウォンだ。
- (5) 食費には 1 カ月に 50 万ウォン程度支出する。
- (6) 韓国料理を食べることにはとくに問題はない。
- (7) 韓国で生活していても韓国の文化を完全に理解できない。
- (8) 韓国の天候が良いことは最もいい点だ。
- (9) 韓国人は外国人に親切であると思う。
- (10) 韓国政府に対し高度外国人材とその家族に対するビザ手続きの簡素化を要望したい。
- (11) ベトナムの家族とは電話やインターネットでよく連絡している。
- (12) 韓国で仕事をみつけた後、5 カ月後にベトナムへ帰った。1 年に 2 回ほど帰る。

韓国 11

1. 属性

(1)年齢・男女別（独身・既婚）	30 歳、男（独身）
------------------	------------

(2) 現住所	韓国（ソウル松坡区）
(3) 出身国(出身地)	ベトナム（タンホア）
(4) 出身大学・学部・専攻	ベトナム国家大学ハノイ校自然科学部 応用数学
(5) 出身大学院・研究科・専攻・課程	—
(6) 卒業年月	2003年
(7) 言語 ①母語	ベトナム語
②その他の言語	英語
(8) ビザの種類	「特定活動（E-7）」

2. 現在の所属企業

(1) 業種

通信、IT 関連

(2) 企業規模

60人

(3) 職務・職種

- ① コンピュータ・プログラム開発担当。
- ② 企業におけるステイタスは開発担当者（Developer）。

(4) 賃金・労働条件など

- ① 月例賃金は約 230 万ウォン、税金と社会保険料を差し引いた手取額で 220 万ウォン。
- ② 現在の賃金水準はベトナムと比較して 2 倍ほど高い。
- ③ 現在の賃金に満足している。
- ④ 1 カ月に生活費として 60 万ウォン使い、160 万ウォン貯蓄できる。

(5) 企業で使う言語

- ① 会社で使用する言語はほとんど英語。
- ② 会社では、英語のできる同僚とのみ話し、他の人とコミュニケーションする必要がある場合は英語のできる韓国人に助けを請う。

(6) 企業に対する満足度

- ① 満足。
- ② 理由は、賃金と業務内容が良いことだ。

(7) 現在の職務に対する満足度

満足。

3. 現在の企業に就職した経緯

- (1) ベトナムで勤務していた企業は賃金が低かった。そこで、韓国で仕事をすれば高い賃金を得ることができ、キャリアを得るのにも役に立ち、学ぶことも多いと考えた。また外国語能力の向上も図ろうと考えた。

- (2) 現在の韓国の会社は、友人の紹介で就職することになった。
- (3) 会社では、通信系統プログラムを研究して、改善点を探り、その結果を活かしてコンピュータ・プログラムを開発している。
- (4) 現在の企業に就職して2年半になる。
- (5) E-7 ビザを取る手続きは簡単であった。会社が助けてくれた。

4. 現在の企業に対する貢献・職場生活など

- (1) 現在の企業に通信情報管理システムの改善で寄与してきた。また、企業の海外業務を担当し、その面でも寄与している。
- (2) 現在の企業で、自分が行っている業務を遂行できる韓国人の専門家がいる。
- (3) 韓国人の同僚との関係は悪くはない。彼らは親切だ。
- (4) 会社では多くのことを学んだ。それは将来の自分の経歴に役立つと思う。
- (5) 韓国企業の仕事の方法や慣行はベトナムと異なるが、とまどう程度で、慌てるほどには違いはない。
- (6) 韓国で働いて「言語」が最も難しい要素だと思う。
- (7) 韓国で働いていて良かったと思える点は、韓国の通信製品は実用的であることが分かったこと、韓国人は責任感が強く、同僚が互いに意見交換することが分かったことである。

5. 過去の職歴

- (1) 大学を卒業した2003年にベトナムのコンピュータ・ソフトウェア開発会社に就職した。
- (2) その後、ベトナムで通信関係企業に転職した。
- (3) 2007年に韓国の企業に就職して、韓国に来た。

6. 将来の計画・希望

- (1) 韓国で長く暮らすつもりはない。
- (2) 韓国の現在の会社との契約があと1カ月残っている。契約が終了した後にベトナムに戻る予定だ。
- (3) 会社を辞める理由は、家族と友人がベトナムにいるからだ。ベトナムにも好条件の職に就く機会がある。
- (4) (日本企業に移って仕事をするつもりはないか、との質問に対し) そのつもりはない。理由は言語と仕事をする考え方が異なるからだ。
- (5) 以前、日本で就職しようと思ったことがある。しかし、日本の会社は日本語能力について中級、上級レベルを要求した。日本語を学ぶ時間はとてもなかった。自分は4カ月ほど日本語を習ったことがある。
- (6) 台湾、香港、中国やシンガポールでの就職は考えたことがない。

7. その他特記事項

- (1) 韓国語が分からないので、韓国人と付き合うのが難しい。
- (2) 韓国では主にベトナム人の友人と会っている。

- (3) 韓国で休日や寂しい時は、家で休んだり、映画を観たり、友人を訪ねたりする。
- (4) 会社が部屋を探してくれた。1 カ月約 50 万ウォンの家賃だ。
- (5) 食費には 1 カ月 30 万ウォン支出している。
- (6) 韓国の食べ物はとくに問題はない。
- (7) 韓国生活で良い点は、生活水準が高く、治安もよく、韓国人は親切で責任感が強いことだ。
- (8) 韓国の若者とは簡単に付き合うことができない。韓国の大人は自分に親切で自分と話したがるのに、自分は韓国語が分からず話ができない。
- (9) ベトナムの家族には電話でよく連絡する。
- (10) 韓国で仕事をみつけた後、1 年半後に家族に会うためにベトナムに帰った。

参考文献

- 富士通総研 (2010) 『企業における高度外国人材活用促進事業報告』 (厚生労働省委託)
- 郡司正人・荒川創太・奥田栄二 (2009) 『日本企業における留学生の就労に関する調査』
JILPT 調査シリーズ No. 57、労働政策研究・研修機構
- 山内乾史・原清治編著 (2010) 『学歴と就労の比較教育社会学—教育から職業へのトランジ
ションⅡ』学文社
- 経済産業省編 (2008) 『新経済成長戦略 2008 改訂版』財団法人 経済産業調査会
アジア人財資金構想ホームページ <http://www.ajinzai-sc.jp/consortium.html>
- Ministry of Labour, Invalids and Social Affairs, Vietnam (2010), "Labour and Social Trends in
Viet Nam 2009/10," Ministry of Labour, Invalids and Social Affairs
- Manpower Research and Statistics Department, Ministry of Manpower, Singapore, Labour Market
Second Quarter 2010 (Retrieved on August 1 2010 from
<http://www.mom.gov.sg/statistics-publications/national-labour-market-information/statistics/Pages/labourforce.aspx>)
- Vincent Gabriel (2008), "Guide to the Singapore Employment Act," Singapore Human Resources
Institute
- Singapore Human Resources Institute, "Human Capital," Volume 10, Issue 4, 2010
- PSB Academy (2010), "Discover, A leaning environment like no other at PSB Academy," PSB
Academy

【資料】 質問項目

中国・ベトナム（大学生・大学院生）

1. 属性

- (1) 氏名（公表しない）
- (2) 年齢
- (3) 男女別
- (4) 独身・既婚
- (5) 現住所（都市名）
- (6) 出身地（都市名）
- (7) 大学・学部・専攻
- (8) 大学院・研究科・専攻・課程（修士課程、博士課程）
- (9) 卒業年月
- (10) 言語
 - 母語
 - その他の言語
- (11) その他特記事項

2. 現在の大学・大学院に進学した経緯

3. 卒業後の進路希望（第1志望、第2志望）

- (1) 外資系企業
- (2) 民間企業
- (3) 国有企業
- (4) 公務員
- (5) 外国にある外国企業
- (6) 起業
- (7) 家業を継ぐ
- (8) （学部生の場合）大学院への進学
- (9) 外国への留学
- (10) その他

○その理由（具体的に）

4. 外国での就職について

- (1) 希望国、業種、職種など
 - その理由（具体的に）
- (2) 何年勤めるつもりか

○その理由

(3) 日本にある日本企業への就職について

5. 将来の希望・展望

(1) 最初に就職した企業に長く勤めるつもりか

○その理由

(2) 将来転職はありうるか

○その理由

(3) その他

6. その他特記事項

シンガポール・韓国（高度外国人材）

1. 属性

(1) 氏名（公表しない）

(2) 年齢

(3) 男女別

(4) 独身・既婚

(5) 現住所（都市名）

(6) 出身国（出身地）（国名、都市名）

(7) 出身大学・学部・専攻

(8) 出身大学院・研究科・専攻・課程（修士課程、博士課程）

(9) 卒業年月

(10) 言語

○母語

○その他の言語

(11) その他特記事項

2. 現在の所属企業

(1) 企業名（公表しない）

(2) 業種

(3) 企業規模

(4) 職務・職種

(5) 賃金・労働条件など（年収、月例賃金、その他）

(6) 企業で使う言語

○業務で使う言語

○同僚との日常的な会話で使う言語

(7) 企業に対する満足度

○「満足」「ほぼ満足」「可もなく不可もなし」「やや不満」「不満」

○その理由

(8) 現在の職務に対する満足度

○「満足」「ほぼ満足」「可もなく不可もなし」「やや不満」「不満」

○その理由

(9) その他の特記事項

3. 現在の企業に就職した経緯

(1) 就職経路

(2) 就職理由

(3) 企業に対する貢献、職場生活など

4. 将来の計画・希望

(1) 現在の企業で長く勤務

○その理由

(2) 転職

○その理由、時期

○現在働いている国の国内か、出身国か、その他の国か

○日本企業への転職の可能性の有無

・その理由

(3) 起業（具体的に、理由、時期、場所）

(4) その他（具体的に）

5. その他特記事項（日常生活など）

JILPT 資料シリーズ No. 80

アジア諸国における高度外国人材の就職意識と
活用実態に関する調査報告書

定価：1,260円（本体1,200円）

発行年月日 2010年12月22日

編集・発行 独立行政法人 労働政策研究・研修機構

〒177-8502 東京都練馬区上石神井4-8-23

（編集） 国際研究部 TEL:03-5903-6311 FAX:03-3594-1113

（販売） 研究調整部成果普及課 TEL:03-5903-6263 FAX:03-5903-6115

印刷・製本 株式会社相模プリント

©2010 JILPT ISBN 978-4-538-87080-9-C3336 Printed in Japan

* 資料シリーズ全文はホームページで提供しております。(URL:<http://www.jil.go.jp/>)